別記様式第２号（その１の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

基　本　計　画　書

基　本　計　画		
事　項	記　入　欄	備　考
計画の区分	学部の学科の設置	
フリガナ 設置者	ガッコウホウジン　ジュウモンジガクエン 学校法人　十文字学園	
フリガナ 大学の名称	ジュウモンジガクエンジョシダイガク 十文字学園女子大学　(Jumonji University)	
大学本部の位置	埼玉県新座市菅沢2丁目1番28号	
大学の目的	建学の精神「身をきたへ 心きたへて 世の中に たちてかひある 人と生きなむ」に基づき、社会の要請に応じる学術の理論と応用を教育研究することによって、社会・文化の発展に貢献する人間性豊かな人材を育成することを目的とする。	
新設学部等の目的	人間生活学部 人間生活学部は、「生活学」、「女性学」を教育研究の中核とし、その具体的課題を人文、社会、自然の諸科学の成果を応用して追及するとともに、生活諸課題を合理的に解決し、発展させることのできる人材を育成することを教育研究上の目的とする。 以下、新たに設置する３学科の人材養成像である。 (1)人間福祉学科 人生のあらゆる場面における実践的な福祉・援助の方策を探る社会福祉学に基づき、「生活の質」の向上や「地域」における「共生」に対する理解を背景として、相談援助や介護、保育に関する知識・技術を適切に応用できる能力を習得するための教育研究を行うことを目的とする。人間福祉の領域において ・人間の尊厳を守り、基本的人権を尊重する女性 ・社会福祉の知識を持ち、共感的態度をもって人とかかわる仕事ができる女性 ・現代社会の問題に常に関心を持ち、その解決に積極的に取り組む女性 を養成する。 (2)健康栄養学科 栄養学を基礎として、食・運動・教育に関する専門的知識や技術、指導力、実践力を習得することにより、健康のスペシャリストとしてすべての人々の健康生活のための学びと実践を支え、推進できる人材を育成することを教育上の目的とする。子どもから高齢者まですべての人々が健康を得るためには、どのような生活を送ることが必要であるかを学び、実践することが重要であることから、 ・食・運動・健康に関する専門性を身につけ、社会の健康づくりに貢献出来る女性 ・自らの健康管理ができ、健康を体現できる女性 ・すべての人の生活の質の向上のために、使命感を持って、自ら考え、行動できる女性 を養成する。 (3)文芸文化学科 ことばを有する人間によって生み出された文化・芸術を深く理解し、それに基づいて、新たな文化を創造、発信する人材を養成する。また、人間生活の全般において、人として知的に成熟することを目指す人間を育成することを教育研究上の目的とする。 ・ことばと深くかかわる人間存在への洞察を行うことができ、人類史的な立場に立って自らの文化を深く理解して、次の世代に継承できる女性 ・高度な言語運用能力と論理的思考力を身につけることにより、自らの考えや想いを的確に発信できる女性 ・日本と世界の多種多彩な文芸・文化を読み解き、新しい文化形成の担い手となる女性 を養成する。	

新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	備考
		年	人	年次 人	人		年 月 第 年次		
	人間生活学部								
	人間福祉学科 (Department of Human Welfare)	4	100	3年次 5	410	学士 (社会福祉学)	平成27年4月 第1年次 平成29年4月 第3年次	埼玉県新座市菅沢2丁目1番28号	
	健康栄養学科 (Department of Health and Nutrition)	4	80	3年次 5	330	学士 (栄養学)	平成27年4月 第1年次 平成29年4月 第3年次		
	文芸文化学科 (Department of Literature and Culture)	4	70	3年次 5	290	学士 (文学)	平成27年4月 第1年次 平成29年4月 第3年次		
	計		250	15	1,030				

同一設置者内における変更状況（名称，定員の変更，移行等）	十文字学園女子大学 人間生活学部 幼児教育学科〔定員増〕 （ 40）（平成27年4月） （3年次編入学定員） （△5）（平成29年4月） 児童教育学科〔定員増〕 （ 40）（平成27年4月） （3年次編入学定員） （ 5）（平成29年4月） 人間発達心理学科〔定員増〕 （ 40）（平成27年4月） ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科〔定員減〕（△20）（平成27年4月） ※収容定員の変更に係る学則変更認可申請書提出済（平成26年3月27日） 十文字学園女子大学 人間生活学部 人間福祉学科（廃止） （△60） （3年次編入学定員） （△ 5） ※平成27年4月学生募集停止 （3年次編入学定員は平成29年4月学生募集停止） 十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科（廃止） （△140） ※平成27年4月学生募集停止	

教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数
		講義	演習	実験・実習	計	
	人間福祉学科	112 科目	68 科目	14 科目	194 科目	124 単位
	健康栄養学科	80 科目	24 科目	32 科目	136 科目	124 単位
	文芸文化学科	107 科目	26 科目	6 科目	139 科目	124 単位

教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等						兼任教員等
			教授	准教授	講師	助教	計	助手	
	新設分	人間福祉学科	7 (8)	3 (4)	3 (3)	0 (0)	13 (15)	1 (1)	32 (15)
		健康栄養学科	6 (6)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	10 (10)	3 (3)	23 (12)
		文芸文化学科	4 (5)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	10 (11)	1 (1)	22 (10)
		計	17 (19)	11 (12)	5 (5)	0 (0)	33 (36)	5 (5)	63 (25)
	既設分	幼児教育学科	8 人 (6)	7 人 (7)	5 人 (5)	1 人 (1)	21 人 (19)	1 人 (1)	17 人 (12)
		児童教育学科	9 (12)	5 (4)	1 (0)	0 (0)	15 (16)	1 (1)	28 (16)
		人間発達心理学科	7 (6)	5 (5)	3 (2)	0 (0)	15 (13)	1 (1)	23 (12)
		食物栄養学科	10 (9)	4 (3)	1 (0)	2 (2)	17 (14)	5 (5)	16 (9)
		生活情報学科	8 (8)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	1 (1)	10 (7)
		メディアコミュニケーション学科	5 (5)	5 (5)	1 (0)	0 (0)	11 (10)	1 (1)	17 (11)
		21世紀教育創生部	5 (8)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	7 (10)	0 (0)	— (—)
		計	52 (54)	31 (29)	12 (8)	3 (3)	98 (94)	10 (10)	72 (34)
	合計		69 (73)	42 (41)	17 (13)	3 (3)	131 (130)	15 (15)	127 (53)

教員以外の職員の概要	職種	専任	兼任	計
	事務職員	81 人 (81)	0 人 (0)	81 人 (81)
	技術職員	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	図書館専門職員	4 (4)	0 (0)	4 (4)
	その他の職員	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	計	85 (85)	0 (0)	85 (85)

校地等	区分	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計
	校舎敷地	27,442 ㎡	— ㎡	— ㎡	27,442 ㎡
	運動場用地	33,091 ㎡	— ㎡	— ㎡	33,091 ㎡
	小計	60,533 ㎡	— ㎡	— ㎡	60,533 ㎡
	その他	23,765 ㎡	— ㎡	— ㎡	23,765 ㎡
	合計	84,298 ㎡	— ㎡	— ㎡	84,298 ㎡

校舎	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計	
	34,769 ㎡ (34,769 ㎡)	— ㎡ (— ㎡)	— ㎡ (— ㎡)	34,769 ㎡ (34,769 ㎡)	

教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	
	43 室	72 室	13 室	10 室 (補助職員 — 人)	3 室 (補助職員 — 人)	大学全体

専任教員研究室	新設学部等の名称	室数	
	人間福祉学科	15 室	
	健康栄養学科	10 室	
	文芸文化学科	11 室	

図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	
	大学全体	183,500〔20,500〕 (179,500〔20,420〕)	698〔200〕 (698〔200〕)	19〔4〕 (19〔4〕)	4,750 (4,550)	7,500 (5,500)	200 (170)	学科単位での特定不能のため、大学全体の数
	計	183,500〔20,500〕 (179,500〔20,420〕)	698〔200〕 (698〔200〕)	19〔4〕 (19〔4〕)	4,750 (4,550)	7,500 (5,500)	200 (170)	

図書館	面積	閲覧座席数	収納可能冊数	
	1,955㎡	298	160,000	大学全体

体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要		
	3,252㎡	該当なし	該当なし	大学全体

経費の見積り及び維持方法の概要

経費の見積り	区分	開設前年度	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次	
	教員１人当り研究費等		200千円	200千円	200千円	200千円	—	—	収容定員増を含み学科単位での特定不能のため、大学全体
	共同研究費等		15,000千円	15,000千円	15,000千円	15,000千円	—	—	
	図書購入費	15,000千円	15,000千円	15,000千円	15,000千円	15,000千円	—	—	
	設備購入費	111,400千円	118,000千円	60,000千円	60,000千円	60,000千円	—	—	

学生１人当り納付金	第１年次	第２年次	第３年次	第４年次	第５年次	第６年次	
	1,350千円	1,250千円	1,250千円	1,250千円	—	—	健康栄養学科
	1,300千円	1,200千円	1,200千円	1,200千円	—	—	人間福祉学科・文芸文化学科

学生納付金以外の維持方法の概要	私立大学等経常経費補助金、資産運用収入、雑収入 等

既設大学等の状況

大学の名称	十文字学園女子大学							
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	年	人	年次 人	人		倍		
大学院　人間生活学研究科								
食物栄養学専攻	2	5	—	10	修士 (栄養学)	1.50	平成22年度	埼玉県新座市菅沢2丁目1番28号
人間生活学部						1.09		
幼児教育学科	4	150	3年次 10	620	学士 (教育学)	1.14	平成23年度	
児童教育学科	4	50	—	200	学士 (教育学)	1.49	平成23年度	
人間発達心理学科	4	100	3年次 5	410	学士 (心理学)	1.31	平成23年度	
食物栄養学科	4	120	3年次 10	500	学士 (栄養学)	1.09	平成23年度	
人間福祉学科	4	60	3年次 5	250	学士 (社会福祉学)	1.03	平成23年度	
生活情報学科	4	100	3年次 5	410	学士 (社会情報学)	1.00	平成23年度	
ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科	4	100	3年次 5	410	学士 (ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学)	0.74	平成23年度	

大学の名称	十文字学園女子大学短期大学部							
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	年	人	年次 人	人		倍		
表現文化学科	2	140	—	280	短期大学士 (文学)	0.41	平成24年度	埼玉県新座市菅沢2丁目1番28号

附属施設の概要	名称：十文字学園女子大附属幼稚園 目的：教育実習園及び研究協力園としての役割 所在地：埼玉県新座市菅沢2丁目1番28号(隣接地) 設置年月日：昭和43年4月 規模等：土地3,708㎡　建物1,417㎡

教　育　課　程　等　の　概　要

（人間生活学部人間福祉学科）

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実験・実習	専任教員等の配置 教授	専任教員等の配置 准教授	専任教員等の配置 講師	専任教員等の配置 助教	専任教員等の配置 助手	備考
共通科目	十文字学	学びの基盤をつくる	入門ゼミナール	1前	2			○			7	3	3			
			地域で学ぶ	1前・後		2		○								兼3
			読書入門	1前・後		2		○			7	3	3			
			総合科目	1前・後		2		○								兼1
		女性の自立・生き方を学ぶ	家庭と法	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			キャリアデザインとライフプラン	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			子育てと環境	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			食の科学	1・2・3・4前・後		2		○								兼4
			女性と健康	1・2・3・4前・後		2		○								兼3
			女性と文化	1・2・3・4前・後		2		○								兼5
		地域と社会を学ぶ	埼玉の地理・歴史・文化	1・2・3・4前・後		2		○								兼3
			現代社会と教育	1・2・3・4前・後		2		○								兼3
			現代社会と福祉	1・2・3・4前・後		2		○			2					
			現代社会とグローバリゼーション	1・2・3・4前・後		2		○			1					兼3
			くらしのなかの日本国憲法	1・2・3・4前・後		2		○			1					兼1
			情報とネットワーク社会	1・2・3・4前・後		2		○								兼3
		人間と自然を学ぶ	地球環境の保全と生活	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			宇宙とものなりたち	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			生物の多様性と倫理	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			地球のしくみと災害	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			原子のエネルギーとわたしたち	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			健康と運動	1・2・3・4前・後		2		○								兼2
	保健体育		身体運動Ⅰ	1前		1				○						兼6
			身体運動Ⅱ	1・2・3・4後		1				○						兼6 集中を含む
	外国語	基礎科目	英語Ⅰ	1通		2			○							兼4
			英語Ⅱ	1・2・3・4通		2			○							兼4
			フランス語Ⅰ	1通		2			○							兼1
			フランス語Ⅱ	1・2・3・4通		2			○							兼1
			中国語Ⅰ	1通		2			○							兼1
			中国語Ⅱ	1・2・3・4通		2			○							兼1
			ハングルⅠ	1通		2			○							兼1
			ハングルⅡ	1・2・3・4通		2			○							兼1
			日本語Ⅰ	1通		2			○							兼1
			日本語Ⅱ	1・2・3・4通		2			○							兼1
			海外語学研修（事前事後指導を含む）	1・2・3・4前		2				○						兼2
		資格科目	ＴＯＥＩＣ対策講座	1・2・3・4前		2		○								兼2
			中国語試験対策科目	1・2・3・4前･後		2		○								兼1
			日本語能力試験対策講座（文法・文字語彙）	1・2・3・4前･後		2		○								兼1
			日本語能力試験対策講座（読解）	1・2・3・4前･後		2		○								兼1
		目的別科目	アドバンスト・リスニング	1・2・3・4前		2		○								兼2
			アドバンスト・リーディング	1・2・3・4後		2		○								兼2
			アドバンスト・ライティング	1・2・3・4後		2		○								兼2
			日常英会話入門	1・2・3・4前		2		○								兼1
			日常英会話	1・2・3・4後		2		○								兼1
			ビジネス英語	1・2・3・4前		2		○								兼2
			ビジネス英会話	1・2・3・4後		2		○								兼2
			映画・ドラマ英語	1・2・3・4後		2		○								兼2
			インターネット英語	1・2・3・4前		2		○								兼2
			メディア英語	1・2・3・4後		2		○								兼2
			日本語表現技術	1・2・3・4通		2			○							兼1
	情報処理基礎		情報処理演習Ⅰ	1前	1				○		1					兼10
			情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4後		1			○		1					兼10
	キャリア教育	働く意欲を高める	社会人入門	1後		2		○								兼2
			キャリアサポート	2前		2		○								兼1
			インターンシップ短期	2・3前・後		1				○						兼1
			インターンシップ	2・3前・後		2				○						兼1
			自主社会活動	1・2・3・4前後		1				○						兼1
		就業力を身につける	キャリア基礎力入門	2前		2		○								兼1
			キャリア基礎力応用	2後		2		○								兼1
			現代社会理解	3前		2		○								兼2
	小計（60科目）			－	3	111		－			7	3	3			兼52

専門科目	社会福祉基礎科目	社会福祉概論Ⅰ	1前	2			○			1						
		社会福祉概論Ⅱ	1後	2			○			1						
		高齢者に対する支援と介護保険制度Ⅰ	1後	2			○					1				
		高齢者に対する支援と介護保険制度Ⅱ	2前		2		○					1				
		児童・家庭福祉論	1前	2			○								兼1	
		障害者福祉論	1後	2			○				1					
		医学一般	1前		2		○								兼1	
		権利擁護と成年後見制度	3前		2		○								兼1	
		心理学理論と心理的支援	3前		2		○								兼1	
		社会保障論Ⅰ	3前	2			○			1						
		ソーシャルワーク論Ⅰ	1後	2			○								兼1	
		社会的養護論	2前		2		○								兼1	
		地域福祉論Ⅰ	2前	2			○			1						
	ソーシャルワーク専門科目	ソーシャルワーク論Ⅱ	2前	2			○								兼1	
		ソーシャルワーク論Ⅲ	2後		2		○				1					
		ソーシャルワーク論Ⅳ	3前		2		○				1					
		ソーシャルワーク論Ⅴ	3後		2		○			1						
		ソーシャルワーク論Ⅵ	4前		2		○					1				
		就労支援サービス論	2後		2		○				1					
		地域福祉論Ⅱ	2後		2		○			1						
		社会調査の基礎	2前		2		○			1						
		福祉行財政と福祉計画	3後		2		○			1						
		社会理論と社会システム	2後		2		○			1						
		公的扶助論	3前	2			○								兼1	
		保健医療サービス論	3前		2		○								兼1	
		社会保障論Ⅱ	3後		2		○			1						
		更生保護制度	3後		2		○			1						
		社会福祉施設経営論	3後		2		○								兼1	
		相談援助演習Ⅰ	1後		1			○				1			兼1	
		相談援助演習Ⅱ	2前		1			○			1				兼1	
		相談援助演習Ⅲ	2・3後		1			○		2	2	1				
		相談援助演習Ⅳ	3・4前		1			○		2	2	1				
		相談援助演習Ⅴ	3・4後		1			○		2	2	1				
	ケアワーク専門科目	基礎介護論Ⅰ	1前		2		○			1						
		基礎介護論Ⅱ	1後		2		○			1						
		介護と倫理	2前		2		○			1						
		介護と自立	2後		2		○								兼1	
		介護と環境	3前		2		○								兼1	
		介護と地域	3後		2		○								兼1	
		コミュニケーション技術Ⅰ	1後		1			○		1						
		コミュニケーション技術Ⅱ	2前		1			○		1						
		生活支援技術概論	1前		1			○							兼1	
		日常生活支援技術Ⅰ	1前		1			○							兼1	
		日常生活支援技術Ⅱ	1後		1			○							兼1	
		日常生活支援技術Ⅲ	1後		1			○			1					
		生活環境支援技術	2後		1			○		1						
		家事生活支援技術	2前		1			○							兼1	
		生活支援技術応用Ⅰ	2前		1			○							兼1	
		生活支援技術応用Ⅱ	2後		1			○		1						
		生活支援技術展開Ⅰ	2前		1			○							兼1	
		生活支援技術展開Ⅱ	3後		1			○							兼1	
		介護過程基礎Ⅰ	1後		2		○			1						
		介護過程基礎Ⅱ	2前		2		○			1						
		介護過程展開Ⅰ	2後		1			○		1						
		介護過程展開Ⅱ	3前		1			○							兼1	
		介護サービス計画	3後		2		○								兼1	
		発達と老化Ⅰ	1前		2		○								兼1	
		発達と老化Ⅱ	1後		2		○								兼1	
		認知症の理解Ⅰ	2前		2		○				1					
		認知症の理解Ⅱ	2後		1			○							兼1	
		障がいの理解Ⅰ	2前		2		○								兼1	
		障がいの理解Ⅱ	2後		2		○				1					
		こころとからだのしくみⅠ	2前		2		○				1					
		こころとからだのしくみⅡ	2後		2		○				1					
		医療を必要とする人への介護Ⅰ	3前		2		○			1						
		医療を必要とする人への介護Ⅱ	3前		2		○			1						
		医療を必要とする人への介護Ⅲ	3後		2		○			1	1				兼2	
		医療を必要とする人への介護Ⅳ	3後		1			○		1	1				兼2	

専門科目	保育専門科目	保育原理	1前		2		○				1					
		教育原理	2後		2		○			1						
		相談援助	3前		1			○		1						
		保育者論	3前		2		○			1						
		乳幼児期の心理学	1前		2		○								兼1	
		保育の心理学Ⅱ	1後		1			○							兼1	
		子どもの保健Ⅰ	2前		2		○								兼1	
		子どもの保健Ⅱ	2後		2		○								兼1	
		子どもの保健演習	2前		1			○							兼1	
		子どもの食と栄養	2前		2			○							兼1	
		児童・家庭支援論	2後		2		○			1						
		児童・家庭支援演習（介入事例検討）	3前		1			○							兼1	
		保育課程論	3前		2		○				1					
		保育内容総論	1後		1			○			1					
		保育内容演習Ⅰ	1後		2			○							兼1	
		保育内容演習Ⅱ	2前		2			○							兼1	
		保育内容演習Ⅲ	2後		2			○			1					
		保育内容演習Ⅳ	3前		2			○			1					
		保育内容演習Ⅴ	3後		2			○							兼1	
		乳児保育	2後		2			○							兼1	
		障害児保育	2前		2			○			1					
		社会的養護演習	2後		1			○		1						
		保育相談支援	3後		1			○		1						
		保育の表現技術Ⅰ（音楽表現）	1前		2			○			1					
		保育の表現技術Ⅱ（身体表現）	1後		2			○							兼1	
		保育の表現技術Ⅲ（造形表現）	2前		2			○							兼1	
		保育の表現技術Ⅳ（言語表現）	2後		1			○							兼1	
		保育の表現技術Ⅴ（ピアノ）	1・2・3・4前･後		1			○			1					
		発達障害の理解	2後		2		○								兼1	
		障害児と地域支援	3後		2		○			1						
		レクリエーション援助論	1・2・3・4前		2		○								兼1	
	社会福祉実践科目	相談援助実習指導Ⅰ	2・3前		1			○		2	2	1				
		相談援助実習指導Ⅱ	2・3後		1			○		3	2	1				
		相談援助実習指導Ⅲ	3・4通		2			○		3	2	1				
		社会福祉実習	3・4通		4				○	3	2	1				集中
		介護総合演習Ⅰ	1後		1			○		2	1					
		介護総合演習Ⅱ	2後		1			○		2	1					
		介護総合演習Ⅲ	3前		1			○		2	1					
		介護総合演習Ⅳ	3後		1			○		2	1					
		介護実習Ⅰ	1後		2				○	2	1					集中
		介護実習Ⅱ-1	2後		4				○	2	1					集中
		介護実習Ⅱ-2	3前		4				○	2	1					集中
		保育実践演習	3後		2			○		2		2				
		保育実習ⅠＡ（保育所実習）	3前・後		2				○	2		2				集中
		保育実習ⅠＢ（施設実習）	3前・後		2				○	2		2				集中
		保育実習指導Ⅰ	2通		2			○		2		2				
		保育実習Ⅱ（保育所実習）	3後・4前		2				○	2		2				集中
		保育実習指導Ⅱ	3前		1			○		2		2				
		保育実習Ⅲ（施設実習）	3後・4前		2				○	2		2				集中
		保育実習指導Ⅲ	3前		1			○		2		2				
	社会福祉展開科目	社会調査の応用	2後		2		○			1						
		調査と統計	1後		2		○			1						
		公的扶助特論	3後		2		○			1						
		精神保健福祉論	1・2・3・4後		2		○								兼1	
		ボランティア・コーディネーション	1・2・3・4後		2		○			1						
		介護基礎	1前		2		○								兼1	
		ユニバーサルデザイン論	1・2・3・4前		2		○			1						
		リハビリテーション論	2・3前		2		○								兼1	
		手話	1・2・3・4後		2		○								兼1	
		社会福祉の歴史	1・2・3・4前		2		○				1					
		スクールソーシャルワーク論	3後		2		○								兼1	
		ケア論	1・2・3・4前		2		○				1					
		医療ソーシャルワーク論	3・4前		2		○								兼1	
	演習	人間福祉基礎演習	2前	1				○		7	3	3				
		人間福祉演習	3通	2				○		7	3	3				
	卒業研究	卒業研究	4通	4				○		7	3	3				
	小計（134科目）		－	27	210	0	－			7	3	3			兼25	
合計（194科目）			－	30	321	0	－			7	3	3			兼78	

学位又は称号	学士（社会福祉学）	学位又は学科の分野	社会学・社会福祉学関係／教育学・保育学

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
共通科目から必修科目を含めた18単位以上を修得すること。ただし、十文字学の4区分からそれぞれ1科目2単位以上（「学びの基礎をつくる」区分は必修「入門ゼミナール」の他に1科目2単位以上）を修得すること。また、保健体育から1単位、外国語の「基礎科目」区分から2単位以上を修得すること。 専門科目から、必修科目29単位を含め90単位以上を修得すること。 その他、自由選択科目として、共通科目・自学科専門科目・他学科専門科目から16単位以上を修得すること。 合計で124単位以上を修得すること。	１学年の学期区分	２学期
	１学期の授業期間	１５週
	１時限の授業時間	９０分

教　育　課　程　等　の　概　要

（人間生活学部健康栄養学科）

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実験・実習	専任教員等の配置 教授	専任教員等の配置 准教授	専任教員等の配置 講師	専任教員等の配置 助教	専任教員等の配置 助手	備考	
共通科目	十文字学	学びの基盤をつくる	入門ゼミナール	1前	2			○			6	3	1				
			地域で学ぶ	1前・後		2		○								兼3	
			読書入門	1前・後		2		○			6	3	1				
			総合科目	1前・後		2		○								兼1	
		女性の自立・生き方を学ぶ	家庭と法	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			キャリアデザインとライフプラン	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			子育てと環境	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			食の科学	1・2・3・4前・後		2		○				1	1			兼2	
			女性と健康	1・2・3・4前・後		2		○				1				兼2	
			女性と文化	1・2・3・4前・後		2		○								兼5	
		地域と社会を学ぶ	埼玉の地理・歴史・文化	1・2・3・4前・後		2		○								兼3	
			現代社会と教育	1・2・3・4前・後		2		○								兼3	
			現代社会と福祉	1・2・3・4前・後		2		○								兼3	
			現代社会とグローバリゼーション	1・2・3・4前・後		2		○								兼4	
			くらしのなかの日本国憲法	1・2・3・4前・後		2		○								兼2	
			情報とネットワーク社会	1・2・3・4前・後		2		○								兼3	
		人間と自然を学ぶ	地球環境の保全と生活	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			宇宙とものなりたち	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			生物の多様性と倫理	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			地球のしくみと災害	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			原子のエネルギーとわたしたち	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			健康と運動	1・2・3・4前・後		2		○			1					兼1	
	保健体育		身体運動Ⅰ	1前		1				○	1	1				兼4	
			身体運動Ⅱ	1・2・3・4後		1				○	1	1				兼4	集中を含む
	外国語	基礎科目	英語Ⅰ	1通		2			○							兼4	
			英語Ⅱ	1・2・3・4通		2			○							兼4	
			フランス語Ⅰ	1通		2			○							兼1	
			フランス語Ⅱ	1・2・3・4通		2			○							兼1	
			中国語Ⅰ	1通		2			○							兼1	
			中国語Ⅱ	1・2・3・4通		2			○							兼1	
			ハングルⅠ	1通		2			○							兼1	
			ハングルⅡ	1・2・3・4通		2			○							兼1	
			日本語Ⅰ	1通		2			○							兼1	
			日本語Ⅱ	1・2・3・4通		2			○							兼1	
			海外語学研修（事前事後指導を含む）	1・2・3・4前		2				○						兼2	
		資格科目	ＴＯＥＩＣ対策講座	1・2・3・4前		2		○								兼2	
			中国語試験対策科目	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			日本語能力試験対策講座（文法・文字語彙）	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
			日本語能力試験対策講座（読解）	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
		目的別科目	アドバンスト・リスニング	1・2・3・4前		2		○								兼2	
			アドバンスト・リーディング	1・2・3・4後		2		○								兼2	
			アドバンスト・ライティング	1・2・3・4後		2		○								兼2	
			日常英会話入門	1・2・3・4前		2		○								兼1	
			日常英会話	1・2・3・4後		2		○								兼1	
			ビジネス英語	1・2・3・4前		2		○								兼2	
			ビジネス英会話	1・2・3・4後		2		○								兼2	
			映画・ドラマ英語	1・2・3・4後		2		○								兼2	
			インターネット英語	1・2・3・4前		2		○								兼2	
			メディア英語	1・2・3・4後		2		○								兼2	
			日本語表現技術	1・2・3・4通		2			○							兼1	
	情報処理基礎		情報処理演習Ⅰ	1前	1				○							兼11	
			情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4後		1			○							兼11	
	キャリア教育	働く意欲を高める	社会人入門	1後		2		○								兼1	
			キャリアサポート	2前		2		○								兼1	
			インターンシップ短期	2・3前・後		1				○						兼1	
			インターンシップ	2・3前・後		2				○						兼1	
			自主社会活動	1・2・3・4前後		1				○						兼1	
		就業力を身につける	キャリア基礎力入門	2前		2		○								兼1	
			キャリア基礎力応用	2後		2		○								兼1	
			現代社会理解	3前		2		○								兼2	
	小計（60科目）			―	3	111		―			6	3	1			兼53	

専門科目	学科基礎		食と健康	1前	2			○			6	3	1				オムニバス
			健康管理概論	2前	2			○			1						
			基礎統計学	1前	2			○								兼1	
			統計学演習	1後	1					○						兼1	
	栄養・食生活領域	社会生活と健康	公衆衛生学（衛生学を含む）	3後		2		○			1						
			社会福祉概論	3前		2		○								兼1	
		人体の構造と機能	解剖生理学(解剖学を含む)	1前	2			○			1						
			解剖生理学実験	1後		1				○	1		1				オムニバス
			生化学	2前	2			○			1						
			生化学実験	2後		1				○	1						
			分子栄養学	4前		2		○			1						
			運動生理学（生理学を含む）	2前		2		○			1						
			運動生理学実験	2後		1				○	1						オムニバス
			バイオメカニクス	3前		2		○			1						
			病態生理学	2後	2			○			1						
		食品と衛生	食品学Ⅰ	1前	2			○				1					
			食品学Ⅱ	1後	2			○				1					
			食品学実験	2前		1				○		1					
			食品加工学	4後		2		○				1					
			食品加工学実習	4後		1				○		1					
			食品機能論	4後		2		○			1						
			食品衛生学	1後	2			○			1						
			食品衛生学実験	2前		1				○	1						
		栄養と健康	基礎栄養学Ⅰ	1前	2			○					1				
			基礎栄養学Ⅱ	1後	2			○					1				
			基礎栄養学実験	1後		1				○		1	1				
			応用栄養学	2前	2			○					1				
			応用栄養学実習	2後		1				○			1				
			臨床栄養学Ⅰ	3前	2			○			1						
			臨床栄養学Ⅱ	3後		2		○								兼1	
			臨床栄養学実習	3後		1				○						兼1	
		栄養の指導	栄養指導論Ⅰ	2前		2		○								兼1	
			栄養指導論Ⅱ	2後		2		○					1				
			栄養指導論実習Ⅰ	2後		1				○						兼1	
			栄養指導論実習Ⅱ	3前		1				○						兼1	
			公衆栄養学概論	3後	2			○				1					
			公衆栄養学実習	4前		1				○		1					
		給食の運営	調理学	1前	2			○			1						
			基礎調理学実習Ⅰ	1前	1					○	1						
			基礎調理学実習Ⅱ	1後	1					○	1						
			応用調理学実習	2後		1				○	1						
			給食計画・実務論	3前		2		○			1						
			給食運営実習	3後		1				○	1						
			給食運営校外実習	4通		1				○	1	2	1				集中
			給食運営演習	4通		2			○		1	2	1				オムニバス
			食事計画論	2前	2			○			1	1					
			食事計画論演習	2前		1			○		1	1					
		食文化・食ビジネス	食文化概論	3前		2		○				1					
			健康食育論	3後		2		○				1					
			食コーディネート論	3前		2		○								兼1	
			食コーディネート論実習	3後		1			○							兼1	
			フードマネージメント論	3後		2		○								兼1	
	健康支援領域		運動の障害と予防	2前		2		○			1						
			健康産業施設等現場実習	3前		1				○	1						集中
			スポーツ社会学（スポーツ経営管理学を含む）	3後		2		○								兼1	
			健康スポーツビジネス論	4前		2		○				1					
			障碍者福祉論	4後		2		○								兼1	

専門科目	健康運動領域	健康づくりの運動Ａ（ストレッチング・ウォーキング・陸上競技）	1前	1					○		1				兼1	オムニバス
		健康づくりの運動Ｂ（ダンス）	2前		1				○	1					兼1	オムニバス
		健康づくりの運動Ｃ（エアロビックダンス・体操）	2後		1				○	1						
		健康づくりの運動Ｄ（水泳・水中運動）	1前		1				○	1					兼1	オムニバス・集中
		健康づくりの運動Ｅ（球技）	1後		1				○	1	1				兼1	オムニバス
		健康づくりの運動Ｆ（武道・器械体操）	1後		1				○						兼2	オムニバス
		健康づくりの運動Ｇ（野外活動）	2前		1				○	1						集中
		運動栄養学演習	3前		1			○							兼1	
		健康運動指導演習	3前		1			○		2						オムニバス
		トレーニング論演習	3後		1			○							兼1	
		運動プログラム演習	2前		1			○		1						
		体力測定・評価演習	3後		1			○							兼1	
	教育領域	体育原理	2前		2		○			1						
		運動学（運動方法学）	2後		2		○								兼1	
		健康・スポーツ心理学	2後		2		○								兼1	
		救急・応急処置演習	2後		1			○							兼1	集中
		学校保健概論	3前		2		○								兼3	オムニバス
	演習	健康栄養学演習	3通	2				○		6	3	1				
	卒業研究	卒業研究	4通	4				○		6	3	1				
	小計（76科目）		－	42	78	0	－			6	3	1			兼21	
合計（136科目）			－	45	189	0	－			6	3	1			兼73	

学位又は称号	学士（栄養学）	学位又は学科の分野	家政関係

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
共通科目から必修科目を含めた18単位以上を修得すること。ただし、十文字学の4区分からそれぞれ1科目2単位以上（「学びの基礎をつくる」区分は必修「入門ゼミナール」の他に1科目2単位以上）を修得すること。また、保健体育から1単位、外国語の「基礎科目」区分から2単位以上を修得すること。 専門科目から、必修科目40単位を含め90単位以上を修得すること。 その他、自由選択科目として、共通科目・自学科専門科目・他学科専門科目から16単位以上を修得すること。 合計で124単位以上を修得すること。	１学年の学期区分	２学期
	１学期の授業期間	１５週
	１時限の授業時間	９０分

教　育　課　程　等　の　概　要

（人間生活学部文芸文化学科）

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由	授業形態 講義	授業形態 演習	授業形態 実験・実習	専任教員等の配置 教授	専任教員等の配置 准教授	専任教員等の配置 講師	専任教員等の配置 助教	専任教員等の配置 助手	備考
共通科目	十文字学	学びの基盤をつくる	入門ゼミナール	1前	2			○			4	5	1			
			地域で学ぶ	1前・後		2		○								兼3
			読書入門	1前・後		2		○			4	5	1			
			総合科目	1前・後		2		○								兼1
		女性の自立・生き方を学ぶ	家庭と法	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			キャリアデザインとライフプラン	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			子育てと環境	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			食の科学	1・2・3・4前・後		2		○								兼4
			女性と健康	1・2・3・4前・後		2		○								兼3
			女性と文化	1・2・3・4前・後		2		○			1	3				
		地域と社会を学ぶ	埼玉の地理・歴史・文化	1・2・3・4前・後		2		○			1					兼2
			現代社会と教育	1・2・3・4前・後		2		○								兼3
			現代社会と福祉	1・2・3・4前・後		2		○								兼3
			現代社会とグローバリゼーション	1・2・3・4前・後		2		○					1			兼3
			くらしのなかの日本国憲法	1・2・3・4前・後		2		○								兼2
			情報とネットワーク社会	1・2・3・4前・後		2		○								兼3
		人間と自然を学ぶ	地球環境の保全と生活	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			宇宙とものなりたち	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			生物の多様性と倫理	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			地球のしくみと災害	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			原子のエネルギーとわたしたち	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			健康と運動	1・2・3・4前・後		2		○								兼2
	保健体育		身体運動Ⅰ	1前		1				○						兼6
			身体運動Ⅱ	1・2・3・4後		1				○						兼6 集中を含む
	外国語	基礎科目	英語Ⅰ	1通		2			○							兼4
			英語Ⅱ	1・2・3・4通		2			○							兼4
			フランス語Ⅰ	1通		2			○							兼1
			フランス語Ⅱ	1・2・3・4通		2			○							兼1
			中国語Ⅰ	1通		2			○							兼1
			中国語Ⅱ	1・2・3・4通		2			○							兼1
			ハングルⅠ	1通		2			○							兼1
			ハングルⅡ	1・2・3・4通		2			○							兼1
			日本語Ⅰ	1通		2			○							兼1
			日本語Ⅱ	1・2・3・4通		2			○							兼1
			海外語学研修（事前事後指導を含む）	1・2・3・4前		2				○						兼2
		資格科目	ＴＯＥＩＣ対策講座	1・2・3・4前		2		○								兼2
			中国語試験対策科目	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			日本語能力試験対策講座（文法・文字語彙）	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
			日本語能力試験対策講座（読解）	1・2・3・4前・後		2		○								兼1
		目的別科目	アドバンスト・リスニング	1・2・3・4前		2		○								兼2
			アドバンスト・リーディング	1・2・3・4後		2		○								兼2
			アドバンスト・ライティング	1・2・3・4後		2		○								兼2
			日常英会話入門	1・2・3・4前		2		○								兼1
			日常英会話	1・2・3・4後		2		○								兼1
			ビジネス英語	1・2・3・4前		2		○								兼2
			ビジネス英会話	1・2・3・4後		2		○								兼2
			映画・ドラマ英語	1・2・3・4後		2		○								兼2
			インターネット英語	1・2・3・4前		2		○								兼2
			メディア英語	1・2・3・4後		2		○								兼2
			日本語表現技術	1・2・3・4通		2			○							兼1
	情報処理基礎		情報処理演習Ⅰ	1前	1				○			2				兼9
			情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4後		1			○			2				兼9
	キャリア教育	働く意欲を高める	社会人入門	1後		2		○			1					
			キャリアサポート	2前		2		○			1					
			インターンシップ短期	2・3前・後		1				○						兼1
			インターンシップ	2・3前・後		2				○						兼1
			自主社会活動	1・2・3・4前・後		1				○	1					
		就業力を身につける	キャリア基礎力入門	2前		2		○								兼1
			キャリア基礎力応用	2後		2		○								兼1
			現代社会理解	3前		2		○								兼2
	小計（60科目）			－	3	111	0	－			4	5	1			兼48

専門科目	専門必修科目	基礎科目	文芸文化入門	1前	2			○				1					
			文芸文化概論	1後	2			○					1				
			日本文学概論	2前	2			○			1						
			芸術文化概論	2後	2			○								兼1	
			文芸文化特講	3前	2			○			3	2	1				ｵﾑﾆﾊﾞｽ
		日本語科目	日本語基礎	1前	2			○				1				兼2	
			日本語表現Ⅰ	1後	2			○				2				兼2	
			日本語表現Ⅱ	2後	2			○			2					兼2	
			日本語表現Ⅲ	3後	2			○			2	1					
		演習科目	基礎演習	1後	1				○		2	2	1				
			文芸文化ゼミⅠ	2前	1				○		1	2	1				
			文芸文化ゼミⅡ	2後	1				○		3	3					
			文芸文化テーマ研究ゼミ	3通	2				○		4	5	1				
	専門基幹科目	芸術文化基礎科目	文化を考える	1・2前		2		○			1						
			日本と異文化	1・2前		2		○				1					
			世界の演劇	1・2前		2		○					1				
			芸術とことば	1・2後		2		○			1						
		日本語・日本文学基礎科目	日本語学入門	1・2前		2		○				1					
			言語学入門	1・2後		2		○			1						
			日本文学史Ａ	1・2後		2		○			1						
			日本文学史Ｂ	1・2前		2		○								兼1	
			日本文学史Ｃ	1・2後		2		○				1					
		専門を学ぶための基礎科目	日本文学の名作	1・2前		2		○			1						
			海外文学の名作	1・2後		2		○					1				
			音声表現	1・2前・後		2		○			1						
			考える日本史	1・2後		2		○								兼1	
			フィールドスタディ	1・2前・後		1			○		1						
			生涯学習概論	1・2前		2		○								兼1	
	専門選択科目	芸術文化領域	芸術と歴史	2･3･4前		2		○								兼1	
			芸術と生活	2･3･4後		2		○								兼1	
			芸術と人間	2･3･4前		2		○				1					
			日本の文化	2･3･4前		2		○			1						
			文化と歴史	2･3･4後		2		○								兼1	
			文化と生活	2･3･4前		2		○				1					
			生活とデザイン	2･3･4前		2		○								兼1	
			色彩とデザイン	2･3･4前		2		○				1					
			舞台芸術Ａ	2･3･4前		2		○								兼1	
			舞台芸術Ｂ	2･3･4後		2		○				1					
			身体と表現	2･3･4前		2		○								兼1	
			映像文化論	2･3･4後		2		○								兼1	
			芸能の世界	2･3･4後		2		○								兼1	
		日本語・日本文学領域	日本文学論Ａ	2･3･4前		2		○			1						
			日本文学論Ｂ	2･3･4前		2		○				1					
			日本文学論Ｃ	2･3･4前		2		○			1						
			日本文学研究Ａ	2･3･4後		2		○			1						
			日本文学研究Ｂ	2･3･4後		2		○				1					
			日本文学研究Ｃ	2･3･4後		2		○			1						
			児童文学	2･3･4前		2		○								兼1	
			物語分析	2･3･4前		2		○								兼1	
			漢詩・漢文に親しむ	2･3･4後		2		○								兼1	
			日本語学Ａ	2･3･4前		2		○				1					
			日本語学Ｂ	2･3･4前		2		○			1						
			日本語学研究Ａ	2･3･4後		2		○				1					
			日本語学研究Ｂ	2･3･4後		2		○			1						
			日本語音声学	2･3･4後		2		○			1						
		創作表現領域	硬筆書道	2･3･4通		2			○							兼1	
			毛筆書道	2･3･4通		2			○							兼1	
			創作ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ Ａ	2･3･4通		2			○							兼1	
			創作ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ Ｂ	2･3･4通		2			○							兼1	
			創作ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ Ｃ	2･3･4通		2			○							兼1	
			創作ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ Ｄ	2･3･4通		2			○							兼1	
			創作ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ Ｅ	2･3･4通		2			○							兼1	

専門科目	専門選択科目	総合文化領域	図書の文化	2･3･4前		2		○				1					
			くらしと日本語	2･3･4前		2		○			1						
			データコレクション入門	2･3･4前		2		○			1						
			比較文化論	2･3･4前		2		○					1				
			外国文化論Ａ	2･3･4前		2		○					1				
			外国文化論Ｂ	2･3･4後		2		○								兼1	
			文化財研究	2･3･4後		2		○				1					
			日本文化研究	2･3･4後		2		○			1						
			比較文化研究	2･3･4後		2		○				1					
			テーマで触れる芸術	2･3･4後		2		○				1					
			テーマで読む文学	2･3･4後		2		○					1				
			神話・伝承学	2･3･4前		2		○			1						
			笑いの文化	2･3･4後		2		○					1				
			マンガ・アニメ文化論	2･3･4前		2		○								兼1	
			ディズニー研究	2･3･4後		2		○								兼1	
			多元文化論	2･3･4前		2		○								兼1	
	卒業研究		卒業研究	4通	4				○		4	5	1				
	小計（79科目）			－	27	129	0	－			4	5	1			兼18	
合計（139科目）				－	30	240	0	－			4	5	1			兼67	

学位又は称号	学士（文学）	学位又は学科の分野	文学関係

卒業要件及び履修方法	授業期間等	
共通科目から必修科目を含めた18単位以上を修得すること。ただし、十文字学の4区分からそれぞれ1科目2単位以上（「学びの基礎をつくる」区分は必修「入門ゼミナール」の他に1科目2単位以上）を修得すること。また、保健体育から1単位、外国語の「基礎科目」区分から2単位以上を修得すること。 専門科目から、必修科目27単位を含め90単位以上を修得すること。ただし、専門基幹科目から10単位を修得すること（芸術文化コースは「芸術文化基礎科目」区分からコース必修科目「文化を考える」を含め6単位以上、日本語・日本文学コースは「日本語・日本文学基礎科目」区分からコース必修科目「日本語学入門」を含め6単位以上とする）。 その他、自由選択科目として、共通科目・自学科専門科目・他学科専門科目から16単位以上を修得すること。 合計で124単位以上を修得すること。	１学年の学期区分	２学期
	１学期の授業期間	１５週
	１時限の授業時間	９０分

授　業　科　目　の　概　要

（人間生活学部人間福祉学科）

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通科目	十文字学	学びの基礎をつくる	入門ゼミナール	各学科は入学直後の学生が大学での生活と学習がスムースに進み、卒業までの展望や卒業後の進路についても思い描けるように丁寧にオリエンティションとガイダンスを行う。また、学生が受け身にならないように、さまざまな形で自ら学ぶ要素を取り入れるようにする。時間割上の設定、授業方法は各学科の創意工夫にゆだねられるが、下記の項目について必ず含めることとする。①本学園創設の理念、建学の精神、②学園及び大学が歩んだ歴史、③本学が立地する地域の特色や課題、④学科が目標とし、卒業時に想定される人物像。	
			地域で学ぶ	担当する教員(単独または複数)は、地域の実情を熟知し、地域においてさまざまな活動を行っている人士(単独または複数)を招き、地域の特色、地域が抱える課題等について学生に情報を提供するとともに、学生自らがそうしたさまざまな活動に加わるための意欲の喚起と必要な知識の獲得を進める。その上で、前述した地域の人士の協力と援助を得て、地域においてさまざまな活動をできるようにする。時間割上の設定にはとらわれず、しかし単位構成上有効な時間量を確保して進めることに配慮する。	
			読書入門	担当する教員(単独とする)は、ゼミの開講に当って一冊の本を決め、半期の設定された時間割上の時間において学生たちとその本をじっくりと読み合い、内容を攻究する。できるだけその本一冊の読解に止まることなく、読書の楽しみ、読書の方法への開眼などが実現するように努力する。ゼミが開設されている期間及び終了後においても、読書感想文を書くようにし、それを公表することによって、読書の意欲が定着するように努力する。	
			総合科目	担当する教員(単独または複数)は、学外の企業、団体、有志などの協力を得て、特定の題目、特に社会の動向と連動するような課題について、期間内に15回以内の授業を設定する。授業では特定の専門分野に限ることなく、共通科目が扱う領域を総合的に、かつ自由に、創意的に扱うことによって、学生自らが学ぶ意欲と姿勢を獲得できるように配慮する。扱う課題において「総合」科目であり、企業等の授業提供を主旨とする点からは「冠講座」となる。なお、授業をゼミナールの形態で進めるケースは総合ゼミと呼ぶことにするが、この科目の中の一つの形態である。	
		女性の自立・生き方を学ぶ	家庭と法	家庭生活を営む上で関係のある法律について取り扱う。価値観が多様化し、様々な家族のかたちがあるなか、身近な事例や裁判などを素材にして現代の結婚・離婚・親子・相続のしくみや法の課題について学ぶ。また、家庭から一歩踏み出して女性が働くときの制度的な課題から、これからの生き方を考えることを目的とする。	
			キャリアデザインとライフプラン	女性が働くことの意味や目的を考えるとともに、自分自身のキャリアプランを設計する。結婚、出産、育児などの家庭生活と仕事をどう捉えていきたいか、人生設計の中で仕事をどう位置付けたいか、将来を見据えた自己分析を通して、自らのキャリアプランを考察する。統計情報から働く女性の動向を把握するとともに、ポジティブ・アクションや仕事と家庭の両立支援といった女性の活躍を推進する政策、女性労働に関する法的な変遷を学習した上で、固定観念に囚われない自分らしい職業選択について考える。	
			子育てと環境	子育ては新たな発見や予測しない問題に直面することの連続である。少子化社会において次世代を育成する子育てについて考えることは重要な課題であり、様々な議論が展開されている。本来、子育ては楽しく充実した営みである。しかし、現実には直面する課題や問題が多く、必ずしも子育てを楽しんでいるとは言えない場合も少なくない。そこで、子育てを楽しみ、充実させるために必要な視点について学び、豊かな子育てとは何かを考える。	
			食の科学	日本は、世界に類を見ないほど豊富な食材や食品が流通していて、欲しいと思えば何でも手に入る恵まれた環境にある。一方で食生活の乱れに由来することで、若年層が低栄養状態にあること、壮年層に肥満やメタボリックシンドロームなどをはじめ生活習慣病の増加が社会問題となっている。また、幼児や児童・生徒に見られる個食や孤食、偏食や欠食など、家庭で食卓を介したコミュニケーションの欠如は、子どもたちの健全な成長に影響を及ぼしている。この科目では健康であるための食生活について、栄養学、食品学から加工・調理学、食習慣、美味論さらには食環境論まで幅広く、学び、その理解を深める。	
			女性と健康	生涯を通じた健康とQOLの向上を目指すには、女性のライフサイクルに応じた正しい知識が求められる。若い時から、バランスの良い食事、ストレス対応、女性の生理、喫煙、飲酒、薬物の問題や、食の安全、感染症の予防などを考えることは今後の社会人や家庭人として役立つ。健康に関する知識のみならず行動が伴うように多方面から学習する。	

共通科目	十文字学	女性の自立・生き方を学ぶ	女性と文化	「女性（性）」・「男性（性）」という区分は、生物学的なオス（雄）・メス（雌）とは別に、意識的・無意識的な文化的・社会的制度によって存在している。そのような「女性（性）」がどのように文化的・社会的に創出されてきたのか、文化のなかで「女性（性）」はどのような意味や役割を担ってきたのか、といった点をさまざまな文化事象を通して具体的に考察し、それらを踏まえて文化創造の主体としての女性のありようを探究する。	
		地域と社会を学ぶ	埼玉の地理・歴史・文化	埼玉の地理・歴史・文化について、広く地元学という観点から学び、理解を深めていく。静的学習にとどまらず、体験学習や参加型学習という要素を取り入れ、埼玉を広域的に、またあるときは特定の地域に焦点化させてその生活の実際に触れながら、埼玉の現状や課題について考察を深めていく。	
			現代社会と教育	高度情報化、高度消費化、グローバル化社会と形容される現代社会おいて、教育はかつてない複雑な問題を呈している。教育がすぐれた社会的な営みである以上、主として学校で生起している様々な課題（子どもの学力・意欲・体力・モラルの低下・問題行動党）は、現代社会の変容と関連している。本講義では、複数の教員がそれぞれの専門的分野の知見を生かしながら、教育課題を多角的に捉え学ばせていく。	
			現代社会と福祉	少子高齢化、失業、貧困、孤立、医療、介護、子育て支援等、現代社会が抱える福祉課題はじつに多様で、どれも深刻な状況にある。その要因は何か、どのような対策が講じられているのか、自助・共助・公助をどう組み合わせて課題解決をめざすのか、こうした問題を一人ひとりの生活の視点から理解を深めることによって、生活のリテラシーとして福祉を活用し、創造する可能性を学ぶ。	
			現代社会とグローバリゼーション	インターネット及び情報技術、交通機関の発展・発達等により、様々な分野においてグローバル化が加速度的に進んでいる。そしてそれらは、私たちの生活・社会においても大きな影響を与え始めた。本講義では、衣服、映画、政治、経済、ビジネス、日本の国際貢献のあり方等からグローバル化について多面的にとらえるとともに、グローバル化がもたらすメリット、デメリットについて考え、理解することで、自分の生活に活かしていくことを目的とする。	
			くらしのなかの日本国憲法	私たちの暮らしにとって憲法はどのよう役割を果たしているのか。すべての生活部面にわたって個人として尊重され、人権が保障されていように、権力をコントロールする法的なちからとなっている。憲法の理念、しくみ、内容を広く学び、主権者の一人として基本的な憲法理解解力を獲得することを目的とする。	
			情報とネットワーク社会	情報に接する機会はますます多くなり、自ら社会に向けて情報を発信することも可能となってきた。このような情報社会においては、膨大な情報から有用なものを取捨選択し、モラルに則って効果的に活用することが重要である。そのための基礎知識の習得を本科目の目的とし、情報の基礎（情報の概念、特徴等）、情報システムのしくみ（コンピュータ、ネットワーク等）、情報とネットワーク社会の関係（セキュリティ、個人情報・知的財産権の保護、情報倫理等）を主たるテーマとして講義形式で授業を実施する。	
		人間と自然を学ぶ	地球環境の保全と生活	人間の活動と環境はどんな関係にあるのか、またどんな関係にあるべきなのかを、環境学の視点から理解することを目的とする。私たちの日常的な行動が環境に及ぼす影響、悪化してしまった環境改善への対策などについて、政治、経済、社会の動向との関連を検証しながら、具体的な事例を取り上げて論じる。公的な環境保護政策や民間の保護活動のあり方についても解説する。さらに、エコシステムという視点から見て人間は何を意識して行動すべきなのかについて、これまで行われてきた様々な議論を紹介する。	
			宇宙とものなりたち	人間はなぜここにいるのかについて、宇宙規模で考える。太陽系の天体について学ぶことにより、地球環境がいかに恵まれたものであるかを再認識する。また、宇宙が膨張している事実を学ぶことにより、宇宙には始まりがあり、それから現在の宇宙の姿になるまでにどのようなできごとがあったのかを理解する。さらに、太陽系の始まりから地球環境はどのように整えられてきたのか、長い宇宙の進化の中で人類と宇宙はどのような関係があるのかを学ぶ。	
			生物の多様性と倫理	まずは身近な生物圏を知る。どのような生物が存在して、他の生物や環境とどのような関係があるのか理解し、生物種の保存について考える。さらに、遺伝情報を読み取り、操作や選択をすることが可能となってきたいま、そのことの生態系への影響や倫理的側面を考える。	

共通科目	十文字学	人間と自然を学ぶ	地球のしくみと災害	地震とそれに伴う津波、集中豪雨や竜巻などの自然災害は、近年その規模と頻度が増しているように思われる。また、台風は年々強さを増し、猛暑日は頻度や発生地域が拡大しているように感じられる。人間にとっては災害となるような自然現象はどのようにして起こるのか、そのしくみを理解する。さらに、人間はそのような自然災害に対してどのような準備・対策をすべきなのか、また、そのような災害が起きたときにどう対処したらよいかについて考える。	
			原子のエネルギーとわたしたち	人間とエネルギーのかかわりは火の発見から始まり、今、私たちの快適で便利な暮らしは、エネルギーを消費することによって成り立っている。大量のエネルギーを取り出せる原子力は福島事故によって、制御不能となる大きな危険性をはらんでいることに直面した。しかし、将来の暮らしとエネルギーを考えるためには、経済性、環境性、安全性など多面的な視点で考える必要がある。エネルギー利用の歴史と現状を学び、また、放射線の基礎知識を学ぶことによって、医療や農業など暮らしに身近な放射線利用についても考える。	
			健康と運動	本学学園歌に「身をきたへ心きたへて世の中にたちてかひある人と生きなむ」と謳われているように、世の中に出て社会的な役割を十分に果たすためには、各自の心身へのたえまない洞察と働きかけが必要となる。本授業では、体育科学の最新の研究成果をベースとして、その洞察と働きかけに関する知見を提供する。授業を通して、運動の今日的な意義や健康のあり方についての教養を深め、女性としてしなやかに日々を過ごすための素地を整える。	
	保健体育		身体運動Ⅰ	１年次前期に学科クラスごとに履修し、2～5週を単位として数種類の体育実技を行う。協同型および競争型レクリエーションを織り交ぜて、入学直後の学生が学科内の交流を深める機会を提供する。また多彩な身体運動を通じ、「身体を動かすこと」の楽しさを体感し、さらに自らと他者の身体についての気付きを深める。主な実技種目として、長縄とびやリズムエクササイズ、ティーボールをはじめとした各種球技などを行う。これらの実技科目を通じて、大学生活への帰属意識を高め、4年間の学園生活に臨む修学態度の基礎を涵養する。	
			身体運動Ⅱ	1～4年次後期に、希望科目(学修内容）を学科の枠を外して選択・履修させる。ここでは生涯を通じてスポーツに親しむ素地を涵養すべく、同一の種目または運動領域の活動を継続的に行う。そして、スポーツには集団種目や個人種目、球技や体操など多彩な楽しみ方があること、自らの意欲や能力に応じて「身体を動かす愉しみ方」を見つけることを目標とする。各種球技、ゴルフ、リズムエクササイズ、筋力トレーニングなどの科目を設けるとともに、教職等の資格取得に関連する内容、集中で開講するシーズンスポーツ（３泊４日の雪上実習：スキー、スノーボード等）も設定する。	集中を含む
	外国語	基礎科目	英語Ⅰ	通年科目として英語によるコミュニケーションのための基礎的英語能力の育成を目指す科目である。とりわけ、聞く・話す、読む・書くの4技能の総合的育成を行い、大学を経て社会にでても通用する英語力の育成を目標としている。そのため、前期ではおもに英語の聞く、読むための認知能力の効率的な修得を目指す。そのため、重要な文法事項や語彙を効率的に学習できるようにする。後期では前期で修得した内容や力を基に、話す、書くの運用能力を育成するものである。	
			英語Ⅱ	英語Ⅰをふまえ、あるいは実力に応じ、英語の4技能、リスニング力とスピーキング力、リーディング力とライティング力をより高いレベルで身につける科目である。リスニングではビジネスシーンだけではなく、日常、映画やTV、ニュースなどより多くの英語素材を的確に把握できる力の養成を目指す。 リーディングでは様々な素材、新聞や雑誌、Email、告知などの英語情報を読みこなす力を養成する。スピーキングではリスニングをベースに話す力を養成する。ライティングもリーディングベースにしながら英文構成の基礎力をつけていく。	
			フランス語Ⅰ	初めてフランス語を学ぶ学生を対象に、フランス語の基本的な語彙、発音、現在形までの簡単な文の構造についての入門的な授業を行う。まずは、フランス語で日常よく使われる挨拶や基本的な単語を実際に何度も発音しながら、フランス語に慣れることを第1の目標とする。さらに、フランス語の綴りと発音の関係についても学び、初見の単語でもある程度発音が予測できるようになることを目指す。また、フランス語の辞書を引くことにも慣れさせ、簡単な短文であれば、辞書を引きながら意味を理解できるようにする。	
			フランス語Ⅱ	フランス語Ⅰをふまえ、あるいは実力に応じ、基礎的な文法事項を復習しながら、自己紹介、バスや電車の乗り方、ホテルの予約の仕方、買い物など、初歩の会話に必要な具体的な表現を習得することを目指す。文法事項では過去形や複文の構造なども学習し、徐々に語彙を増やしながら、平易な文章を読めるようにすることも併せて目指す。さらに、詩・小説・映画などを通してフランス文化に触れて行くことも目的の一つとする。	
			中国語Ⅰ	初めて中国語を学ぶ学生を対象に、中国語のしくみ、ピンイン（発音と声調をあらわした記号）の読み方を指導します。テキストは比較的容易な内容なので、繰り返し発音することで定着を図ります。別冊問題集を解く過程で簡体字や文法理解のチェックを行ない、日本語との違いを意識してもらいます。最終的には中国語検定試験準４級レベルの中国語力を付け、簡単な自己紹介や挨拶などが身に付くようにする。	

共通科目	外国語	基礎科目	中国語Ⅱ	中国語の基礎がほぼできている学生を対象に、中級レベルのテキストを使用して「読む・聴く」のレベルアップを図るとともに、「書く・話す」能力の養成を行ないます。授業はテキストだけではなく、受講生のレベルによってやや易しい基本的な復習プリントを用いて基礎を補ったり、長文や時事文読解を行ないハイレベルな内容にするなど柔軟に対応していきます。中国語検定試験４級・３級レベルの中国語力を付け、自分の言いたいことがアウトプットできるようにする。	
			ハングルⅠ	初めて韓国語を学ぶ学生を対象に、ハングルの母音（字）と子音（字）が区別でき、約450語の単語や限られた文型からなる文を理解する力を修得することを目的とする。決まり文句としてのあいさつやあいづち・簡単な質問ができ、またそのような質問に答えることができたり、自分自身や家族の名前、特徴・好き嫌いなどの私的な話題、日課や予定、食べ物などの身近なことについて伝え合うことができるようになることを目指す。	
			ハングルⅡ	ハングルⅠをふまえ、あるいは実力に応じ、比較的使用頻度の高い約950語の単語や文型からなる文を理解する力を修得することを目的とする。レストランでの注文や簡単な買い物をする際の依頼や簡単な誘いなどを行うことができたり、簡単な日記や手紙、メールなどの短い文を読み、何について述べられたものなのかをつかむことができるようになることを目指す。また、自分で辞書を引き、頻繁に用いられる単語の組み合わせ(連語)についても一定の知識を身につける。	
			日本語Ⅰ	留学生対象の通年科目であり、日本語四技能を総合的に学習する科目である。大学入学後、留学生が学部の講義を受講し、理解するには、高い日本語力が求められる。大学講義の理解の助けになるよう、「聞く」（講義の聞き取りがスムーズになるよう）、「話す」（意見発表に自信を持って臨めるよう）、「読む」（教材、資料の読み取りが正しく、早く行えるよう）、「書く」（レポート作成、記述問題の解答が的確にできるよう）の四技能すべてを学習する。授業は日本語力によりレベル別に開講される。	
			日本語Ⅱ	留学生対象の通年科目である。日本語Ⅰの履修を踏まえ、開講されるため、先に日本語Ⅰが履修済みであることが求められる。限られた時間ではあるが、日本語四技能能力を総合的に向上させるために、日本語Ⅰに続き学習を行う。学内の講義理解がより容易になること、また、学生同士、教員とのコミュニケーション力が上がることを目指し学習を継続させる。さらに、卒業後の進路も見据え、社会におけるコミュニケーションが円滑に行えるよう、一段上の日本語力を身につけることを目標とする。授業は日本語力によりレベル別に開講される。	
			海外語学研修（事前事後指導を含む）	短期留学を通じて外国語によるコミュニケーションのための基礎的外国語能力の育成を目指す科目である。各言語Ⅰに相当する聞く・話す、読む・書くの4技能の総合的育成を留学先の大学で行い、社会にでても通用する外国語力の育成を目標としている。昼間は大学で集中授業、午後のアクティビティ、ステイ先での生活会話、様々なシチュエーションで常に外国語に接することで海外の文化や風習なども学べる。各言語Ⅰに相当する以上の内容を集中して修得することを目指している。	
		資格科目	ＴＯＥＩＣ対策講座	TOEICが始めてという学生から高得点までを目指す学生に対応するため、目的別クラス設定をしている。目標点は個人によって異なるからである。まず、運用力に重点を置き、運用するための語法力をさらにつけ、文脈や状況での判断を養成する。また、リーディングで用いるskimming（流し読み）を通して大意や要旨を把握し、scanning（拾い読み）によって情報を選択する方法を養成する。予測読みを加えながらより速く、正確に読み取る力を養成する。また、それらがリスニングでの設問理解にも利用出来る段階まで養成する。	
			中国語試験対策科目	中国語検定試験・HSKなどの試験に対応できるよう、発音・文法・作文を重点に指導します。基礎の確認から始め、日本語と異なる簡体字、紛らわしい発音の判別、動詞を中心にした語の配列について死角がなくなるようチェックアップを行ないます。試験近くには過去問を解き、出題方式に慣れるようにします。テキストには過去５年間の傾向を網羅したものを使用しますが、適宜プリントで精読・多読の習慣をつけ、幅広い中国語力が身につくようにする。	
			日本語能力試験対策講座（文法・文字語彙）	留学生対象の日本語科目である。日本語能力試験の出題項目のうち、文法・文字語彙に特化して、実際の試験の出題形式に則り、演習形式で授業を進める。講座は能力試験Ｎ1、Ｎ２レベルの合格を目指し、レベル別に開講される。限られた時間で効果的に学習を進めるため、学生の予習、復習が強く求められる。また、受講前に能力試験Ｎ２レベルに相当する文法、文字語彙の自習がされていることが望ましい。毎回、実践練習を行い、時間の余裕があるときには、聴解問題の学習にも触れる予定である。	
			日本語能力試験対策講座（読解）	留学生対象の通年の日本語科目である。日本語能力試験の出題項目のうち、読解問題に特化して、実際の試験の出題形式に則り、演習形式で授業を進める。講座は能力試験Ｎ1、Ｎ２レベルの合格を目指し、レベル別に開講される。限られた時間で効果的に学習を進めるため、学生の予習、復習が強く求められる。また、受講前に能力試験Ｎ２レベルに相当する文法、文字語彙の自習がされていることとが望まれる。毎回、実践練習を行い、時間の余裕があるときには、聴解問題の学習にも触れる予定である。	

共通科目	外国語	目的別科目	アドバンスト・リスニング	より高度な内容の素材の聞き取りを目指す。まず、内容的には大学の講義やアカデミックな説明、会社等での会話や会議、といった難しい内容の聴き取りに欠かせない内容把握力をつける。次に、スピードである。英語の表現や言い回しは読めば易しいが、聴き取れないことが多い。これは、英語が独自の音変化を起こすためである。弱音化、消失、脱落、同化、連結等の音変化を克服することで、相当なスピードのものも聴き取れるようになる。アドバーンスト・リスニングは内容、速度同時に養うことを目指している。留学を考えている学生にも対応している。	
			アドバンスト・リーディング	より高度な内容の素材のリーディングを目指す。まず、内容的には大学のテキストやアカデミックな解説書、会社等での書類や文書、といった難しい内容のリーディングに欠かせない内容把握力をつける。次に、大量の情報を一定時間で処理しようとすると、求められるのが速読力である。Phrase reading, skimming, scanning, predictionなどを養成し、大量の文書を短時間で読破し、まとめる力を養成する。留学を考えている学生にも対応している。	
			アドバンスト・ライティング	日常的な話題を扱った短い英文のモデルエッセイを読み、そこで使われた構文や表現を使い、自分の言いたいことを読み手に分かりやすい平易な英語で表現し、自己流ではない自然な英文が書けるようにする。前半では単文で書くことから始めて、アイデアを一つ一つ文にしていく。それを集めてパラグラフ構成を目指してライティングする。さらには一貫性や論理展開を考えたパラグラフ構成とパセージとしてバランスのとれた長い文が書けるようにする。	
			日常英会話入門	日常英会話入門は、英語による応答ができるように、学生のリスニング力とスピーキング力をつけることを目標としている。リスニングを併用する理由は、会話を続けるためには相手の話していることが理解できなければならないからである。まず第一段階では、学生が話がしやすい身近家族や学校のことを話すことかれ始める。第二段階では意見や説明、質問といったやり取りのための基礎作りを行う。最後の第三段階では、調べたことや新しいことに対して対応できる力を養成する。	
			日常英会話	日常英会話は、日常英会話入門を履修したことを前提としない。学生にはナチュラルスピードのリスニング力とスピーキング力をつけることを目標としている。学生が話が少し苦手とする社会状勢や事件、次に意見や説明、質問をいったやり取りのための基礎作りを行う。そして最後に調べたことや新しいことに対して対応できる力を養成する。この科目は、日米英会話学院と提携して行われる。	
			ビジネス英語	ビジネス英語を基礎から学習する科目である。ビジネスの世界で必要とされる英語力を養成することを目標とする。また、様々なビジネスの場面で役立つ会話表現や英文ビジネス文書に関する基礎知識を習得し、実際に活用できるようになることを目指す。手紙　やファックス、Emailなどのビジネスのための通信の基本から、面会、予約、案内、招待などの社交関係の基本、通知、購入、注文、履歴書などの社内や取引関係の内容を扱う。	
			ビジネス英会話	実社会に出てから役立つよう「ビジネス英会話」の基本を学ぶ。まず、ビジネスのための通信の基本である「電話」から始まり、社交関係の予約や案内、社内の英語でのスカッション、取引関係のにおけるプレゼンテーション、雇用関係の交渉等を学習します。実際の会社等の例を元に、練習を重ね、使えるレベルまで引き上げることを目指す。	
			映画・ドラマ英語	海外映画やドラマは文化の一形態であり、それらを字幕なしで聴き取れることは、直接文化を理解する上で重要である。この科目は、最終的に字幕なしで映画やドラマの英語を聴き取れる力を養うことを目標にしている。そのために、英語の音変化、映画やドラマ独特の言い回し、背景知識を通して生きた英語に触れながら基礎的な英語力を養う。さらに、英語理解のの正しい学習法を知り、将来も主体的に学び続けていけるだけの素地を培うことを目指す。	
			インターネット英語	今や情報のためのツールとしてのインターネットは必需品である。しかし、実際に英語のウェブサイトを閲覧する場合ある程度の知識や常識が必要となる。この科目は、実際に英語のウェブサイトを閲覧しながら生の英語に触れ、慣れてくれば、英語による情報を発信するスキルを学ぶ。英語によるSearch Engineから始まり、Social NetworkingやOnline Englishといった基本的な知識から導入する。英語力を養成しながら英語のウェブサイトの閲覧から発信までを扱う。	
			メディア英語	世界では情報の多くが英語でやりとりされている。日々刻々と変化する世界状勢を英字新聞、ホームページに頻出する企業、事件などグローバル化した現代社会を読み解くための基本的な知識を英語で学ぶ。実力に応じて、実際の英字新聞(Japan Times, New York Times, USA Today等)やCNN,ABCニュース等使い内容が理解できるようにする。	

共通科目	外国語	目的別科目	日本語表現技術	留学生対象の通年の日本語科目である。全講義のうち文章表現について七割、口頭表現について三割の時間を用いて授業を進める。最終目標は、文字および口頭で自分の考え、伝達したい事柄を的確に伝える技術を身につけることである。文章表現については、語彙段階（的確な語彙の選択・話し言葉と書き言葉の区別・接続表現など）から文章段階（文の適切な完結・段落のある文章・文章の構成・レポート作成など）まで、順を追って進める。口頭表現については、授業での適切な意見発表の方法、口頭発表の方法などを学ぶ。レベル別に開講する。	
	情報処理基礎		情報処理演習Ⅰ	本科目では、大学での学習や社会で必要となるコンピュータを中心としたICT活用に関する基礎技術を習得することを目的とする。主な学習内容は、大学の情報環境の理解およびその利活用、オペレーティングシステムやアプリケーションソフトウェアの基礎操作、レポート・論文やビジネス文書の作成、Web・メール等インターネットの活用、プレゼンテーションである。授業形態は演習形式とし、課題により評価を行う。学習者の操作経験やスキルに応じた課題設定と支援を行う。	
			情報処理演習Ⅱ	本科目は情報処理演習Ⅰの継続として、大学での学習や社会で必要となるコンピュータを中心としたICT活用に関する基礎技術について、専門領域の学習や各自の目的・目標に応じた内容を習得することを目的とする。主な学習内容は、表計算ソフトウェアの基礎操作、データ活用と処理、基礎的なホームページ作成等の中から選択する。授業形態は演習形式とし、課題により評価を行う。学習者の操作経験やスキルに応じた課題設定と支援を行う。	
	キャリア教育	働く意欲を高める	社会人入門	社会人生活を送ることで多くの人間が直面する社会的諸問題を理解している学生は少ない。金銭面の問題、健康や食生活、社会保障、家族の問題など、将来直面する可能性ある現実的な諸問題をその背景も含めて理解し、このような現実が自分にも関係することとして捉え、考えさせる。あわせて低学年からこのような現実的社会問題を理解することで、社会人とは何か知り、将来の社会人としての覚悟や職業観を醸成するとともに、目的意識を持った学生生活を送る意識付けとさせていく。	
			キャリアサポート	金融やマスコミ、福祉、情報、メーカーなど様々な分野で活躍する女性ゲストを迎え、仕事と生活、自身の生き方などをテーマとする講演を聞きながら、学生はキャリア形成の一助とし、学生生活への意欲向上や職業観の醸成を培っていく。本科目では講演と併せて、学生同士のグループワークも取り入れる。講演から感じ取ったことを参考に、学生自身が今後のキャリアを展望するとともに、そのキャリア形成のために何が必要か、何を準備していくかをグループのなかで意見交換していく。	
			インターンシップ短期	企業や官公庁など実際の職場での就業体験をすることで、学生は社会や企業を知り、あわせて将来設計を自らに問う機会を持つ。実習先には「就業体験プログラム」作成を依頼し、実習の効果が上がるように求める。学生はこのような職場体験を通して、仕事の取り組み方や職場内外での人間関係の構築方法などを学ぶが、あわせて今後の大学生活での勉強や課外活動などへの取り組みに対する指針にもつなげていく。尚、インターンシップの成果についてはレポートや報告会のなかで公表していく。本科目では５日以上１０日未満のインターンシップを対象とする。	
			インターンシップ	企業や官公庁など実際の職場での就業体験をすることで、学生は社会や企業を知り、あわせて将来設計を自らに問う機会を持つ。実習先には「就業体験プログラム」作成を依頼し、実習の効果が上がるように求める。学生はこのような職場体験を通して、仕事の取り組み方や職場内外での人間関係の構築方法などを学ぶが、あわせて今後の大学生活での勉強や課外活動などへの取り組みに対する指針にもつなげていく。尚、インターンシップの成果についてはレポートや報告会のなかで公表していく。本科目では１０日以上のインターンシップを対象とする。	
			自主社会活動	大学入学までに多くの学生は家庭と学校とういう枠の中で育っている。場合によっては大学生活の中でも同じような狭い活動範囲のなかで過ごす可能性も否定できない。卒業後に多様な環境と複雑な人間関係の中で社会生活を送るためには、大学時代に社会と接点を持ち、そのなかで考え行動する学びの要素が必要である。本科目は、ボランティア活動や地域活動、福祉活動などさまざまな社会活動の参加を積極的に評価し、社会のなかで必要とするコミュニケーション能力や自主性、協調性といった社会人基礎力を培っていく。	
		就業力を身につける	キャリア基礎力入門	大学生活はもちろん、卒業後の職場や日常生活のなかでも基礎的学力は欠かせない。特に言語（国語的理解力）と非言語（数的理解力）の基礎的学力は、さまざまな場面で必要とされており、昨今の就職試験でもSPI試験としてその能力が問われるケースが多い。この科目では、大学入学までに本来学んできた言語・非言語の基礎的学力が、なぜ必要とされるのかを伝えると同時に、具体的問題を解きながら、分かりやすい解説を加えて学び直していく。あわせて、この分野に自信を持てない学生の苦手意識を払拭していく。	
			キャリア基礎力応用	大学生活、社会人生活で必要とされる言語・非言語の基礎学力は「キャリア基礎力入門」で学び直していくが、さらに踏み込んで応用力を磨くことで、大学生活や社会人生活で接するこの分野での課題解決力を高め、あわせて就職試験等のSPI試験対応力も磨いていく。応用力を高めていくためには、具体的な問題を多く解くことが近道であるため、「キャリア基礎力入門」以上に問題を解く時間を多く取り入れ解説を加えていく。	

共通科目	キャリア教育	就業力を身につける	現代社会理解	政治や経済、国際情勢、暮らしといった社会状況を理解し、知的ボキャブラリーを増やしていくことは、自律的社会生活を送るうえで、また高度なコミュニケーションを交わす上で欠かすことはできない。実際にこのような教養問題は一般常識試験として就職試験でも多く問われている。本科目は、昨今の日本を取り巻く社会情勢をテーマ別に理解しながら、学生一人ひとりにとって身近な問題であることを認識させ、これらニュースに対する知的好奇心や知的感度を高めていく。	
専門科目	社会福祉基礎科目		社会福祉概論Ⅰ	社会福祉の対象と概念を整理した上で、今日的課題である少子高齢化問題について概観する。具体的なテーマとして、　①生活保護と生存権（貧困・基本的人権・最低限度の生活）、②福祉社会と少子化問題（非婚化・出生率・育児制度・児童虐待・福祉国家等）、③福祉社会と高齢化問題、④福祉社会と障害者自立支援について検討する。各テーマの問題の所在、背景を検討し、福祉社会構築に向けた具体的な課題について受講者と検討する。	
			社会福祉概論Ⅱ	福祉政策の構成要素（福祉政策における政府、市場、家族、個人の役割を含む）、福祉政策と関連政策（教育政策、住宅政策、労働政策を含む）、相談援助活動と福祉政策との関係について理解する。福祉政策の構成要素、福祉政策と関連政策、相談援助活動と福祉政策の関係の諸問題を具体的に取り上げ、日本における社会福祉総体の意味や位置づけについて総合的な理解を深めていく。	
			高齢者に対する支援と介護保険制度Ⅰ	高齢者の心身の状態や高齢者を取り巻く家族、経済、就労、社会参加などの側面をとりあげ、高齢者の生活実態を明らかにする。次に、高齢者を取り巻く社会情勢、政策、制度の沿革と現状について理解する。さらに高齢者のもつ福祉や介護への需要に対して制度政策がどのように機能しているか、あるいはどのようなところが制度の谷間になって残っているのか、またフォーマルな制度だけではなく、インフォーマルなサービスの連携も併せて検討し、今後のあるべき方向性を探っていく。	
			高齢者に対する支援と介護保険制度Ⅱ	高齢者の福祉問題のなかで介護を必要とする高齢者をどのように支援するかは、中心的な問題である。介護の概念や介護過程における介護の技法、介護予防、人間観や倫理問題を含めて終末期ケアに関する理解を深めるなど幅広く介護および介護をとりまく問題を学ぶ。また介護問題を含めた生活上の困難に対する相談活動において必要となる介護保険制度など高齢者の福祉・介護にかんする法・制度について実際に即して理解する。	
			児童・家庭福祉論	現代社会の児童・家庭福祉の実態と、これを取り巻く社会情勢、福祉需要（ひとり親家庭、児童虐待、DV、地域における子育て支援、及び青少年育成等）と実際を理解する。児童福祉法、児童虐待防止法、DV法、母子及び寡婦福祉法、母子保健法、児童手当法、児童扶養手当法、特別児童扶養手当等の支給に関する法律、次世代育成支援対策法のあらましを理解する。児童の最善の利益を実現する視点を滋養し、社会福祉士としての基礎的な見識を培う。	
			障害者福祉論	障害者の生活実態所を取り巻く社会情勢や福祉・介護需要（地域移行や就労の実態を含む）について理解する。また障害者福祉制度の発展過程について理解する。相談援助活動において必要となる障害者自立支援法や障害者の福祉・介護に係る他の法制度について理解することである。内容としては①障害者の生活実態所を取り巻く社会情勢、福祉・介護需要、②障害者福祉制度の発展過程、③障害者総合支援法、④障害者総合支援法における組織および団体の役割と実際、⑤障害者総合支援法における専門職の役割と実際、⑥障害者総合支援法における多職種連携、ネットワーキングと実際を含んで学ぶ。	
			医学一般	近年、急激に高齢化社会がすすみ、疾病構造の変化がおこり、医療の政策、対策が変化している。本講座のねらいは、福祉・介護の現場で必要な医学の知識を学び、自分の健康について関心を持ち、よりよい対人援助ができる人材を育てることにある。 内容 １.医学概論　２.人体構造と機能　３.代表的な疾患　４.精神障害、精神保健　５.リハビリテーション医療　６.公衆衛生の現状　７.保健医療対策　８.医事法制と保健・医療機関および専門職	
			権利擁護と成年後見制度	相談援助活動と、日本国憲法の基礎原理、民法、行政法の理解などの法との関わりについて理解する。相談援助活動において必要となる成年後見制度の概要や民放における親権や扶養の概要、成年後見制度の最近の動向について学ぶ。社会的排除や虐待などの権利侵害や認知症などの日常生活上の支援が必要な者に対する権利擁護活動の実際について理解する。	
			心理学理論と心理的支援	社会福祉士に必要な内容になるよう留意しながら、心理学理論による人の理解とその技法の基礎について理解する。人の成長・発達と心理との関係について理解する。日常生活と心の健康との関係について理解する。心理的支援の方法と実際について理解する。内容としては①人の心理的理解、②人の成長・発達と心理、③日常生活と心の健康、④心理的支援の方法と実際などについて学ぶ。	

専門科目	社会福祉基礎科目	社会保障論Ⅰ	現代社会における社会保障制度の課題（少子高齢化と社会保障の関係を含む）、社会保障の概念や対象、社会保障の理念、発達過程、社会保障制度の体系と概要について理解する。現代社会における社会保障制度の課題（少子高齢化と社会保障制度の関係を含む）、社会保障の概念や対象及びその理念、社会保障の財源と費用等の諸問題を具体的に取り上げ、総合的な理解を深めていく。社会保障とは何か、というその本質的意味をとらえられるようにすることをねらいとする。	
		ソーシャルワーク論Ⅰ	社会福祉士の役割（総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発を含む）と意義について理解する。精神保健福祉士の役割と意義について理解する。相談援助の概念と範囲について理解する。相談援助の理念について理解する。相談援助における権利擁護の意義と範囲について理解する。内容としては①社会福祉士の役割と意義、②精神保健福祉士の役割と意義、③相談援助の概念と範囲、④相談援助の理念、⑤相談援助における権利擁護の意義などが含まれる。	
		社会的養護論	児童福祉施設に関する法制度や理念、歴史を理解するために学習する。具体的には基本原則、養護問題及び政策の特徴を学ぶ。さらに、子どもの権利、子どもの養護の歴史、社会的養護の体系、施設、里親、制度や特質も学ぶ。さらに、施設での日常生活及び自立支援について理解を深め、支援的援助を学び、親子、地域との関係調整について技法を学ぶ。また、職員の勤務体制や措置費とともに、養育体制や近年の処遇の小規模化や地域小規模養護施設の動向などについての理解を深める。こうした学習を通じて、社会的養護を担う職員となる素養を養う。	
		地域福祉論Ⅰ	地域福祉の基本的考え方、現状と今後の推進課題を理解することを目標に、地域福祉の概念、歴史的な発展の過程、地域福祉関係計画策定に基づく住民を主体とする具体的な地域福祉実践のあり方や、地域福祉の主体形成を図る福祉教育の意義を理解するとともに、地域福祉に係る社会福祉協議会や行政、その他の組織、団体及び専門職の役割と実際について講義する。	
	ソーシャルワーク専門科目	ソーシャルワーク論Ⅱ	相談活動にかかわる専門職の概念と範囲および専門職倫理について理解する。および総合的かつ包括的な援助と他職種連携の意義と内容について理解する。内容としては①相談援助に係る専門職の概念と範囲、②専門職倫理と倫理的ジレンマ、③総合的かつ包括的な援助と他職種連携（チームアプローチを含む）の意義と内容などを含んで学習する。	
		ソーシャルワーク論Ⅲ	相談援助の過程とそれにかかわる知識と技術について理解する。相談援助の過程及び相談援助の面接技術について理解し、その概要を説明できるようになること、また専門的援助関係について理解し、例を挙げて説明できるようになることを目的とする。主な授業内容は、相談援助の過程、相談援助における援助関係、相談援助のための面接記述、ケースマネジメントとケアマネジメント、アウトリーチなどである。特に近年我が国の福祉実践において中心的な手法とみなされつつあるケアマネジメントの理論とその思想的背景、及びその実際を中心的に学習していく。	
		ソーシャルワーク論Ⅳ	相談援助における人と環境の交互作用に関する理論について理解する。また、相談援助の対象と様々な実践モデルについて理解する。システム理論及びソーシャルワークの各種アプローチモデルを理解し、その概要を説明できるようになることを目的とする。主な授業内容は、一般システム論、心理社会的アプローチ、機能的アプローチ、問題解決アプローチ、生活モデル、ストレングスモデルなどであり、これら代表的ソーシャルワーク理論を学んでいく。	
		ソーシャルワーク論Ⅴ	福祉を必要とする人の相談に応じ、総合的かつ包括的な相談援助の過程とそれに係る知識と技術を理解することを目標に、アウトリーチ、相談援助における社会資源の活用・調整・開発、相談援助における多職種・多機関を含むネットワーキングについて、実践に基づきながらその意義、目的、方法、留意点について理解するとともに、集団を活用した相談援助について講義する。	
		ソーシャルワーク論Ⅵ	相談援助の過程とそれに係る知識と技術を理解することと相談援助における事例分析の意義や方法、相談援助の実際について理解することを目標に、記録の意義、目的、方法、留意点について、相談援助と個人情報の保護の意義と留意点について、ＩＴの活用について理解し、社会的排除につながる複合的で多問題化したさまざまな具体的相談援助の事例分析から、相談援助のあり方について講義する。	
		就労支援サービス論	相談援助活動において必要となる各種の就労支援制度について理解する。就労支援に係る組織、団体及び専門職について理解する。就労支援分野との連携について理解する。内容としては①雇用・就労の動向と労働施策の概要、②就労支援制度の概要、③就労支援に係る組織、団体の役割と実際、④就労支援に係る専門職の役割と実際、⑤就労支援分野との連携と実際などを含んで学習する。	

専門科目	ソーシャルワーク専門科目	地域福祉論Ⅱ	地域福祉の推進方法について理解することを目標に、地域福祉の推進を図るための多職種・多機関との連携を含むネットワーキングの意義とその方法及びその実際について理解する。具体的実践から地域における福祉ニーズの把握方法、社会資源の把握とその活用・調整及び新たな社会資源の開発、地域における福祉サービスの評価方法について学習する。	
		社会調査の基礎	社会調査の意義と目的およびその対象と方法の概要を理解し、社会福祉援助技術における位置づけを学ぶ。さらに社会調査の適切な実施に欠かせない、統計法に関する知識、倫理・個人情報保護について理解する。特に、量的調査・質的調査の違いを理解し、目的にふさわしい調査方法を選択できる力を獲得する。社会福祉士として必要な社会調査に関する知識を身につけることを目標とする。	
		福祉行財政と福祉計画	福祉の行財政の実施体制（国・都道府県・市町村の役割、国と地方の関係、財源、組織及び団体、専門職の役割を含む）、福祉行財政の実際、福祉計画の意義や目的・主体・方法・留意点について理解する。具体的には福祉行政の実施体制、福祉行財政の動向、福祉計画の意義と目的、福祉計画の主体と方法、福祉計画の実際という項目を取り上げる。地方分権推進という国と地方自治体の関係性の問い直し、及び住民参加の制度的保障という問題意識をもって、自治体福祉政策の在り方への考察を深めていく。	
		社会理論と社会システム	社会をシステムとして捉える考え方を理解できるようになることを、主要なねらいとする。法と社会システム、経済と社会システムといったテーマの検討を行う。一方、近代化の意味とその問題性の理解に努める。近代化を軸に、産業化、都市化、情報化といった問題を検討する。家族や地域の変容やそれに伴う問題を、近代化という大きな社会変動を背景に考察することも試みる。こうしたことを踏まえて、生活の質など生活構造に関わる問題、さらには、社会問題についても検討する。	
		公的扶助論	現代社会と貧困、低所得階層の生活実態とこれを取り巻く社会情勢、福祉需要とその実際について理解する。また公的扶助の歴史的展開につき、主に、典型的に形成されてきたイギリス救貧行政の変遷たどりながら、公的扶助の本質的課題（惰民観、個人貧から社会貧への認識の変容、費用負担の在り方、福祉国家像等）についての考察を深める。さらに、社会的セーフティネットの制度的保障の在り方（防貧的性格、救貧的性格）やその現代的意義について理解する。すなわち憲法25条の生存権保障の現代的意味について理解を深めていく。	
		保健医療サービス論	相談援助活動において必要となる医療保険制度や保健医療サービスについて理解する。また保健医療サービスにおける専門職の役割と実際、他職種協働について理解する。内容としては①医療保険制度、②診療報酬、③保健医療サービスの概要、④保健医療サービスにおける専門職の役割と実際、⑤保健医療サービス関係者との連携と実際などについて学ぶ。	
		社会保障論Ⅱ	社会保障（社会保険）制度の体系、年金保険制度及び医療保険制度の具体的内容、公的保険制度と民間保険制度の関係、諸外国における社会保障制度の概要について理解する。社会保障（社会保険）制度の体系、公的保険制度と民間保険制度の関係、年金保険制度の具体的内容、医療保険制度の具体的内容、諸外国における社会保障制度の概要に関して、その制度政策のポイントを押さえ、社会保険制度の在り方（社会保険方式・税方式）への考察を深めていく。	
		更生保護制度	相談援助活動において必要となる更生保護制度について理解させ、また更生保護を中心に、刑事司法・少年司法分野で活動する組織、団体及び専門職について理解させる。さらに刑事司法・少年司法分野の他機関等との連携の在り方について理解させる。内容としては①更生保護制度の概要、②更生保護制度の担い手、③更生保護制度における関係機関・団体との連携、④医療観察制度の概要、⑤更生保護における近年の動向と課題を含み、理解を深める。	
		社会福祉施設経営論	社会福祉サービスに係る組織や団体（社会福祉法人、NPO法人、その他の法人等の特徴や理事会、評議員会、及び監事の在方の基準と機能等）について理解する。社会福祉サービスの組織、運営に関する基礎理論（集団力学、リーダーシップ、会計、財務等）について理解する。社会福祉サービスの経営と管理運営（労働環境の整備と人材確保、コンプライアンスとガバナンス）について理解する。	
		相談援助演習Ⅰ	将来福祉職を目指す学生は、専門的援助関係の基礎となる対人関係そのものを築き、生きていく力を形成することが求められる。本授業では福祉援助の専門的援助関係を学び、それを形成していくうえで必要な自己覚知を広げ深めていくことを中心的なねらいとする。本授業では、主に援助者の自己概念と自己覚知、価値観や信念を明確化・促進することを目指す様々な演習を行う。また対人コミュニケーションにおける基本的技術の習得、及び他者理解の促進のための演習を行う。	

専門科目	ソーシャルワーク専門科目	相談援助演習Ⅱ	相談援助における基本的なコミュニケーション技術、及び面接技術を習得することをねらいとする。また相談援助事例を通して、相談援助の過程について理解する。おもな授業内容は、ソーシャルワークの基本姿勢やその臨床的態度、ソーシャルワークの援助過程、コミュニケーション技術及び基本的面接技術（波長合わせ、ジョイニング、プロンプト、プローブ、反映技法、応答技法、質問、支持、焦点化、明確化、説明、提案）、ロールプレイを活用した事例理解、記録の方法などである。	
		相談援助演習Ⅲ	社会福祉士に求められる相談援助に関わる知識と技術について、実践的に習得することを目的とする。相談援助を専門的技術として概念化、理論化し、体系立てることができる能力を滋養する。積極的な参加のもとに課題別（児童虐待、高齢者虐待、ＤＶ、等）の相談援助事例（集団に対する相談援助事例を含む）を活用し、総合的かつ包括的な援助について実践的に習得する。	
		相談援助演習Ⅳ	社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養することを目標に、総合的かつ包括的な援助及び地域福祉の基盤整備と開発に係る具体的な相談援助事例を体系的にとりあげ、集団指導等を通して、具体的な援助場面を想定した実技指導を中心に演習する。	
		相談援助演習Ⅴ	社会福祉士に求められる相談援助に係る知識と技術について実践的に習得する。相談援助演習の最終段階の科目であり、相談援助実習の後に置かれている科目である。従って、相談援助実習の学びのなかの疑問を解決したり、大学の授業のなかにフィードバックさせたりしながら、個別的な体験を一般化し理論に高めると同時に体得するまでに理解を深める。具体的には相談援助実習のなかでケース取りをし、それを検討するという方法をとりながら学んでいく。	
	ケアワーク専門科目	基礎介護論Ⅰ	本科目は介護福祉士養成課程の基幹科目。他の専門科目とも関連し、基本的な介護の概念・知識を理解することが求められる。授業概要は１．介護福祉士を取り巻く状況（介護の変遷・少子高齢社会・家族機能の変化、介護の社会化、介護ニーズの変化）や２．介護問題理解、３．介護福祉士の役割と機能を支えるしくみについて学習する。	
		基礎介護論Ⅱ	本科目は介護福祉士養成課程の基幹科目。他の専門科目とも関連し、基本的な概念・知識を理解することが求められる。授業概要は、1.「尊厳を支える介護」、２．「自立に向けた介護」３．「介護を必要とする人の理解」４．「介護従事者の倫理（職業倫理、利用者の人権と介護、プライバシーの保護」、について学習する。	
		介護と倫理	介護従事者の倫理とその課題を理解できることを目指す。具体的には、「専門職とはなにか」、「様々な専門職に求められる倫理」、「介護職の歴史から倫理を考える」、「介護現場で求められる倫理」、「利用者の人権」、「高齢者分野における職業倫理の必要性」、「障がい者分野等における職業倫理の必要性」、「プライバシーの保護」、「人間の尊厳」、「個人情報保護法と介護福祉のあり方」などについて学ぶ。さらに、事例を提示し、事例検討を通して学びを深める。	
		介護と自立	そのひとらしい自立に向けた、介護の必要性と方法を理解し、習得することを目指す。具体的な内容は、「多様な自立支援の考え方」、「生活意欲に働きかけるエンパワメントの視点」、「施設や地域における自立支援の具体的な展開」、「ＩＣＦの理解」、「個別ケアの理解」、「リハビリテーションの考え方」、「様々な場におけるリハビリテーション」などについて学ぶ。さらに、事例検討を通して学びを深める。	
		介護と環境	利用者の「尊厳ある暮らし」を支えるために、介護におけるリスクマネジメントの考え方を理解し、事故防止や感染症対策の具体的手法を学ぶ。また介護者自身の心身の健康管理に必要な基礎的知識と技術も重要である。具体的には介護従事者の安全環境として身体の健康管理（感染予防、腰痛予防と対策等）、心の健康管理（ストレス、燃えつき症候群）、介護における安全の確保とリスクマネジメント、事故防止・安全対策、感染予防の基礎知識と衛生管理、生活環境および労働環境の整備など、グループワークを交えながら学びを深める。	
		介護と地域	介護サービスとその地域における連携を理解することをねらいとする。授業内容は「介護サービスの概要」として介護サービスの歴史から始め、介護保険制度の概要等について学ぶ。次に「介護サービス提供の場の特性」、「保健医療職との連携」、「利用者の特性に応じた様々な連携」、「地域連携の歴史とその考え方」、「フォーマル・インフォーマルな地域連携の仕組み」などについて学ぶ。さらに、事例検討を通して学びを深める。	

専門科目	ケアワーク専門科目	コミュニケーション技術Ⅰ	介護福祉士に必要なコミュニケーション理論・技術についての演習を行う。授業概要は、コミュニケーション技術Ⅰでは介護におけるコミュニケーションの基本について、（1）コミュニケーションとは、（2）コミュニケーションの基本、（3）コミュニケーションの理論と実際、について演習を展開する。	
		コミュニケーション技術Ⅱ	介護福祉士に必要なコミュニケーション理論・技術についての演習を行う。授業概要は、コミュニケーション技術Ⅱでは、（1）介護場面における利用者・家族とのコミュニケーションの基本について、（2）利用者の特性に応じたコミュニケーション（3）介護におけるチームのコミュニケーションの基本、について演習を展開する。	
		生活支援技術概論	生活とは何か」について理解することからはじめる。人としての生活は、家族、地域や社会と関わりながら、人間として尊厳のある暮らしをすることである。援助を必要な人にとって、人間として尊厳のある暮らしとは、どのようなものかを理解することを目指す。具体的には「生活支援の基本的な考え方」や「生活支援におけるＩＣＦの視点に基づくアセスメント」、「生活支援における介護予防」などについて学ぶ。	
		日常生活支援技術Ⅰ	日常生活支援技術とは、介護が必要な人々に対して、単に身体的な介護をするのではなく、自立に向けてトータルに生活を支援していくための技術であることを理解することを目指す。具体的には、最初に「基本となる介護技術の意味」について学び、「自立に向けた環境整備」、「利用者と介護者の双方にとって、安全で安楽な介護技術」、「自立に向けた移動の介護技術」など、介護技術の基本的な理論と共に介護技術の基本を学ぶ。	
		日常生活支援技術Ⅱ	障害者や高齢者など、日常生活を送る上で支援が必要な人々がどのような状態にあっても、その人の自立・自律を尊重し、潜在能力を引き出すような、介護技術を習得する。講義による生活支援技術の理論を学びながら、実技演習を行う。「洗面や整髪などモーニングケアにおける介護技術」、「衣服の着脱の介護技術」など身じたくの介護について学び、さらに「食事における介護技術」、「食後の口腔ケアの介護技術」など食事の介護について学ぶ。	
		日常生活支援技術Ⅲ	尊厳の保持、プライバシーへの配慮が特に必要な支援について、実習を視野に入れ、実習に必要な様々な生活支援技術を科学的な理論と共に習得することを目指す。授業内容は「安全で安心できる入浴・清潔保持の介護技術」、「自立に向けた排泄の介護技術」、「安眠できる環境条件や不眠時の介護」など、尊厳・プライバシーについて配慮しながら、適切な支援ができる介護技術を学ぶ。さらにそれぞれの介護における「他職種の役割と協働」などについて学ぶ。	
		生活環境支援技術	「ケアワーク」は、日常生活に根ざした広い視野に起ち、食生活、被服生活、住生活などの各専門分野について理解を深めることが重要である。このような視点から、介護の基礎となる「生活環境」とそこで営まれる「住」に関する様々な技能を習得し、かつ高齢者や障害者の生活環境支援の能力を養うことを目的としている。住生活について様々な視点から解説を行い、高齢者や障害者の生活環境支援のための技術について理解を深めるものである。	
		家事生活支援技術	家庭生活を中心とした人と環境との相互作用について学び、日常生活を充実させるための総合的な視点と思考を養う。日常生活を充実させるための総合的な視点と思考をもち、自立に向けた家事の介護技術を習得することを目指す。　具体的な内容としては「家庭生活の基礎知識」「家庭生活とその経営、生活設計」、「高齢者・障害者の家庭生活の特徴と問題点」、「家事援助の技法（調理）、（掃除・ごみ捨て）、（衣類・寝具の衛生管理）、（裁縫）、（買物）」などについて学ぶ。	
		生活支援技術応用Ⅰ	介護を必要とする人々はさまざまな状態、状況にあることを理解する。さらに、障害に応じて、その人の状況の合った適切な介護を行い、どのような状況にあっても自立・自律を尊重し、潜在能力を引き出し、安全に支援できる技術や知識を習得することをねらいとする。まず「利用者の状態・状況に応じた生活支援技術とは何か」について学ぶ。さらに「視覚障害」、「聴覚・言語障害」、「運動機能障害」、「知的障害」など、各々の障害の特性を理解し、障害に応じた利用者の生活を支援する方法について学ぶ。	
		生活支援技術応用Ⅱ	介護を必要とする人々はさまざまな状態、状況にあることを理解する。さらに、障害に応じて、その人の状況の合った適切な介護を行い、どのような状況にあっても自立・自律を尊重し、潜在能力を引き出し、安全に支援できる技術や知識を習得することをねらいとする。まず「利用者の状態・状況に応じた生活支援技術とは何か」について学ぶ。さらに「視覚障害」、「聴覚・言語障害」、「運動機能障害」、「知的障害」など、各々の障害の特性を理解し、障害に応じた利用者の生活を支援する方法について学ぶ。	

専門科目	ケアワーク専門科目	生活支援技術展開Ⅰ	利用者がいきいきと生きがいを感じながら生きることができるよう、生活全体を活性化するための援助活動の基本的方法と援助の果たすべき役割について理解する。利用者との出会い、よりよく知り合うための基本的方法を学び、実践する力を身につける。具体的には、「生活を潤す余暇について」、「コミュニケーションを高めるレクリエーション・プログラムの実際」、「福祉現場のレクリエションの現状と課題」などについて学ぶ。さらに、事例検討を通して学びを深める。	
		生活支援技術展開Ⅱ	医学の知識を必要とする生活支援を中心に学ぶ。授業内容は「内部障害者」の医学的管理、セルフケアの知識から、健康支援への視点をもつ。さらに「緊急時対応」では、日々の体調の変化や異常を見極める知識と対処技術。「終末期の介護」では、個々が死生観をもち、専門職としての介護能力を高めることを目的とし、尊厳の保持を貫く終末介護のあり方と、他職種との連携への学びを深める。	
		介護過程基礎Ⅰ	介護福祉の専門性は介護過程の展開の中にみることができる。介護福祉は利用者の生活の困りごとに対して介護の立場から支援することであるが、生活の主体は利用者であるから支援は利用者を主体にすすめる。利用者の意志を大切にしながら利用者の得意なことや喜びに視点を当てての支援となる。「楽しく学ぶ介護過程」第１章と第２章を教材に用いて“介護過程の視点に気づき広げる”ことを目的とする。	
		介護過程基礎Ⅱ	介護過程基礎Ⅰで学んだ介護過程の視点を活かし、「介護過程」の構造と構成要素について学ぶ。「介護過程」は、「課題解決思考過程」を介護福祉に応用した思考過程であり、介護実践の方法である。介護過程基礎Ⅱでは介護過程の骨組みについて、「楽しく学ぶ介護過程」の第３章と第４章を教材に用いて具体的に学びながら、介護過程の構造と構成要素のうち、特に“アセスメント”について、学生自身が介護過程の目指すものとして実感できることを目的としている。	
		介護過程展開Ⅰ	介護過程基礎で学んだ１．介護過程の４つの構成要素（①アセスメント→計画立案→実践→評価・考察）、２．ICF理論について、を基礎とし、介護過程展開Ⅰでは、事例（主に高齢者と障害者）によるケアプランの作成と介護過程の展開プロセスの理解を深めることを目的とする。科目の概要として、高齢者の事例を提示し、グループワークを展開しグループ発表を行う。介護保険制度の概要についても理解を深める。学修内容として、３年次の応用介護実習における、個別のケアプランの作成の基礎技能を身に付けることを到達課題とする。	
		介護過程展開Ⅱ	他の科目で学習した知識や技術を統合して、介護過程を展開し、介護計画を立案し、 適切な介護サービスの提供ができる能力を養うことがねらいである。特に障がい者介護の現場での 実践的な展開を理解する。 授業の概要は障がい者介護における生活と、自立の視点を学んだ後、実際に居宅・地域・施設における介護過程の展開の演習を行う。さらに介護実習における介護過程展開への応用について試みる。到達目標は①障がい者介護における介護過程の展開について説明できるようになる。②介護過程の展開について実習等で展開できるようになる。	
		介護サービス計画	他の科目で学習した知識や技術を統合して、介護過程を展開し、介護計画を立案し、適切な介護サービスの提供ができる能力を養うことをねらいとする。特にチームアプローチと介護サービス計画の実際について学ぶ。授業内容としては、「介護過程とチームアプローチ」、「他職種との連携」、「介護サービス計画（ケアプラン）の実際」、「介護福祉専門職としての介護過程展開の意義」などについて学ぶ。さらに、介護実習で実践した介護サービス計画を事例として検討し、さらに理解を深める。	
		発達と老化Ⅰ	ヒトはそのライフステージに応じて、生きる形がさまざまに変化する。ヒトの生涯を時間の軸でとらえ、能力の獲得とその変化を、発達と老化の視点から整理して理解する。具体的内容は、生物としてのヒトの特徴、ヒトの成長と発達、老化にともなう心身機能の変化、老年期の発達と成熟、老年期の発達課題（人格と尊厳、老いの価値、喪失体験、不安、セクシュアリティ、認知症）など講義中心に行い、「老い」と「死」の理解、高齢者と健康　高齢者の疾病と生活上の留意点について理解を深める。	
		発達と老化Ⅱ	心理学的立場から人間の生涯発達過程を理解すること、特に老年期の心理学的（心理・行動面の）特徴について理解を深めることを目標とする。生涯発達過程を発達段階及び発達課題の諸理論に基づいて理解する。次に老化に伴うこころの変化と日常生活について、特に老化による心理・行動面の特徴として知覚、認知、人格、適応機能の特徴や、高齢者の主観的側面である老いの受容、幸福感、生きがい感、喪失感等の理解とそれらの関連要因について理解を深める。上記の老年期の心理・行動面の特徴が日常生活にどのように反映されるのかを考察し、仮説検証型の思考様式に基づく対人援助職としての素養を高める。	
		認知症の理解Ⅰ	認知症に関する基礎的知識を習得するとともに、認知症の人に認められる高次脳機能障害に基づく意思表示が困難などの特性を理解し、本人のみならず家族を含めた周囲の環境にも配慮した介護の視点を習得する。授業概要は講義を中心とし、認知症の体験を理解し、医学・行動・心理的理解と診断、認知症の原因疾患と治療、認知症の予防、認知症ケアの歴史、認知症ケアの理念と視点など、総合的に学びを深める。到達目標は認知症に関する正しい知識に基づいた介護の視点を習得することである。	

専門科目	ケアワーク専門科目	認知症の理解Ⅱ	認知症の理解Ⅰに続き、ねらいは、認知症に関する基礎的知識を習得するとともに、認知症のある人の体験や意思表示が困難な特性を理解し、本人のみならず家族を含めた周囲の環境にも配慮した介護の視点を習得するものである。授業概要は認知症に伴うこころとからだの変化と日常生活、連携と協働、家族への支援を、講義およびグループワークで学ぶ。到達目標としては医学的知識を基礎として、生活面、社会面の学びを深めると同時に、対策としての介護保険制度や度の他の制度の理解も深め、総合的な視野をもてるようにする。	
		障がいの理解Ⅰ	障害のある人の心理や身体機能に関する基礎知識を習得するとともに、障害のある人の体験を理解し、本人のみならず家族を含めた周囲の環境にも配慮した介護の視点を習得する学習とする。授業内容は、障害の概念、障害のとらえかた、リハビリテーションの基本理念、ノーマライゼーション、視覚障害、聴覚障害、言語障害、肢体不自由の種類と原因と特性、精神障害、知的障害、発達障害、難病など国際生活機能分類(ICF)や国際疾病分類(ICD)に基づいて、障害の医学的な側面の理解を中心としておこなう。授業終了時の到達目標は、障害のある人の身体機能に関する基礎知識の理解の習得である。	
		障がいの理解Ⅱ	障害のある人の心理や身体機能に関する基礎的知識を習得するとともに、障害のある人の体験を理解し、自立に向けた生活支援の視点から、生活の理解が大切であることを学ぶ。同時に知的障害、精神障害、発達障害等の分野で必要とされる心理的社会的なケアについての基礎的な知識を学び、理論と実践の融合を目指す。また本人のみならず家族を含めた周囲の環境にも配慮した介護の視点、多職種連携、地域支援についても学びを深める。	
		こころとからだのしくみⅠ	生活支援技術の基本となる人体の構造や機能を学び、介護サービス提供における安全への留意点や心理的側面への配慮についての理解を学習する。授業展開は生活支援技術とリンクさせながら講義を行い、移動・身じたく・食事・排泄についてのこころとからだのしくみを学ぶ。到達目標は生活支援技術のエビデンス（根拠）を理解し、適切な援助技術を創設する力を養うことである。	
		こころとからだのしくみⅡ	生活支援技術の基本となる人体の構造や機能を学び、介護サービス提供における安全への留意点や心理的側面への配慮についての理解を学習する。授業展開は生活支援技術とリンクさせながら講義を行い、入浴・安楽・終末期についてのこころとからだのしくみを学ぶ。到達目標は生活支援技術のエビデンス（根拠）を理解し、適切な援助技術を創設する力を養うことである。	
		医療を必要とする人への介護Ⅰ	医療を必要とする人の安全と暮らしを守るための基礎的知識と技能を学ぶ。介護福祉士の業務に「医療的ケア」として、医師の指示の下に医行為を行うことになった経緯を理解し、その意義と役割を学ぶ。具体的には「人間と社会」、「保健医療制度とチーム医療」、「安全な療養生活」、「清潔保持と感染予防」、「健康状態の把握」など、医療的ケアの実践のための概論編である。利用者・家族の尊厳を守りつつ、医療倫理を理解した上で、安全な療養生活を保障するための知識を習得する。	
		医療を必要とする人への介護Ⅱ	医療を必要とする人への「医療的ケア」を、安全・適切に実施するために必要な知識・技術を学ぶ。具体的には、高齢者及び障害児･者の「たんの吸引」の必要性と実施手順を理解する。また呼吸器の構造や機能を理解し、体調の変化へ気づく力を培い、緊急時の対応や医療機器の理解と共に、医療職との連携のあり方を学ぶ。さらに「呼吸を整える」ための生活環境や生活習慣などから、予防の視点をもてるよう学びを深める。	
		医療を必要とする人への介護Ⅲ	医療を必要とする人への「医療的ケア」を安全・適切に実施するために必要な知識・技術を学ぶ。具体的には高齢者及び障害児･者の「経管栄養」の必要性と実施手順を習得する。この時、消化器の構造や機能を理解し、体調の変化へ気づく力を培い、緊急時の対応や医療機器の理解と共に、医療職との連携のあり方を学ぶ。さらに「食を整える」ための生活環境や生活習慣などから、予防の視点をもてるよう学びを深める。	
		医療を必要とする人への介護Ⅳ	「医療的ケア」を安全・適切に実施するために必要な知識・技術を習得するための演習である。高齢者及び障害児･者の「たんの吸引」「経管栄養」について、法で定められた規定の演習を行う。この時、医行為を受ける利用者や家族の気持ちを理解し、不安を抱くことのことのないような説明と、同意を得ることを基本とし、清潔・不潔の概念をしっかり身に付けた上で、技術の手順に留まらず、行為の根拠を人体の構造・機能から考えながら行為できることを目的とする。	
	保育専門科目	保育原理	保育の意義と保育所保育指針における保育の基本及び保育の内容と方法の基本について理解する。社会が期待する保育者を目指し、子どもや保育取り巻く状況を適切捉えるための基礎的な知識を身に付ける。具体的には、保育における養護と教育の関係、保育における専門性とは何か、 保育所の役割と機能、幼保一体化施設について学ぶ。保育の理念と概念、児童の最善の利益を考慮した保育のあり方も学ぶ。保育の社会的意義・保育所保育指針の制度的位置づけを確認する。さらに、発達過程に応じた保育を３歳未満児から年齢に応じて学ぶ。	

専門科目	保育専門科目	教育原理	保育者として、教育の基礎理論を理解するために、教育の理念並びに歴史、教育に関する社会的、制度的な事項の基本を理解する。具体的には、教育とは何かという視点から、人間形成と教育のあり方、遺伝と環境因子について学ぶ。さらに、生涯を通じた学習の中での幼児期の位置づけを発達課題と幼児期の発達の特徴を掴むことで学ぶ。さらに、幼児教育の歴史を学ぶ、現在の我が国の教育制度について理解を深める。保育者としての教師の役割を学び、遊びを通じての指導の方法だけでなく、一人一人の発達の特性に応じた指導、教育の方法を習得する。	
		相談援助	子どもの健やかな育ちを支えるために、子どもの親、家族、子どもと家族を取り巻く地域の人々と協力して適切な支援ネットワークを創るため、豊富な事例を通して学ぶ。具体的には、相談援助の意義と機能、理論を学び、保育とそソーシャルワークの関連についても学ぶ。相談援助の対象と援助過程について理解を深め、ケースワークやグループワークについて模擬練習を通しての理解を行う。さらに、相談援助過程での記録の取り方と評価の仕方を学び、保育士となった際に実際的に役立つようにする。また、地域の多様な機関との連携のあり方について理解を深める。	
		保育者論	保育者の意義や役割、倫理観、保育士の制度的枠組みと専門性についての理解を通じて、保育者としての基礎的な力を身に付け、それを踏まえて自らの保育者像を描くことができるように学ぶ。具体的には、理想の保育者像について自分史をもとに振り返る。さらに、保育に関する法規定、厚生労働省との関係、保育の特徴を学ぶ。保育士の職務内容と服務の基準についても学ぶ。さらに、懲戒処分や分限処分についても理解を深める。労働条件に関しても、勤務時間、年次有給休暇、出産・育児休暇（休業）制度、給与と手当についても認識を深め保育士資格取得への自覚を持つ。	
		乳幼児期の心理学	保育実践における子どもの発達について理解する。子どもの生活や遊びの中で育つ心の発達について、実践的に学ぶ。保育における発達支援、援助方法について学びを深める、具体的には、保育実践における発達の理解の必要性。生涯発達、日常生活を通しての学びの把握と援助の仕方。自我の芽生えと自立心を支えるための関わりについて。集団生活における子どもの発達と個人差について。仲間関係の発達と援助の仕方について。思考の発達と遊びの発展を支える援助。子どもの遊びを通しての学びの事例等である。	
		保育の心理学Ⅱ	保育場面において必要なことの一つである「人間理解」を促進するために、心理学の基礎的知識を身につけ、本講義で得られた知識を実際の保育の場面で子どもの姿に結び付けて、より具体的に人間の心を理解するための方法を身につける。具値的には、人間の発達の規定要因について、運動機能の発達、認知発達について、社会科の基礎となる家庭の与える影響について、人間と集団の関係、集団の発達過程について、子どもの発達に影響を与える保育者の働きかけについて、基礎的な学習理論の理解、人間の記憶と学習を支える動機づけのメカニズム等を学ぶ。	
		子どもの保健Ⅰ	乳幼児の成長、発達を理解するとともに成長曲線の見方をとうして成長の特性を学ぶ。言語発達の個性的なことと家庭や集団における健康管理について基本的な事項を学ぶ。家庭や生活環境の重要性、乳幼児の主な病気の早期発見、予防等について学習する。また、母子健康手帳や乳幼児健診等の母子保健行政について学び、日本の小児保健の水準や保健対策の現状、今後の課題にも言及する。	
		子どもの保健Ⅱ	ゼロ歳児保育、病児保育、集団保育、アレルギー対応等これからの育児現場で必要となる知識の基本と保健活動の計画について学習する。細菌性、ウィルス性感染症、学校感染症等についての知識と感染拡大予防対策、子どもの事故の実態と予防対策についても学ぶ。増加している定期予防接種、任意予防接種の意義と標準的接種時期についても保育者には必要な知識であるので学習する。	
		子どもの保健演習	子どもの保健Ⅰで学んだ基礎知識を基に、乳幼児の健康管理と保健指導の実際についてグループでの実習を中心に学習する。乳幼児の健康観察、身体計測の実際を人形を活用して経験する。幼児の家庭で行う聴覚検査、視力検査を互いに演習する。保育の場での事故の防止を考えるために子どもの様々な場面における事故の実際をまなび、事故予防のための危険についてグループディスカッションをとうして、事故予防の環境整備を発見する。乳児の日常生活での着替え、おむつ替え、調乳、哺乳、沐浴等を実際に体験する。感染拡大防止のためにおう吐物の適切な処理や、正しい手洗い方法もできる限り演習で体験し、パワーポイント、ビデオ、ディスカッションも取り入れ、育児相談などにおいて実際に役立つ知識と技術の習得を目指す。	
		子どもの食と栄養	保育者として、小児期における心身の発育、発達過程を踏まえ、離乳期からの食事支援ができるように小児栄養学の基本的知識を身に付ける。また、保育者として、小児の栄養特性や正しい食生活を理解するために、小児栄養学の基本的知識を身に付ける。具体的には、小児栄養学の意義と目的、小児の味覚・嗜好・消化器官の発達、食事バランスガイドと身体の構成成分、基礎代謝と食事接収基準、望ましい食生活、食事計画の立て方、母乳栄養と授乳の仕方、人工栄養と調と混合栄養、離乳の基本、離乳食とその与え方、食事の仕方とマナーなどを学ぶ。	

専門科目	保育専門科目	児童・家庭支援論	子育て家庭を対象とする家庭支援に関わる理念と歴史、法制度の理解を通じて、家庭支援において保育者に求められる役割を考察することで、家族全体を視野に入れた保育や保育者の子ども理解の基礎を身に付ける。具体的には、家族に対する支援の必要性、家族の定義、形態、家族の変化と機能、家族を取り巻く社会の変化、諸外国での子育ての現状と支援、保育者の役割、保育者による家族支援の形態、家庭教育の歴史、地域の子育て支援家庭への援助、地域の子育て支援システム、ネットワークとの協力体制、連携方法を学ぶ。	
		児童・家庭支援演習（介入事例検討）	児童家庭支援論〈家庭支援論〉の学習を前提により具体的に家族に対する支援の方法を考察する。具体的には、現代社会における家族と社会の変化について、家族が抱える子育てに関する問題、育児不安、子どもに対する虐待などについて造詣を深める。その後、家族に対する支援や援助の方法、仕方を事例を十分に使いながら学習する。特に保育者であることを踏まえ、保育所、施設における家族支援の方法だけでなく、保育所等における子育て支援センター等における家族支援についても触れ、多様な家族支援のあり方を学ぶ機会とする。	
		保育課程論	保育所における子どもたちの姿を踏まえ、保育者として子どもの育ちを支えるために、記録の取り方や計画作成の仕方を学び、よりよい保育のあり方について理解する。また、子どもの姿を通して、どのような「ねらい」をもつか、その保育のねらいの意味と重要性を保育計画の立案を通して学ぶ。具体的には、保育における計画の意味と意義、保育所保育指針におけるねらいの意味、長期、短期計画と保育実践、制作活動と計画、製作活動の計画、集団遊びの計画、保育における流れと家庭との連携、事例を踏まえた保育計画の立案を行う。	
		保育内容総論	保育内容総論は、保育内容各科目の基礎となるものである。乳児から5歳児までの保育所での生活のすべてを考える。具体的には、まず子どもの立場に立って園生活をイメージすることから始める。遊びの中、生活の中で学ぶことの意味を考える。保育所保育指針での保育内容の捉え方を確認する。保育内容の各領域について概要を掴む。また、年齢に応じた保育内容の捉え方を学ぶ。そして、子育て支援と関連、預かり保育、長時間保育、地域子育て支援についても確認する。こうした学習を通じて、保育内容と各領域を学ぶ。	
		保育内容演習Ⅰ	幼児の心身の健康に関する領域「健康」のねらい、内容を理解するとともに、幼児が健康な生活を送るために必要な生活習慣や環境、活動の関連について学ぶ。幼児期の体と運動の発達に関する基礎知識を身に付け、運動と遊びの意義を学び、具体例をを通じて指導の実践力を高める。さらに、安全教育について理解を深め、保育者の役割を認識する。具体的に、まず保育の基本を確認し領域「健康」の意味を学ぶ。乳幼児の健やかな心と身体を支えているものを理解する。健康と保育方法、領域健康の指導上の留意事項を確認し、これまでの健康概念の変遷を振り返り学習を深めたい。	
		保育内容演習Ⅱ	乳幼児期を通じて子どもたちが周りの人との関係を深めていく過程の重要性を理解する。遊びにおける集団活動の意義を学び、家庭、地域、保育施設の役割と連携について学ぶ。具体的には、領域「人間関係」についての保育所保育指針の扱いを確認する。保育の基本と人とのかかわりを学ぶ。遊びの中で育つ人とのかかわり、人とのかかわりを育てる保育の実践、人とのかかわりを育てる保育者の役割、人とのかかわりが難しい子どもへの支援、園、家族、家庭、地域と人とのかかわりについても触れ、最後に領域「人間関係」をめぐる諸問題を考察したい。	
		保育内容演習Ⅲ	乳幼児期の子どもたちが身のまわりの自然や社会の仕組みを理解していく道筋を知り、環境と体験を通じて子どもたちの豊かな心情や自ら考え、やり遂げる力を育てることを学ぶ。領域「環境」のねらい、保育内容と活動の展開、援助を学ぶ。具体的には、保育の基本と領域「環境」の基本を学ぶ。子どもの「環境とかかわる力」の発達を支えているもの、子どもの「環境とかかわる力」をどう理解するかを学ぶ。さらに、保育所保育指針における領域「環境」の捉え方を確認したい。保育の場での実際と領域「環境」と実践上の留意点、「環境」のこれまでの変遷についても触れ、まとめたい。	
		保育内容演習Ⅳ	子どもたちが言葉を獲得し、豊かな表現力を身につけていくために保育所で取り組む興味や関心の育て方を学ぶ。具体的には、保育の基本と領域「言葉」を学ぶ。乳幼児の言葉の発達を支えているもの、乳幼児の言葉の発達をどう理解するかを学ぶ。保育所保育指針での領域「言葉」の扱いを確認し保育者の役割も学ぶ。さらに、保育の実際の場での「言葉」の扱い、実践上の留意点にも触れ、実際例として劇遊びの事例を通して言葉と保育の総合性を考えたい。また、領域「言葉」のこれまでの変遷もたどり、保育内容「言葉」基礎を学ぶ。	
		保育内容演習Ⅴ	子どもたちの豊かな表現力を身につけるために保育所で取り組む興味や関心の育て方を実例を提示しながら学ぶ。具体的には、保育の基本と保育内容「表現」の基本を学ぶ。保育内容「表現」のこれまでの歴史的変遷、保育者の役割も振り返る。子どもという存在と表現、子どもの豊かな感性と表現を育てる環境、見る、聞く、嗅ぐ。味わう、触るという諸感覚を通じての感性と表現、生命に対する感性と表現についても学ぶ。さらに、音、音楽に対する感性と表現、絵画、造形に対する感性と表現も考え、園環境が育てる子どもの感性と表現についても配慮できるように学ぶ。	

専門科目	保育専門科目	乳児保育	現代の子育て環境の変化を捉え、乳児保育の実践の場が「子どもにとって最もふさわしい生活の場」となるためのあり方や、乳児保育に関わるためにまず乳児保育の意義を学び、乳児保育の基本と発達、乳児が生活する多様な場としての家庭、保育所、乳児院、家庭内保育を考察する。さらに、乳児保育での健康・安全、食事などを踏まえ、環境を通して行う保育についても学ぶ。さらに、保育計画に基づいた保育を行うために、計画作成の意義、保育課程の編成、指導計画の作成の基本、指導計画に基づく保育の展開についても学ぶ。	
		障害児保育	保育指針の改訂により子ども一人ひとりを主体として受け止めることの重要性が指摘された。障害のある子どもたちとどのように向き合い、ともに育っていくのかを考える。具体的には、まず子どもとはどういう存在なのかを考え、障害とは何か、子どもを一個の主体として受け止めることの意義を考える。その後、知的障害、自閉症、発達障害など障害ごとの特徴と留意点を学ぶ。統合保育の在り方と実際、保育所での障害児の受け入れと支援体制、家族へ支援の在り方と支援体制についても学ぶ。こうした学習によりすべての子どもを受け入れることのできるように学ぶ。	
		社会的養護演習	児童養護施設等の児童福祉施設の入所児童の特性等を理解し、適切な支援を行うための知識、技術を学ぶ。さらに、入所児童の家族への支援の在り方や地域社会との連携の方法についても考察する。具体的には、社会的養護の基本的な枠組みと仕組みについて基本を考える。児童養護施設、乳児院、知的障害児施設などの各施設養護の特性と実際について考察する。里親制度についてもその在り方と実際についても理解を深めたい。さらに、施設保育士として、入所児童に対して日常生活支援としてどのように関わるか、自立支援に対する支援の在り方についても学ぶ。	
		保育相談支援	保育士に固有の専門性とされる保育相談支援の知識や技術、態度、保育相談支援の展開場面、手段等について学ぶ。具体的には、保育相談支援の原理と構造、価値と倫理、信頼関係を築く受容と自己決定の尊重、子どもの最善の利益の重視、保育相談支援の方法と技術、実施体制、環境を通した保育相談支援の在り方を学ぶ、さらには、保育所入所児童の保護者への保育相談支援の在り方、実際について考察する。この授業では、特に、保育所だけでなく、児童養護施設などの児童福祉施設における保育相談支援についても考察を深める。	
		保育の表現技術Ⅰ（音楽表現）	音楽に合わせた身体表現や、声や動きによる表現で、イメージを人に伝えたり、他の人の表現をよく見たり聴いたりして共に創り上げる体験をする授業である。朗読・歌・身体表現からなる総合表現の作品にも取り組む。表現の前提となる、イメージをふくらませる過程も大切にし、保育者として子どもに音楽表現を指導する際の声かけ、表情、安心して自己表現できるために必要なことについても学生自身が考えられるようにする。	
		保育の表現技術Ⅱ（身体表現）	乳幼児期を通じて子どもたちが周りの人との関係を深めていく過程の重要性を理解する。遊びにおける集団活動の意義を学び、家庭、地域、保育施設の役割と連携について学ぶ。具体的には、領域「人間関係」についての保育所保育指針の扱いを確認する。保育の基本と人とのかかわりを学ぶ。遊びの中で育つ人とのかかわり、人とのかかわりを育てる保育の実践、人とのかかわりを育てる保育者の役割、人とのかかわりが難しい子どもへの支援、園、家族、家庭、地域と人とのかかわりについても触れ、最後に領域「人間関係」をめぐる諸問題を考察したい。	
		保育の表現技術Ⅲ（造形表現）	造形表現は、幼児にとって重要な表現方法である。汎用性の高い造形だけでなく、季節や行事に合わせた造形表現を行えるように、実技を重視し学びたい。まず、保育所保育指針における表現活動、造形表現活動について学びたい。さらに、造形表現の指導法の基本と展開についての基礎知識、様々な造形活動や教材研究の方法、造形表現を行うための素材についても現物を紹介しながら学習を深めたい。さらに、各自が対象者の違いや季節ごとの機会に応じて作成する造形活動の指導案の作成を行い、実際場面でよりより指導を行えるように実践的に学びたい。	
		保育の表現技術Ⅳ（言語表現）	保育内容（言葉）での学習を踏まえ、言葉を使った幼児に対する重要な表現方法である「絵本」について学習を深めたい。具体的には、絵本の種類、日本及び世界の絵本作家、絵本の読み聞かせの基本と実際場面での留意点、発達段階に応じた絵本の選び方を学ぶ。また、同様に幼児にとって重要な表現方法である紙芝居について、選び方、読み聞かせの方法、実際場面での留意点を学びたい。さらには、応用として各自が簡単な創作絵本を作成し、読み方の練習を行い、実習や実際場面での応用ができるように考慮したい。	
		保育の表現技術Ⅴ（ピアノ）	子どもの顔を見ながら歌の伴奏や表現の指導ができる保育者となれるように、読譜と、伴奏づけ・コードネームの理解など具体的な技術を教える科目である。音符を読むだけではなく、作品の性格や描かれた情景を読み取り、表情豊かにピアノを弾けるようになることを目指す。学生に難しすぎることを要求して苦労させるのではなく、ピアノや音楽が言葉のように自己表現の一つの手段となるように、また、音楽で表現することの楽しさを実感し、人と共有できる関係を作れるように工夫する。ピアノを通して美しさを追求する心も育てる。	
		発達障害の理解	LD（学習障害）、ADHD（注意欠陥多動性障害）、ASD（自閉症スペクトラム障害）など発達障害の症状、発現等基本的な発達障害について理解する。発達障害の早期発見、及び発達支援について基本的に理解する。発達障害の症状、発現等医学的心理学的な面での理解を深める。その上で発達支援に必要な就学、就労支援について理解を深め、事例等を通して実際の支援方法について学ぶ。	

専門科目	保育専門科目	障害児と地域支援	障害のある人々、障害のある児童の地域社会への参加は、今日の大きな課題である。地域社会への参加を広げるため、「障害とは何か」というテーマのもと、環境因子の大切さ、社会的障壁の意味を取り上げる。その上で障害と地域支援について理解する。障害児を地域支援する技術を理解する。障害と地域支援の具体的方法について理解する。施策や実践から基本的な考え方を認識し、その意義について深め、さらに実践に活用する技術を身につける。公私協働による多様な支援方法について実践力を養う。	
		レクリエーション援助論	レクリエーション論は人と人との出会い、つながりにおいて意味ある科目である。特に社会福祉サービスや児童とのレクリエーションの役割は重要である。そうした考えに基づき、レクリエーションの基本的な考え方を理解する。福祉レクリエーション援助の技術と方法を理解する。さらにレクリエーションの計画と展開を実践的に理解する。また施策や実践から基本的な考え方を認識するとともに、意義と実践に活用する技術を身につける。	
	社会福祉実践科目	相談援助実習指導Ⅰ	相談援助実習の意義について理解する。社会福祉士として求められる資質、技能、倫理等、総合的に対応できる能力を習得する。具体的な体験、援助活動を、専門的援助技術として理論化し体系立てていく能力を滋養する。実習を行う実習分野についての理解をする。実習における個人のプライバシーの保護と守秘義務について理解する。相談援助に係る知識と技術を理解、習得する。また実習における記録の内容、方法について理解し、事前学習の成果として実習課題を作成する。	
		相談援助実習指導Ⅱ	相談援助実習の意義について理解する。社会福祉士として求められる資質、技能、倫理等、総合的に対応できる能力を習得する。具体的な体験、援助活動を、専門的援助技術として理論化し体系立てていく能力を滋養する。実習を行う実習分野についての理解をする。実習における個人のプライバシーの保護と守秘義務について理解する。相談援助に係る知識と技術を理解、習得する。また実習における記録の内容、方法について理解し、事前学習の成果として実習課題を作成する。また実習後の実習報告書を作成し報告する。	
		相談援助実習指導Ⅲ	社会福祉士として求められる資質、技能、倫理等総合的に対応できる能力を習得する。社会福祉実習の経験を振り返り意味づけすることを通して、実習で得た各々の固有の具体的な知見を「相談援助演習Ⅴ」との関連の中で、既存のソーシャルワーク実践モデルおよび社会福祉実践での専門的知識との関連を見出し、実習後の実習報告書を作成しでそれをもとにプレゼンテーションを行う等、社会福祉士が持つ専門的知識と技術を統合していく学習を行う。	
		社会福祉実習	相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ実際的に理解し実践的な技術等を体得する。社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する。　関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を実践的に理解する。	集中
		介護総合演習Ⅰ	護実習の教育効果を上げるため、実習に必要な知識や技術について、個別の学習到達状況に応じた総合的な学習とする。実習と組み合わせの学習とし、介護実習の意義、介護実習の実習先の特徴、介護実習に必要な知識や技術について学ぶ。また介護実習についての自身の学習課題と学習成果を明確化出来るような学びとする。具体的には、講義やグループワークの他に、実習前後におけるグループ別指導、個別指導、及び実習前報告会、実習後報告会などを行う。	
		介護総合演習Ⅱ	介護実習の教育効果を上げるため、実習と組み合わせの学習とし、介護実習の意義、実習先の特徴、介護実習に必要な知識や技術などの確認、施設等の事前学習、実習前後の報告など、個別の学習到達状況に応じた総合的な学習とする。到達目標は、実習に必要な基本的知識や技術、記録の活用ができることにあり、自身の学習課題と学習成果を明確化し言語化することで、介護福祉士の役割について説明できるようになることにある。	
		介護総合演習Ⅲ	介護実習Ⅱ－２を準備することを目的とする。 授業内容は①介護実習Ⅱ－２で学習する総合的な実習に備え、これまで学んできた知識・理論・技術・思考・態度・倫理を考察、自己課題を抽出する。②介護過程の学びを展開するための介護課題を明確にする。③施設運営に必要な法制度、地域社会資源、施設運営、介護福祉士の成長のためのシステム等を理解する。④施設入所者の暮らし・その思い、また介護福祉士に課せられた社会的な課題を理解する。⑤以上を基に介護実習計画を立案する。	
		介護総合演習Ⅳ	介護実習計画に基づき介護実習を考察することを目的とする。 授業内容は①介護実習Ⅱ－２で行った実習内容を振り返りケーススタディにまとめる。②知識・理論・技術・思考・態度・倫理を考察、自己課題を抽出する。③施設運営にかかわる法制度、地域社会資源、施設運営、介護福祉士の成長のためのシステム等を考察する。④施設入所者の暮らし・その思い、また介護福祉士に課せられた社会的な課題を考察する。⑤ケーススタディ発表会を企画・運営する。	

専門科目	社会福祉実践科目	介護実習Ⅰ	個々の生活リズムや個性を理解するという観点から様々な生活の場において個別ケアを理解し、利用者・家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、多職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割について理解する学習とする。介護福祉にかかわる在宅生活支援事業と入所施設における生活支援の概況を学ぶ。 ・実習Ⅰ－１・・　グループホームや通所介護事業所等における実習　合計５日間（４０時間） ・実習Ⅰ－２・・　介護老人福祉施設や障害者支援施設等の入所施設における実習　合計７日間（５６時間）	集中
		介護実習Ⅱ-1	実習の目的は、理論と実践の統合にある。「実習施設・事業等Ⅰ」の学外施設実習（合計５日間）と「実習施設・事業等Ⅱ」の学外施設実習（合計１７日間）を通して、個々への尊厳のもとに利用者理解、個別ケアの理解、介護技術の確認をし、介護福祉士の役割について学ぶ。到達目標は利用者の理解を中心としたコミュニケーションの実践、個別ケアを理解するため一連の介護過程の実践、多職種協働の実践、これらを通して自らの介護福祉観を育てることである。	集中
		介護実習Ⅱ-2	介護実習計画に基づき介護実習Ⅱ－２を行うことを目標とする。 授業内容は①尊厳ある介護を目指す視点から、個別利用者や家族の心身の状況や暮らしの多様性に沿ってアセスメントを行い、介護計画作成、実施、考察の過程を学ぶ。介護過程の学習を通じて個別利用者を幅広く理解する。②夜勤や変則勤務プログラムを体験し、多角的な利用者支援の在り方を学ぶ。③施設介護をめぐる社会的地域的な状況・法制度の運用実態・地域社会での役割・他機関との連携など広く学ぶ。④以上を通じ介護福祉士としての自己覚知を深める。	集中
		保育実践演習	保育者としての基本的な資質能力が形成されたかについて確認するために、保育者としての自分のあり方について考え、不足する部分を補い、課題を見出し、保育者としての資質を高める。具体的には、これまで行ってきた保育実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの実習での体験と指導者、教員からの助言を振り返り、現場での実践に結び付けるために考察と更なる学習を行う。不足する部分を抽出し、模擬保育を通じ解決を図る。さらには、保育所、施設での行事への参加を行い、実習と違う側面から学びを深めたい。こうした実践的な試みから保育士としての出発点としたい。	
		保育実習ＩＡ（保育所実習）	保育士として、乳幼児に対して適切な保育を行うことができるようになるために、①保育所の内容、機能などを実際の体験を通して理解する。②保育所の１日の保育の流れを把握し、子どもの実態を知る。③乳幼児の生活場面における各領域の保育内容の展開について実践的に理解する。具体的には、保育所において、実実習時間90時間以上の実習を行う。子どもとの関係を築きながら、主に以下の諸点を実践的に学ぶ。①子どもの生活と保育実践の観察と記録のあり方②子どもに対する援助方法③保育士の服務④保育所の機能と役割である。	集中
		保育実習ＩＢ（施設実習）	施設保育士として就職する際に必要な知識と技能を身に付けるために、関連科目の学習を前提に、現場での実習を行う。実習では、児童や利用者についての理解を実践とともに深める。また、施設での保育士の役割を体験的に理解する。さらに、地域社会での施設の役割を現場の体験をもとに再確認する。具体的には、児童福祉施設等において、実実習時間90時間以上の実習を行う。実習での学習項目は次の諸点である。①施設の役割と機能②子ども（利用者）理解③養護内容、生活環境④自立支援計画と記録のあり方⑤専門職としての保育士の役割と倫理である。	集中
		保育実習指導Ⅰ	保育実習の意義・目的、実習内容を理解し、自らの課題を明確にする。実習施設における子どもの人権、プライバシーの保護と守秘義務について理解する。実習の計画、実践、観察、記録、評価の方法について具体的に理解する。実習の事後指導を通じて、実習の総括と自己評価を行い、新たな課題や学習目標を明確にする。具体的には、実習の目的と理解。実習の内容と課題について。社会的使命と子どもの最善の利益の考慮について。実習の手続きの流れ、必要な書類について。実習日誌の書き方の理解。子どもの観察のポイント、年齢による発達の違いを学ぶ。	
		保育実習Ⅱ（保育所実習）	保育者として、乳幼児に対する適切な保育を行うことができるようになるために、①保育所での子どもの実態に即した保育内容を理解し、援助方法を身に付ける。②保育所での子どもの実態と保育目標に応じた保育を展開するために指導計画の作成と実践について具体的に学ぶ。具体的には、実実習時間90時間以上の実習を保育所において行う。公立、または、私立保育所での実習を通して、子どもとの関係を築き、保育士の補助的な仕事を行いながら、子どもの育ちと保育実践の観察と記録、指導計画の立案と援助方法の実際などについて実践的に学ぶ。	集中
		保育実習指導Ⅱ	保育実習の意義、目的、実習の内容を理解し、自らの課題を明確にする。実習施設における子どもの人権、プライバシーの保護と守秘義務について理解する。実習の計画、実践、観察、記録、評価の方法について具体的に理解する。実習の自己指導を通じて、実習の総括と自己評価を行い、新たな課題や学習目標を明確にする。具体的に、保育所実習の振り返りを行う。実習Ⅱに向けての準備、課題をまとめる。実習日誌の書き方を注意事項を体験を通じて再確認する。指導案作成について留意点を学び、年齢設定に応じた指導案を実践的に書き表す。	

専門科目	社会福祉実践科目	保育実習Ⅲ（施設実習）	児童福祉施設で実習を行う目的、意義、内容を理解し実践するために学習する。保育実習Ⅰ（施設）の学習を前提に、保育実習Ⅲの実習を行うために必要な知識を学習する。実習後の指導では、事前学習で学んだ内容に加えて、実際の実習場面で得た技能、知識を再確認する。具体的には、児童福祉施設で実習を行う意義、目的、子どもの人権保護と守秘義務を学ぶ。その他に、実習課題の設定の仕方、実習日誌の書き方、個別ケアーの方法など実習中の対応方法の確認をする。さらに、実習後の自己評価と施設からの評価、教員助言をもとに、今後の学習の方向を確認する。	集中
		保育実習指導Ⅲ	保育実習Ⅰ（施設）での実習を基礎に、施設保育士となるためにさらに児童福祉施設等での実習を行い実践力を高める。具体的には、児童福祉施設等で実実習時間90時間以上の実習を行う。実習では、保育実習Ⅰ（施設）で指導された事項を振り返り、新たに学内での学習で得た知識を生かして実習を行う。特に、対象施設の特徴、留意点については、事前に十分な学習と再確認を行い実習に臨むことが必要である。さらに、卒業後の施設保育士としての活躍を期待し、実習後には、自習施設からの評価、教員の助言をもとに、今後の学習の留意点を踏まえることができるように学ぶ。	
	社会福祉展開科目	社会調査の応用	社会調査に関する知識・技法に基づいて、現代社会を深く理解することがねらいである。特に福祉の間接援助技術としての社会福祉調査の特徴を理解することにより、福祉専門職として求められる調査リテラシーを身につける。具体的には、これまでの社会調査の成果を正確に読み解き、必要な社会調査の企画をおこなえる力を身につけることをめざす。	
		調査と統計	現代社会を客観的に理解する方法の一つとして、統計・調査データについて基本的知識を身につける。データ作成や分析の方法を理解することによって、データを読みとき、さらに適切に活用するリテラシーの修得をめざす。	
		公的扶助特論	公的扶助論を受け、日本における生活保護制度（理念・法制度・運用上の問題、今後の課題）について広く理解する。具体的には、生活保護法そのもの、生活保護制度における組織及び団体の役割と実際、生活保護制度における専門職の役割と実際、生活保護制度における他職種連携、ネットワーキングと実際、福祉事務所の役割と実際自立支援プログラムの意義とその実際について理解する。また、低所得者対策、低所得者への住宅政策、ホームレス対策等の問題を取り上げ、改めて、社会的セーフティネットの制度的保障の在り方（防貧的性格、救貧的性格）やその現代的意義についての総合的な理解を深める。	
		精神保健福祉論	①精神保健の意義、精神障害の基礎知識、精神保健福祉制度の概要について理解する②精神保健福祉の歴史と課題、精神保健福祉法成立史を学ぶ③脱施設化と我が国の地域支援の現状と課題を学ぶことを目的とする。授業内容は①精神保健福祉の意義②現代社会と自殺など精神的不健康の広がり③予防回復に関する精神保健福祉の役割④精神保健福祉に必要な疾患とその支援法の理解⑤脱施設化、ノーマライゼーションの実践と地域社会資源⑥研究発表⑦評価である。	
		ボランティア・コーディネーション	ボランティア・コーディネーションの意義と役割を理解することを目標に、ボランティアについて、ボランティア活動の歴史的経緯、ボランティア活動の現状と課題、ボランティア・コーディネーションの機能、それを担うボランティアセンターと担い手としてのボランティア・コーディネーターの役割について具体的実践を活用しながら講義する。	
		介護基礎	相談援助の対象者の日常生活支援の実際をイメージすることで、必要なマネジメントができるための力をつけることを目的とする。授業展開は技術体験の演習を中心とする。高齢者・障がい者の疑似体験をはじめとして、援助技法の実際を学ぶ。到達目標は、人間の自然なからだの動きを理解し、身体機能の低下や障がいが、日常生活に与える影響を理解する。さらに援助を要する人の自立・自律を尊重した、安全かつ適切な介護技法について理解し、実践する力をつけることである。	
		ユニバーサルデザイン論	福祉機器について、ADLにあわせた分類・種類・操作について学び、疑似体験を通して、障害による生活困難を体感し問題点を探り、安心した生活を営むための活用法を学ぶ。さらに、環境整備について、ユニバーサルデザインをヒューマンインタフェースの面から考察する。人間の情報処理活動の認知科学の研究、ヒューマンインタフェースの視点からの情報処理機械の分析などについて取り扱うことにより、ユニバーサルデザインとコミュニケーションの関係に理解を深める。	
		リハビリテーション論	リハビリテーションの基盤となる理念は、人権の保障であり、障害を持つ人々が能力を発揮できる状態にし、潤いのある豊かな生活を実現することである。リハビリテーションの理念、定義、目的、範囲、対象などリハビリテーションに関する基礎的事項について学習し、ノーマライゼーションの原理やQOLに視点をおき、リハビリテーションを通して機能回復ばかりではなく、人間らしく生きる権利の回復も図ることについて理解を深めることを目的とする。	

専門科目	社会福祉展開科目	手話	聴覚障害について、医学、福祉、教育、文化の各側面から総合的に理解を深め、そのコミュニケーション手段を体得することがねらいである。具体的には、濁音や促音などの動きを含む指文字の仕組みを理解する、手話であいさつや自己紹介などができるようになる、手話以外の筆談や読唇、空文字などについてその特徴を理解し、技術を習得する。耳や脳の構造を学ぶことにより、聴覚障害そのものの仕組みや特性を理解し、福祉や教育、文化面の知識を得ることにより聴覚障害者との円滑な意思疎通が図れる技能と知識を身につけることを目指す。	
		社会福祉の歴史	現代社会における多様な社会福祉制度の諸原理や基礎概念を、その背後にある価値の問題とともに把握し、社会福祉が現代に存在する意味を考えることを目的とする。社会福祉に関して欧米及び日本の歴史について理解し、社会福祉の理念と意義について理解する。また、社会福祉の法体系及び実施体制等の成り立ちや機能を理解するとともに福祉需要の動向について概観する。適宜、タイムリーな話題、事例等を引用し検討しながら日常的で身近な問題としてとらえる。	
		スクールソーシャルワーク論	教育分野に加えて、社会福祉等の専門的な知識や技術を有するスクールソーシャルワーカーの意義を学ぶ。①課題を抱える児童生徒が置かれた環境への働きかけ②関係機関等とのネットワークの構築、連携・調整③学校内におけるチーム体制の構築・支援④保護者、教職員等に対する支援・相談・情報提供⑤教職員等への研究活動等のあらましを理解する。	
		ケア論	対人援助職におけるケア及びケアリングの概念とその思想的意義を探求していくことをねらいとする。ヒーリング（癒し）との関連についても考察していく。主な授業内容は、ケア及びケアリングの概念とその語源の理解、メイヤロフのケアリング論、ノッティングスのケアリング論やホリスティック教育をはじめとする教育領域でのケアリング論、ヒーリング（癒し）とターミナルケア（緩和ケア）など福祉領域にとどまらず学際的な視点から考察していく。	
		医療ソーシャルワーク論	保健医療分野におけるソーシャルワークについて学ぶ。疾病等で自立した生活が営めず困難な状況にあるクライエントやその家族への支援の実際について理解を深め、その支援に中心的に従事する医療ソーシャルワーカーの役割・機能について学習する。また近年常に変化し続ける保健医療福祉政策の現状について確認し、そのような状況な中で、医療分野におけるソーシャルワークの固有の意義について理解し言及していくことを試みる。	
	演習	人間福祉基礎演習	社会福祉における多様な領域とその主要な論点を概観的に学習する。本授業は次年度以降の社会福祉演習と卒業研究との入門的な位置づけとし、学生が自己決定的な学習の動機つけを高め、学生自身が主体的に取り組む課題や研究テーマを発見、形成していく手がかりを獲得することをねらいとする。学科教員がオムニバスで授業を実施する。	
		人間福祉演習	人間福祉及びそれに関連する領域における学問的テーマを、より専門的に学習していく。卒業研究のテーマ設定に向けて、学生個々の興味関心を広げ深めていくよう指導する。また適切で具体的な研究方法について習得し理解を深めていく。本授業は少人数での演習形式で行う。課題によっては実践現場訪問、調査、フィールドワーク等学外活動を実施する。学生は自己主導的な学習(self directed learning)の中で、自身の問題意識や研究テーマを明確にしていくことが求められる。また他者の研究テーマや視点に関心をもち、相互に援助できる関係を築く。	
	卒業研究	卒業研究	新しい事実・解釈を発見し、技術・方法を発明し、創意工夫できる研究力は、社会に役立つ人として生き抜く糧となる。こうした問題発見・解決につながる力を高めるよう、指導教員とともに設定した課題について、研究方法の基本（計画→実行→評価）や取り組む態度を学びつつ、研究を進める。卒業論文として取りまとめ、発表会等の形で研究成果を公表する。知的感性を磨き、科学的視点を育むことをもめざす。	

（注）

1　開設する授業科目の数に応じ，適宜枠の数を増やして記入すること。

2　私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合，大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は，この書類を作成する必要はない。

授　業　科　目　の　概　要

（人間生活学部健康栄養学科）

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通科目	十文字学	学びの基礎をつくる	入門ゼミナール	各学科は入学直後の学生が大学での生活と学習がスムースに進み、卒業までの展望や卒業後の進路についても思い描けるように丁寧にオリエンティションとガイダンスを行う。また、学生が受け身にならないように、さまざまな形で自ら学ぶ要素を取り入れるようにする。時間割上の設定、授業方法は各学科の創意工夫にゆだねられるが、下記の項目について必ず含めることとする。①本学園創設の理念、建学の精神、②学園及び大学が歩んだ歴史、③本学が立地する地域の特色や課題、④学科が目標とし、卒業時に想定される人物像。	
			地域で学ぶ	担当する教員(単独または複数)は、地域の実情を熟知し、地域においてさまざまな活動を行っている人士(単独または複数)を招き、地域の特色、地域が抱える課題等について学生に情報を提供するとともに、学生自らがそうしたさまざまな活動に加わるための意欲の喚起と必要な知識の獲得を進める。その上で、前述した地域の人士の協力と援助を得て、地域においてさまざまな活動をできるようにする。時間割上の設定にはとらわれず、しかし単位構成上有効な時間量を確保して進めることに配慮する。	
			読書入門	担当する教員(単独とする)は、ゼミの開講に当って一冊の本を決め、半期の設定された時間割上の時間において学生たちとその本をじっくりと読み合い、内容を攻究する。できるだけその本一冊の読解に止まることなく、読書の楽しみ、読書の方法への開眼などが実現するように努力する。ゼミが開設されている期間及び終了後においても、読書感想文を書くようにし、それを公表することによって、読書の意欲が定着するように努力する。	
			総合科目	担当する教員(単独または複数)は、学外の企業、団体、有志などの協力を得て、特定の題目、特に社会の動向と連動するような課題について、期間内に15回以内の授業を設定する。授業では特定の専門分野に限ることなく、共通科目が扱う領域を総合的に、かつ自由に、創意的に扱うことによって、学生自らが学ぶ意欲と姿勢を獲得できるように配慮する。扱う課題において「総合」科目であり、企業等の授業提供を主旨とする点からは「冠講座」となる。なお、授業をゼミナールの形態で進めるケースは総合ゼミと呼ぶことにするが、この科目の中の一つの形態である。	
		女性の自立・生き方を学ぶ	家庭と法	家庭生活を営む上で関係のある法律について取り扱う。価値観が多様化し、様々な家族のかたちがあるなか、身近な事例や裁判などを素材にして現代の結婚・離婚・親子・相続のしくみや法の課題について学ぶ。また、家庭から一歩踏み出して女性が働くときの制度的な課題から、これからの生き方を考えることを目的とする。	
			キャリアデザインとライフプラン	女性が働くことの意味や目的を考えるとともに、自分自身のキャリアプランを設計する。結婚、出産、育児などの家庭生活と仕事をどう捉えていきたいか、人生設計の中で仕事をどう位置付けたいか、将来を見据えた自己分析を通して、自らのキャリアプランを考察する。統計情報から働く女性の動向を把握するとともに、ポジティブ・アクションや仕事と家庭の両立支援といった女性の活躍を推進する政策、女性労働に関する法的な変遷を学習した上で、固定観念に囚われない自分らしい職業選択について考える。	
			子育てと環境	子育ては新たな発見や予測しない問題に直面することの連続である。少子化社会において次世代を育成する子育てについて考えることは重要な課題であり、様々な議論が展開されている。本来、子育ては楽しく充実した営みである。しかし、現実には直面する課題や問題が多く、必ずしも子育てを楽しんでいるとは言えない場合も少なくない。そこで、子育てを楽しみ、充実させるために必要な視点について学び、豊かな子育てとは何かを考える。	
			食の科学	日本は、世界に類を見ないほど豊富な食材や食品が流通していて、欲しいと思えば何でも手に入る恵まれた環境にある。一方で食生活の乱れに由来することで、若年層が低栄養状態にあること、壮年層に肥満やメタボリックシンドロームなどをはじめ生活習慣病の増加が社会問題となっている。また、幼児や児童・生徒に見られる個食や孤食、偏食や欠食など、家庭で食卓を介したコミュニケーションの欠如は、子どもたちの健全な成長に影響を及ぼしている。この科目では健康であるための食生活について、栄養学、食品学から加工・調理学、食習慣、美味論さらには食環境論まで幅広く、学び、その理解を深める。	
			女性と健康	生涯を通じた健康とQOLの向上を目指すには、女性のライフサイクルに応じた正しい知識が求められる。若い時から、バランスの良い食事、ストレス対応、女性の生理、喫煙、飲酒、薬物の問題や、食の安全、感染症の予防などを考えることは今後の社会人や家庭人として役立つ。健康に関する知識のみならず行動が伴うように多方面から学習する。	

共通科目	十文字学	女性の自立・生き方を学ぶ	女性と文化	「女性（性）」・「男性（性）」という区分は、生物学的なオス（雄）・メス（雌）とは別に、意識的・無意識的な文化的・社会的制度によって存在している。そのような「女性（性）」がどのように文化的・社会的に創出されてきたのか、文化のなかで「女性（性）」はどのような意味や役割を担ってきたのか、といった点をさまざまな文化事象を通して具体的に考察し、それらを踏まえて文化創造の主体としての女性のありようを探究する。	
		地域と社会を学ぶ	埼玉の地理・歴史・文化	埼玉の地理・歴史・文化について、広く地元学という観点から学び、理解を深めていく。静的学習にとどまらず、体験学習や参加型学習という要素を取り入れ、埼玉を広域的に、またあるときは特定の地域に焦点化させてその生活の実際に触れながら、埼玉の現状や課題について考察を深めていく。	
			現代社会と教育	高度情報化、高度消費化、グローバル化社会と形容される現代社会おいて、教育はかつてない複雑な問題を呈している。教育がすぐれた社会的な営みである以上、主として学校で生起している様々な課題（子どもの学力・意欲・体力・モラルの低下・問題行動党）は、現代社会の変容と関連している。本講義では、複数の教員がそれぞれの専門的分野の知見を生かしながら、教育課題を多角的に捉え学ばせていく。	
			現代社会と福祉	少子高齢化、失業、貧困、孤立、医療、介護、子育て支援等、現代社会が抱える福祉課題はじつに多様で、どれも深刻な状況にある。その要因は何か、どのような対策が講じられているのか、自助・共助・公助をどう組み合わせて課題解決をめざすのか、こうした問題を一人ひとりの生活の視点から理解を深めることによって、生活のリテラシーとして福祉を活用し、創造する可能性を学ぶ。	
			現代社会とグローバリゼーション	インターネット及び情報技術、交通機関の発展・発達等により、様々な分野においてグローバル化が加速度的に進んでいる。そしてそれらは、私たちの生活・社会においても大きな影響を与え始めた。本講義では、衣服、映画、政治、経済、ビジネス、日本の国際貢献のあり方等からグローバル化について多面的にとらえるとともに、グローバル化がもたらすメリット、デメリットについて考え、理解することで、自分の生活に活かしていくことを目的とする。	
			くらしのなかの日本国憲法	私たちの暮らしにとって憲法はどのよう役割を果たしているのか。すべての生活部面にわたって個人として尊重され、人権が保障されていように、権力をコントロールする法的なちからとなっている。憲法の理念、しくみ、内容を広く学び、主権者の一人として基本的な憲法理解解力を獲得することを目的とする。	
			情報とネットワーク社会	情報に接する機会はますます多くなり、自ら社会に向けて情報を発信することも可能となってきた。このような情報社会においては、膨大な情報から有用なものを取捨選択し、モラルに則って効果的に活用することが重要である。そのための基礎知識の習得を本科目の目的とし、情報の基礎（情報の概念、特徴等）、情報システムのしくみ（コンピュータ、ネットワーク等）、情報とネットワーク社会の関係（セキュリティ、個人情報・知的財産権の保護、情報倫理等）を主たるテーマとして講義形式で授業を実施する。	
		人間と自然を学ぶ	地球環境の保全と生活	人間の活動と環境はどんな関係にあるのか、またどんな関係にあるべきなのかを、環境学の視点から理解することを目的とする。私たちの日常的な行動が環境に及ぼす影響、悪化してしまった環境改善への対策などについて、政治、経済、社会の動向との関連を検証しながら、具体的な事例を取り上げて論じる。公的な環境保護政策や民間の保護活動のあり方についても解説する。さらに、エコシステムという視点から見て人間は何を意識して行動すべきなのかについて、これまで行われてきた様々な議論を紹介する。	
			宇宙とものなりたち	人間はなぜここにいるのかについて、宇宙規模で考える。太陽系の天体について学ぶことにより、地球環境がいかに恵まれたものであるかを再認識する。また、宇宙が膨張している事実を学ぶことにより、宇宙には始まりがあり、それから現在の宇宙の姿になるまでにどのようなできごとがあったのかを理解する。さらに、太陽系の始まりから地球環境はどのように整えられてきたのか、長い宇宙の進化の中で人類と宇宙はどのような関係があるのかを学ぶ。	
			生物の多様性と倫理	まずは身近な生物圏を知る。どのような生物が存在して、他の生物や環境とどのような関係があるのか理解し、生物種の保存について考える。さらに、遺伝情報を読み取り、操作や選択をすることが可能となってきたいま、そのことの生態系への影響や倫理的側面を考える。	

共通科目	十文字学	人間と自然を学ぶ	地球のしくみと災害	地震とそれに伴う津波、集中豪雨や竜巻などの自然災害は、近年その規模と頻度が増しているように思われる。また、台風は年々強さを増し、猛暑日は頻度や発生地域が拡大しているように感じられる。人間にとっては災害となるような自然現象はどのようにして起こるのか、そのしくみを理解する。さらに、人間はそのような自然災害に対してどのような準備・対策をすべきなのか、また、そのような災害が起きたときにどう対処したらよいかについて考える。	
			原子のエネルギーとわたしたち	人間とエネルギーのかかわりは火の発見から始まり、今、私たちの快適で便利な暮らしは、エネルギーを消費することによって成り立っている。大量のエネルギーを取り出せる原子力は福島事故によって、制御不能となる大きな危険性をはらんでいることに直面した。しかし、将来の暮らしとエネルギーを考えるためには、経済性、環境性、安全性など多面的な視点で考える必要がある。エネルギー利用の歴史と現状を学び、また、放射線の基礎知識を学ぶことによって、医療や農業など暮らしに身近な放射線利用についても考える。	
			健康と運動	本学学園歌に「身をきたへ心きたへて世の中にたちてかひある人と生きなむ」と謳われているように、世の中に出て社会的な役割を十分に果たすためには、各自の心身へのたえまない洞察と働きかけが必要となる。本授業では、体育科学の最新の研究成果をベースとして、その洞察と働きかけに関する知見を提供する。授業を通して、運動の今日的な意義や健康のあり方についての教養を深め、女性としてしなやかに日々を過ごすための素地を整える。	
	保健体育		身体運動Ⅰ	１年次前期に学科クラスごとに履修し、2～5週を単位として数種類の体育実技を行う。協同型および競争型レクリエーションを織り交ぜて、入学直後の学生が学科内の交流を深める機会を提供する。また多彩な身体運動を通じ、「身体を動かすこと」の楽しさを体感し、さらに自らと他者の身体についての気付きを深める。主な実技種目として、長縄とびやリズムエクササイズ、ティーボールをはじめとした各種球技などを行う。これらの実技科目を通じて、大学生活への帰属意識を高め、4年間の学園生活に臨む修学態度の基礎を涵養する。	
			身体運動Ⅱ	1～4年次後期に、希望科目(学修内容）を学科の枠を外して選択・履修させる。ここでは生涯を通じてスポーツに親しむ素地を涵養すべく、同一の種目または運動領域の活動を継続的に行う。そして、スポーツには集団種目や個人種目、球技や体操など多彩な楽しみ方があること、自らの意欲や能力に応じて「身体を動かす愉しみ方」を見つけることを目標とする。各種球技、ゴルフ、リズムエクササイズ、筋力トレーニングなどの科目を設けるとともに、教職等の資格取得に関連する内容、集中で開講するシーズンスポーツ（３泊４日の雪上実習：スキー、スノーボード等）も設定する。	集中を含む
	外国語	基礎科目	英語Ⅰ	通年科目として英語によるコミュニケーションのための基礎的英語能力の育成を目指す科目である。とりわけ、聞く・話す、読む・書くの4技能の総合的育成を行い、大学を経て社会にでても通用する英語力の育成を目標としている。そのため、前期ではおもに英語の聞く、読むための認知能力の効率的な修得を目指す。そのため、重要な文法事項や語彙を効率的に学習できるようにする。後期では前期で修得した内容や力を基に、話す、書くの運用能力を育成するものである。	
			英語Ⅱ	英語Ⅰをふまえ、あるいは実力に応じ、英語の4技能、リスニング力とスピーキング力、リーディング力とライティング力をより高いレベルで身につける科目である。リスニングではビジネスシーンだけではなく、日常、映画やTV、ニュースなどより多くの英語素材を的確に把握できる力の養成を目指す。 リーディングでは様々な素材、新聞や雑誌、Email、告知などの英語情報を読みこなす力を養成する。スピーキングではリスニングをベースに話す力を養成する。ライティングもリーディングベースにしながら英文構成の基礎力をつけていく。	
			フランス語Ⅰ	初めてフランス語を学ぶ学生を対象に、フランス語の基本的な語彙、発音、現在形までの簡単な文の構造についての入門的な授業を行う。まずは、フランス語で日常よく使われる挨拶や基本的な単語を実際に何度も発音しながら、フランス語に慣れることを第1の目標とする。さらに、フランス語の綴りと発音の関係についても学び、初見の単語でもある程度発音が予測できるようになることを目指す。また、フランス語の辞書を引くことにも慣れさせ、簡単な短文であれば、辞書を引きながら意味を理解できるようにする。	
			フランス語Ⅱ	フランス語Ⅰをふまえ、あるいは実力に応じ、基礎的な文法事項を復習しながら、自己紹介、バスや電車の乗り方、ホテルの予約の仕方、買い物など、初歩の会話に必要な具体的な表現を習得することを目指す。文法事項では過去形や複文の構造なども学習し、徐々に語彙を増やしながら、平易な文章を読めるようにすることも併せて目指す。さらに、詩・小説・映画などを通してフランス文化に触れて行くことも目的の一つとする。	
			中国語Ⅰ	初めて中国語を学ぶ学生を対象に、中国語のしくみ、ピンイン（発音と声調をあらわした記号）の読み方を指導します。テキストは比較的容易な内容なので、繰り返し発音することで定着を図ります。別冊問題集を解く過程で簡体字や文法理解のチェックを行ない、日本語との違いを意識してもらいます。最終的には中国語検定試験準４級レベルの中国語力を付け、簡単な自己紹介や挨拶などが身に付くようにする。	

共通科目	外国語	基礎科目	中国語Ⅱ	中国語の基礎がほぼできている学生を対象に、中級レベルのテキストを使用して「読む・聴く」のレベルアップを図るとともに、「書く・話す」能力の養成を行ないます。授業はテキストだけではなく、受講生のレベルによってやや易しい基本的な復習プリントを用いて基礎を補ったり、長文や時事文読解を行ないハイレベルな内容にするなど柔軟に対応していきます。中国語検定試験４級・３級レベルの中国語力を付け、自分の言いたいことがアウトプットできるようにする。	
			ハングルⅠ	初めて韓国語を学ぶ学生を対象に、ハングルの母音（字）と子音（字）が区別でき、約450語の単語や限られた文型からなる文を理解する力を修得することを目的とする。決まり文句としてのあいさつやあいづち・簡単な質問ができ、またそのような質問に答えることができたり、自分自身や家族の名前、特徴・好き嫌いなどの私的な話題、日課や予定、食べ物などの身近なことについて伝え合うことができるようになることを目指す。	
			ハングルⅡ	ハングルⅠをふまえ、あるいは実力に応じ、比較的使用頻度の高い約950語の単語や文型からなる文を理解する力を修得することを目的とする。レストランでの注文や簡単な買い物をする際の依頼や簡単な誘いなどを行うことができたり、簡単な日記や手紙、メールなどの短い文を読み、何について述べられたものなのかをつかむことができるようになることを目指す。また、自分で辞書を引き、頻繁に用いられる単語の組み合わせ(連語)についても一定の知識を身につける。	
			日本語Ⅰ	留学生対象の通年科目であり、日本語四技能を総合的に学習する科目である。大学入学後、留学生が学部の講義を受講し、理解するには、高い日本語力が求められる。大学講義の理解の助けになるよう、「聞く」（講義の聞き取りがスムーズになるよう）、「話す」（意見発表に自信を持って臨めるよう）、「読む」（教材、資料の読み取りが正しく、早く行えるよう）、「書く」（レポート作成、記述問題の解答が的確にできるよう）の四技能すべてを学習する。授業は日本語力によりレベル別に開講される。	
			日本語Ⅱ	留学生対象の通年科目である。日本語Ⅰの履修を踏まえ、開講されるため、先に日本語Ⅰが履修済みであることが求められる。限られた時間ではあるが、日本語四技能能力を総合的に向上させるために、日本語Ⅰに続き学習を行う。学内の講義理解がより容易になること、また、学生同士、教員とのコミュニケーション力が上がることを目指し学習を継続させる。さらに、卒業後の進路も見据え、社会におけるコミュニケーションが円滑に行えるよう、一段上の日本語力を身につけることを目標とする。授業は日本語力によりレベル別に開講される。	
			海外語学研修（事前事後指導を含む）	短期留学を通じて外国語によるコミュニケーションのための基礎的外国語能力の育成を目指す科目である。各言語Ⅰに相当する聞く・話す、読む・書くの4技能の総合的育成を留学先の大学で行い、社会にでても通用する外国語力の育成を目標としている。昼間は大学で集中授業、午後のアクティビティ、ステイ先での生活会話、様々なシチュエーションで常に外国語に接することで海外の文化や風習なども学べる。各言語Ⅰに相当する以上の内容を集中して修得することを目指している。	
		資格科目	ＴＯＥＩＣ対策講座	TOEICが始めてという学生から高得点までを目指す学生に対応するため、目的別クラス設定をしている。目標点は個人によって異なるからである。まず、運用力に重点を置き、運用するための語法力をさらにつけ、文脈や状況での判断を養成する。また、リーディングで用いるskimming（流し読み）を通して大意や要旨を把握し、scanning（拾い読み）によって情報を選択する方法を養成する。予測読みを加えながらより速く、正確に読み取る力を養成する。また、それらがリスニングでの設問理解にも利用出来る段階まで養成する。	
			中国語試験対策科目	中国語検定試験・HSKなどの試験に対応できるよう、発音・文法・作文を重点に指導します。基礎の確認から始め、日本語と異なる簡体字、紛らわしい発音の判別、動詞を中心にした語の配列について死角がなくなるようチェックアップを行ないます。試験近くには過去問を解き、出題方式に慣れるようにします。テキストには過去５年間の傾向を網羅したものを使用しますが、適宜プリントで精読・多読の習慣をつけ、幅広い中国語力が身につくようにする。	
			日本語能力試験対策講座（文法・文字語彙）	留学生対象の日本語科目である。日本語能力試験の出題項目のうち、文法・文字語彙に特化して、実際の試験の出題形式に則り、演習形式で授業を進める。講座は能力試験N1、Ｎ２レベルの合格を目指し、レベル別に開講される。限られた時間で効果的に学習を進めるため、学生の予習、復習が強く求められる。また、受講前に能力試験Ｎ２レベルに相当する文法、文字語彙の自習がされていることが望ましい。毎回、実践練習を行い、時間の余裕があるときには、聴解問題の学習にも触れる予定である。	
			日本語能力試験対策講座（読解）	留学生対象の通年の日本語科目である。日本語能力試験の出題項目のうち、読解問題に特化して、実際の試験の出題形式に則り、演習形式で授業を進める。講座は能力試験N1、Ｎ２レベルの合格を目指し、レベル別に開講される。限られた時間で効果的に学習を進めるため、学生の予習、復習が強く求められる。また、受講前に能力試験Ｎ２レベルに相当する文法、文字語彙の自習がされていることとが望まれる。毎回、実践練習を行い、時間の余裕があるときには、聴解問題の学習にも触れる予定である。	

共通科目	外国語	目的別科目	アドバンスト・リスニング	より高度な内容の素材の聞き取りを目指す。まず、内容的には大学の講義やアカデミックな説明、会社等での会話や会議、といった難しい内容の聴き取りに欠かせない内容把握力をつける。次に、スピードである。英語の表現や言い回しは読めば易しいが、聴き取れないことが多い。これは、英語が独自の音変化を起こすためである。弱音化、消失、脱落、同化、連結等の音変化を克服することで、相当なスピードのものも聴き取れるようになる。アドバーンスト・リスニングは内容、速度同時に養うことを目指している。留学を考えている学生にも対応している。	
			アドバンスト・リーディング	より高度な内容の素材のリーディングを目指す。まず、内容的には大学のテキストやアカデミックな解説書、会社等での書類や文書、といった難しい内容のリーディングに欠かせない内容把握力をつける。次に、大量の情報を一定時間で処理しようとすると、求められるのが速読力である。Phrase reading, skimming, scanning, predictionなどを養成し、大量の文書を短時間で読破し、まとめる力を養成する。留学を考えている学生にも対応している。	
			アドバンスト・ライティング	日常的な話題を扱った短い英文のモデルエッセイを読み、そこで使われた構文や表現を使い、自分の言いたいことを読み手に分かりやすい平易な英語で表現し、自己流ではない自然な英文が書けるようにする。前半では単文で書くことから始めて、アイデアを一つ一つ文にしていく。それを集めてパラグラフ構成を目指してライティングする。さらには一貫性や論理展開を考えたパラグラフ構成とパセージとしてバランスのとれた長い文が書けるようにする。	
			日常英会話入門	日常英会話入門は、英語による応答ができるように、学生のリスニング力とスピーキング力をつけることを目標としている。リスニングを併用する理由は、会話を続けるためには相手の話していることが理解できなければならないからである。まず第一段階では、学生が話がしやすい身近家族や学校のことを話すことかれ始める。第二段階では意見や説明、質問といったやり取りのための基礎作りを行う。最後の第三段階では、調べたことや新しいことに対して対応できる力を養成する。	
			日常英会話	日常英会話は、日常英会話入門を履修したことを前提としない。学生にはナチュラルスピードのリスニング力とスピーキング力をつけることを目標としている。学生が話が少し苦手とする社会状勢や事件、次に意見や説明、質問をいったやり取りのための基礎作りを行う。そして最後に調べたことや新しいことに対して対応できる力を養成する。この科目は、日米英会話学院と提携して行われる。	
			ビジネス英語	ビジネス英語を基礎から学習する科目である。ビジネスの世界で必要とされる英語力を養成することを目標とする。また、様々なビジネスの場面で役立つ会話表現や英文ビジネス文書に関する基礎知識を習得し、実際に活用できるようになることを目指す。手紙　やファックス、Emailなどのビジネスのための通信の基本から、面会、予約、案内、招待などの社交関係の基本、通知、購入、注文、履歴書などの社内や取引関係の内容を扱う。	
			ビジネス英会話	実社会に出てから役立つよう「ビジネス英会話」の基本を学ぶ。まず、ビジネスのための通信の基本である「電話」から始まり、社交関係の予約や案内、社内の英語でのスカッション、取引関係のにおけるプレゼンテーション、雇用関係の交渉等を学習します。実際の会社等の例を元に、練習を重ね、使えるレベルまで引き上げることを目指す。	
			映画・ドラマ英語	海外映画やドラマは文化の一形態であり、それらを字幕なしで聴き取れることは、直接文化を理解する上で重要である。この科目は、最終的に字幕なしで映画やドラマの英語を聴き取れる力を養うことを目標にしている。そのために、英語の音変化、映画やドラマ独特の言い回し、背景知識を通して生きた英語に触れながら基礎的な英語力を養う。さらに、英語理解のの正しい学習法を知り、将来も主体的に学び続けていけるだけの素地を培うことを目指す。	
			インターネット英語	今や情報のためのツールとしてのインターネットは必需品である。しかし、実際に英語のウェブサイトを閲覧する場合ある程度の知識や常識が必要となる。この科目は、実際に英語のウェブサイトを閲覧しながら生の英語に触れ、慣れてくれば、英語による情報を発信するスキルを学ぶ。英語によるSearch Engineから始まり、Social NetworkingやOnline Englishといった基本的な知識から導入する。英語力を養成しながら英語のウェブサイトの閲覧から発信までを扱う。	
			メディア英語	世界では情報の多くが英語でやりとりされている。日々刻々と変化する世界状勢を英字新聞、ホームページに頻出する企業、事件などグローバル化した現代社会を読み解くための基本的な知識を英語で学ぶ。実力に応じて、実際の英字新聞(Japan Times, New York Times, USA Today等)やCNN,ABCニュース等使い内容が理解できるようにする。	

共通科目	外国語	目的別科目	日本語表現技術	留学生対象の通年の日本語科目である。全講義のうち文章表現について七割、口頭表現について三割の時間を用いて授業を進める。最終目標は、文字および口頭で自分の考え、伝達したい事柄を的確に伝える技術を身につけることである。文章表現については、語彙段階（的確な語彙の選択・話し言葉と書き言葉の区別・接続表現など）から文章段階（文の適切な完結・段落のある文章・文章の構成・レポート作成など）まで、順を追って進める。口頭表現については、授業での適切な意見発表の方法、口頭発表の方法などを学ぶ。レベル別に開講する。	
	情報処理基礎		情報処理演習Ⅰ	本科目では、大学での学習や社会で必要となるコンピュータを中心としたICT活用に関する基礎技術を習得することを目的とする。主な学習内容は、大学の情報環境の理解およびその利活用、オペレーティングシステムやアプリケーションソフトウェアの基礎操作、レポート・論文やビジネス文書の作成、Web・メール等インターネットの活用、プレゼンテーションである。授業形態は演習形式とし、課題により評価を行う。学習者の操作経験やスキルに応じた課題設定と支援を行う。	
			情報処理演習Ⅱ	本科目は情報処理演習Ⅰの継続として、大学での学習や社会で必要となるコンピュータを中心としたICT活用に関する基礎技術について、専門領域の学習や各自の目的・目標に応じた内容を習得することを目的とする。主な学習内容は、表計算ソフトウェアの基礎操作、データ活用と処理、基礎的なホームページ作成等の中から選択する。授業形態は演習形式とし、課題により評価を行う。学習者の操作経験やスキルに応じた課題設定と支援を行う。	
	キャリア教育	働く意欲を高める	社会人入門	社会人生活を送ることで多くの人間が直面する社会的諸問題を理解している学生は少ない。金銭面の問題、健康や食生活、社会保障、家族の問題など、将来直面する可能性ある現実的な諸問題をその背景も含めて理解し、このような現実が自分にも関係することとして捉え、考えさせる。あわせて低学年からこのような現実的社会問題を理解することで、社会人とは何か知り、将来の社会人としての覚悟や職業観を醸成するとともに、目的意識を持った学生生活を送る意識付けとさせていく。	
			キャリアサポート	金融やマスコミ、福祉、情報、メーカーなど様々な分野で活躍する女性ゲストを迎え、仕事と生活、自身の生き方などをテーマとする講演を聞きながら、学生はキャリア形成の一助とし、学生生活への意欲向上や職業観の醸成を培っていく。本科目では講演と併せて、学生同士のグループワークも取り入れる。講演から感じ取ったことを参考に、学生自身が今後のキャリアを展望するとともに、そのキャリア形成のために何が必要か、何を準備していくかをグループのなかで意見交換していく。	
			インターンシップ短期	企業や官公庁など実際の職場での就業体験をすることで、学生は社会や企業を知り、あわせて将来設計を自らに問う機会を持つ。実習先には「就業体験プログラム」作成を依頼し、実習の効果が上がるように求める。学生はこのような職場体験を通して、仕事の取り組み方や職場内外での人間関係の構築方法などを学ぶが、あわせて今後の大学生活での勉強や課外活動などへの取り組みに対する指針にもつなげていく。尚、インターンシップの成果についてはレポートや報告会のなかで公表していく。本科目では５日以上１０日未満のインターンシップを対象とする。	
			インターンシップ	企業や官公庁など実際の職場での就業体験をすることで、学生は社会や企業を知り、あわせて将来設計を自らに問う機会を持つ。実習先には「就業体験プログラム」作成を依頼し、実習の効果が上がるように求める。学生はこのような職場体験を通して、仕事の取り組み方や職場内外での人間関係の構築方法などを学ぶが、あわせて今後の大学生活での勉強や課外活動などへの取り組みに対する指針にもつなげていく。尚、インターンシップの成果についてはレポートや報告会のなかで公表していく。本科目では１０日以上のインターンシップを対象とする。	
			自主社会活動	大学入学までに多くの学生は家庭と学校とういう枠の中で育っている。場合によっては大学生活の中でも同じような狭い活動範囲のなかで過ごす可能性も否定できない。卒業後に多様な環境と複雑な人間関係の中で社会生活を送るためには、大学時代に社会と接点を持ち、そのなかで考え行動する学びの要素が必要である。本科目は、ボランティア活動や地域活動、福祉活動などさまざまな社会活動の参加を積極的に評価し、社会のなかで必要とするコミュニケーション能力や自主性、協調性といった社会人基礎力を培っていく。	
		就業力を身につける	キャリア基礎力入門	大学生活はもちろん、卒業後の職場や日常生活のなかでも基礎的学力は欠かせない。特に言語（国語的理解力）と非言語（数的理解力）の基礎的学力は、さまざまな場面で必要とされており、昨今の就職試験でもSPI試験としてその能力が問われるケースが多い。この科目では、大学入学までに本来学んできた言語・非言語の基礎的学力が、なぜ必要とされるのかを伝えると同時に、具体的問題を解きながら、分かりやすい解説を加えて学び直していく。あわせて、この分野に自信を持てない学生の苦手意識を払拭していく。	
			キャリア基礎力応用	大学生活、社会人生活で必要とされる言語・非言語の基礎学力は「キャリア基礎力入門」で学び直していくが、さらに踏み込んで応用力を磨くことで、大学生活や社会人生活で接するこの分野での課題解決力を高め、あわせて就職試験等のSPI試験対応力も磨いていく。応用力を高めていくためには、具体的な問題を多く解くことが近道であるため、「キャリア基礎力入門」以上に問題を解く時間を多く取り入れ解説を加えていく。	

共通科目	キャリア教育	就業力を身につける	現代社会理解	政治や経済、国際情勢、暮らしといった社会状況を理解し、知的ボキャブラリーを増やしていくことは、自律的社会生活を送るうえで、また高度なコミュニケーションを交わす上で欠かすことはできない。実際にこのような教養問題は一般常識試験として就職試験でも多く問われている。本科目は、昨今の日本を取り巻く社会情勢をテーマ別に理解しながら、学生一人ひとりにとって身近な問題であることを認識させ、これらニュースに対する知的好奇心や知的感度を高めていく。	
専門科目	学科基礎		食と健康	健康のスペシャリストとして、社会に貢献できる栄養士をめざすための学科の初年度教育である。 （オムニバス方式／全15回） （2 池川繁樹／1回）健康の意義、健康に関与する要因／（5 高橋正人／1回）健康に関する諸問題やそれに対する各国の施策／（10 佐々木菜穂／2回）健康と栄養／（9 渡邊容子／2回）食品と栄養／（6 長尾昭彦／１回）食品の安全性／（3 木村靖子／2回）健康と食事／（8 徳野裕子／2回）栄養士の役割と業務、（4 高橋京子／1回）健康における運動の意義、運動指導／（1 飯田路佳／2回）健康のための運動の実践方法／（7 石山隆之／1回）健康とスポーツ	オムニバス方式
			健康管理概論	健康の概念（健康の定義、健康の判定、健康阻害要因、総合保健）、健康の現状（国民の健康状態、諸外国の健康の現状）、健康増進医学（健康増進の定義、必要性、健康増進の３原則、健康増進の現状と問題点）、健康づくりの施策（国民健康づくり、健康増進施設）、健康管理技術（健康管理の考え方、健康管理の方法、健康教育、健康相談、健康診査、健康管理の実際）、母子・成人・高齢者・精神の健康管理等を講述する。	
			基礎統計学	本学科では栄養、運動、健康といったことを学ぶが、これらのことを扱ううえで、種々のデータを集めたり、解析したりする。データ解析を行うときに、統計学がに必要になる。本講義では統計学の理論ではなく、目の前にあるデータを適切に解析し、そこからどのような事柄が導き出せるかを考えられるようにする。具体的な項目として、平均、標準偏差、度数分布、差の検定などである。	
			統計学演習	栄養士に従事した場合、情報を適切に扱う基礎的能力を養うとともにコンピュータを利用した情報処理の方法を身につけ、実践的な情報活用能力を育成する。データベースの作成、検索、統合などの基本を学び、コンピュータの操作、周辺装置の機能等について学ぶ。インターネットの活用に習熟し、世界の健康情報や保健衛生に関する情報を検索し、関係機関・団体との通信情報の収集方法を学ぶ。	
	栄養・食生活領域	社会生活と健康	公衆衛生学（衛生学を含む）	公衆衛生とは組織的な社会的（公共的）努力により、疾病の予防、寿命の延長、そして健康増進を図る活動である。授業目標は、集団の特性を正確に把握し、現状の分析結果をもとに保健医療計画を立て、地域社会の組織的な努力を通じて疾病予防、生命延長、肉体的・精神的健康と能力を保持・増進するための基礎的知識を学ぶことにある。主な項目は、公衆衛生の概念、衛生統計、疫学の意義・調査法、感染症、衛生行政、環境衛生、環境公害、母子保健、成人・高齢者保健、精神保健、学校保健、産業保健、社会保障、医療制度、医療費等である。	
			社会福祉概論	今や社会福祉は、市民生活にとって必要不可欠な制度・サービスとなっているが、福祉それ自体も大きく変化している。近年の社会福祉の動向に注目しながら、「社会福祉とは何か」を出発点として、社会福祉・地域福祉の概念や歴史、社会福祉の形態、社会福祉の行政と民間活用、社会福祉の関係法規、諸外国の社会福祉の動向について学ぶ。	
		人体の構造と機能	解剖生理学(解剖学を含む)	人体の構造と機能を理解する。細胞の構造と機能（生体膜／細胞内小器官／生体情報の受容／輸送／興奮）、骨系（形状と種類／骨化・リモデリング）、筋系（形状と種類／筋収縮機構）、消化系（唾液腺／消化管／肝・膵臓／管腔内･膜消化／吸収／調節）、循環系（体液・血液／心臓・血管・リンパ管／心拍動・血圧とその調節／血液の構成／血液凝固）、呼吸系（気道・肺／呼吸運動とその調節／血液ガス）、泌尿系（腎臓・尿路／尿生成／尿生成以外の腎機能）	
			解剖生理学実験	解剖生理学の講義を補完し、講義では理解し難い事項を実施、修得する。 （オムニバス方式／全15回） （2 池川繁樹／5回）初級電気生理学、心電図と末梢循環、呼吸と心拍数、筋電図（ECG）、反射、脳波（EEG） （5 高橋正人／5回）血液・免疫（血球像／抗血清の作成／凝集抗体価／溶血（免疫性・低張性）、循環・呼吸・体温調節、感覚生理学（皮膚感覚／味覚と嗅覚／視覚／半規管） （10 佐々木菜穂／5回）ラットの解剖、主要臓器のマクロ・ミクロ形態学的観察、ヘモグロビンの酸素結合、消化吸収（翻転腸管におけるグルコース誘発性Na＋電流の測定と糖輸送能の解析／膜消化との共役等）	オムニバス方式
			生化学	生化学は生命現象の科学的基礎を取り扱う学問であり、生体の構造・性質・機能を分子レベルで学ぶ。栄養学・健康科学を学ぶ上で必須となる基礎科目である。本科目は、栄養士に必要とされる生化学の基本的原理や基礎的知識を習得することを目的とし、人体の構造、エネルギー代謝、中間代謝の概要、内分泌系、免疫と生体防御について講述する。細胞の構造、生体を構成する物質とその代謝、細胞内環境と生体内情報、生体内情報伝達系などの理解を深める事により、体の中での生命現象を総合的に理解する。	

専門科目	栄養・食生活領域	人体の構造と機能	生化学実験	生化学で学んだ生体物質や代謝酵素、さらには臨床栄養学で学ぶ臨床検査値について実体験を通じて確かな知識として身につけ、生体の構造・性質・機能や代謝の科学的な理解を深めることを目指す。また、定量的な生化学実験の技術、得られた数値データの取り扱いについて学ぶ。生化学実験では、血液成分（糖、トリグリセリド、アルブミン、中性脂肪、総コレステロール、リン脂質）の測定、尿の定性・クレアチニンの定量などを行う。	
			分子栄養学	分子栄養学の進歩に伴い、栄養機能について遺伝子発現解析、機能タンパク質や代謝産物の網羅的解析を行う分子栄養学が進歩している。本講義では、食品の栄養の生体における機能を分子栄養学的側面（酵素・受容体・抗体）から、最近の研究に関する知見を含めて学ぶ。また、近年、その生体機能において注目されている非栄養素の役割、食品および食事の役割、食生活と疾患の関わるについて、分子栄養学視点から学ぶ。	
			運動生理学（生理学を含む）	人間が運動をおこなうとき、からだの諸機能はどのような応答を示すのか。またトレーニングをおこなうとからだの形態や機能はどのように変化するのか。さらにこれらのことと栄養との関連はどうなるのか。運動生理学では身体運動によるからだの生理学的な諸機能がどのように変化するのかを学び、健康やスポーツのための運動について考える。	
			運動生理学実験	運動生理学実験ではヒトが運動をおこなったときの生理学的応答をどのように測定評価するのかについて学ぶ。 （オムニバス方式／全15回） （51 松本昇裕／6回）呼吸・循環系、酸素摂取量、心拍数 （2 池川繁樹／6回）身体組成、形態計測、皮脂厚測定、体脂肪率 （2 池川繁樹・51 松本昇裕／3回）体力測定法、新体力測定	オムニバス方式
			バイオメカニクス	ヒトの様々な動き、運動そしてスポーツを解剖学、力学、生理学の立場から解説する。関節運動と全身運動、身体構造と運動の力学的側面、骨格筋の力発揮特性、頭頸部・上肢・下肢・脊柱・骨盤の運動、運動と仕事・エネルギー、陸上運動・水中運動の特性について理解する。	
			病態生理学	病態生理学では生理学を基盤とし、メタボリックシンドローム、肥満症、高血圧症、高脂血症、糖尿病、虚血性心疾患、骨粗鬆症、関節関係の疾患などの疾患について、その原因、症状を理解し、治療法（食事療法、運動療法など）について学ぶ。	
		食品と衛生	食品学I	食品を科学的に理解し、有効に利用するために、食品に含まれる炭水化物、脂質、タンパク質、ビタミンなどの栄養素、食品を特徴づける味、におい、色などの嗜好成分についての基礎的知識を学ぶ。さらに、加工や調理、保存により生じるこれら食品成分の化学的変化について理解する。これら食品成分のもつ性質や変化は化学反応に基づいており、この科目のはじめに栄養士が食品学や栄養学を理解する上で必要な（有機）化学の基礎知識についても論じる。	
			食品学II	食品を利用する場合に、それぞれの食品の特性についての知識が必要である。食品学Ｉで学んだ食品の主要成分、嗜好性成分についての知識を基礎にして、穀類・いも・野菜・果実類等の植物性食品および肉・魚介・卵・乳類等の動物性食品について、食品成分表における食品の分類に従い、各食品群の種類と特徴、成分組成や栄養的特質、おいしさや機能性について講義する。さらに、その食品の品質や取り扱い方のほか、利用と加工などについても解説する。	
			食品学実験	食品学関連の講義で学んだ知識を確実に習得するために、実験をとおして体得・確認する。まず、化学実験に必要な基礎的技術や知識を学んだうえで、身近な食品の水分、タンパク質，脂質、灰分、無機質などの一般成分分析を行う。そのほか油脂の化学的特数の測定（酸化・ケン化価・ヨウ素化・過酸化物価）、しょうゆ中の食塩の定量、かんきつ類のアスコルビン酸の定量、小麦粉の品質判定、果実の酸度・糖度・ペクチン、粉乳中の還元糖の定量などを行う。	
			食品加工学	加工は食品をおいしく、食べやすく、長く保蔵できるようにするで原価より価値を向上させる操作である。食品の形態や性質は様々であるが、各種食品で共通して適用される加工、貯蔵方法は多い、食品学で学んだ各食品の化学的性質などの知識をもとに、食品の加工および貯蔵法の原理を理解して、各食品に適した加工・貯蔵方法について学ぶ。冷蔵・冷凍、缶詰、乾燥などの原理と種類、包装材料の種類と特徴、農産食品・畜産食品・水産食品・発酵食品など個々の加工食品の製造法、保存法、規格や表示について解説する。	

専門科目	栄養・食生活領域	食品と衛生	食品加工学実習	食品加工学で学んだ知識をもとに、各種食品の製造実習を行うことにより加工・貯蔵技術の習得を目指す。また市販加工食品がどのような製造されているかの理解を深め、日常生活での適切な利用方法を学ぶ。実習時間に限りがあるため、製造工程や時間、食品衛生上の安全性や技術的な面から実習に適切な品目を選ぶ。ジャム、チーズ、パン、ピクルス、めん、豆腐、こんにゃく、ミカン缶詰などの製造を行う。	
			食品機能論	食品には1次機能（栄養）、2次機能（嗜好）のほかに、第3の機能として健康の維持・増進するための生体に対する食品の調節機能の役割がある。その食品の第3機能に関し、各種疾患と食品の機能性、抗酸化的防御機構、食品のアレルゲン成分、食品による免疫系の賦活、食品に含まれる生理活性（機能性物質と機能性新素材）、機能性食品と行政の対応、特定保健用食品等について講述する。	
			食品衛生学	栄養士として食の安全性を確保するために必要となる、食品衛生に関する基本的な知識を習得する。食品衛生の概念、食品衛生行政、食品衛生関係法規（食品衛生法、食品別の規格基準など）、食品の変質（微生物による変質、化学的変質）及び変質防止（冷蔵冷凍、脱水、加熱など）、食中毒（発生状況、細菌性食中毒、自然毒中毒、化学食中毒など）、食品添加物（主要な食品添加物の種類と目的）、経口的寄生虫疾患（魚介・肉・野菜などに関係するもの）、食品衛生管理等について講述する。	
			食品衛生学実験	食品衛生学の講義で学修した知識をさらに深めるために、自らの手で実験を行う。食品の腐敗や食中毒は微生物によることが多いが、通常は確認できない。本実験では微生物を定性的および定量的に測定する。器具の乾熱滅菌、培地の調製や滅菌などの微生物実験の基本を修得しながら、空中落下菌と手指付着菌の検出、生菌数測定、滅菌と洗浄の意味、飲料水の適否を判断する化学的試験と大腸菌群の定性試験等、食品衛生の基礎知識を養う。	
		栄養と健康	基礎栄養学I	栄養とは生物がエネルギー源や生体構成成分となる物質を獲得して利用し、生存・活動する営み・現象であり、栄養の質がよい状態であることが健康の維持増進、疾病の予防のための大前提である。したがって、基礎栄養学Iは栄養学関連領域を学ぶための土台となる科目である。本講義では栄養の基本概念、人間の摂食行動、消化吸収、五大栄養素の体内動態について講述し、栄養士として必要な栄養学の基礎知識を身に着けることを目的とする。	
			基礎栄養学II	基礎栄養学IIでは，基礎栄養学Iで学んだ知識を基にエネルギー代謝、遺伝子発現と栄養、食事摂取基準の概念・策定原理について学び、基礎栄養学に対する理解を深める。健康栄養学の基盤をなす分野であることを理解し、人々が健康な生活をする上で欠かせない栄養学の知識を習得することを目標とする。基礎栄養学の総まとめと応用栄養学、生化学への導入として，栄養学関連領域を全般的に講義する。	
			基礎栄養学実験	机上では理解しがたい事項を実地に修得し、基礎栄養学I・IIの講義を補完する。化学実験を行うにあたり、その基礎的事項について初歩から学ぶ。実験の心得、実験器具の名称や使用方法、試薬の調製、機器の操作方法や数値の取り扱い、レポートのまとめ方等について説明し、科学的に正しい考え方ができるようになることを目的とする。栄養素の性質を理解するための栄養素の定性・定量実験を行う。	
			応用栄養学	健康の維持増進、疾病予防には、日常の食生活のあり方が深くかかわる。特に一生を通じて各年代による特殊性に応じた栄養管理の必要性が高まっている。そこで成人期の栄養を基盤として、妊娠期・授乳期の栄養、身体的、精神的にも成長と発達が著しい乳児期、幼児期、学童期の栄養、身体発育に加え、精神的・心理的な変化が伴い、食生活に起因する健康問題が増加している思春期の栄養、加齢による肉体的特異性をふまえた高齢者の栄養等について講述する。各ライフステージにおける生理的な変化とその栄養状態に応じた栄養管理の考え方を理解する。	
			応用栄養学実習	応用栄養学で学んだ理論を基に、各ライフステージに適した食生活のあり方について考え、健康増進、疾病予防の観点から献立作成、調理できる実践力を身につけることを目的とする。また、「日本人の食事摂取基準（2010年版）」を理解し、各ライフステージに適した栄養を摂取するための献立を作成し、調理実習を行う。	
			臨床栄養学Ⅰ	臨床栄養学では傷病者の病態や栄養状態を正しく評価し、その改善やQOLの向上を目指して、適切な栄養アセスメント、栄養ケア計画、評価に関する献立作成、栄養管理、栄養療法を行うための考え方を学ぶ。特に本科目では臨床栄養学の意義と目的、治療における栄養管理の意義、栄養補給法について講述する。	

専門科目	栄養・食生活領域	栄養と健康	臨床栄養学Ⅱ	臨床栄養学Ⅱでは各疾病別病態と栄養の関係を理解し、栄養の面から疾病の予防・治療について理解することを目的とする。代謝疾患、消化器疾患、循環器疾患、腎疾患などの代表的な疾病と代謝性疾患について、その病因や症状、予後などについて学ぶ。また、それらの疾病の食事療法について理解を深め、栄養士として献立作成、栄養の指導を行える知識を身につける。	
			臨床栄養学実習	臨床栄養学Ⅰ・Ⅱで学修した理論をもとに、疾病治療上とくに栄養管理の重要な疾患について、栄養の役割と食事療法の重要性を、演習・実習の技法を取り入れながら学ぶ。食事療法を必要とする疾患別に(消化器系疾患、内分泌・代謝系疾患、循環器系疾患、腎疾患、食物アレルギー・先天性代謝異常、血液疾患等)、栄養計画作成の技術と実践的展開の方法を習得し、食品・料理・献立・調理・供食へとつなげ、各疾患の食事療法への理解を深める。	
		栄養の指導	栄養指導論Ⅰ	栄養指導を行う対象者は、すべての年齢層にわたる。栄養指導を行う意義を十分に理解し、捉えることができる知識を習得することを目的とする。初めに、栄養の専門家として知っておくべき基礎知識（法規関係、歴史的変遷など）を学ぶ。次に、対象に応じた栄養教育プログラムの作成・実施・評価の方法ならびに総合的なマネジメントにより、主体的な実践力形式の支援に必要な健康･栄養教育の理論と方法論について修得する。	
			栄養指導論Ⅱ	栄養指導論Ⅰで学んだ理論と方法論を下に、対象特性別（ライフステージ）に応じた栄養指導のあり方、方法について学ぶ。対象特性別に栄養上の特性について理解を深め、実態を調査し、これを評価･判定して、問題点を明確にし、具体的に指導する方法を学ぶ。各ライフステージごとの栄養指導のポイントについても学習する。また、心を持つ「ひと」の行動を、好ましい方法へ導くための行動科学やカウンセリングにも触れる。	
			栄養指導論実習Ⅰ	栄養教育・健康教育の専門家として必要な実践手法を修得する。各栄養指導の場で必要な基本的な栄養アセスメント（身体状況の把握、栄養状態の把握、臨床状況の把握）、栄養指導のための食事計画、栄養指導を効果的に行う技術（情報と媒体など）について学ぶ。その上で、ライフステージ別の模擬的栄養指導について実践的に行うことで、基本的な栄養指導の方法について習得する。	
			栄養指導論実習Ⅱ	各栄養指導の場やライフステージ別の栄養指導実践の場で役に立つように、グループ毎の栄養指導のプレゼンテーションの形式をとり授業を進める。そのためには、各グループ毎の課題設定と立案、資料収集と整理、対象の実態把握、問題点の確定、使用する教育媒体の作製ならびに教材の効果的な活用法について学ぶ。グループ毎のプレゼンテーションに対して、参加学生による相互評価を行う。	
			公衆栄養学概論	公衆栄養学は、人間集団の健康問題が栄養素、食物、食生活および食習慣、そして環境などの要因とどのように関係するのかを明らかにし、その知見を健康の維持・増進に役立てることを目的とする。公衆栄養の概念、国民栄養の現状と課題（国民の栄養状態－栄養素摂取の実態と課題、国民栄養の諸問題）、栄養所要量、食料問題（食料の受給と供給）、栄養行政（意義、目的、沿革、栄養行政、組織の役割）、関係法規（栄養改善法、栄養士法、調理師法、老人保健法等）、社会的要因の栄養問題、諸外国の栄養問題を説明する。	
			公衆栄養学実習	公衆栄養学概論の知識を基本とし、実践しながら学ぶ。県（保健所）、市町村（保健センター）等における公衆栄養活動をするための地域栄養計画の樹立やあり方について設定したモデルから演習をとおして学習する。特に地域特性の把握と問題解決のための事業内容のつながりについての理解を深めるとともに、単に栄養計画だけでなく広く健康問題への働きかけの方策を知るための機会とする。	
		給食の運営	調理学	食べ物を栄養的に優れ、おいしく安全に調理するために必要な食品材料や調理操作に関する基礎的知識、調理による各食品の栄養素、呈味成分、機能成分の科学的変化について学ぶことで、調理技術の向上と食生活への活用を目指す。非加熱操作・加熱操作・調味操作、植物性食品・動物性食品等の調理性、調理設備・機器及びエネルギー源の利用、食事様式と調理文化、調理環境等について解説する。さらに、これらの知識と技術を基本に望ましい食事設計についても学ぶ。	
			基礎調理学実習Ⅰ	調理学で系統的に学んだ理論と知識をもとに、栄養士として健康でおいしい食事を提供するために必要な調理の基礎技術を実習を通して習得する。日本料理、西洋料理、中国料理の基本的な日常献立から実習する。食材の選び方や扱い方、基礎的な調理操作や調味のしかた、食材や調理操作上の衛生管理、盛りつけやテーブルセッティング、食事作法について学ぶ。また、献立作成および作成献立に従った調理工程の検討についての実習も行う。	

専門科目	栄養・食生活領域	給食の運営	基礎調理学実習II	家庭での調理経験が少ないため、調理学実習Ｉに続き、日本料理、西洋料理、中国料理の基本的な日常献立により、基礎的な調理技術の習得を目指す。さらに、季節にふさわしい食材を使った行事食や供応食などの調理方法や食卓の整え方、また食文化についてもふれる。食品の特徴を生かした調理方法を学び、徐々に基礎から応用へと調理技術を進めながら、食事をいかにおいしく、合理的にしかも再現性よく整えるべきかなども考えながら実習する。応用分野である給食管理などにも活用できる能力を身につける。	
			応用調理学実習	調理学実習Ｉ・Ⅱで学修したスキルを基本とし、食事としてのまとめ方、調理技術力を強化し応用力を養う。日本・西洋・中国それぞれの献立形式で供食プランニングができるように実習する。また日常的献立における調理操作をとりあげ、調理操作により生じる食品の組織や物性の変化、栄養成分の変化、おいしさの違いなどについて実験をとおして確かめるることにより、栄養士として必要な調理技術の理解を深める。じゃがいもの調理性、卵の熱凝固性、ゲル化剤によるゼリーの食感の違い、だし汁の官能評価、ハンバーグの副材料の効果などについて実験を行う。	
			給食計画・実務論	学校・事業所・病院・福祉・介護施設等の特定給食施設では、食事利用者の栄養面、食品の特性、流通、調理科学を基礎とし、HACCPの概念に基づいた衛生管理による安全な食事を提供しなければならない。そこで利用者のニーズや給食条件に合致した栄養・食事管理について学ぶとともに、食材管理、調理作業管理、安全衛生管理、食堂、厨房等の施設・設備管理、原価管理、給食の組織運営などについて基本的な考え方や方法を修得する。	
			給食運営実習	給食計画・実務論で学んだ知識を基礎として、集団給食施設の運営技術及び考え方を修得することを目的とする。10名程度のグループに分かれ、本学学生を対象とした給食サービスの実習を行う。、対象集団の給与栄養目標を設定し、これを充足する食品構成、献立作成、作業計画、食材料の購入、調理、配膳、下膳作業及び給食の効果判定な給食の計画、実施、評価など一連の流れを体験する。さらに、実施した給食作業の標準化や改善方法についてもディスカッションする。	
			給食運営校外実習	給食運営校外実習では、給食業務を行うために必要な食事計画や調理を含めた給食サービス提供に関し、栄養士として具備すべき知識および技術を習得することを目的とする。特定給食施設での調理技術、給食計画立案能力、給食実務に関する処理能力などを修得する。実践の場である事業所給食施設、福祉給食施設等のうち１ヶ所を選択し、1週間校外実習する。	集中
			給食運営演習	給食運営校外実習を効果的に進めるため、事前・事後指導を行う。 （オムニバス方式／全30回） （3 木村靖子／8回）校外実習の目的と心構え、実習の事前指導①（実習中の心得・注意点、実習課題設定の意義）、実習の事後指導①（実習記録のまとめ） （9 渡邊容子／8回）事前指導②（実習施設の特性、実習課題の検討）、事後指導②（報告会の目的、発表テーマの設定、発表内容の検討） （8 徳野裕子／７回）事前指導③（実習ノートの作成）、事後指導③（報告会の企画、進行） （10 佐々木菜穂／７回）事前指導④（抗体検査、細菌検査の受診、実習への携帯品）、事後指導④（実習先への礼状の書き方、報告会の発表方法の検討）	オムニバス方式
			食事計画論	日常の食事は心身の健康を維持し、食文化を継承していく上で重要である。食事計画は、ライフステージに合わせて栄養面、嗜好面・安全面を考慮するだけでなく、家族の団欒・食事作法を含めた食事構成や食環境なども考慮する必要がある。　食品学、栄養学・調理学で学んだ知識を生かして、献立作成に必要な基礎的知識、献立作成手順などを学ぶ。さらに、食文化および食嗜好の変遷により得られた食事様式や食卓の演出法なども理解する。さらに、栄養士を目指す人は給食の食事計画に応用、展開するために必要な知識についても解説する。	
			食事計画論演習	食事計画論で学んだ知識を基礎として、栄養士として実際に食事計画ができるための技術を習得する。食品成分表の見方及び使い方、栄養成分値の計算、荷重平均成分表の作成、食品構成表の作成、、献立の組み立て方、献立表の作成などを実際に行い、作成献立に従って調理、盛りつけをする。出来上がった食事に関して評価を行い、改善点などを検討する。	
		食文化・食ビジネス	食文化概論	人間の食生活は、身体の生理的必要性や自然環境の条件付けだけでなく、社会・文化的環境のもとに営まれている。食の歴史や風土、食習慣、食事作法などを地域や民族、文化の違いにより比較、考察することで、食文化の多様性を知る。食文化を学ぶ意義、風土と食物、食料生産の技術と文化（採集狩猟の食文化、農耕文化、牧畜文化、穀物栽培文化など）、食と思想・宗教、食のタブー、日本の食文化の成り立ち、日本料理、西洋料理、中国料理などの料理の歴史、食の道具と食作法、食に関する言葉と表現などについて解説する。	

専門科目	栄養・食生活領域	食文化・食ビジネス	健康食育論	国民の「食」をめぐる現状は著しく変化し、偏食や不規則な食事による肥満や生活習慣病の増加、食の外国への依存、食の安全性に対する危惧、伝統的食文化の危機などの様々な問題が生じています。このような状況のもと平成17年に食育基本法が策定され、国をあげての食育推進の取り組みが始まった。　国民の一員として食育の推進を図るために必要な知識として、健康と食をめぐる日本の現状と課題、子どもの健康上の問題点や、食の安全、食環境や食料自給率などの問題について詳しく解説し、今後の食育のあり方をディスカッションする。	
			食コーディネート論	食の分野の専門職として、フードコーディネートを行うために必要な基礎的知識と技術を講義する。フードコーディネートの基本理念、日本の食事文化の歴史、食卓（日本、中国、西洋料理など）のコーディネート、食卓でのサービスとマナー、快適な食空間の演出方法、メニュープランニングなどについて解説する。また、メニュープランニングやフードマネジメントなど食の企画についても実践的に学ぶ。	
			食コーディネート論実習	食の分野の専門職として、フードコーディネートを行うために必要な知識と技術を講義とともに演習や実習をまじえて理解する。食と感性、調理文化、現代の食文化、メニュープランニング、テーブルウェアの知識と演出法、食事作法の比較文化、サービスマナー、トータルプラン、食情報等の項目に関して学ぶ。我々の食環境を楽しくし、心豊かな食生活を送るうえで、フードコーディネートがいかに重要かを実際の献立や料理、食器などを使って学ぶことで体感する。	
			フードマネージメント論	フード事業並びにフード関連事業におけるマネジメントの基礎的考え方と実際を学ぶ。まず、フードマネジメントの概説として日本のフードマネージメントの歴史や今後の展望、経営的な基礎知識について解説する。さらに、フード事業展開の手順として開業準備のためのマーケティング、業態開発、出店戦略、販売促進、店舗販促などの知識を経営的な面から学習する。また、フードコーディネータの業務としてトータルプラン、食卓と食空間、食の企画・構成・演出についても学び、経営者に提案できる技術を習得する。	
	健康支援領域		運動の障害と予防	スポーツや運動を指導する場合、それに伴う怪我や病気について理解し、予防法を考えなければならない。内科的障害については、急性障害（熱中症、急性腎不全、運動誘発喘息、運動誘発アナフィラキシーなど）、慢性障害（貧血、オーバートレーニングなど）について、外科的障害については上肢、下肢および脊椎に関する障害の基本的知識を学び、予防法、治療法について理解する。	
			健康産業施設等現場実習	健康のための運動指導を行うためには、専門的な知識の習得だけでなく、様々なケースに対応できる指導能力を身につけなければならない。実際の指導現場で、受講者に相対することで、実践能力を身につけるとともに現場での指導者の役割を理解する。	集中
			スポーツ社会学（スポーツ経営管理学を含む）	スポーツを社会現象として捉え、社会との関係からスポーツの特徴やあり方を理解する。スポーツの社会学的理解のための基本的な概念を理解し、近代スポーツの特徴および現代スポーツの特徴やその意義、役割を踏まえ、望ましいスポーツ振興のあり方や方法について思考できる能力を身につける。さらに、様々な領域で展開されるスポーツ現象について、経営学的なアプローチを試み、体育・スポーツの経営と管理について体系的に学び、関連する諸問題について理解を深める。体育・スポーツの現場での指導の実践や運営に携わる基本的能力を身につける。	
			健康スポーツビジネス論	健康産業は、人々が豊かで活力のある生活を確立するために必要不可欠な産業になりつつある。スポーツを通した健康実現に対する期待は大きく、2020東京オリンピックが決まった今、益々拡大と多様化傾向を見せる成長産業の1つとなる。その一方、健康を産業としてマネジメントし、マーケティングや関連法律等の専門知識と能力を備えた人材等を養成･確保することは，豊かな健康スポーツライフの創造の実現にむけて最優先されるべき課題の1つである。本講座は、健康ビジネスだけでなくスポーツビジネスにも触れる。本講座は単なる健康やスポーツ指導の現場にとどまらず、ビジネス視点からアプローチし、健康増進を通じた豊かな社会の実現に視する人材を輩出することを目的とする。健康やスポーツにかかわる様々な現象やビジネスモデルなどの具体的な事例を取り上げながら、健康ビジネス全般を学ぶ機会を提供していく。	
			障碍者福祉論	障害者福祉とは心身に障害をもつ人々の自立を支援することである。本講義では、障害者総合支援について、自立支援、地域における生活支援（事業と施設）、福祉サービスの申請と利用、障害者福祉に関する法律について学ぶ。	

専門科目	健康運動領域	健康づくりの運動Ａ（ストレッチング・ウォーキング・陸上競技）	幼児から高齢者などの幅広い階層に対し、健康維持増進に寄与できるストレッチングや陸上競技について基礎となる理論をふまえ、その方法を学び、自身のスポーツライフのためのコンディショニングの知識を得、実践につなげる。 （オムニバス方式／全15回） （7 石山隆之／8回）アジリティトレーニングとその指導法、コーディネーショントレーニング、体幹トレーニングとその指導法他 （61 青木己奈／7回）陸上競技としての走・跳・投とその指導法、ハードル、リレー、走り幅とび等の基礎的技術や特性の理解	オムニバス方式
		健康づくりの運動Ｂ（ダンス）	課題解決型の実技授業であり、ダンスの持つ魅力や楽しさを獲得し、指導力を身につけることを目的とする。創作ダンス・現代的なリズムのダンス・フォークダンス等も学び、指導力を獲得する。 （オムニバス方式／全15回） （1 飯田路佳／8回）ダンスの基礎的運動、リズムダンスの基礎、課題の解決 （69 鴨志田加奈／7回）踊り込むとは、仲間との協力、創造力の共有、構成を工夫する他	オムニバス方式
		健康づくりの運動Ｃ（エアロビックダンス・体操）	エアロビック運動について必要な基本知識を学習し、技術を習得し、コミュニケーション能力や能動的に学ぶ力を向上させる。運動を行う時の服装、環境条件、運動実施上の留意点について学ぶ。体操では、体つくり運動で扱われる「体ほぐしの運動」「体力を高める運動」を体験し指導者として資質を高める。	
		健康づくりの運動Ｄ（水泳・水中運動）	生涯スポーツの代表的運動である水泳・水中運動の基本的技術から、知識、実践とその指導まで学ぶことをねらいとする。 （オムニバス形式／全15回） （4 高橋京子／8回）水泳の基本技術（平泳ぎ･クロール・背泳ぎ・バタフライ）を習得、全身運動・有酸素運動の特性の理解と実践 （77 蓬郷尚代／7回）アクアエクササイズ（水中ウォーキング・アクアビクス）の実践と水中運動の危険性（指導中の事故が生死にかかわるスポーツのため、その安全管理）	オムニバス方式 集中
		健康づくりの運動Ｅ（球技）	球技では、「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」として体系的な指導が行われる。 （オムニバス方式／全15回） （7 石山隆之／8回）「ゴール型」「ベースボール型」を中心に、攻守の特徴や「型」に応じた特性、技能の実践、指導方法 （73 清水文子／7回）「ゴール型」「ネット型」を中心に、型に属する代表的な種目、「型」に応じた特性や魅力、体感する指導法	オムニバス方式
		健康づくりの運動Ｆ（武道・器械体操）	柔道及び器械体操の基本的な運動および知識を身につけ、安全面も重視した継続的な取り組みにつながる指導法を学ぶ。 （オムニバス方式／全15回） （70 佐藤愛子／8回）柔道の基本動作、対人運動の技能を理解、日本の伝統的武道のな行動様式や作法の知識 （64 上向のり子／7回）／マット運動、鉄棒、とび箱、平均台を教材とした器械運動の技能習得、指導法・幇助法	オムニバス方式
		健康づくりの運動Ｇ（野外活動）	野外活動は単に身体活動から得られる効果にとどまらず、自然の大切さを理解したり，自分自身を見つめ直したりする機会も提供してくれる。この様な活動を、地域の青少年育成に活用し、教育現場で展開する意義と効果は大きい。「野外活動」を、理論と実践から学び、企画・運営・マネジメントに必要な基礎知識と技能を身に付ける。野外活動には他人との協力・共同作業の機会が多い。この演習を通して心身の適切な発達やコミュニケーション能力向上につなげていく。	集中
		運動栄養学演習	運動と栄養との関連を食生活と運動、消化吸収の機構、栄養素の機能と代謝、身体活動の定量法とその応用、栄養アセスメントの観点から学習する。	
		健康運動指導演習	健康づくりのための運動を指導するため、対象者の年齢、体力に応じた指導方法や介護予防のための運動指導を学習する。 （オムニバス方式／全15回） （2 池川繁樹／5回）筋力を維持するための運動、筋力を高めるための運動 （1 飯田路佳／10回）柔軟性を維持・改善するエクササイズ、敏捷性・バランス能力を改善するエクササイズ、リズム体操、ボール、椅子、マット等を用いたエクササイズ	オムニバス方式
		トレーニング論演習	ヒトのからだの運動に対する適応能力について学ぶ。全身運動、局所運動の仕事量とエネルギー消費、トレーニングの原則（反復性、漸増性、個別性）、トレーニングの可逆性について理解し、さらに具体的な内容としてウオーキング、ジョギングの速度、時間の設定、静的レジスタンストレーニング、動的レジスタンストレーニング、道具の利用法、指導上の注意などを理解する。	

専門科目	健康運動領域	運動プログラム演習	健康のための運動を指導する際、運動プログラムを作成し、指導にあたらなければならない。健診結果、メディカルチェック、心電図に関する知識、運動プログラム作成の理論、有病者の運動プログラム、生活習慣病対策の運動プログラム、運動負荷試験の理論と実際について学ぶ。	
		体力測定・評価演習	体力測定方法と評価の考え方を理解する。適正な体力測定の条件、妥当性、信頼性、客観性、簡便性、経済性、安全性、について理解し、適正に測定することを学ぶ。	
	教育領域	体育原理	スポーツ史、スポーツ哲学を踏まえ、体育の本質やありかたについて、体系的に学ぶ。学校という教育機関において教科体育を担当する専門科としての基本的な考え方を養成する。次の5点から授業を構成する。①スポーツの本質、②スポーツと体育、③体育と健康、④体育のありかた、⑤体育と体育教師。これらを通し、よい体育の授業の在り方を追求していく。	
		運動学（運動方法学）	ヒトの身体運動を科学的にとらえ、また運動を実践する際に必要な基本的な知識を学ぶ。ヒトの運動に共通する性質と、運動に影響を与える要因を、科学的に分析する。さらに、人が運動を身に付ける過程を理解し、自分自身の運動技能の習得や、他者への運動技能の指導に生かす。また、動き方を伝えるための観察力をたかめ、適正な処方を提供する能力を磨く。	
		健康・スポーツ心理学	健康運動心理学では、心の健康、カウンセリング、ストレスマネージメントについて学習する。具体的な項目として、メンタルヘルスについて、運動に関する心理的要因、心と身体の調和、健康運動の心理的多様性、運動の心理的効果、ストレスの概念、ストレス関連疾患、ストレス対処法、カウンセリングと相談指導、カウンセリング技法である。	
		救急・応急処置演習	突然起こる怪我や急病に対応できるように救急処置に必要な疾病を理解し、基本的な対処方法を習得する。内容として、応急処置を必要とする疾病の基礎知識、応急処置の原理と実際、および、心肺蘇生法の実際等を学ぶ。	集中
		学校保健概論	学校保健の意義と目的を理解し、健康観察、健康診断、健康相談など具体的な事項を学習することで、保健体育の教員として学校保健における果たすべき役割を学習する。　さらに子どもの発育発達の特徴を踏まえたうえで、子どもの健康（精神も含む）状態の把握の方法と対応、慢性疾患や障害をもつ子どもとへの対応の方法について学習する。 （オムニバス形式／全15回） （34 齋藤千景／7回）学校保健の意義と目的、学校保健行政と組織等、学校保健関係職員、学校保健組織活動、学校保健計画、学校安全計画、子どもの健康把握と対応（健康観察、健康相談、健康診断、保健調査）、学校における保健教育・保健指導、保健室の役割、学校安全・危機管理、学校環境衛生 （48 布施晴美／5回）子どもの発育・発達（身体面、精神面）、子どもに多い病気とその対応）、感染症とその予防、子どもの健康障害と疾病異常 （24 柏葉修治／3回）精神保健、精神的健康の維持と促進、まとめ	オムニバス方式
	卒業研究	健康栄養学演習	健康栄養学科で学んだことをもとに、自らの興味関心を持つ研究分野について深く探究する卒業研究（４年次）の準備のための科目である。各自の興味関心のある研究分野から、問題や課題を発見する方法、資料や文献などの情報収集の方法、文献の読み方、研究テーマの設定、研究の進め方、報告のしかたについて理解する。卒業研究テーマを決定に向けて、お互いに討論を繰り返し、研究テーマの絞り込みを行う。	
		卒業研究	新しい事実・解釈を発見し、技術・方法を発明し、創意工夫できる研究力は、たとえささやかでも、社会に役立つ人として生き抜く糧となる。こうした問題発見・解決につながる力を高めるよう、指導教員とともに設定した課題について、研究方法の基本（計画→実行→評価）や取り組む態度を学びつつ、研究を進める。卒業論文としての取りまとめ、発表会等の形で研究成果を公表する。知的感性を磨き、科学的視点を育むことをもめざす。	

（注）

1　開設する授業科目の数に応じ，適宜枠の数を増やして記入すること。

2　私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合，大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は，この書類を作成する必要はない。

授　業　科　目　の　概　要

（人間生活学部文芸文化学科）

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通科目	十文字学	学びの基礎をつくる	入門ゼミナール	各学科は入学直後の学生が大学での生活と学習がスムースに進み、卒業までの展望や卒業後の進路についても思い描けるように丁寧にオリエンティションとガイダンスを行う。また、学生が受け身にならないように、さまざまな形で自ら学ぶ要素を取り入れるようにする。時間割上の設定、授業方法は各学科の創意工夫にゆだねられるが、下記の項目について必ず含めることとする。①本学園創設の理念、建学の精神、②学園及び大学が歩んだ歴史、③本学が立地する地域の特色や課題、④学科が目標とし、卒業時に想定される人物像。	
			地域で学ぶ	担当する教員(単独または複数)は、地域の実情を熟知し、地域においてさまざまな活動を行っている人士(単独または複数)を招き、地域の特色、地域が抱える課題等について学生に情報を提供するとともに、学生自らがそうしたさまざまな活動に加わるための意欲の喚起と必要な知識の獲得を進める。その上で、前述した地域の人士の協力と援助を得て、地域においてさまざまな活動をできるようにする。時間割上の設定にはとらわれず、しかし単位構成上有効な時間量を確保して進めることに配慮する。	
			読書入門	担当する教員(単独とする)は、ゼミの開講に当って一冊の本を決め、半期の設定された時間割上の時間において学生たちとその本をじっくりと読み合い、内容を攻究する。できるだけその本一冊の読解に止まることなく、読書の楽しみ、読書の方法への開眼などが実現するように努力する。ゼミが開設されている期間及び終了後においても、読書感想文を書くようにし、それを公表することによって、読書の意欲が定着するように努力する。	
			総合科目	担当する教員(単独または複数)は、学外の企業、団体、有志などの協力を得て、特定の題目、特に社会の動向と連動するような課題について、期間内に15回以内の授業を設定する。授業では特定の専門分野に限ることなく、共通科目が扱う領域を総合的に、かつ自由に、創意的に扱うことによって、学生自らが学ぶ意欲と姿勢を獲得できるように配慮する。扱う課題において「総合」科目であり、企業等の授業提供を主旨とする点からは「冠講座」となる。なお、授業をゼミナールの形態で進めるケースは総合ゼミと呼ぶことにするが、この科目の中の一つの形態である。	
		女性の自立・生き方を学ぶ	家庭と法	家庭生活を営む上で関係のある法律について取り扱う。価値観が多様化し、様々な家族のかたちがあるなか、身近な事例や裁判などを素材にして現代の結婚・離婚・親子・相続のしくみや法の課題について学ぶ。また、家庭から一歩踏み出して女性が働くときの制度的な課題から、これからの生き方を考えることを目的とする。	
			キャリアデザインとライフプラン	女性が働くことの意味や目的を考えるとともに、自分自身のキャリアプランを設計する。結婚、出産、育児などの家庭生活と仕事をどう捉えていきたいか、人生設計の中で仕事をどう位置付けたいか、将来を見据えた自己分析を通して、自らのキャリアプランを考察する。統計情報から働く女性の動向を把握するとともに、ポジティブ・アクションや仕事と家庭の両立支援といった女性の活躍を推進する政策、女性労働に関する法的な変遷を学習した上で、固定観念に囚われない自分らしい職業選択について考える。	
			子育てと環境	子育ては新たな発見や予測しない問題に直面することの連続である。少子化社会において次世代を育成する子育てについて考えることは重要な課題であり、様々な議論が展開されている。本来、子育ては楽しく充実した営みである。しかし、現実には直面する課題や問題が多く、必ずしも子育てを楽しんでいるとは言えない場合も少なくない。そこで、子育てを楽しみ、充実させるために必要な視点について学び、豊かな子育てとは何かを考える。	
			食の科学	日本は、世界に類を見ないほど豊富な食材や食品が流通していて、欲しいと思えば何でも手に入る恵まれた環境にある。一方で食生活の乱れに由来することで、若年層が低栄養状態にあること、壮年層に肥満やメタボリックシンドロームなどをはじめ生活習慣病の増加が社会問題となっている。また、幼児や児童・生徒に見られる個食や孤食、偏食や欠食など、家庭で食卓を介したコミュニケーションの欠如は、子どもたちの健全な成長に影響を及ぼしている。この科目では健康であるための食生活について、栄養学、食品学から加工・調理学、食習慣、美味論さらには食環境論まで幅広く、学び、その理解を深める。	
			女性と健康	生涯を通じた健康とQOLの向上を目指すには、女性のライフサイクルに応じた正しい知識が求められる。若い時から、バランスの良い食事、ストレス対応、女性の生理、喫煙、飲酒、薬物の問題や、食の安全、感染症の予防などを考えることは今後の社会人や家庭人として役立つ。健康に関する知識のみならず行動が伴うように多方面から学習する。	

共通科目	十文字学	女性の自立・生き方を学ぶ	女性と文化	「女性（性）」・「男性（性）」という区分は、生物学的なオス（雄）・メス（雌）とは別に、意識的・無意識的な文化的・社会的制度によって存在している。そのような「女性（性）」がどのように文化的・社会的に創出されてきたのか、文化のなかで「女性（性）」はどのような意味や役割を担ってきたのか、といった点をさまざまな文化事象を通して具体的に考察し、それらを踏まえて文化創造の主体としての女性のありようを探究する。	
		地域と社会を学ぶ	埼玉の地理・歴史・文化	埼玉の地理・歴史・文化について、広く地元学という観点から学び、理解を深めていく。静的学習にとどまらず、体験学習や参加型学習という要素を取り入れ、埼玉を広域的に、またあるときは特定の地域に焦点化させてその生活の実際に触れながら、埼玉の現状や課題について考察を深めていく。	
			現代社会と教育	高度情報化、高度消費化、グローバル化社会と形容される現代社会おいて、教育はかつてない複雑な問題を呈している。教育がすぐれた社会的な営みである以上、主として学校で生起している様々な課題（子どもの学力・意欲・体力・モラルの低下・問題行動党）は、現代社会の変容と関連している。本講義では、複数の教員がそれぞれの専門的分野の知見を生かしながら、教育課題を多角的に捉え学ばせていく。	
			現代社会と福祉	少子高齢化、失業、貧困、孤立、医療、介護、子育て支援等、現代社会が抱える福祉課題はじつに多様で、どれも深刻な状況にある。その要因は何か、どのような対策が講じられているのか、自助・共助・公助をどう組み合わせて課題解決をめざすのか、こうした問題を一人ひとりの生活の視点から理解を深めることによって、生活のリテラシーとして福祉を活用し、創造する可能性を学ぶ。	
			現代社会とグローバリゼーション	インターネット及び情報技術、交通機関の発展・発達等により、様々な分野においてグローバル化が加速度的に進んでいる。そしてそれらは、私たちの生活・社会においても大きな影響を与え始めた。本講義では、衣服、映画、政治、経済、ビジネス、日本の国際貢献のあり方等からグローバル化について多面的にとらえるとともに、グローバル化がもたらすメリット、デメリットについて考え、理解することで、自分の生活に活かしていくことを目的とする。	
			くらしのなかの日本国憲法	私たちの暮らしにとって憲法はどのよう役割を果たしているのか。すべての生活部面にわたって個人として尊重され、人権が保障されていように、権力をコントロールする法的なちからとなっている。憲法の理念、しくみ、内容を広く学び、主権者の一人として基本的な憲法理解解力を獲得することを目的とする。	
			情報とネットワーク社会	情報に接する機会はますます多くなり、自ら社会に向けて情報を発信することも可能となってきた。このような情報社会においては、膨大な情報から有用なものを取捨選択し、モラルに則って効果的に活用することが重要である。そのための基礎知識の習得を本科目の目的とし、情報の基礎（情報の概念、特徴等）、情報システムのしくみ（コンピュータ、ネットワーク等）、情報とネットワーク社会の関係（セキュリティ、個人情報・知的財産権の保護、情報倫理等）を主たるテーマとして講義形式で授業を実施する。	
		人間と自然を学ぶ	地球環境の保全と生活	人間の活動と環境はどんな関係にあるのか、またどんな関係にあるべきなのかを、環境学の視点から理解することを目的とする。私たちの日常的な行動が環境に及ぼす影響、悪化してしまった環境改善への対策などについて、政治、経済、社会の動向との関連を検証しながら、具体的な事例を取り上げて論じる。公的な環境保護政策や民間の保護活動のあり方についても解説する。さらに、エコシステムという視点から見て人間は何を意識して行動すべきなのかについて、これまで行われてきた様々な議論を紹介する。	
			宇宙とものなりたち	人間はなぜここにいるのかについて、宇宙規模で考える。太陽系の天体について学ぶことにより、地球環境がいかに恵まれたものであるかを再認識する。また、宇宙が膨張している事実を学ぶことにより、宇宙には始まりがあり、それから現在の宇宙の姿になるまでにどのようなできごとがあったのかを理解する。さらに、太陽系の始まりから地球環境はどのように整えられてきたのか、長い宇宙の進化の中で人類と宇宙はどのような関係があるのかを学ぶ。	
			生物の多様性と倫理	まずは身近な生物圏を知る。どのような生物が存在して、他の生物や環境とどのような関係があるのか理解し、生物種の保存について考える。さらに、遺伝情報を読み取り、操作や選択をすることが可能となってきたいま、そのことの生態系への影響や倫理的側面を考える。	

共通科目	十文字学	人間と自然を学ぶ	地球のしくみと災害	地震とそれに伴う津波、集中豪雨や竜巻などの自然災害は、近年その規模と頻度が増しているように思われる。また、台風は年々強さを増し、猛暑日は頻度や発生地域が拡大しているように感じられる。人間にとっては災害となるような自然現象はどのようにして起こるのか、そのしくみを理解する。さらに、人間はそのような自然災害に対してどのような準備・対策をすべきなのか、また、そのような災害が起きたときにどう対処したらよいかについて考える。	
			原子のエネルギーとわたしたち	人間とエネルギーのかかわりは火の発見から始まり、今、私たちの快適で便利な暮らしは、エネルギーを消費することによって成り立っている。大量のエネルギーを取り出せる原子力は福島事故によって、制御不能となる大きな危険性をはらんでいることに直面した。しかし、将来の暮らしとエネルギーを考えるためには、経済性、環境性、安全性など多面的な視点で考える必要がある。エネルギー利用の歴史と現状を学び、また、放射線の基礎知識を学ぶことによって、医療や農業など暮らしに身近な放射線利用についても考える。	
			健康と運動	本学学園歌に「身をきたへ心きたへて世の中にたちてかひある人と生きなむ」と謳われているように、世の中に出て社会的な役割を十分に果たすためには、各自の心身へのたえまない洞察と働きかけが必要となる。本授業では、体育科学の最新の研究成果をベースとして、その洞察と働きかけに関する知見を提供する。授業を通して、運動の今日的な意義や健康のあり方についての教養を深め、女性としてしなやかに日々を過ごすための素地を整える。	
	保健体育		身体運動Ⅰ	１年次前期に学科クラスごとに履修し、2～5週を単位として数種類の体育実技を行う。協同型および競争型レクリエーションを織り交ぜて、入学直後の学生が学科内の交流を深める機会を提供する。また多彩な身体運動を通じ、「身体を動かすこと」の楽しさを体感し、さらに自らと他者の身体についての気付きを深める。主な実技種目として、長縄とびやリズムエクササイズ、ティーボールをはじめとした各種球技などを行う。これらの実技科目を通じて、大学生活への帰属意識を高め、4年間の学園生活に臨む修学態度の基礎を涵養する。	
			身体運動Ⅱ	1～4年次後期に、希望科目(学修内容）を学科の枠を外して選択・履修させる。ここでは生涯を通じてスポーツに親しむ素地を涵養すべく、同一の種目または運動領域の活動を継続的に行う。そして、スポーツには集団種目や個人種目、球技や体操など多彩な楽しみ方があること、自らの意欲や能力に応じて「身体を動かす愉しみ方」を見つけることを目標とする。各種球技、ゴルフ、リズムエクササイズ、筋力トレーニングなどの科目を設けるとともに、教職等の資格取得に関連する内容、集中で開講するシーズンスポーツ（３泊４日の雪上実習：スキー、スノーボード等）も設定する。	集中を含む
	外国語	基礎科目	英語Ⅰ	通年科目として英語によるコミュニケーションのための基礎的英語能力の育成を目指す科目である。とりわけ、聞く・話す、読む・書くの4技能の総合的育成を行い、大学を経て社会にでても通用する英語力の育成を目標としている。そのため、前期ではおもに英語の聞く、読むための認知能力の効率的な修得を目指す。そのため、重要な文法事項や語彙を効率的に学習できるようにする。後期では前期で修得した内容や力を基に、話す、書くの運用能力を育成するものである。	
			英語Ⅱ	英語Ⅰをふまえ、あるいは実力に応じ、英語の4技能、リスニング力とスピーキング力、リーディング力とライティング力をより高いレベルで身につける科目である。リスニングではビジネスシーンだけではなく、日常、映画やTV、ニュースなどより多くの英語素材を的確に把握できる力の養成を目指す。 リーディングでは様々な素材、新聞や雑誌、Email、告知などの英語情報を読みこなす力を養成する。スピーキングではリスニングをベースに話す力を養成する。ライティングもリーディングベースにしながら英文構成の基礎力をつけていく。	
			フランス語Ⅰ	初めてフランス語を学ぶ学生を対象に、フランス語の基本的な語彙、発音、現在形までの簡単な文の構造についての入門的な授業を行う。まずは、フランス語で日常よく使われる挨拶や基本的な単語を実際に何度も発音しながら、フランス語に慣れることを第1の目標とする。さらに、フランス語の綴りと発音の関係についても学び、初見の単語でもある程度発音が予測できるようになることを目指す。また、フランス語の辞書を引くことにも慣れさせ、簡単な短文であれば、辞書を引きながら意味を理解できるようにする。	
			フランス語Ⅱ	フランス語Ⅰをふまえ、あるいは実力に応じ、基礎的な文法事項を復習しながら、自己紹介、バスや電車の乗り方、ホテルの予約の仕方、買い物など、初歩の会話に必要な具体的な表現を習得することを目指す。文法事項では過去形や複文の構造なども学習し、徐々に語彙を増やしながら、平易な文章を読めるようにすることも併せて目指す。さらに、詩・小説・映画などを通してフランス文化に触れて行くことも目的の一つとする。	
			中国語Ⅰ	初めて中国語を学ぶ学生を対象に、中国語のしくみ、ピンイン（発音と声調をあらわした記号）の読み方を指導します。テキストは比較的容易な内容なので、繰り返し発音することで定着を図ります。別冊問題集を解く過程で簡体字や文法理解のチェックを行ない、日本語との違いを意識してもらいます。最終的には中国語検定試験準４級レベルの中国語力を付け、簡単な自己紹介や挨拶などが身に付くようにする。	

共通科目	外国語	基礎科目	中国語Ⅱ	中国語の基礎がほぼできている学生を対象に、中級レベルのテキストを使用して「読む・聴く」のレベルアップを図るとともに、「書く・話す」能力の養成を行ないます。授業はテキストだけではなく、受講生のレベルによってやや易しい基本的な復習プリントを用いて基礎を補ったり、長文や時事文読解を行ないハイレベルな内容にするなど柔軟に対応していきます。中国語検定試験４級・３級レベルの中国語力を付け、自分の言いたいことがアウトプットできるようにする。	
			ハングルⅠ	初めて韓国語を学ぶ学生を対象に、ハングルの母音（字）と子音（字）が区別でき、約450語の単語や限られた文型からなる文を理解する力を修得することを目的とする。決まり文句としてのあいさつやあいづち・簡単な質問ができ、またそのような質問に答えることができたり、自分自身や家族の名前、特徴・好き嫌いなどの私的な話題、日課や予定、食べ物などの身近なことについて伝え合うことができるようになることを目指す。	
			ハングルⅡ	ハングルⅠをふまえ、あるいは実力に応じ、比較的使用頻度の高い約950語の単語や文型からなる文を理解する力を修得することを目的とする。レストランでの注文や簡単な買い物をする際の依頼や簡単な誘いなどを行うことができたり、簡単な日記や手紙、メールなどの短い文を読み、何について述べられたものなのかをつかむことができるようになることを目指す。また、自分で辞書を引き、頻繁に用いられる単語の組み合わせ(連語)についても一定の知識を身につける。	
			日本語Ⅰ	留学生対象の通年科目であり、日本語四技能を総合的に学習する科目である。大学入学後、留学生が学部の講義を受講し、理解するには、高い日本語力が求められる。大学講義の理解の助けになるよう、「聞く」（講義の聞き取りがスムーズになるよう）、「話す」（意見発表に自信を持って臨めるよう）、「読む」（教材、資料の読み取りが正しく、早く行えるよう）、「書く」（レポート作成、記述問題の解答が的確にできるよう）の四技能すべてを学習する。授業は日本語力によりレベル別に開講される。	
			日本語Ⅱ	留学生対象の通年科目である。日本語Ⅰの履修を踏まえ、開講されるため、先に日本語Ⅰが履修済みであることが求められる。限られた時間ではあるが、日本語四技能能力を総合的に向上させるために、日本語Ⅰに続き学習を行う。学内の講義理解がより容易になること、また、学生同士、教員とのコミュニケーション力が上がることを目指し学習を継続させる。さらに、卒業後の進路も見据え、社会におけるコミュニケーションが円滑に行えるよう、一段上の日本語力を身につけることを目標とする。授業は日本語力によりレベル別に開講される。	
			海外語学研修（事前事後指導を含む）	短期留学を通じて外国語によるコミュニケーションのための基礎的外国語能力の育成を目指す科目である。各言語Ⅰに相当する聞く・話す、読む・書くの4技能の総合的育成を留学先の大学で行い、社会にでても通用する外国語力の育成を目標としている。昼間は大学で集中授業、午後のアクティビティ、ステイ先での生活会話、様々なシチュエーションで常に外国語に接することで海外の文化や風習なども学べる。各言語Ⅰに相当する以上の内容を集中して修得することを目指している。	
		資格科目	ＴＯＥＩＣ対策講座	TOEICが始めてという学生から高得点までを目指す学生に対応するため、目的別クラス設定をしている。目標点は個人によって異なるからである。まず、運用力に重点を置き、運用するための語法力をさらにつけ、文脈や状況での判断を養成する。また、リーディングで用いるskimming（流し読み）を通して大意や要旨を把握し、scanning（拾い読み）によって情報を選択する方法を養成する。予測読みを加えながらより速く、正確に読み取る力を養成する。また、それらがリスニングでの設問理解にも利用出来る段階まで養成する。	
			中国語試験対策科目	中国語検定試験・HSKなどの試験に対応できるよう、発音・文法・作文を重点に指導します。基礎の確認から始め、日本語と異なる簡体字、紛らわしい発音の判別、動詞を中心にした語の配列について死角がなくなるようチェックアップを行ないます。試験近くには過去問を解き、出題方式に慣れるようにします。テキストには過去５年間の傾向を網羅したものを使用しますが、適宜プリントで精読・多読の習慣をつけ、幅広い中国語力が身につくようにする。	
			日本語能力試験対策講座（文法・文字語彙）	留学生対象の日本語科目である。日本語能力試験の出題項目のうち、文法・文字語彙に特化して、実際の試験の出題形式に則り、演習形式で授業を進める。講座は能力試験N1、Ｎ２レベルの合格を目指し、レベル別に開講される。限られた時間で効果的に学習を進めるため、学生の予習、復習が強く求められる。また、受講前に能力試験Ｎ２レベルに相当する文法、文字語彙の自習がされていることが望ましい。毎回、実践練習を行い、時間の余裕があるときには、聴解問題の学習にも触れる予定である。	
			日本語能力試験対策講座（読解）	留学生対象の通年の日本語科目である。日本語能力試験の出題項目のうち、読解問題に特化して、実際の試験の出題形式に則り、演習形式で授業を進める。講座は能力試験N1、Ｎ２レベルの合格を目指し、レベル別に開講される。限られた時間で効果的に学習を進めるため、学生の予習、復習が強く求められる。また、受講前に能力試験Ｎ２レベルに相当する文法、文字語彙の自習がされていることとが望まれる。毎回、実践練習を行い、時間の余裕があるときには、聴解問題の学習にも触れる予定である。	

共通科目	外国語	目的別科目	アドバンスト・リスニング	より高度な内容の素材の聞き取りを目指す。まず、内容的には大学の講義やアカデミックな説明、会社等での会話や会議、といった難しい内容の聴き取りに欠かせない内容把握力をつける。次に、スピードである。英語の表現や言い回しは読めば易しいが、聴き取れないことが多い。これは、英語が独自の音変化を起こすためである。弱音化、消失、脱落、同化、連結等の音変化を克服することで、相当なスピードのものも聴き取れるようになる。アドバーンスト・リスニングは内容、速度同時に養うことを目指している。留学を考えている学生にも対応している。	
			アドバンスト・リーディング	より高度な内容の素材のリーディングを目指す。まず、内容的には大学のテキストやアカデミックな解説書、会社等での書類や文書、といった難しい内容のリーディングに欠かせない内容把握力をつける。次に、大量の情報を一定時間で処理しようとすると、求められるのが速読力である。Phrase reading, skimming, scanning, predictionなどを養成し、大量の文書を短時間で読破し、まとめる力を養成する。留学を考えている学生にも対応している。	
			アドバンスト・ライティング	日常的な話題を扱った短い英文のモデルエッセイを読み、そこで使われた構文や表現を使い、自分の言いたいことを読み手に分かりやすい平易な英語で表現し、自己流ではない自然な英文が書けるようにする。前半では単文で書くことから始めて、アイデアを一つ一つ文にしていく。それを集めてパラグラフ構成を目指してライティングする。さらには一貫性や論理展開を考えたパラグラフ構成とパセージとしてバランスのとれた長い文が書けるようにする。	
			日常英会話入門	日常英会話入門は、英語による応答ができるように、学生のリスニング力とスピーキング力をつけることを目標としている。リスニングを併用する理由は、会話を続けるためには相手の話していることが理解できなければならないからである。まず第一段階では、学生が話がしやすい身近家族や学校のことを話すことかれ始める。第二段階では意見や説明、質問といったやり取りのための基礎作りを行う。最後の第三段階では、調べたことや新しいことに対して対応できる力を養成する。	
			日常英会話	日常英会話は、日常英会話入門を履修したことを前提としない。学生にはナチュラルスピードのリスニング力とスピーキング力をつけることを目標としている。学生が話が少し苦手とする社会状勢や事件、次に意見や説明、質問をいったやり取りのための基礎作りを行う。そして最後に調べたことや新しいことに対して対応できる力を養成する。この科目は、日米英会話学院と提携して行われる。	
			ビジネス英語	ビジネス英語を基礎から学習する科目である。ビジネスの世界で必要とされる英語力を養成することを目標とする。また、様々なビジネスの場面で役立つ会話表現や英文ビジネス文書に関する基礎知識を習得し、実際に活用できるようになることを目指す。手紙　やファックス、Emailなどのビジネスのための通信の基本から、面会、予約、案内、招待などの社交関係の基本、通知、購入、注文、履歴書などの社内や取引関係の内容を扱う。	
			ビジネス英会話	実社会に出てから役立つよう「ビジネス英会話」の基本を学ぶ。まず、ビジネスのための通信の基本である「電話」から始まり、社交関係の予約や案内、社内の英語でのスカッション、取引関係のにおけるプレゼンテーション、雇用関係の交渉等を学習します。実際の会社等の例を元に、練習を重ね、使えるレベルまで引き上げることを目指す。	
			映画・ドラマ英語	海外映画やドラマは文化の一形態であり、それらを字幕なしで聴き取れることは、直接文化を理解する上で重要である。この科目は、最終的に字幕なしで映画やドラマの英語を聴き取れる力を養うことを目標にしている。そのために、英語の音変化、映画やドラマ独特の言い回し、背景知識を通して生きた英語に触れながら基礎的な英語力を養う。さらに、英語理解のの正しい学習法を知り、将来も主体的に学び続けていけるだけの素地を培うことを目指す。	
			インターネット英語	今や情報のためのツールとしてのインターネットは必需品である。しかし、実際に英語のウェブサイトを閲覧する場合ある程度の知識や常識が必要となる。この科目は、実際に英語のウェブサイトを閲覧しながら生の英語に触れ、慣れてくれば、英語による情報を発信するスキルを学ぶ。英語によるSearch Engineから始まり、Social NetworkingやOnline Englishといった基本的な知識から導入する。英語力を養成しながら英語のウェブサイトの閲覧から発信までを扱う。	
			メディア英語	世界では情報の多くが英語でやりとりされている。日々刻々と変化する世界状勢を英字新聞、ホームページに頻出する企業、事件などグローバル化した現代社会を読み解くための基本的な知識を英語で学ぶ。実力に応じて、実際の英字新聞(Japan Times, New York Times, USA Today等)やCNN,ABCニュース等使い内容が理解できるようにする。	

共通科目	外国語	目的別科目	日本語表現技術	留学生対象の通年の日本語科目である。全講義のうち文章表現について七割、口頭表現について三割の時間を用いて授業を進める。最終目標は、文字および口頭で自分の考え、伝達したい事柄を的確に伝える技術を身につけることである。文章表現については、語彙段階（的確な語彙の選択・話し言葉と書き言葉の区別・接続表現など）から文章段階（文の適切な完結・段落のある文章・文章の構成・レポート作成など）まで、順を追って進める。口頭表現については、授業での適切な意見発表の方法、口頭発表の方法などを学ぶ。レベル別に開講する。	
	情報処理基礎		情報処理演習Ⅰ	本科目では、大学での学習や社会で必要となるコンピュータを中心としたICT活用に関する基礎技術を習得することを目的とする。主な学習内容は、大学の情報環境の理解およびその利活用、オペレーティングシステムやアプリケーションソフトウェアの基礎操作、レポート・論文やビジネス文書の作成、Web・メール等インターネットの活用、プレゼンテーションである。授業形態は演習形式とし、課題により評価を行う。学習者の操作経験やスキルに応じた課題設定と支援を行う。	
			情報処理演習Ⅱ	本科目は情報処理演習Ⅰの継続として、大学での学習や社会で必要となるコンピュータを中心としたICT活用に関する基礎技術について、専門領域の学習や各自の目的・目標に応じた内容を習得することを目的とする。主な学習内容は、表計算ソフトウェアの基礎操作、データ活用と処理、基礎的なホームページ作成等の中から選択する。授業形態は演習形式とし、課題により評価を行う。学習者の操作経験やスキルに応じた課題設定と支援を行う。	
	キャリア教育	働く意欲を高める	社会人入門	社会人生活を送ることで多くの人間が直面する社会的諸問題を理解している学生は少ない。金銭面の問題、健康や食生活、社会保障、家族の問題など、将来直面する可能性ある現実的な諸問題をその背景も含めて理解し、このような現実が自分にも関係することとして捉え、考えさせる。あわせて低学年からこのような現実的社会問題を理解することで、社会人とは何か知り、将来の社会人としての覚悟や職業観を醸成するとともに、目的意識を持った学生生活を送る意識付けとさせていく。	
			キャリアサポート	金融やマスコミ、福祉、情報、メーカーなど様々な分野で活躍する女性ゲストを迎え、仕事と生活、自身の生き方などをテーマとする講演を聞きながら、学生はキャリア形成の一助とし、学生生活への意欲向上や職業観の醸成を培っていく。本科目では講演と併せて、学生同士のグループワークも取り入れる。講演から感じ取ったことを参考に、学生自身が今後のキャリアを展望するとともに、そのキャリア形成のために何が必要か、何を準備していくかをグループのなかで意見交換していく。	
			インターンシップ短期	企業や官公庁など実際の職場での就業体験をすることで、学生は社会や企業を知り、あわせて将来設計を自らに問う機会を持つ。実習先には「就業体験プログラム」作成を依頼し、実習の効果が上がるように求める。学生はこのような職場体験を通して、仕事の取り組み方や職場内外での人間関係の構築方法などを学ぶが、あわせて今後の大学生活での勉強や課外活動などへの取り組みに対する指針にもつなげていく。尚、インターンシップの成果についてはレポートや報告会のなかで公表していく。本科目では５日以上１０日未満のインターンシップを対象とする。	
			インターンシップ	企業や官公庁など実際の職場での就業体験をすることで、学生は社会や企業を知り、あわせて将来設計を自らに問う機会を持つ。実習先には「就業体験プログラム」作成を依頼し、実習の効果が上がるように求める。学生はこのような職場体験を通して、仕事の取り組み方や職場内外での人間関係の構築方法などを学ぶが、あわせて今後の大学生活での勉強や課外活動などへの取り組みに対する指針にもつなげていく。尚、インターンシップの成果についてはレポートや報告会のなかで公表していく。本科目では１０日以上のインターンシップを対象とする。	
			自主社会活動	大学入学までに多くの学生は家庭と学校という枠の中で育っている。場合によっては大学生活の中でも同じような狭い活動範囲のなかで過ごす可能性も否定できない。卒業後に多様な環境と複雑な人間関係の中で社会生活を送るためには、大学時代に社会と接点を持ち、そのなかで考え行動する学びの要素が必要である。本科目は、ボランティア活動や地域活動、福祉活動などさまざまな社会活動の参加を積極的に評価し、社会のなかで必要とするコミュニケーション能力や自主性、協調性といった社会人基礎力を培っていく。	
		就業力を身につける	キャリア基礎力入門	大学生活はもちろん、卒業後の職場や日常生活のなかでも基礎的学力は欠かせない。特に言語（国語的理解力）と非言語（数的理解力）の基礎的学力は、さまざまな場面で必要とされており、昨今の就職試験でもSPI試験としてその能力が問われるケースが多い。この科目では、大学入学までに本来学んできた言語・非言語の基礎的学力が、なぜ必要とされるのかを伝えると同時に、具体的問題を解きながら、分かりやすい解説を加えて学び直していく。あわせて、この分野に自信を持てない学生の苦手意識を払拭していく。	
			キャリア基礎力応用	大学生活、社会人生活で必要とされる言語・非言語の基礎学力は「キャリア基礎力入門」で学び直していくが、さらに踏み込んで応用力を磨くことで、大学生活や社会人生活で接するこの分野での課題解決力を高め、あわせて就職試験等のSPI試験対応力も磨いていく。応用力を高めていくためには、具体的な問題を多く解くことが近道であるため、「キャリア基礎力入門」以上に問題を解く時間を多く取り入れ解説を加えていく。	

共通科目	キャリア教育	就業力を身につける	現代社会理解	政治や経済、国際情勢、暮らしといった社会状況を理解し、知的ボキャブラリーを増やしていくことは、自律的社会生活を送るうえで、また高度なコミュニケーションを交わす上で欠かすことはできない。実際にこのような教養問題は一般常識試験として就職試験でも多く問われている。本科目は、昨今の日本を取り巻く社会情勢をテーマ別に理解しながら、学生一人ひとりにとって身近な問題であることを認識させ、これらニュースに対する知的好奇心や知的感度を高めていく。	
専門科目	専門必修科目	基礎科目	文芸文化入門	人文学研究に関する基礎的な事項を学ぶための入門的科目である。文学研究及び芸術研究領域における研究方法、術語、理論等を紹介するとともに、歴史学や社会学、哲学等の周辺領域も視野に入れつつ、人文学における芸術学についての概念イメージを形作ることを目的とする。高等学校までに修得した国語科や社会科の知識を土台に、それらを有機的に関連付けながら、身近にある文化現象に学術的にアプローチするための基礎的な知識や考え方を学び、より専門的な学修のための準備を行う科目である。	
			文芸文化概論	「文芸文化入門」を土台とし、人間の豊かな想像力が生み出した多様な言語芸術、文化事象を概説するとともに、世界の文学、芸術を幅広く現代的な観点から研究・読解するための様々なアプローチを考えていく。国の枠を超えて、文学、芸術を、歴史学的、社会学的、哲学的、思想的に研究し、読解を試みるための枠組みを提供する。さらに、個々の研究への応用を考え、専門分野に対する理解の深化を促す。言語を媒体とする文化を社会との関係から考察し共有することで文芸に対する深い知識、研ぎ澄まされた感性、鋭い観察眼を養うことを目指す。	
			日本文学概論	日本の女流文学の始発と展開について概観し、文学と女性の関わり方について考察することを目的とする。平安時代に清少納言や紫式部などの優れた女性作家が輩出されたことは、世界文学史上においても注目される出来事である。１０００年前の日本でなぜ、女流文学が栄えたのか、その理由を明らかにするため、女流日記文学を取り上げて検証する。作者の経歴と時代的な背景について理解を深めた上で、個々の作品を読み解きながら、作品形成の内的動機について考えていく。扱う作品は、『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』等である。	
			芸術文化概論	日本の古典的な文学論・芸道論・芸術論を、時代を追って眺めていく。また、比較芸術論的な視野をもって、海外の理論も考えていく。西欧の芸術論はアリストテレスの『詩学』をその始祖とし、以後の芸術論や美学は哲学的方法と科学的方法等があったが、それらは体系的である。日本の文学論や芸術論はより実作に即していて、片言隻語的であるが、そこになお珠玉のように光る芸術の真理を伝えていて興味深いものがある。歌論・連歌論・芸道論・俳論・絵画論等を読み、かつ、近代の最先端の芸術作品の理論化も試みる。	
			文芸文化特講	上級学年としての専門学修をより深めるための準備を行う科目である。人間生活に関わる人文学的問題をめぐって、言語学、文学、文化学等それぞれの立場から講義を行う。複数の専門的アプローチに触れることで、問題把握の多様な実例と専門研究の具体例を知り、多様な視野と柔軟な発想力を身につけながら、学生各自の専門学修を改めて見つめ直すことを目的とする。 （オムニバス方式／全１５回） （３　武田比呂男／２回、１　赤間恵都子／２回） 民俗学的アプローチによる講義 （４　松永修一／１回、星野祐子／２回） 言語学的アプローチによる講義 （８　小林実／４回） 日本文学・比較文学・文化学的アプローチによる講義 （１１　落合真裕／４回） 英文学・演劇論的アプローチによる講義	オムニバス
		日本語科目	日本語基礎	物事を他人に分かりやすく伝えるためには、日本語による表現力の養成が欠かせない。まずは、自身の日本語力を振り返り、アカデミックな場で求められる日本語運用に対して、意識的になることから始める。具体的には、主語と述語の対応、文末表現、文と文との接続、敬語、文法、語彙、文体、漢字の表記、言葉の意味など、文レベルでの日本語の整え方を、演習形式により実践的に学ぶ。また、本講義の内容は『日本語検定』の出題範囲と重なっているため、日本語力の伸長を確認すべく、同検定の受検を推奨している。	
			日本語表現Ⅰ	課題に合わせて、ある程度の長さの文を執筆することを目標とする。まずは、与えられた課題を吟味し、自分らしいテーマを設定する方法を身につける。その上で、序論・本論・結論の三部構成を理解し、段落の付け方や文の整え方、接続表現の効果的な使い方について学ぶ。また、意見文、要約文、批評文などのタイプの異なる課題文を執筆することで、それぞれの課題に応じた型を身につけ、レポートや論文作成につながる確かな文章力を習得する。	
			日本語表現Ⅱ	研究の深まりに合わせて、専門的なレポート・論文を執筆する場面が増えてくる。本講義では、人文学系の学びに求められるアカデミックなレポート・論文の執筆方法を学ぶ。具体的には、章立て、テーマ設定、研究課題の立て方、先行研究の探し方・まとめ方など、人文学系の論文・レポート作成において求められるスキルを身につける。また、レジュメの作成方法や発表の仕方、プレゼンテーションスキルを学び、演習や研究ゼミの発表に活かすことを目標とする。	

専門科目	専門必修科目	日本語科目	日本語表現Ⅲ	目前とする就職活動に向けて、履歴書やエントリーシートの書き方を、実践を通して身につける。履歴書の書き方においては、自己ＰＲ、得意な科目、学生時代に力を入れたこと、などの一般的な質問項目に対して、自分らしさを表現しながら、的確に答えるスキルを習得する。また、エントリーシートの書き方においては、各自の個性を活かしつつ、企業が求める人材像を意識した書き方を学ぶ。これらの学びを遠して、就職活動場面に限らず様々な場面で求められる情報整理能力・文章構成能力・発信力を身に付けることができる。	
		演習科目	基礎演習	最終学年で行う卒業研究に向けて、研究活動の基礎技術を学修する。初年次から演習形式で学ぶことにより、卒業研究にあたって求められるスキルを身につけることができる。資料調査や文献分析の訓練とともに、プレゼンテーションと議論を通じて共同的に思考を深めることを体験的に学修する。これらを通じて演習形式の授業に親しみ、調査力、分析力、読解力、思考力、発想力を磨くことを目的とする。	
			文芸文化ゼミⅠ	文芸文化学科の学びの中心となる４領域について興味を深めることを目的とする。ワークショップスタイルで実施するPBL型授業は、「与えられた課題に対して」、「学習者がチームを組み」、「プロジェクト形式によって実施する」といった、大きく３つの特徴を持っている。「共同作業・グループワーク」と「モノづくり」の２つの学習体験をおこない、プロジェクトの実施スキルや問題解決能力、さらにプレゼンテーション力などを養うことを目指す。	
			文芸文化ゼミⅡ	本PBL型授業では、文芸文化学科で学ぶ専門領域の面白さを知ることを目的としている。「問題理解、基本調査フェーズ」、「ブレインストーミングフェーズ」、「仮説検討、評価フェーズ」そして「仕上げ、ブラッシュアップフェーズ」といった４つのフェーズで進めていく。それぞれのフェーズを通して受講者の専門的知識への関心を深めてもらう。また、グループでのプロジェクトワークを進めることで学びの場作りを企図する。	
			文芸文化テーマ研究ゼミ	専門的な研究に本格的に取り組むための演習科目であり、各担当教員の専門領域において、自らの興味・関心に応じた学びを追求する。１・２年次までに修得した言語文化の知識を、（１）芸術文化、（２）日本語・日本文学、（３）創作表現、（４）総合文化のいずれかの領域において発展・深化させることを主眼とする。少人数の演習形式によって、「卒業研究」の入門となる科目である。	
	専門基幹科目	芸術文化基礎科目	文化を考える	洗練された高級なもの、教養として身に着けるべきもの、というようなイメージを持たれたり、振る舞いや信念を基礎づけるものとされたりもする「文化」という語について考察し、文化事象にかかわる自らの姿勢を検証することを目的とする。「文化」の定義や範疇、概念の変遷、担い手や主体性の問題、文化の融合・衝突、政治・社会とのかかわり、物質的なものと精神的なものとの関係など、多方面から「文化」についてアプローチする。	
			日本と異文化	異文化受容の観点から、日本文化と異文化との関係について考察する科目である。異文化との接触のなかで育まれてきた「日本文化」と、その歴史的な過程について、具体的な事象を手がかりに、異文化に対するイメージ形成とその作用、異文化受容態度、受容の文化的風土、異文化の土着的変容等の諸問題を考える。社会のグローバル化が進む現代にあって、異文化との付き合い方について深く思考することが可能となることを目的とする。	
			世界の演劇	視覚文化であるパフォーマンス芸術の実例に多く触れ、自分の関心のある分野に自覚的、積極的にアプローチすることを目的とする。西洋を中心に、古代ギリシアから始まって現代に至る緩やかな時代順に、その基本的な概念、特性、意義、現在の課題可能性を考察する。時代によって主題や様式が変化する理由を歴史的、社会的背景から多角的に探ることで、演劇と人間生活との関わりを理解する思考を習得し、演劇文化をより深く理解する視点を得られるようにする。	
			芸術とことば	散文や韻文をことばによる芸術作品と捉え、選ばれたことばの響きや調べ、その表現技法および表現効果を学ぶ。特に、短い字数で豊かな世界を表現する短詩型文学の俳句、短歌、詩については、実際に朗読を行うことで、その音楽性を体感する。また、日本における短詩型文学の歴史を学び、時代背景を考慮しながら、短詩型文学がどのように発展し、今に至るのかを理解する。さらには、文学にとどまらず、日本や世界各国におけることば遊びについて理解を深める。	
		日本語・日本文学基礎科目	日本語学入門	現代日本語学を学ぶうえで、基本となる諸概念について習得する。音韻・文字・語彙・文法・文章・談話などの様々なレベルから、日本語を客観的にとらえる見方を身に付ける。また、日頃、無意識的な存在である日本語を意識的に捉えることで、身近な言語現象が、体系的な規則によって成立していることを理解する。さらに、日本語研究において欠かせないデータ収集や分析方法を学び、日常生活における日本語がどのようなしくみや法則によって成立していくのかを探求する。	

専門科目	専門基幹科目	日本語・日本文学基礎科目	言語学入門	言語学の目標や理論的背景を学び、言語学の科学的手法を理解することを目標とする。言語学のめざすもの、人間言語の特性、動物の「言語」と人間言語の違いを理解したうえで、対象言語として主に日本語と英語を取り上げながら、心理言語学（母語の習得）・社会言語学（言語の多様性）・神経言語学といった言語学の周辺諸分野に関する基本的な概念や考え方を学び、コミュニケーションの重要な一手段である「ことば」の仕組みを解明するための方法についての理解を深める。	
			日本文学史Ａ	日本文学の発生から平安時代までの文学史の基礎的な知識を習得し、古代日本人の精神的活動の変遷を概観して、日本文学を学ぶための指針を得ることを目的とする。かつて日本に文字が無かった口承文芸の時代、中国から渡来した漢字を日本語表記に使っていた時代、漢字から平仮名が発明され、和歌や物語などの国風文化が始まった時代、そして藤原摂関体制の下で完成した後宮文化の時代、さらに王朝文化が衰退する院政期まで、古代日本の歴史や文化の流れをたどりながら、日本文学の始まりとその展開について学んでいく。	
			日本文学史Ｂ	古代から近代までの間は、日本独自の文化が多様なジャンルと多様な人間性の中に開花した時代である。中世文学と近世文学の展開を歴史的にあとづけ、それぞれの文学の特質と時代精神を考究する。史的区分では、前者は鎌倉・室町・安土桃山時代であり、後者は江戸時代である。『新古今和歌集』『平家物語』『徒然草』等の中世は＜戦乱の世＞であり＜無常観＞を具現化している。『おくのほそ道』『南総里見八犬伝』等の近世は、＜泰平の世＞に＜町人文学＞が開花した。雅と俗、無常と享楽の中で、現代の日本文化の中核となる思想や哲学や様式美などが、いかに出現したのかを考える。	
			日本文学史Ｃ	明治から現代までの日本文学史を学ぶ科目である。作品、作家、関連事象についての基礎知識を学ぶとともに、社会史や文化史、政治史などとの連関を確認していく。文学を軸として、日本近代史を見つめ直すことで、近代日本人と「文学」との関係について考察する。文学史的な知識と文化論的思考を合せて学修することで、現代の言語表現を通時的な観点から批評的に理解できるようになることを目指す科目である。	
		専門を学ぶための基礎科目	日本文学の名作	日本文学の代表的作品として世界的にも著名な『源氏物語』を学び、教養として身につけることを目的とする。平安時代中期に成立した『源氏物語』は、発表された直後から、戦時中の一時期を除くすべての時代で高い評価を与えられ、日本文学の名作として認められている作品である。現代社会においても、映画や漫画、宝塚歌劇など様々なメディアを通して受け入れられ、時代を超えて人間の心の真実を伝えている。物語全体の構成や概要を理解した後、原作の名文をところどころ味わいつつ、登場人物の人生や作者の意図について考察していく。	
			海外文学の名作	海外文学作品の講読を通して、文学に関する知識、関心を広げ、各文学作品の文学史上の意義を理解する。主に、英語圏の文学の代表的作品を鑑賞し、その背景にある思想、文化に目を向けながら、作品に表れている人生観、世界観の変遷を探っていく。文学作品を通して我々を取り巻く社会、文化について考え、文学の普遍的価値の洞察を深めるとともに言語芸術の神髄に触れる。	
			音声表現	日本語の教育のなかでこれまであまり取り上げられなかった「声に出して読む」「聞く」「話す」などの音声表現法について、理論を学び、また実践的な能力を養成していく。明瞭に発音し、美しく正確な日本語で話すことは、コミュニケーション能力を高めて自己を表現する第一歩である。基礎的な腹式呼吸や発声、発音、共通語のアクセントや鼻濁音などを知り、朗読の基本的方法を学ぶ。さらに、文学作品（詩・エッセイ・小説・俳句・短歌）の朗読や、絵本や昔話の読み聞かせを学ぶ。これらの活動を通して、日本語の音声表現の特徴を考え、芸術性を追求することを目的とする。	
			考える日本史	歴史観によって現実認識（歴史認識）が違ってくることに気づき、クリティカルに物事を読み取る力を身につけることを目標とする。多角的な視点から過去の歴史的経験に立ち返り、現在をとらえ返す歴史学的思考の獲得を目指す。受講者の主体的な歴史認識を育てるために、議論と考察を授業の中では重視し、歴史は記憶であるという概念を払拭し、考えることの楽しさを実感できる機会を提供する。	
			フィールドスタディ	キャンパス外で指導教員の下、テーマに沿った調査・研究活動を行うものである。フィールドワークを通した体験による気付きを中心とした学びを期待するもので、担当教員による事前のインストラクション、実習、実習後のワークショップといった一連のプロセスで展開される。ここでいうフィールドワークには、参与観察や密度の高い聞きとりなど狭義のフィールドワークと、狭義のフィールドワークにサーベイの実施や資料の分析などを加えた広義のフィールドワークの２つが含まれる。また、事後のワークショップでは、フィールドワークでの体験や実感に根ざしたアイディアを言語化しoutputすることを通して、伝える技術を学ぶ。	

専門科目	専門選択科目	芸術文化領域	生涯学習概論	生涯学習社会における社会教育の本質と意義、法と制度をはじめ、学校教育・社会教育・家庭教育の連携、社会教育施設（公民館・図書館・博物館）の役割や運営と評価、市民活動と社会教育など、人々の多様な学習活動の諸相について幅広く概説し、市民の視座から生涯学習の全体像を考える。職業の場や地域での学びなど、社会の中の様々な学習機会について見識を広めることにより、主体的に生涯学び続けることの意義と、多様な学習活動への支援の方法を考える。	
			芸術と歴史	＜花鳥風月の文化史＞について、上代から中古・中世・近世文学の史的変遷の中で考えていく。特に歳時記的な視点から考える。歳時記は江戸時代に約１５０部が成立している。その淵源は中国の農事暦としての歳時記にある。日本においては詩歌の暦であった。このように、歳時記の記述を始発とし、四季を大切にする日本文化にアプローチする。あるいは、ビジュアルに日本の伝統的な絵巻物や大和絵、そして浮世絵などにそれらがどう描かれているかを絵画を通して鑑賞する。それぞれの花鳥風月の本意・本情を見出したい。またグローバルな比較文化の視野からも考究する。	
			芸術と生活	＜衣食住と芸術＞について、考える。人間生活の根本的な要素である衣食住をテーマとして、中世や近世の文学・絵画などの領域を対象に考究する。衣については、日本の詩的語彙にいかなる衣の詞があるか調査し、また、模様や色彩についても考える。次に、日本の食の詩的語彙を調査し、民族性や時代、作家の人間性といかに結びつくかを考える。住は住環境の詩的語彙を調査してゆく。詩歌における定住・漂泊（家・草庵・旅）の住まいにおいていかなる語彙があり、その絵画的表現についても考える。海外の比較文化的視座も持ちたい。	
			芸術と人間	人間が生きていく上で欠かせないものという観点から「芸術」を捉え、芸術と人間との関わりを考えていく。そもそも芸術は人間が創りだしたものである。日常生活での心の渇きを癒し、虚しさを埋める力を芸術は持っている。ここでは、芸術とは何なのかを考え、各時代における芸術の誕生、波及、展開を、洋の東西を問わず概観する。また、美学・美術史を人間との関わりから解釈することで、各時代における芸術が、当時の人びとにどのように受容されていたのかを理解する。	
			日本の文化	日本の民俗文化を探究する。現代の最先端の高度情報化社会のなかでも持続する、繰り返される伝統的な生活習慣や意識を探り、私たち自身のありかたを見つめ直すことを目的とする。伝統的な生活や意識（＝基層文化）を把握する学問である民俗学の基礎（対象・方法・目的）を理解し、さらにその成立と展開について、日本民俗学の生みの親である柳田国男の生涯と思想の問題と関連させながら考察し、現代における民俗文化のあり方とその行方を考える。	
			文化と歴史	様々な文化現象に関して、その歴史的観点から考察していく科目。人間生活全般の中で育まれてきた文化的事象や文物について、具体的な事物や事例に触れながら、その歴史的発展や時代的・社会的環境との関係を解き明かしていくことで、人間の文化的活動に関する深い理解と洞察力を養う。また通時的な視野に立ちながら、様々な時代の価値観や思考法の違いについて深く理解することも目的とする。	
			文化と生活	日本経済の成長に伴い、家庭生活における知的活動の向上が著しくなったのは、家庭での手仕事の省力化によるところが大きいといわれる。この家庭内における省力化を推し進めたのは、合理化のために生まれ、科学的産物として各家庭に広がりを増した各種機器である。この講義では、家庭生活を支える機器の誕生、普及と成熟といった歴史的な背景を理解し、科学技術の発展が家庭生活に与えた影響を理解する。また、各種機器の普及が、人間本来の五感の衰退を招いた実態に着目し、文化的生活と引き換えに人間が失ったものについて理解することを目指す。	
			生活とデザイン	＜生活の中のデザインとしての器の美＞を学ぶ。日本の伝統的を生かしつつ、現代的でユニークな形態と実用性を兼備した器の美について、多角的に学ぶ。柳宗悦は日本民藝運動を起こして日本の手仕事を研究した。その子息の柳宗理は世界的な工業デザイナーであり、玩具のデザインやオブジェも手掛けた。その宗理に師事したプロダクト・デザイナーの立場から生活の中のデザインを考え、器に固有の美を＜用と形＞＜素材＞＜ものづくりの現場＞等の方面から考える。海外のすぐれた器との比較研究も行い、デッサンやオブジェの作成などの実技も行う。展覧会も紹介する。	
			色彩とデザイン	モノがあるいは色がなぜ見えるかについて、この世で初めて科学的に考察したのは、ギリシャの自然哲学者だった。そして現代社会において、色彩を使うときに大事なことは、色の本質を知り、色をよく感受できているかという点である。同時に、デザインが意味するところや、与える影響を考えることも大切である。それら人間の知覚の要素である色彩やデザインについて正確な知識を身につけ、女性として豊かに社会との繋がりを築くことを目的として、幅広い観点から色彩とデザインについて講義を展開する。	
			舞台芸術Ａ	日本でもミュージカルに対する認識が、アメリカやヨーロッパなどと同じく最近変化してきている。東京では劇場の数も、観劇人口も増え、外国の作品だけでなく、日本のオリジナル作品もたくさん上演されるようになってきている。文学・音楽・舞踊・演劇・美術の総合芸術としてのミュージカルの魅力を探る。オペラが起源といわれ、大衆娯楽文化から芸術文化になるまでの歴史を学ぶ。特に音楽を中心に研究し、それぞれの時代の特徴を考察することをねらいとする。	

専門科目	専門選択科目	芸術文化領域	舞台芸術Ｂ	舞台芸術を通し日本の文化を学ぶ。世界で唯一の少女歌劇である宝塚歌劇団の出発期から現在までの歴史的な流れを中心に講義を展開する。100年続く宝塚歌劇団は、質の高い音楽表現・舞台機構・社会的思想・身体表現を常に提供してきた。その特質を分析し考察しながら理解を深める。さらに、作品内容や芸術性を追求していく。講義内容は、宝塚の歴史・小林一三の経済観・衣装の特徴・ビジネス性・化粧の特徴・舞台機構・芸術性・音楽性・舞踊・演劇・作法・表現・原作などである。	
			身体と表現	芸術の発生が舞踊に始まるという考え方があるように、人間の営みと舞踊表現は密接にかかわってきた。太古から人間は大いなる力を畏怖し、祈り、歌い、踊った。歌と舞踊を持たない民族はいないといってよい。古代の祭儀における神への捧げものとしての舞踊から、人々が自ら楽しみ熱狂する民俗舞踊、演者と観客とが分かれる芸術舞踊まで、古今東西の舞踊の変遷を辿りながら、身体と表現の関係性をひも解き、表現が身体にどのように関わり、身体が表現にどのような影響を及ぼしてきたのかを考察し、身体による表現の可能性について探求する。	
			映像文化論	映像テクストの範囲や特性、その成立の歴史を理解したうえで、映像テクストのさまざまな分析方法について学ぶ。特に、具体的な作品を分析し、その特質を分析的に理解できるようになることを目的とする。また、写真・映画の誕生、アニメーションの表現技術の展開、映画映像史について概観する。そのうえで、映画やテレビドラマそしてアニメーションなどの映像作品を個別具体的に取り上げ、種々の分析理論を用いながら映像テクストを分析する。また、映像表現の物語性の構築の歴史的な展開など現代の映像テクストの歴史を概観する。	
			芸能の世界	人々を魅了する演劇はいかに誕生し継承されてきたのか。この問題を、日本の古典芸能である歌舞伎を取り上げて検証する。 第一に能や狂言の影響を受けつつも江戸の庶民娯楽として発展し、小説や浮世絵に与えた影響を考える。第二に神の祭りという宗教的性質があること。市川団十郎の「にらみ」などを取り上げる。第三に世界で初めての回り舞台などの舞台芸術・演出などを考える。第四に商品広告などのメディアとしての役割をみてみる。その他、西洋演劇やアジアの演劇との比較やミュージカル・宝塚等にも対象を広げて考究する。	
		日本語・日本文学領域	日本文学論Ａ	古代から歌われ続けてきた和歌の価値と役割について理解し、日本文学および日本文化に対する基礎的知識を習得することを目的とする。古代の貴族たちにとって、宮中行事の場や日常生活の折々で、和歌の贈答はなくてはならないものだった。当然ながら日本文学においても和歌は重要な位置を占めている。そのような和歌の価値を文学史上、最初に示した『古今和歌集』を中心に取り上げ、季節のとらえ方や作歌技巧などを学ぶとともに、他の文学作品との関わりについて考察していく。	
			日本文学論Ｂ	日本文学に関する基礎的な専門教養を身につける科目である。近代や現代の歴史的環境を背景に具体的なテクストについて、ジャンル、ジェンダー、階級、文体、記憶、環境、メディア、テクノロジー、間テクスト性等、さまざまなテーマを身近な事例を通して考察する。娯楽としてではなく、確かな問題意識に基づいて能動的に文学テクストを読解するための基礎的な学修を目的とする科目である。	
			日本文学論Ｃ	主題論的に日本文学の特質を考察する。文学的な表現の基盤にはそれを生み出した人々の精神・思想が存在する。そうした精神構造・思想と表現がどのように関わって表現世界が生み出されるのかを理解することを目的とする。万葉集・日本霊異記などのテキストを読み解きながら、カミとホトケの葛藤や他界観の変容、無常観の形成など、日本に仏教が入ってくることでそれまでの在来の信仰世界を生きた人々の精神世界がどのように変容したのかについて理解を深める。	
			日本文学研究Ａ	平安時代の文学と時代背景について学び、王朝文学の構造を読み解くことを目的とする。女流文学隆盛期とされる平安時代は、文学も政治的背景の上に成り立つ徹底的な男性優位社会だった。その構造を明らかにするために、宮廷女房の代表的作品である『枕草子』を取り上げ、同時代を扱う歴史物語である『栄華物語』と『大鏡』を対照させながら読んでいく。作品内に書かれていない歴史的背景を周辺資料から探ることによって、『枕草子』の新しい読み方と王朝文化の内実を解き明かしていく。	
			日本文学研究Ｂ	日本文学に関するより専門的な教養を身につける科目。近代文学および現代文学について、具体的なテーマに即して考察する。近現代の歴史的背景に基づく文学テクストや文学事象に内在する問題についてより専門的な視点から学ぶことで、問題摘出力や考察力を身につけることを目的とする。また歴史学や社会学、哲学、言語学、精神分析学等の隣接学問との学際的な相関を学ぶことで、人文学的教養を広げることも目的とする科目である。	
			日本文学研究Ｃ	主題論的に日本文学の特質を探究する。近代的な文学概念をふまえながら、幻想文学というジャンルがどのような特質を持ち、どのように成立したかを理解したうえで、個別の作品を読み解き、それぞれの幻想文学としての特徴を探りながら、その作品を生み出す基盤について検討することを目的とする。西洋的な近代小説とはやや遠いところに位置する、声や身体による伝承と深くつながりを持ち、民俗的な想像力を豊かな土壌として生み出されたと考えられる文学作品などを取り上げ、文学表現としての幻想性を考察する。	

専門科目	専門選択科目	日本語・日本文学領域	児童文学	子ども時代に親しんだ児童文学を、グローバルな視座から考究する。昔話の本質は「人間存在の真相を示す」と言われる。また、マックス・リュティは「昔話は、どんな材料でも簡潔にまとめ、純化してしまう様式形態をもった含世界性の冒険物語である」という。日本のおとぎ話の源流は中世のお伽草子であり、その比較研究を行う。海外のグリム童話や不思議の国のアリスの成立や作品分析をする。また紙芝居は近代日本のオリジナルな文化であり、ベトナムに文化輸出もされた。あわせて、昔話の朗読練習や、国際子ども図書館の見学も行う。	
			物語分析	文学作品、芸術作品、都市空間等のさまざまなテクストを分析的に読解するための文芸学の基礎を学ぶ。記号論や身体論等の文芸理論の方法と知見を、初学者向けに分かりやすく解説し、実践的に学ぶ。テクストに対する印象や感想を、分析的に言語化することを通じて、論理的思考力や言語表現力を磨き、批評的思考を養うことを目的とする科目である。	
			漢詩・漢文に親しむ	日本文学にも大きな影響を与えた中国の古典小説の中から、傾向の異なる短編作品を少しずつ取り上げ、その多様な世界を、原文を通して味わうことを目的とする。取り上げる作品は、志怪（中国の怪談）、伝奇小説（唐代の恋愛物語や変身譚など）、公案小説（中国のミステリー）である。原文を扱うが、漢文の得手不得手に関わらず、漢文の基礎が身につくような講義を行う。やさしい文章を読みながら、白文・訓読・現代語訳の関係を学べるようにする。	
			日本語学A	上代から現代までの日本語の変化とその要因を、音韻、文字、語彙、文法、文章・談話などの様々なレベルにおいて理解する。各時代の言語生活が反映された文献を比較・検討することで、その時代を生きた人々の言語生活を理解し、当時の人びとの言語意識を探る。また、古い時代のことばを、現代語から切り離された過去の言語活動の記録として捉えるのではなく、現代語への影響やその残存を意識しながら、日本語の成立を通時的に捉える。さらに、研究資料や各種文献、古辞書の扱い方を学び、日本語の歴史を捉えるための基礎力を身につける。	
			日本語学B	日本語に関する言語研究で明らかになった知見を元に、ことばと社会との関わりについて考えながら、様々な問題発見を実践的に身につけていくことを目的とする。また、単なる知識の伝授だけでなく、考えるプロセスの訓練を行う。主に日本語のバリエーションを社会とのかかわりからとらえる社会言語学の手法を用いる。言語使用者の属性・使用場面、言語行動、言語生活、言語接触、言語変化、言語意識などの観点から日本語の様相を概観すると同時に、社会生活においてことばがどのように使用されているかについて、ケーススタディとして学んでいく。	
			日本語学研究A	私達の身の周りに存在する様々な日本語をデータに、その表現の工夫や面白さを考える。例えば、新聞・雑誌・広告などの身近なメディアの表現や、日々進化するコミュニケーションツールの表現に注目し、身近な言語現象にみられる工夫やそのメカニズムを理解する。また、受講生自らが興味をもったデータを収集、帰納的に分析することで、それぞれのデータに反映された文化のあり方を考察する。さらには、グローバルな視点でことばと文化を考えることで、当該地域の生活および文化と各種言語は、相互に影響し合っていることを理解する。	
			日本語学研究B	日本の地域言語を学ぶ中で、地域とは何か、日本とは何かを考えていく。母語として特に気づくこともなく使っている日本語を、言語研究で明らかになった成果を元に、考察していくことを目的とする。単なる知識の伝授だけでなく、考えるプロセスの訓練も行う。特に、ことばと地域との関わりについて考えながら、情報の目利きとして生きることの楽しさについても考えていく。	
			日本語音声学	日本語の音について考え理解することを目標とする。日本語の音声・音韻・リズム・アクセント・イントネーションについて概説する。音声学の基礎的な考え方について学習し、日本語音声・音韻・リズム・アクセント・イントネーションの具体的な記述と考察が、それぞれのレベルにあわせて得られることを目標とする。併せて、コンピューターを用いた音響音声学の基礎も学ぶ。	
		創作表現領域	硬筆書道	パソコン全盛の現代社会においても、硬筆は便利な筆記用具であり、手書きの美しい筆跡の果たす役割は大きい。そこで、まずは、文字を書く基本として、正しい姿勢やペンの持ち方を身に付ける。そのうえで、漢字・平仮名・片仮名などの字形、日常表記の漢字仮名交じり文の整え方等の基礎力を養い、実用書式（履歴書・手紙・封筒・葉書他）の実作を行う。また、後期は、応用編として、上級の硬筆書道のさまざまな技法を修得し、芸術性の高い創作表現を学習していく。また、臨書や鑑賞を通して、文字の美を感じ取る。なお、希望者には硬筆書写技能検定の受験指導も行う。	

専門科目	専門選択科目	創作表現領域	毛筆書道	前期は、中国唐時代までの書道史を学びつつ、基礎的な技法を身につける。具体的には、初唐の三大家（虞世南・欧陽詢・褚遂良）の楷書、書聖王羲之の行書などの名品を臨書する。さらに、暑中見舞いはがきの書き方、般若心経の写経など細字実用書を学ぶ。臨書を生かした創作にも挑戦する。後期は、日本独自の「和様の書」に注目し、日本の書道史について中国のそれと比較しながら理解を深める。そのうえで、平安時代の古筆を鑑賞し、かな文字の基礎練習を行ったり、干支を意識した年賀状制作を試みたりする。また、書道展の見学会など学外において書に親しむ活動を取り入れる。希望者には、毛筆検定の指導も行う。	
			創作ワークショップA	デザイン（Design）とは、視覚や触覚を駆使して自己表現し、生活を豊かにする営みのことである。狭い意味の模様作りやイラスト作成とは異なり、【視覚言語】としてのコミュニケーション（Communication）媒体である。つまりNon Verbal Communicationとして重要な手段である。創作を通じて、日常性の中にある視覚的な効果や影響力を認識し、自らが受け手であり発信者であることを自覚する。「人間にとって造形性は必要」を視点とし、形や色彩に関わる概念を再認識し、自らが造形することの喜びを体感すること、既成概念から離脱し、新たな造形性を発揮し造形的思考力を高めることを目的とする。	
			創作ワークショップB	小説の実践的な創作実習や作品の合評を通じて、表現能力を養うことを目的とする。まず小説の書き方を論じた著作・論考を取り上げ、その技法や理論を学び、創作方法に関する知識を学ぶ。更に実際に小説を創作しながら、文学を深く理解できるようにする。実作においては、教師による添削及び講評、受講者同士の合評を行い、各人の創作モチーフがより優れた表現作品として具現できるようにするとともに、作品に対する客観的な批評尺度を身につける。	
			創作ワークショップC	従来、専門的な技術者の分業によっていた出版・編集が、近年はコンピュータを使うことによって、簡単かつパーソナルに行えるようになってきた。この授業ではイラストレータとフォトショップというデザイナーにとっては定番のソフトを使用して、まずはマーク、イラスト、名刺やCDジャケットなどを作る。さらに描画した画像を、文字や写真とともに編集・デザインして最終的に本という形にまとめていく。素材の選び方、料理の仕方に よって、さまざまな表現の可能性があることを知り、実際に作品を制作する体験を通して、オリジナルな「自分の表現」を実践する。	
			創作ワークショップD	太古の昔から人間の生活に「装い」は不可欠であった。人間生活に密着している装いは時代の変遷とともに多様な文化表現の一つとなっていった。様々な装い（ファッション）に触れ、その基本的原理、特質を理解するとともに、自己、社会、現代を見つめ自己表現の手段として装うことを身につける。衣服の変遷、生地の種類、デザインの型、デザイナー、リサイクルファッションについての理解を深めながら、生地選び、デザイン、作成という行程を一貫して行う。	
			創作ワークショップE	美術の歴史は、人間の歴史と共に古い。美術には、もともと人間の一番大切なものを伝えたり、表したりする力がある。見えているものを伝える、目に見えない奥深い心の世界などを出現させる。主に視覚や触覚を通して“もの”に関わり、感じたり考えたり心を表したりする造形行動は、生活をより豊かにする営みであり、人間同士理解し合える手段として欠かせない行動のひとつである。その造形行動の大切さや楽しさを体中の感覚を駆使して再認識してもらうことが第一のねらいであり、自己の感性を再認識し自己の価値観を多様にすることになる。	
		総合文化領域	図書の文化	社会的記憶装置である図書館、著作者の思想や情報が表現された図書（書物）の歴史を概説する。具体的には、図書（書物）を中心とするメディアの生産（印刷）、普及、流通、利用の歴史を踏まえながら、国内外を含む図書館の歴史的発展と社会的役割について考える。とりわけ、図書（書物）を活用する場が形成されることにより、人々が集まる場が形成され、新たな活動へと展開した。図書（書物）と人との関わりを辿ることにより、図書（書物）と図書館の本質を考え、現代社会における図書の意義を探究する。	
			くらしと日本語	日々のくらしの中で、私たちは場面に見合った言語行動を選択する。本講義では、生活における具体的な場面を取り上げ、私たちの言語行動が場面によって規定されていることを理解する。たとえば、子育て場面に注目することで、言語レベルが異なる子どもとのコミュニケーションの姿を分析する。また、医療場面や介護場面のような非対称的な人間関係において、どのような会話がなされているのかを具体例をもとに考える。さらに、放送〈、インターネット〉などのメディアのことばに注目することで、情報を正しく判断する力を身につけ、不特定多数の人びとに発信する際のことばの工夫を探る。	
			データコレクション入門	様々な問題や疑問を解決するために、データを集め、集めたデータを使って考えるための方法を学ぶ。調査票調査（いわゆるアンケート調査）だけではなく、多様な調査研究法についても学び、適切な調査方法を選択し、考察できるようになることを目標とする。統計学の基礎とSPSSによるデータ分析の基礎を学ぶ。	

専門科目	専門選択科目	総合文化領域	比較文化論	世界の文化にはそれぞれの固有の様式がある。その文化とは何か。文化の相違を人々はどのように捉えてきたのか。自文化と異文化の違いについて対照して、異文化の存在とその様式の相違について考察を深める。異なる時代や異文化の諸事例を紹介しながら、自文化の持つ非常識・常識の概念を見つめ直し、自らの日常生活の文化を真摯に捉え学ぶことで、自己と他者をめぐる深い洞察力、理解力を養い、グローバル社会で他国の人たちと対峙する際に必要な視野を形成する。	
			外国文化論Ａ	欧米の文化が生み出し育んだ思想や文化は、世界経済・政治、日常生活における習慣、娯楽、芸術などに大きな影響を与えてきた。欧米の文化とその歴史的背景を学問的に探求し、グローバル化時代における地域文化のあり方を探ることを目的とする。古代ギリシャ・ローマから継承されてきた諸要素を文学、芸術、映像文化などから読み解き、自文化との相違を理解し、欧米諸国の歴史、民族、社会、教育、文化、習慣などに対して深く理解する視点を得られるようにする。	
			外国文化論Ｂ	本講義では、戦後、様々な分野において日本と緊密な関係を構築し、今後更なる発展が予想されるASEAN諸国（東南アジア10ヵ国）を主に取り上げる。そして、それらの政治、経済、文化、宗教、社会、歴史等の基礎的な知識や、現状と今日的な課題等を幅広く包括的に学ぶとともに、日本と比較しながら各国の理解を深めていく。また、マクロ・ミクロの視点から、多様性がある共同体としてのASEANと日本との今後の関係の在り方、特に期待される日本の役割や貢献について議論し、考察する。	
			文化財研究	数多くのヒト・モノ・情報が集積された都市に焦点を当て、自治体の文化政策を踏まえながら、文化財と文化施設の公共的意義について考える。特に、保存という限られた視点ではなく、美術館や博物館、図書館、地域文化施設などによる文化財や貴重書等の利活用を通した市民参画やコミュニティ創生の観点から、文化財を活かして都市文化を創り、地域社会の「広場」（文化財に基づく広場）を形成する事例を中心に概説し、都市と現代社会のあり方を考察する。	
			日本文化研究	日本の宗教文化の基層を考察する。日本の古代において、神霊や精霊、妖怪、魔物など超自然的存在はひっくるめて「モノ」と呼ばれ、ときに「タタリ」というかたちで、人間に災厄をもたらし、霊異を体験させてきた。古代の人々はそれを畏怖し、占いや祭祀などのさまざまな手段で交渉してきたが、古代の神話・説話・史書などのなかにあらわれた、そうした超自然的存在との交渉を読み解いて「モノ」「モノノケ」の諸相を把握し、それらを生み出した人々の精神構造を探究する。	
			比較文化研究	具体的な複数の文化を比較対照することで、その差異と同一性について考察していくとともに、互いの他者性を理解することを目的とする。異文化どうしのつながりと、それぞれの違いとを具体的な事例を通して見ていきながら、異文化と自らの文化とを相対的に理解する視点を養う。また特定地点で生じざるを得ない視野や思考の偏りを知ることで、グローバル社会の現場において、相手の立場について想像力を働かせる努力ができるようになることを目指す科目である。	
			テーマで触れる芸術	ひとつのテーマを軸に芸術作品や芸術文化について学ぶ。「テーマ」という観点から芸術作品や作品群を捉え、その描かれ方を分析的に紹介する。取り扱う作品に関しては、特定のジャンルや時代、地域等を限定せずに、むしろ人間生活の様々な局面に即しながら芸術作品が成立する様子を学際的に探っていく。芸術の諸相と人間生活の多様な側面とのつながりについて理解を深めることを目的とする科目である。	
			テーマで読む文学	優れたファンタジーの名産地であるイギリス文学の作品を鑑賞、批評する方法を身につけ、新たな時代の創生を描く「ファンタジー文学」の効用について考察する。ファンタジー的要素の濃い文学作品を習慣、風俗、伝統、歴史、宗教、思想、言語、民族意識などの観点から多角的に概観し、ファンタジー文学の特質を深く理解するとともに、人間とは何か、自己とは何か、生きるとは何かという時代を超えた人生のテーマが描かれた、高度な文学的意図を持つ「ファンタジー文学」を理解する契機とする。	
			神話・伝承学	神話は、人類が文字を持たない時代から、自分たちを取り巻く世界をどのように理解してきたかという世界観の表明であり、物語の形であらわされた原初の哲学と言ってよいものである。神話や伝承に関する基礎的な知識を身に着けたうえで、古事記や風土記、さまざまな民間伝承などを読み解いていく。神話や伝承を単なるお話ととらえるのではなく、世界との関係を理解し調整するための知的な活動に基づく言説としてとらえ、独自の表現を支える神話や伝承の想像力のありようを理解し、神話や伝承を生み出した人々の精神世界を探求する。	
			笑いの文化	古来から芸能・文芸は、笑い・ユーモアを我々に提供し、ゆとりある人生を送るための必須要素として位置づけられれてきた。現在、社会人としてユーモアの完成を身につけ笑いを生み出せる人間は、潤滑な人間関係を築けるとして、非常に重要視されている。様々なジャンル、地域、文化の笑い・ユーモアに触れ、その構造、特徴、社会的役割について分析し、笑い・ユーモアを通して文化や言語の差異からくる異文化理解の難しさについて考察する。	

専門科目	専門選択科目	総合文化領域	マンガ・アニメ文化論	マンガやアニメーションの歴史的な文脈を探りながら、私たちの社会や文化、日常生活の中でマンガとアニメが果たしてきた役割を考察することを目的とする。マンガとアニメーションは、戦後日本の代表的なポピュラー文化として相互に影響を与えながら発展し、「ソフト・パワー」として現在日本の産業を支える重要なコンテンツになっている。その理由について社会学、歴史学、文化研究、メディア論、表象論、文学理論などの理論や方法論中心に紹介する。また、制作の現場がどのように展開されているかを学ぶために、マンガやアニメーションの制作に関わっている特別講師を招聘し、現場の実際を体験する。	
			ディズニー研究	ディズニー映画の歴史的変遷をたどりながら、ディズニー映画の世界の特質とそれらが与える影響、役割について社会学的に文化人類学的など様々な視点から分析することを目的とする。また、映画の原作となっている作品と比較しながら、神話・伝承にまで遡り、人々の習慣、信仰、風俗、歴史、教育などについて理解を深め、単なるエンター・テイメントとしてではなくディズニー映画の本質を見極める視点を養う。	
			多元文化論	アメリカ大陸の「発見」にはじまり、先住民との出会い、アフリカからの奴隷売買、南北問題、公民権運動、日系移民、ヒスパニック、さらにはイスラム教とグローバリズムの問題など、さまざまな文化の接触・衝突・融合の現場と言ってよいアメリカの歴史・文化をたどりながら、さまざまな文化が接触・融合・衝突する過程においてどのような問題を発生させるのか、また多元的な文化がどのように共生の方向を見出しうるのか、といった課題を考察する。	
	卒業研究		卒業研究	新しい事実・解釈を発見し、技術・方法を発明し、創意工夫できる研究力は、たとえささやかでも、社会に役立つ人として生き抜く糧となる。こうした問題発見・解決につながる力を高めるよう、指導教員とともに設定した課題について、研究方法の基本（計画→実行→評価）や取り組む態度を学びつつ、研究を進める。卒業論文として取りまとめたり、研究成果の発表会を行ったりと、学びの集大成として公表する。知的感性を磨き、科学的視点を育むことをも目指す。	

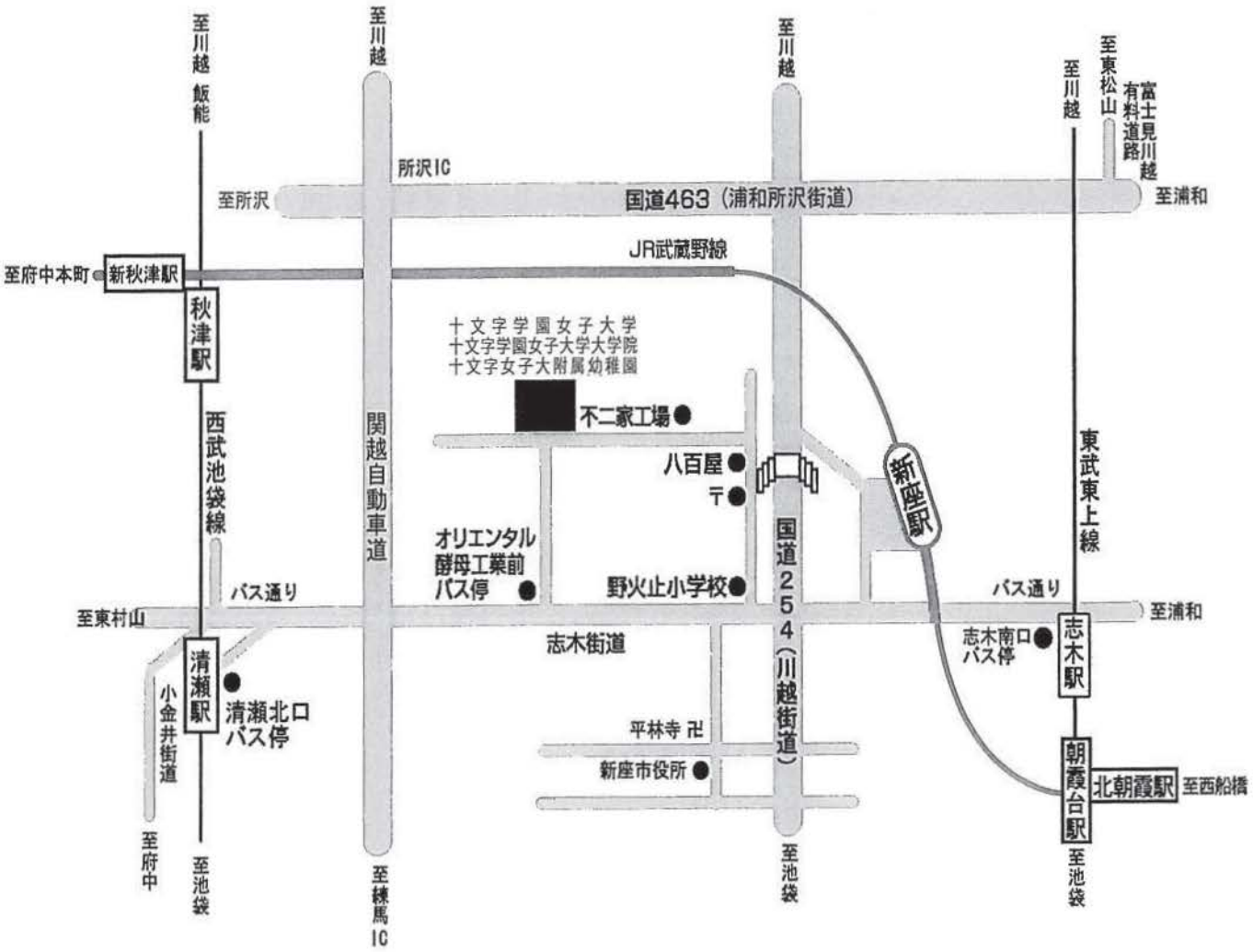
（注）

1　開設する授業科目の数に応じ，適宜枠の数を増やして記入すること。

2　私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合，大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は，この書類を作成する必要はない。

群馬県
栃木県
茨城県
千葉県
長野県
山梨県
東京都
上里町
本庄市
神川町
美里町
深谷市
熊谷市
行田市
羽生市
北川辺町
加須市
大利根町
栗橋町
長瀞町
寄居町
騎西町
鷲宮町
皆野町
鴻巣市
久喜市
幸手町
嵐山町
滑川町
菖蒲町
東秩父村
小川町
吉見町
杉戸町
小鹿野町
北本市
白岡町
宮代町
東松山市
桶川市
伊奈町
蓮田市
ときがわ町
鳩山町
川島町
春日部市
上尾市
横瀬町
越生町
坂戸市
鶴ヶ島市
松伏町
秩父市
毛呂山町
川越市
さいたま市
越谷市
吉川町
飯能市
日高市
ふじみ野市
狭山市
富士見市
川口市
三郷市
三芳町
志木市
蕨市
草加市
八潮市
入間市
朝霞市
戸田市
所沢市
和光市
鳩ヶ谷市
新座市
十文字学園女子大学
十文字学園女子大学大学院
十文字女子大附属幼稚園

十文字学園女子大学
十文字学園女子大学大学院
十文字女子大附属幼稚園



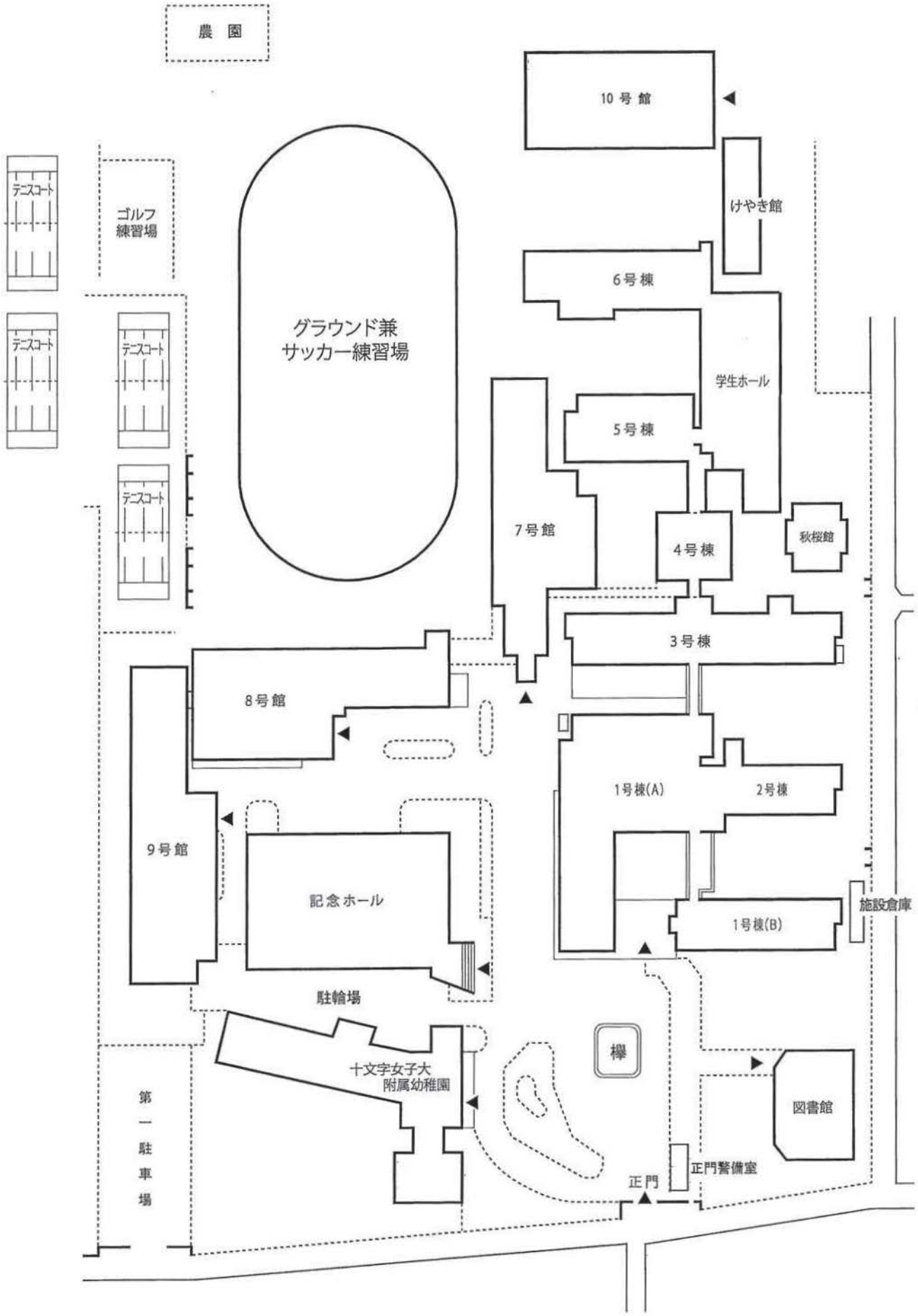
●ＪＲ武蔵野線新座駅下車、徒歩８分

●東武東上線「志木駅」発「清瀬駅」行きバス

●西武池袋線「清瀬駅」発「志木駅」行きバス

ともにオリエンタル酵母工業前下車、徒歩５分

建物配置図


農園
10号館
けやき館
テニスコート
ゴルフ練習場
グラウンド兼サッカー練習場
6号棟
学生ホール
テニスコート
テニスコート
5号棟
テニスコート
7号館
4号棟
秋桜館
3号棟
8号館
1号棟(A)
2号棟
9号館
記念ホール
施設倉庫
1号棟(B)
駐輪場
欅
十文字女子大附属幼稚園
図書館
第一駐車場
正門警備室
正門

十文字学園女子大学学則（案）

第１章　総則

（目的）

第１条　十文字学園女子大学（以下「本学」という。）は、建学の精神「身をきたへ　心きたへて　世の中に　たちてかひある　人と生きなむ」に基づき、社会の要請に応じる学術の理論と応用を教育研究することによって、社会・文化の発展に貢献する人間性豊かな人材を育成することを目的とする。

２　本学は、学部・学科の人材の育成に関する目的その他の教育研究上の目的を別表のとおり定める。

第２章　教育研究組織

（学部及び学科）

第２条　本学に人間生活学部及び次の学科を置き、その入学定員及び収容定員は、次のとおりとする。

	入学定員	編入学定員３年次	収容定員
幼児教育学科	１９０名	５名	７７０名
児童教育学科	９０名	５名	３７０名
人間発達心理学科	１４０名	５名	５７０名
人間福祉学科	１００名	５名	４１０名
健康栄養学科	８０名	５名	３３０名
食物栄養学科	１２０名	１０名	５００名
文芸文化学科	７０名	５名	２９０名
生活情報学科	１００名	５名	４１０名
メディアコミュニケーション学科	８０名	５名	３３０名

（留学生別科）

第３条　本学に留学生別科を置く。

２　留学生別科に関し必要な事項は、別に定める。

（大学院）

第４条　本学に大学院を置く。

２　大学院の学則は、別に定める。

（図書館）

第５条　本学に、図書館を置く。

２　図書館に関し必要な事項は、別に定める。

（機構）

第６条　本学に、地域連携推進機構を置く。

２　機構に関し必要な事項は、別に定める。

（情報センター）
第７条　本学に、情報センターを置く。
２　情報センターに関し必要な事項は、別に定める。

（健康管理センター）
第８条　本学に、健康管理センターを置く。
２　健康管理センターに関し必要な事項は、別に定める。

（２１世紀教育創生部）
第９条　本学に、２１世紀教育創生部を置き、次のセンターを設ける。
一　キャリア教育センター
二　リメディアル教育センター
三　教職課程センター
四　特別支援教育センター
２　２１世紀教育創生部に関し必要な事項は、別に定める。

（研究センター）
第１０条　本学に、必要に応じて研究センターを置くことができる。
２　研究センターに必要な事項は、別に定める。

第３章　修業年限及び学年暦

（修業年限及び在学年限）
第１１条　学部の修業年限は、４年とする。
２　学生は８年を超えて在学することができない。ただし、第２６条第１項又は第２７条第１項の規定により入学した学生は、第２６条第３項又は第２７条第３項の規定により定められた在学すべき年数の２倍に相当する年数を超えて在学することができない。

（学年及び授業期間）
第１２条　学年は、４月１日に始まり、翌年３月３１日に終わる。
２　１年間の授業を行う期間は、３５週にわたることを原則とする。

（学期）
第１３条　学年を次の２学期に分ける。
前期　４月１日から９月３０日まで
後期　１０月１日から翌年３月３１日まで

（休業日）
第１４条　休業日は、次のとおりとする。
一　日曜日
二　国民の祝日に関する法律（昭和２３年法律第１７８号）に規定する休日
三　学園創立記念日　２月１５日

四　春季休業日　３月２１日から３月３１日まで
五　夏季休業日　８月１日から９月１０日まで
六　冬季休業日　１２月２３日から翌年１月６日まで
２　必要がある場合は、学長は、前項の休業日を変更し、又は休業日に授業（実習を含む。）を課すことができる。
３　第１項に定めるもののほか、学長は、臨時の休業日を定めることができる。

第４章　職員組織

（職員組織）
第１５条　本学に、次の職員を置く。
一　学長及び副学長
二　教授、准教授、講師、助教及び助手
三　学長が必要と認めたときは、学長補佐を置くことができるものとし、教授又は准教授をもって充てる。
四　事務職員、技術職員及びその他必要な職員

（職員の職務）
第１６条　職員の職務に関し必要な事項は、別に定める。

第５章　運営会議

（運営会議）
第１７条　本学に、大学及び大学院の運営に関する重要な事項を審議するため運営会議を置く。
２　運営会議の組織及び運営に関し必要な事項は、別に定める。

第６章　教授会

（教授会）
第１８条　本学に、教授会を置く。
２　教授会の組織及び運営に関し必要な事項は、別に定める。

第７章　協議会

（協議会）
第１９条　本学に、大学及び大学院の重要な事項を協議するため協議会を置く。
２　協議会の構成及び運営に関し必要な事項は、別に定める。

第８章　事務局

（事務局）
第２０条　本学に、事務局を置く。
２　事務局に関し必要な事項は、別に定める。

第９章　入学

（入学の時期）
第２１条　入学の時期は、学年の始めとする。ただし、再入学及び転入学並びに外国人留学生については、学期の始めとすることができる。

（入学資格）
第２２条　本学に入学することのできる者は、次の各号の一に該当する女子とする。
一　高等学校又は中等教育学校を卒業した者
二　通常の課程による１２年の学校教育を修了した者
三　外国において、学校教育における１２年の課程を修了した者又はこれに準ずる者で文部科学大臣の指定した者
四　文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者
五　専修学校の高等課程（修業年限が３年以上あることその他の文部科学大臣が定める基準を満たすものに限る。）で文部科学大臣が別に指定するものを文部科学大臣が定める日以降に修了した者
六　文部科学大臣の指定した者
七　高等学校卒業程度認定試験規則（平成１７年文部科学省令第１号）により文部科学大臣の行う高等学校卒業程度認定試験に合格した者（同規則附則第２条の規定による廃止前の大学入学資格検定規程（昭和２６年文部省令第１３号）により文部科学大臣の行う大学入学資格検定に合格した者を含む。）
八　その他本学において、個別の入学資格審査により、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、１８歳に達した者

（入学の出願）
第２３条　本学に入学を志願する者は、入学願書に所定の入学検定料及び別に定める書類を添えて願い出なければならない。

（入学者の選考）
第２４条　前条の入学志願者については、別に定めるところにより選考を行う。

（入学手続き及び入学許可）
第２５条　前条の選考の結果に基づき合格の通知を受けた者は、所定の期日までに、誓約書その他別に定める書類を提出するとともに、所定の入学登録料を納付しなければならない。
２　学長は、前項の入学手続を完了した者に入学を許可する。

（編入学）
第２６条　次の各号の一に該当する女子で、本学への編入学を志願する者には、別に定め

るところにより選考の上、相当年次に入学を許可する。ただし、学科において編入学についての制限を設けたときは、この限りではない。

一　大学、短期大学又は高等専門学校を卒業した者

二　大学に２年以上在学し、６２単位以上修得した者

三　修業年限が２年以上で、かつ、課程の修了に必要な総授業時数が１，７００時間以上である専修学校の専門課程を修了した者（ただし、学校教育法第９０条に規定する大学入学資格を有する者に限る。）

四　外国において学校教育における１４年の課程を修了した者

五　前各号に定める者のほか、法令等で大学に編入学ができると定められた者

２　前項の編入学志願者に対する取り扱いについては、第２３条、第２４条及び第２５条の規定を準用する。

３　前項の規定により入学を許可された者の既に修得した授業科目及びその単位数の取り扱い並びに履修すべき授業科目及び在学すべき年数については、教授会の議を経て学長が決定する。

（転入学及び再入学）

第２７条　大学を卒業した者又は退学した者で、本学に転入学又は再入学を志願する者があるときは、別に定めるところにより選考の上、相当年次に入学を許可することができる。ただし、学科において転入学についての制限を設けたときは、この限りではない。

２　前項の選考に合格した者の入学手続き及び入学許可については第２５条の規定を準用する。

３　前項の規定により入学を許可された者の既に修得した授業科目及びその単位数の取扱い並びに履修すべき授業科目及び年数については、前条第３項の規定を準用する。

第１０章　教育課程

（授業科目の区分、免許、資格）

第２８条　授業科目の区分は、共通科目及び専門科目に分ける。

２　授業科目、履修方法及び単位数は別に定める。

３　教育職員免許状を受けようとする者は、教育職員免許法（昭和２４年法律第１４７号）及び同法施行規則（昭和２９年文部省令第２６号）に規定する授業科目及び単位を修得するものとする。

４　保育士資格を得ようとする者は、児童福祉法施行規則（昭和２３年厚生省令第１１号）に規定する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

５　栄養士の資格（管理栄養士国家試験受験資格）を得ようとする者は、栄養士法（昭和２２年法律第２４５号）に規定する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

６　社会福祉士の受験資格を得ようとする者は、社会福祉士及び介護福祉士法（昭和６２年法律第３０号）に規定する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

７　介護福祉士の受験資格を得ようとする者は、社会福祉士及び介護福祉士法に規定する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

８　図書館司書の資格を得ようとする者は、図書館法施行規則（昭和２５年文部省令第２７号）の規定に基づき本学が定める図書館に関する授業科目を履修し、その単位を修得しなければならない。

９　学芸員の資格を得ようとする者は、博物館法施行規則（昭和３０年１０月４日文部科学省令第２４号）の規定に基づき本学が定める博物館に関する授業科目を履修し、その単位を取得しなければならない。
10　その他資格取得に関する事項は、別に定める。

（単位の計算方法）
第２９条　各授業科目の単位数は、次の基準により計算するものとする。
一　講義及び演習については、１５時間から３０時間までの範囲で、本学が定める時間の授業をもって１単位とする。
二　実験、実習及び実技については、３０時間から４５時間までの範囲で、本学が定める時間の授業をもって１単位とする。
２　前項の規定にかかわらず、卒業研究の授業科目については、学修の成果を評価して４単位とする。

（単位の授与）
第３０条　授業科目を履修し、その試験に合格した者には、所定の単位を与える。

（他大学等における授業科目の履修等）
第３１条　本学は、教育上有益と認めるときは、学生に他の大学又は短期大学の授業科目を履修させることができる。
２　前項の規定により修得した単位については、教授会の議に基づき、６０単位を超えない範囲で本学における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。
３　前２項の規定は、学生が外国の大学又は短期大学に留学する場合及び外国の大学又は短期大学が行う通信教育における授業科目をわが国において履修する場合について準用する。

（短期大学及び大学以外の教育施設等における学修）
第３２条　本学は、教育上有益と認めるときは、学生が行う短期大学又は高等専門学校の専攻科における学修その他文部科学大臣が別に定める学修を、教授会の議に基づき、本学における授業科目の履修とみなし、単位を与えることができる。
２　前項により与えることができる単位数は、前条第２項により本学において修得したものとみなす単位数と合わせて６０単位を超えないものとする。

（入学前の既修得単位の認定）
第３３条　本学は、教育上有益と認めるときは、学生が本学に入学する前に大学又は短期大学において履修した授業科目について修得した単位を、入学後の本学における授業科目の履修により修得したものとみなすことができる。
２　本学は、教育上有益と認めるときは、学生が本学に入学する前に行った前条第１項に規定する学修を本学における授業科目の履修とみなし、単位を与えることができる。
３　前２項により修得したものとみなし、又は与えることのできる単位数は、編入学、転入学、再入学の場合を除き、本学において修得した単位以外のものについては、第３１条及び前条第１項により本学において修得したものとみなす単位数と合わせて６０単位を超えないものとする。

（成績）
第３４条　授業科目の試験の成績は、Ｓ、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄの５種の標語をもって表し、Ｓ、Ａ、Ｂ、Ｃを合格とする。

第１１章　休学、転学、転学科、留学、退学及び除籍

（休学）
第３５条　疾病その他特別の理由により２カ月以上修学することができない者は、学長の許可を得て休学することができる。
２　疾病のため修学することが適当でないと認められる者については、学長は休学を命ずることができる。

（休学期間）
第３６条　休学期間は、１年以内とする。ただし、特別の理由がある場合は、１年を限度として休学期間の延長を認めることができる。
２　休学期間は、通算して４年を超えることができない。
３　休学期間は、第１１条第２項の在学期間に算入しない。
４　休学期間が満了したときは、願い出の有無に関わらず復学となる。ただし、休学期間中にその理由が消滅したときは、学長の許可を得て復学することができる。

（転学）
第３７条　他の大学への入学又は転入学を志願しようとする者は、学長の許可を得なければならない。

（転学科）
第３８条　本学の学生で、他の学科に転学科を志願する者は、別に定めるところにより相当年次へ転学科することができる。

（留学）
第３９条　外国の大学又は短期大学で学修することを志願する者は、学長の許可を得て留学することができる。
２　前項の許可を得て留学した期間は､第４２条に定める在学期間に含めることができる。

（退学）
第４０条　退学しようとする者は、学長の許可を受けなければならない。

（除籍）
第４１条　次の各号の一に該当する者は、教授会の議を経て、学長が除籍する。
一　授業料の納付を怠り、督促してもなお納付しない者
二　第１１条第２項に定める在学年限を超えた者
三　第３６条第２項に定める休学期間を超えてなお修学できない者
四　長期間にわたり行方不明の者
五　死亡した者
２　前項第一号により除籍となった者が当該除籍の事由となった未納の授業料に相当する

額を納付して復籍を願い出た場合は、審査の上これを許可する場合がある。
３　復籍に関し必要な事項は、別に定める。

第１２章　卒業

（卒業要件）
第４２条　本学を卒業するためには、４年以上在学し、所定の授業科目について各学科とも１２４単位以上を修得しなければならない。

（学位）
第４３条　前条の要件を満たした者については、教授会の議を経て、学長が卒業を認定し、次の区分に従い学士の学位を授与する。

幼児教育学科	学士（教育学）
児童教育学科	学士（教育学）
人間発達心理学科	学士（心理学）
人間福祉学科	学士（社会福祉学）
健康栄養学科	学士（栄養学）
食物栄養学科	学士（栄養学）
文芸文化学科	学士（文学）
生活情報学科	学士（社会情報学）
メディアコミュニケーション学科	学士（コミュニケーション学）

第１３章　賞罰

（表彰）
第４４条　学生として表彰に値する行為があった者は、十文字学園女子大学・同短期大学部学生表彰規程の定めるところにより、学長がこれを表彰する。

（懲戒）
第４５条　本学の規則に違反し、又は学生としての本分に反する行為をした者は、教授会の議を経て、学長が懲戒する。
２　前項の懲戒の種類は、退学、停学及び訓告とする。
３　前項の退学は、次の各号の一に該当する者に対して行う。
　一　性行不良で改善の見込みがないと認められる者
　二　学力劣等で成業の見込みがないと認められる者
　三　正当な理由がなくて出席正常でないと認められる者
　四　本学の秩序を乱し、その他学生としての本分に著しく反した者

第１４章　科目等履修生、研究生、特別聴講学生及び外国人留学生

（科目等履修生）
第４６条　本学において、特定の授業科目を履修することを志願する者があるときは、本

学の教育に支障のない限りにおいて、選考の上、科目等履修生として履修を許可することがある。ただし、学科において科目等履修生についての制限を設けたときは、この限りでない。
２　科目等履修生に関し必要な事項は、別に定める。

（研究生）
第４７条　大学を卒業した者又はこれと同等以上の学力があると認められる者で、本学において、本学教員の指導の下に研究することを希望する者があるときは、選考の上、研究生として入学を許可することがある。
２　研究生に関し必要な事項は、別に定める。

（特別聴講学生）
第４８条　他の大学の学生で、本学において特定の授業科目を履修することを志願する者があるときは、当該他の大学との協議に基づき、特別聴講学生として入学を許可することがある。
２　特別聴講学生に関し必要な事項は、別に定める。

（外国人留学生）
第４９条　外国人で、大学において教育を受ける目的を持って入国し、本学に入学を志願する者があるときは、選考の上、外国人留学生として入学を許可することがある。
２　外国人留学生に関し必要な事項は、別に定める。

第１５章　検定料、入学登録料、授業料その他の費用

（検定料、入学登録料、授業料及び施設費の金額）
第５０条　本学の検定料、入学登録料、授業料及び施設費の金額は、次のとおりとする。

検定料	３５，０００円
入学登録料	１００，０００円
授業料	７５０，０００円
施設費	３００，０００円

２　第４２条に定める卒業要件を満たす単位が未修得のため、４年次終了後も引き続き在学する者のうち、一定の要件を満たす者に係る授業料及び施設費については別に定める。

（授業料等の納付）
第５１条　授業料及び施設費は、年額の二分の一ずつを二期に分けて、前期は４月、後期は１０月の指定された期日までに納付しなければならない。ただし、１年次に納付する授業料及び施設費に係る納付期限については、別に定めるところによるものとする。
２　特別の事情により授業料を納めることができない者又は所定の納期に納付が困難な者に対しては、願い出により分納又は延納を許可することがある。

（実験実習費）
第５２条　実験実習費は、別に納付しなければならない。
２　前条第２項の規定は、実験実習費について準用する。

（復学等の場合の授業料）
第５３条　前期又は後期の中途において復学又は入学した者は、復学又は入学した月から当該期末までの授業料を復学又は入学した月に納付しなければならない。

（学年の中途で卒業する場合の授業料）
第５４条　学年の中途で卒業する見込みの者は、卒業する見込みの月までの授業料を納付するものとする。ただし、第５１条第２項の規定の適用を受ける者についてはこの限りでない。

（退学、除籍及び停学の場合の授業料）
第５５条　前期又は後期の中途で退学し又は除籍された者の該当期分の授業料は徴収する。
２　停学期間中の授業料は徴収する。

（休学の場合の授業料、施設費及び実験実習費）
第５６条　休学を許可され又は命じられた者については、休学期間中の授業料、施設費及び実験実習費（以下「授業料等」という。）を免除する。
２　前項の規定にかかわらず、学期の中途で休学した者については、当該学期の授業料等は徴収する。ただし、休学後に復学した者については、納付された授業料等のうち、当該学期における休学期間中の授業料等に相当する額を復学後の授業料等に充当する。

（入学登録料、授業料の免除及び徴収の猶予）
第５７条　経済的理由によって納付が困難であり、かつ、修学に熱意があると認める場合又はやむを得ない事情があると認められる場合は、入学登録料、授業料の全部又は一部を免除し、又は徴収を猶予することがある。
２　入学登録料、授業料の免除及び徴収の猶予に関し必要な事項は、別に定める。

（納付した検定料等）
第５８条　第２３条及び第２５条第１項の規定により納付した検定料及び入学登録料は原則として返付しない。

（科目等履修生、研究生及び特別聴講学生の授業料等）
第５９条　科目等履修生、研究生及び特別聴講学生の検定料、登録料及び授業料に関し必要な事項は、別に定める。

第１６章　公開講座

（公開講座）
第６０条　社会人の教養を高め、文化の向上に資するため、本学に公開講座を開設することができる。

第１７章　点検評価等

（点検評価等）

第６１条　本学は、教育研究水準の向上を図り、大学の目的及び社会的使命を達成するため、本学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行う。
２　前項の点検及び評価に関し必要な事項は、別に定める。

第１８章　学則の変更

（学則の変更）
第６２条　この学則に変更の必要が生じたときは、学長は、教授会の議を経て変更することができる。

附　　則
１　この学則は、平成８年４月１日から施行する。
２　平成８年度から平成１１年度において社会情報学部社会情報学科の収容定員は第３条第１項の規定にかかわらず次のとおりとする。

平成８年度	１８０名
平成９年度	３７０名
平成１０年度	５８５名

附　　則
１　この学則は、平成９年４月１日から施行する。
附　　則
１　この学則は、平成１１年４月１日から施行する。
附　　則
１　この学則は、平成１２年４月１日から施行する。
２　平成１２年度から平成１５年度において社会情報学部コミュニケーション学科の収容定員は第３条第１項の規定にかかわらず次のとおりとする。

平成１２年度	１４５名
平成１３年度	２９０名
平成１４年度	４４５名

附　　則
１　この学則は、平成１３年４月１日から施行する。
附　　則
１　この学則は、平成１４年４月１日から施行する。
２　平成１４年度から平成１６年度において人間生活学部の収容定員は第３条第２項の規定にかかわらず次のとおりとする。

	幼児教育学科	食物栄養学科
平成１４年度	１００名	８０名
平成１５年度	２００名	１６０名
平成１６年度	３００名	２５０名

附　　則
１　この学則は、平成１５年４月１日から施行する。
附　　則
１　この学則は平成１６年４月１日から施行する。
２　平成１６年度から平成１８年度における社会情報学部の収容定員は第３条第１項の規

定にかかわらず次のとおりとする。

	社会情報学科	コミュニケーション学科
平成１６年度	７３５名	５８５名
平成１７年度	６７０名	５７０名
平成１８年度	６４０名	５５５名

３　平成１６年度から平成１８年度における人間生活学部人間福祉学科及び人間発達心理学科の収容定員は第３条第２項の規定にかかわらず次のとおりとする。

	人間福祉学科	人間発達心理学科
平成１６年度	６０名	８０名
平成１７年度	１２０名	１６０名
平成１８年度	１８５名	２４０名

附　則

１　この学則は平成１７年４月１日から施行する。

附　則

１　この学則は平成１７年４月７日から施行し、平成１７年４月１日から適用する。

附　則

１　この学則は平成１８年４月１日から施行する。

２　平成１７年度以前に入学した学生に係る授業料は、改正後の第４４条の規定にかかわらずなお従前のとおりとする。

附　則

１　この学則は平成１８年４月１日から施行する。

２　平成１８年３月３１日以前に入学し、引き続き在学する者及び平成１９年度までの編入学者に係る授業科目、履修方法及び単位数については、改正後の第２３条第２項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附　則

１　この学則は平成１８年３月２日から施行し、平成１７年４月１日から適用する。

附　則

１　この学則は平成１９年４月１日から施行する。

２　平成１９年度から平成２１年度における人間生活学部児童幼児教育学科幼児教育専攻及び児童教育専攻、ならびに幼児教育学科の収容定員は第３条第２項の規定にかかわらず、次のとおりとする。

児童幼児教育学科	幼児教育専攻	児童教育専攻
平成１９年度	１４０名	５０名
平成２０年度	２８０名	１００名
平成２１年度	４１０名	１５０名
幼児教育学科		
平成１９年度	３００名	
平成２０年度	２００名	
平成２１年度	１００名	

附　則

１　この学則は平成１９年４月１日から施行する。

附　則

１　この学則は平成１８年４月１日から施行する。

附　則

１　この学則は平成１９年４月１日から施行する。

２　第４５条第１項に定める授業料及び施設費の納付期日については、平成１９年度入学者から適用し、平成１８年度以前に入学し、引き続き在学する者及び平成２０年度までの編入学者については従前のとおりとする。

附　則

１　この学則は、平成２１年４月１日から施行する。

２　平成２１年度から平成２３年度における社会情報学部の収容定員は、第３条第１項の規定にかかわらず次のとおりとする。

	社会情報学科	コミュニケーション学科
平成２１年度	５８０名	５１５名
平成２２年度	５５０名	４９０名
平成２３年度	５２０名	４７０名

３　平成２１年度から平成２３年度における人間生活学部食物栄養学科及び人間発達心理学科の収容定員は、第３条第２項の規定にかかわらず次の通りとする。

	食物栄養学科	人間発達心理学科
平成２１年度	３８０名	３３５名
平成２２年度	４２０名	３５０名
平成２３年度	４６０名	３６０名

４　第２０条第１項及び第４４条第１項に定める入学登録料（入学金）については、平成２１年度に入学する者から適用する。

５　平成２０年度以前に入学した者に係る授業料は、改正後の第４４条第１項の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附　則

１　この学則は、平成２１年４月１日から施行する。

附　則

１　この学則は、平成２２年４月１日から施行する。

附　則

１　この学則は、平成２３年４月１日から施行する。ただし、社会情報学部社会情報学科、コミュニケーション学科、人間生活学部児童幼児教育学科、食物栄養学科、人間福祉学科、人間発達心理学科は、第２条の規定にかかわらず、平成２３年３月３１日に当該学科に在学する者が当該学科に在学しなくなるまでの間、存続するものとする。

２　第２条に規定する第３年次編入学定員については、平成２５年４月１日から施行する。

なお、社会情報学部社会情報学科、コミュニケーション学科、人間生活学部児童幼児教育学科幼児教育専攻、食物栄養学科、人間福祉学科、人間発達心理学科の第３年次編入学に係る学生募集は、平成２５年度から停止する。

３　平成２３年度から平成２５年度における人間生活学部の収容定員は、第２条の規定にかかわらず、次のとおりとする。

	幼児教育学科	児童教育学科	人間発達心理学科	食物栄養学科
平成２３年度	１５０名	５０名	１００名	１２０名
平成２４年度	３００名	１００名	２００名	２４０名
平成２５年度	４６０名	１５０名	３０５名	３７０名

	人間福祉学科	生活情報学科	メディアコミュニケーション学科
平成２３年度	６０名	１００名	１００名
平成２４年度	１２０名	２００名	２００名
平成２５年度	１８５名	３０５名	３０５名

４　平成２２年度以前に入学した者に係る授業料は、改正後の第４８条第１項の規定にかかわらず、なお、従前の例による。

附　則

この学則は平成２３年１０月１日から施行する。

附　則

１　この学則は平成２５年４月１日から施行する。

２　ただし、第１１条第２項に定める授業期間は、平成２４年４月１日から適用する。

附　則

１　この学則は平成２６年１月１日から施行する。

附　則

１　この学則は、平成２７年４月１日から施行する。

２　第２条に規定する第３年次編入学定員については､平成２９年４月１日から施行する。

３　平成２７年度から平成２９年度における人間生活学部の収容定員は、第２条の規定にかかわらず、次のとおりとする。

	幼児教育学科	児童教育学科	人間発達心理学科
平成２７年度	６６０名	２４０名	４５０名
平成２８年度	７００名	２８０名	４９０名
平成２９年度	７３５名	３２５名	５３０名

	人間福祉学科	健康栄養学科	食物栄養学科
平成２７年度	２９０名	８０名	５００名
平成２８年度	３３０名	１６０名	５００名
平成２９年度	３７０名	２４５名	５００名

	文芸文化学科	生活情報学科	メディアコミュニケーション学科
平成２７年度	７０名	４１０名	３９０名
平成２８年度	１４０名	４１０名	３７０名
平成２９年度	２１５名	４１０名	３５０名

別表

人間生活学部 　人間生活学部は、「生活学」、「女性学」を教育研究の中核とし、その具体的課題を人文、社会、自然の諸科学の成果を応用して追及するとともに、生活諸課題を合理的に解決し、発展させることのできる人材を育成することを教育研究上の目的とする。
幼児教育学科 　幼児教育学科は、感性レベル（感じて気づく）、認識レベル（考えて理解する）、行為レベル（かかわり合い表現する）という３つのレベルでの学びの統合をめざし、「子どもから学ぶ　子どもとともに育つ」という基本姿勢をもった保育者を養成する。人間理解力と関係発展力に富んだ創造的保育実践力があり、地域社会の中で様々な役割をもって人間の成長発達を支え、未来を切り拓く人材の育成を図ることを教育研究上の目的とする。
児童教育学科 　児童教育学科は、教育に関する基本的な知識と指導技術を確実に習得させるとともに、これらを活用し、学校教育の諸課題を解決する能力を獲得させる。同時に、本学と連携する教育委員会や学校等と協同し、教員としての実践的な指導力を獲得させる。このため学校教育の充実に資する研究を行うとともに、大学と地域の学校等での実体験を通した往還的な学びや経験をもとに、教員として必要な資質・能力を鍛錬し、実践的指導力を身につけさせる。よって、学校教育が抱える現代的な諸問題の解決に資する研究と教育を行う。
人間発達心理学科 　人間発達心理学科は、生涯発達に関する心理学的知見と態度及び技能を具備し、心理学的支援を要する人々についてカウンセリング・マインドを持って関わり支援できる人材を育成することを教育研究上の目的とする。
人間福祉学科 　人間福祉学科は、人生のあらゆる場面における実践的な福祉・援助の方策を探る社会福祉学に基づき、「生活の質」の向上や「地域」における「共生」に対する理解を背景として、相談援助、介護、保育に関する知識・技術を適切に応用できる能力を習得することを教育研究上の目的とする。
健康栄養学科 　健康栄養学科は、栄養学を基礎として、食・運動・教育に関する専門的知識や技術、指導力、実践力を習得することにより、健康のスペシャリストとしてすべての人々の健康生活のための学びと実践を支え、推進できる人材を育成することを教育研究上の目的とする。

食物栄養学科 　食物栄養学科は、科学的な根拠に基づく識見、企画力・指導能力、実践力を備えた感性豊かな食と栄養と健康の専門家となることのできる人材を養成することを教育研究上の目的とする。
文芸文化学科 　文芸文化学科は、ことばを有する人間によって生み出された文化・芸術を深く理解し、それに基づいて、新たな文化を創造、発信する人材を養成する。また、人間生活の全般において、人として知的に成熟することを目指す人間を育成することを教育研究上の目的とする。
生活情報学科 　生活情報学科は、ビジネス社会で求められる教養とコミュニケーション能力、ICT 活用能力を習得させ、自ら学び、考え、行動できる能力を備えて、変化の激しい社会に対応でき、第一線で活躍できる人材を育成することを教育研究上の目的とする。
メディアコミュニケーション学科 　メディアコミュニケーション学科は、高度情報社会の多様な情報を的確に判断するためのメディアリテラシーを身につけるとともに、様々なメディアの特性を生かして効果的に情報を表現、発信できる能力を備えて、社会生活の中で主体的に活動することのできる能力を育成する。そして、多様なメディアコンテンツ制作やメディア産業に関わる専門知識、最新のメディア情報技術を学修し、さらにそれら双方を実践的に結びつける企画力・編集力・実行力・分析力を身につけ、メディアに関わる社会の分野で総合的な能力を持ち主体的に活躍できる、柔軟で創造力のある人材を育成することを教育研究上の目的とする。

目　　次

ア　設置の趣旨及び必要性……p.1

イ　学部、学科等の特色……p.2

ウ　学部、学科等の名称及び学位の名称……p.3

エ　教育課程の編成の考え方及び特色……p.3

オ　教員組織の編成の考え方及び特色……p.5

カ　教育方法、履修指導方法及び卒業要件……p.6

キ　施設、設備等の整備計画……p.8

ク　入学者選抜の概要……p.10

ケ　資格取得……p.11

コ　企業実習や海外語学研修など学外実習を実施する場合は、その具体的計画……p.12

サ　編入学定員を設定する場合は、その具体的計画……p.13

シ　管理運営……p.13

ス　自己点検・評価……p.14

セ　情報の公表……p.15

ソ　授業内容方法の改善を図るための組織的な取組……p.17

タ　社会的・職業的自立に関する指導等及び体制……p.18

ア　設置の趣旨及び必要性

本学は平成 23 年度に社会情報学科とコミュニケーション学科からなる社会情報学部と児童幼児教育学科、食物栄養学科、人間福祉学科、人間発達心理学科からなる人間生活学部を統合し、新たな人間生活学部を設置した。これを本学では第一次教育体制改革と呼ぶ。

平成 23 年度に設置した新たな人間生活学部は、「生活学」を教育研究の中核とし、その具体的課題を人文、社会、自然の諸科学の成果を応用して追究するとともに、生活諸課題を合理的に解決し、発展させることのできる人材を育成することを教育研究上の目的としている。設置以降、「育」「発達」「福祉」「食」「情報」「コミュニケーション」を主要領域として教育研究活動を展開し、本学の基本理念である社会に役立つ有用な女性の育成に努めてきたところである。

その上で、第一次教育体制改革の方針（①学部を統合し、大学としての理念の明確化②共通教育の充実③学生の学びの実現）を引き継ぐとともに、「大学全入時代」の本格化に対する備えを万全にするため、①大学の社会的責任の自覚②学士課程教育の充実③財政基盤の確立④地域連携の重視を新たな柱とする第二次教育体制改革の検討を開始した。

学校法人十文字学園の理事会においても、経営上の観点から、本学の伝統にふさわしく、学生募集において成功が見込まれる教育研究領域において新たな学科をたちあげること、学生募集において成功していない学科においては学部編成について抜本的な改革に取り組むことが課題として提示された。

そこで、学部構成については、①人間生活学部の既存学科について定員増を含め新しい体制を構築する②人間生活学部に健康・運動領域の新たな学科をたちあげる③十文字学園女子大学短期大学部を廃止し、その教育研究領域を人間生活学部に移行し、新たな学科をたちあげることを具体的方針として検討を行い、人間福祉学科、健康栄養学科及び文芸文化学科を新たに設置することとした。各学科の教育研究上の目的は以下のとおりである。

（１）人間福祉学科

現在の人間福祉学科は社会福祉士及び介護福祉士の養成を行っているが、新たに保育士養成の機能を加える。現在の学位の種類及び分野は「社会学・社会福祉学」であるが、「教育学・保育学」を加え「社会学・社会福祉学／教育学・保育学」とするため、新たな人間福祉学科として設置を行う。

新たな人間福祉学科は、人生のあらゆる場面における実践的な福祉・援助の方策を探る社会福祉学に基づき、生活の質の向上や地域における共生に対する理解を背景として、相談援助、介護、保育に関する知識・技術を適切に応用できる能力を習得することを教育研究上の目的とする。

（２）健康栄養学科

栄養学を基礎として、食・運動・教育に関する専門的知識や技術、指導力、実践力を習得することにより、健康のスペシャリストとしてすべての人々の健康生活のための学びと実践を支え、推進できる人材を育成することを教育研究上の目的とする。

（３）文芸文化学科

十文字学園女子大学短期大学部表現文化学科の教育研究領域を移行する形で、人間生活学部に文芸文化学科を設置する。表現文化学科は十文字学園女子大学短期大学部の唯一の学科であることから、在校生が卒業するのを待って十文字学園女子大学短期大学部は廃止する。

文芸文化学科では、ことばを有する人間によって生み出された文化・芸術を深く理解し、それに基づいて、新たな文化を創造、発信する人材を養成する。短期大学部表現文化学科の教育研究上の目的は、文化・芸術を理解することにとどまるが、文芸文化学科は、多様化する人間生活の中で、文化・芸術の営みを日々の生活に効果的に取り入れ、新しい文化創造の担い手となることも目指す点で、表現文化学科とは異なる。また、文芸文化学科は、人間生活の全般において、人として知的に成熟することを目指す人間を育成することも教育研究上の目的とする。

イ　学部、学科等の特色

本学は、大正 11 年の文華高等女学校（学校法人十文字学園の前身）の設立以来、学園歌として歌い継がれている「身をきたへ　心きたへて　世の中に　たちてかひある人と生きなむ」という建学の精神にもとづき、強健な身体と確固たる精神および自由に活用できる実用的知識を持ち、社会に役立つ有用な女性の育成を教育の基本理念としてきた。社会に役立つ有用な女性の育成は、中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」（平成 17 年 1 月）で提示されている「大学の機能別分化」における「幅広い職業人養成」に合致するものとして、本学の特色とするものである。新たに設置する人間福祉学科、健康栄養学科及び文芸文化学科においても、本学の社会に役立つ有用な女性の育成という教育の基本理念のもと「幅広い職業人養成」を行う。

なお、各学科の特色は以下のとおりである。

（１）人間福祉学科

人間福祉学科は社会福祉・保育コースと社会福祉・介護福祉コースからなるが、単に保育士または介護福祉士を養成するのではなく、両コースともに社会福祉学を基盤としており相談援助に強いという点を特長とする。

なお、本学では幼児教育学科においても保育士の養成を行っているが、人間福祉学科で保育士を養成する意味は、社会福祉の知識が必要な児童養護施設や介護についての技能が求められる障害児入所施設（入所・通所）などでの施設保育、および問題や悩みを抱える保護者からの相談に対応できる相談援助技術といった付加価値の高い保育士の養成にある。

（２）健康栄養学科

健康栄養学科では栄養士の養成を行うが、健康づくりのための運動や健康教育に関する専門的知識・技術などを併せ持つことを特長とする。

本学では食物栄養学科において、食・栄養に関して深く学ぶ中で、臨床に関して高度な専門知識・技能及び管理能力を有する優れた管理栄養士を養成しているが、健康栄養学科は学びを食・栄養の周辺領域に広げて展開することで特長を出していく。つまり、国民の健康増進を形成する基本的要素となる「栄養・食生活」「身体活動・運動」を学ぶことで、食生活の改善や運動習慣の定着等による生活習慣病の第一次予防、乳幼児期から高齢期までそれぞれのライフステージにおける心身機能の維持及び向上などに資することができ、健康寿命の延伸の一端を担っていく。

（３）文芸文化学科

文芸文化学科では、ことばを学びの中核とし、適切かつ高度な日本語の運用能力と論理的思考を身につけることを目的とする。これは、中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」（平成 20 年 12 月）で提示している「学士力」の「汎用的技能」のうちコミュニケーション能力、論理的思考力を培うことに合致する。

3 年次から芸術文化コースと日本語・日本文学コースに分かれ、自分の興味に合わせて学びの主たる領域を選択できることが特長である。

ウ　学部、学科等の名称及び学位の名称

（１）人間福祉学科

「人間福祉学科」　　（英訳名：Department of Human Welfare）

「学士（社会福祉学）」　（英訳名：Bachelor of Social Welfare）

一人の人間の立場にたった福祉、すなわち、幼児期から高齢期までの各ライフステージやその個人のおかれた状況に応じた福祉の実現という視点を教育研究上の目的や教育課程に盛り込んでいることから、学科の名称は「人間福祉学科」とする。

人間福祉学科の主な教育研究領域は「社会福祉学」であり、教育研究上の目的にも「社会福祉学に基づき」との文言が含まれ、学術的にも及び社会的にも定着している「学士（社会福祉学）」を学位の名称とする。

（２）健康栄養学科

「健康栄養学科」　（英訳名：Department of Health and Nutrition）

「学士（栄養学）」　（英訳名：Bachelor of Nutritional Science）

栄養士としての知識・技能をベースとした健康の専門家を養成することから、学科の名称は「健康栄養学科」とする。

健康栄養学科の主な教育研究領域は「栄養学」であり、教育研究上の目的にも「栄養学を基礎とし」との文言が含まれており、学術的にも社会的にも定着している「学士（栄養学）」を学位の名称とする。

（３）文芸文化学科

「文芸文化学科」　（英訳名：Department of Literature and Culture）

「学士（文学）」　（英訳名：Bachelor of Arts）

学科の名称は、ことばを有する人間によって生み出された文化・芸術を理解するという教育研究上の目的を端的に伝えるため、言語によって表現される芸術の総称を指す「文芸」と「文化」を用いて、「文芸文化学科」とした。

教育課程は芸術文化領域と日本語・日本文学領域を中心に編成されており、学科系統分類上、正統的な人文科学の文学関係に属することから、学位の名称は「学士（文学）」とする。

エ　教育課程の編成の考え方及び特色

（１）人間福祉学科

人間福祉学科は社会福祉士・保育士・介護福祉士の養成を行う。そこで、社会福祉士については「社会福祉に関する科目を定める省令」（平成二十年三月二十四日文部科学省・厚生労働省令第三号）、保育士については「児童福祉法施行規則第 6 条の 2 第 1 項第 3 号の指定保育士養成施設の修業科目及び単位数並びに履修方法」（平成十三年五月二十三日厚生労働省告示第百九十八号）、介護福祉士については「社会福祉士介護福祉士養成施設指定規則（昭和六十二年十二月十五日厚生省令第五十号）別表第 4 に則り、授業科目を配置している。

具体的には、社会福祉学を学ぶ上で必要な基礎知識を修得するための科目区分として「社会福祉基礎科目」を置き、「社会福祉概論Ⅰ・Ⅱ」「ソーシャルワーク論Ⅰ」「地域福祉論Ⅰ」など 13 科目を配置する。

その上で、社会福祉士を目指す上で社会福祉の理論的側面を理解するための科目区分として「ソーシャルワーク専門科目」を置き、「ソーシャルワーク論Ⅱ～Ⅵ」「地域福祉論Ⅱ」「公的扶助論」「相談援助演習Ⅰ～Ⅴ」など 20 科目を配置する。

また、介護福祉士を目指す上で福祉現場における介護に関する知識、技術及び態度を修得するための科目区分として「ケアワーク専門科目」を置き、「介護基礎論Ⅰ・

Ⅱ」「介護と倫理」「日常生活支援技術Ⅰ～Ⅲ」など 35 科目を配置する。

また、保育士を目指す上で福祉現場における保育に関する知識、技術及び態度を修得するための科目区分として「保育専門科目」を置き、「保育原理」「保育課程論」「保育内容演習Ⅰ～Ⅴ」「保育の表現技術Ⅰ～Ⅴ」など 31 科目を配置する。

さらに、科目区分「社会福祉実践科目」に「ソーシャルワーク専門科目」「ケアワーク専門科目」「保育専門科目」で学んだ成果を演習・実習として実際に体験する 19 科目を配置する。

そして、科目区分「社会福祉関連科目」に「ソーシャルワーク専門科目」「ケアワーク専門科目」「保育専門科目」「社会福祉実践科目」の各科目区分の応用的・補完的な科目 13 科目を配置し、福祉専門職としての学びを深める。

これらの各科目区分の履修に加え「人間福祉基礎演習」「人間福祉演習」「卒業研究」の履修により、社会福祉の多様な分野を担う社会福祉の専門職および家庭・地域において人間の生活を核とした環境づくりや住民間のネットワークづくりに貢献できる地域や家庭で福祉を担う専門的人材の育成を目指す。

（２）健康栄養学科

健康栄養学科は、栄養士としての知識・技能を土台に健康づくりのための運動や健康教育に関して学び、健康の専門家を養成するため、科目区分として「学科基礎」「栄養・食生活領域」「健康支援領域」「健康運動領域」「教育領域」を設ける。

科目区分「学科基礎」には、学科の基礎となる 4 科目（「食と健康」「健康管理概論」「基礎統計学」「統計学演習」）を配置し、いずれも必修とする。

科目区分「栄養・食生活領域」には、栄養士養成に対応するため、栄養士法施行規則（昭和二十三年一月十六日厚生省令第二号）別表第 1 に則り、以下の小区分を設定の上、授業科目を配置する。科目区分「社会生活と健康」には「公衆衛生学（衛生学を含む)」「社会福祉概論」の 2 科目を配置する。科目区分「人体の構造と機能」には「解剖生理学（解剖学を含む)」「生化学」「病態生理学」の必修科目 3 科目を含む 9 科目を配置する。科目区分「食品と衛生」には「食品学Ⅰ」「食品学Ⅱ」「食品衛生学」の必修科目 3 科目を含む 8 科目を配置する。「栄養と健康」区分には「基礎栄養学Ⅰ」「基礎栄養学Ⅱ」「応用栄養学」「臨床栄養学Ⅱ」の必修科目 4 科目を含む 8 科目を配置する。科目区分「栄養の指導」には必修科目「公衆栄養学概論」を含む 6 科目を配置する。科目区分「給食の運営」には「調理学」「基礎調理学実習Ⅰ」「基礎調理学実習Ⅱ」「食事計画論」の必修科目 4 科目を含む 10 科目を配置する。これらの科目区分では、栄養士に必要な基礎的知識と技術の修得を重視し、実験・実習科目、学外実習を充実させることで実践力を高める。

さらに、社会の健康づくりに貢献できる知識と技能を養うため、食・運動・教育の領域において多様な科目を展開する。具体的には、科目区分「食文化・食ビジネス」に「食文化概論」など 5 科目、科目区分「健康支援領域」に「運動の障害と予防」など 5 科目、科目区分「健康運動領域」に「健康づくりの運動Ａ～Ｇ」など 12 科目、科目区分「教育領域」に「健康・スポーツ心理学」など 5 科目を配置する。

なお、取得可能な資格の一つに、中学校教諭一種免許状（保健体育）及び高等学校教諭一種免許状（保健体育）があるが、教科に関する指導法は、他の免許種を含めて卒業要件外で全学的な教職課程を運営しているため含んでいない。

（３）文芸文化学科

ことばを有する人間によって生み出された文化・芸術に向き合い、人間とことばへの理解を深めると共に、多彩な表現活動の意味を認識し、芸術・文化の創造的な働きや豊かな広がり、およびその価値を感得する教育課程を設定している。

1年次は、アカデミック・リテラシーと言語運用能力を涵養し、進級後の専門学習に必要となる文化・芸術への基礎的な学習能力を身につけるため、必修科目として科目区分「専門必修科目」の小区分「基礎科目」から「文芸文化入門」「文芸文化概論」を、小区分「日本語科目」から「日本語基礎」「日本語表現Ⅰ」を、小区分「演習科目」の「基礎演習」を履修する。

2年次は、思考力、分析力、語学力、情報処理能力、コミュニケーション能力を養うPBL型の「文芸・文化ゼミ」(科目区分「専門必修科目」の小区分「演習科目」)を軸に、1年次で修得した知識・技能を、様々な文化や芸術を対象とする研究に応用することを通して、さらに発展、拡充する。

また、1・2年次には、多様な文化・芸術に触れることで興味・関心のあり方を見定めると共に、3年次のコース選択に備える科目区分「専門基幹科目」から学ぶ。科目区分「専門基幹科目」には小区分「芸術文化基礎科目」(「文化を考える」など4科目)、「日本語・日本文学基礎科目」(「日本語学入門」など5科目)、「専門を学ぶための基礎科目」(「日本文学の名作」など6科目)を置く。

さらに、2年次からは、科目区分「専門選択領域」の4つの小区分「芸術文化領域」(「芸術と歴史」など13科目)、「日本語・日本文学領域」(「日本文学論」など14科目)、「創作表現領域」(「創作ワークショップ」など7科目)、「総合文化領域」(「図書の文化」など16科目)を横断的に学び、自らが関心を抱く専門領域を深めるとともに、高い教養と豊かな人間性、洞察力や判断力を涵養する。

3年次では、芸術文化コースと日本語・日本文学コースのいずれかを選択し、専門的に取り組むテーマを明確に把握する。少人数制のゼミを履修し個別指導に基づいて、専門分野への考究を深め、4年次の卒業論文、卒業制作の作成につなげる。

4年次には、学びの集大成として卒業研究に取り組み、卒業論文または卒業制作を作成する。

（4）共通教育

現行の教育課程は、科目区分「初年次ゼミナール」「十文字学」「保健体育」「外国語」「情報処理基礎」「キャリア教育」で構成され、「十文字学」の中に小区分として「女性を学ぶ」「地域・社会を学ぶ」「人間・環境を学ぶ」「総合」がある。

平成27年度からの教育課程では「十文字学」に「初年次ゼミナール」の科目を包含し、「学びの基礎をつくる」「女性の自立・生き方を学ぶ」「地域と社会を学ぶ」「人間と自然を学ぶ」の小区分へと変更した。小区分「地域と社会を学ぶ」では、大学と地域の連携強化を目的として、地域社会の課題等を取り上げて多面的に学ぶ科目や、その解決に向けた活動を行う科目を配置し、1科目2単位を選択必修とすることで、学生全員が地域と交流する機会とする。

また、科目区分「外国語」に、新たに目的別や資格に対応する科目を配置し、社会に通用する語学力を養う。語学の学習意欲の高い学生や外国語上級者のニーズに応え、グローバル社会で活躍できる人材を養成する。

オ　教員組織の編成の考え方及び特色

本学では、大学設置基準で定められている専任教員数、教員一人当たりの学生数、演習・実習の科目数などを鑑み教員配置を行っている。

第二次教育体制改革のもとでは、各学科の中核的な科目（本学では「学科目」という）は専任教員が担当するという考えにより、教員配置数と同数の学科目を設定し、その学科目を担当するに相応しい教員を張り付けるかたちで平成30年度までの専任教員配置計画表を策定した。各学科の学科目は以下のとおりである。

①人間福祉学科

「社会福祉概論」、「相談援助」(2)、「地域福祉論」

「高齢者に対する支援と介護保険制度」、「障碍者福祉論」、「児童・家庭福祉論」

「基礎介護論」、「日常生活支援技術」、「こころとからだのしくみ」

「医療を必要とする人への介護」

「保育者論」、「保育課程論」、「保育の表現技術」、「保育実習」

②健康栄養学科

「公衆衛生学」、「運動生理学」、「食品学」、「食品衛生学」、「栄養学」

「栄養指導論」、「調理学」、「健康づくりの運動」(2)、「体育原理」

③文芸文化学科

「芸術と歴史」、「芸術とことば」、「舞台芸術」、「世界の演劇」、「芸術と人間」

「日本文学史」、「日本の文化」、「日本と異文化」、「図書の文化」、「日本語学」(2)

さらに、各学科の専門性を鑑み、人間福祉学科では社会福祉士、介護福祉士及び看護師、健康栄養学科では医師及び管理栄養士、文芸文化学科では学芸員及び司書の資格保有者を配置するなど、適切な教員配置を行っている。

また、新たに設置する 3 学科の開設時の専任教員の職位及び年齢の構成は、下表のとおりであり、バランスが取れている。本学の定年は、学校法人十文字学園十文字学園女子大学・十文字学園女子大学短期大学部就業規則（資料 1）第 15 条により、65 歳と定められている。

【職位構成】

	教授	准教授	講師	助教
人間福祉学科	8 人	4 人	3 人	0 人
健康栄養学科	6 人	3 人	1 人	0 人
文芸文化学科	5 人	5 人	1 人	0 人

【年齢構成】

	定年延長者	60 代	50 代	40 代	30 代	20 代
人間福祉学科	1 人	4 人	5 人	2 人	3 人	0 人
健康栄養学科	0 人	3 人	2 人	4 人	1 人	0 人
文芸文化学科	0 人	2 人	4 人	2 人	3 人	0 人

なお、人間福祉学科は、社会福祉・保育コースが指定保育士養成施設、社会福祉・介護福祉コースが介護福祉士養成施設の指定をそれぞれ受けることとしており、入学定員を各々50 名としているが、あくまで全専任教員が人間福祉学科所属であり、一方のコースに所属するという考えはしない。

カ　教育方法、履修指導方法及び卒業要件

本学はキャップ制度を設け、年間の履修上限を 48 単位と定めている。ただし、集中講義科目、インターンシップ関連科目、教育職員免許状に関する科目、特定の資格に関する科目は除かれる。

また、他大学の取得については、学則第 31 条で「教育上有益と認めるときは、学生に他の大学又は短期大学の授業科目を履修させることができる」とし、「修得した単位については、教授会の議に基づき、60 単位を超えない範囲で本学における授業科目の履修により修得した者ものとみなすことができる」と定めている。

なお、各学科の教育方法、履修指導方法及び卒業要件は以下のとおりである。

（1）人間福祉学科

人間福祉学科では、社会福祉養成に関しては「実習演習担当教員の員数は、実習演習科目ごとにそれぞれ学生 20 人につき 1 人以上とすること」、保育士養成に関しては「1 学級の学生数は、50 人以下であること」、介護福祉養成に関しては「1 学級の定員は、50 人以下であること」と関係法令で定められていることから、これを超えないように各授業科目のクラス数を設定し、適正な学生数を保つ。特に実習、演習は福祉専門職養成の中核をなすものであることから少人数教育を徹底し、福祉現場との緊密な連携ときめ細やかな指導により理論と実践の統合を目指す。

卒業要件は、次のとおりである。

共通科目から必修科目を含めた 18 単位以上を修得する。ただし、科目区分「十文字学」の 4 つの小区分からそれぞれ 1 科目 2 単位以上（小区分「学びの基礎をつくる」からは必修科目「入門ゼミナール」の他に 1 科目 2 単位以上）を修得する。また、科目区分「保健体育」から 1 単位、科目区分「外国語科目」の小区分「基礎科目」から 2 単位以上を修得する。

専門科目から、必修科目 27 単位を含め 90 単位以上を修得する。

その他、自由選択科目として、共通科目・自学科専門科目・他学科専門科目から 16 単位以上を修得する。

合計で 124 単位以上を修得することを卒業要件とする。

履修モデルについては、資料 2「社会福祉士国家試験受験資格・保育士資格の取得を目指す場合」、資料 3「社会福祉士国家試験受験資格・介護福祉士国家試験資格の取得を目指す場合」を参照されたい。

（2）健康栄養学科

健康栄養学科では、栄養士養成に関しては「同時に授業を行う学生の数は、おおむね 40 人であること」と関係法令で定められていることから、これを超えないように各授業科目のクラス数を設定し、適正な学生数を保つ。特に実験・実習科目については教育効果を十分にあげられる学生数にするとともに、1 名の教員に加えて 1 名の助手を配置する。

卒業要件は、次のとおりである。

共通科目から必修科目を含めた 18 単位以上を修得する。ただし、科目区分「十文字学」の 4 つの小区分からそれぞれ 1 科目 2 単位以上（小区分「学びの基礎をつくる」からは必修科目「入門ゼミナール」の他に 1 科目 2 単位以上）を修得する。また、科目区分「保健体育」から 1 単位、科目区分「外国語科目」の小区分「基礎科目」から 2 単位以上を修得する。

専門科目から、必修科目 40 単位を含め 90 単位以上を修得する。

その他、自由選択科目として、共通科目・自学科専門科目・他学科専門科目から 16 単位以上を修得する。

合計で 124 単位以上を修得することを卒業要件とする。

履修モデルについては、資料 4「栄養士資格・中学校教諭一種免許状（保健体育）・高等学校教諭一種免許状（保健体育）の取得を目指す場合」、資料 5「栄養士資格・健康運動指導士資格の取得を目指す場合」を参照されたい。

（3）文芸文化学科

文芸文化学科では課外活動を有効活用した授業や体験型授業の授業科目を多く配置する。例えば、「舞台芸術 A」では宝塚、「舞台芸術 B」では劇団四季の舞台を鑑賞する。また、「創作ワークショップ」では、言葉によりストーリーを構成する小説創作、パソコンを使った絵本制作、書道家による毛筆・硬筆書道などを展開するこ

とで、鑑賞者として文化・芸術を理解することに加え、表現者としての学びを大切にする。

卒業要件は、次のとおりである。

共通科目から必修科目を含めた 18 単位以上を修得する。ただし、科目区分「十文字学」の 4 つの小区分からそれぞれ 1 科目 2 単位以上（小区分「学びの基礎をつくる」からは必修科目「入門ゼミナール」の他に 1 科目 2 単位以上）を修得する。また、科目区分「保健体育」から 1 単位、科目区分「外国語科目」の小区分「基礎科目」から 2 単位以上を修得する。

専門科目から、必修科目 27 単位を含め 90 単位以上を修得する。ただし、専門基幹科目から 10 単位を修得する（芸術文化コースは科目区分「芸術文化基礎科目」からコース必修科目「文化を考える」を含め 6 単位以上、日本語・日本文学コースは科目区分「日本語・日本文学基礎科目」からコース必修科目「日本語学入門」を含め 6 単位以上とする）。

その他、自由選択科目として、共通科目・自学科専門科目・他学科専門科目から 16 単位以上を修得する。

合計で 124 単位以上を修得することを卒業要件とする。

履修モデルについては、資料 6「中学校教諭一種免許状（国語）・高等学校教諭一種免許状（国語）の取得を目指す場合」、資料 7「芸術文化コースで学芸員資格・司書資格の取得を目指す場合」を参照されたい。

キ　施設、設備等の整備計画

（a）校地、運動場の整備計画

本学の総校地面積は、84,298 ㎡であり、授業で活用しているグランド兼サッカー練習場（33,091 ㎡）やテニスコートなどは学内のキャンパスにある。

また、記念ホールの他、学生が休息に利用する場所としてカフェテリア及び学生食堂の 2 つの食堂、憩いの場として学生ホール、クラブ活動の施設として文科系クラブを中心とした秋桜館及びスポーツ系クラブを中心としたけやき館がある。

（b）校舎等施設の整備計画

本学では、一般教室及び演習室等を 1 号棟から 10 号館に配置しており、これらの授業・研究棟の延べ床面積は、34,769 ㎡になる。また、1 号棟及び 7・8・9 号館にはコンピュータ演習室があり、学生は授業で利用している時間を除き 20 時迄自由に利用できる。平成 27 年度の室数は、一般教室 43 室、演習室 72 室、コンピュータ演習室 10 室、語学学習施設 3 室とする。また、研究室は専任教員 1 人につき 1 室を与える。

（c）図書館等の資料及び図書館の整備計画

図書館は、正門を入ってすぐ右の鉄筋コンクリート 3 階建ての専用棟のほか、学内中央に位置する教室棟・研究棟の 8 号館 1 階に情報センター（図書館分室）を設けている。両施設とも、学生にとって利用しやすい位置にあり、平成 25 年度の両施設あわせての入館者は年間 12 万人を超え、授業のある期間で平均した場合 1 人の学生が毎週 1 回は利用していることとなる。授業期間の開館時間は、授業開始前の 8 : 50 から 20 : 00（情報センターは 19 : 30）までであり、5 限の授業終了後も充分に活用できる。

資料の蔵書数は、平成 25 年度末で図書 179,604 冊、雑誌約 700 タイトルを所蔵している。毎年図書は約 3,000 冊、雑誌 330 タイトル、視聴覚は 400 点を購入し、蔵書数は年々増加している。本学は、文学・語学のほか、社会科学、生活科学、情

報科学など幅広い分野の図書・雑誌を所蔵しており、利用者も自分の専門学科の分野の図書だけでなく、様々な分野の図書まで閲覧できる蔵書構成である。そのため、学科の改組にあたり改めて資料を揃える必要はないが、前述の全蔵書冊数とともに、今後も引き続き図書等の資料の充実を図っていく予定である。一般資料のほか、電子媒体の資料の収集も積極的に行っている。「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」、「NewYorkTimes」を含む約 1,000 タイトルの新聞を利用できる「InfoTrack Newsstand」などの国内外の新聞情報のオンラインデータベースや、幅広い分野や一般紙まで対象としている「CiNii（国立情報学研究所）」、「日経 BP 記事検索サービス」、「大宅壮一文庫」のほか、「Academic Search Elite」などの国内外の雑誌論文やオンラインジャーナルも利用できる。食物栄養学科や健康栄養学科については、科学技術や医学・薬学情報に特化している科学技術振興機構の日本最大の科学技術関係文献情報データベース「J-DreamⅢ」、医学・薬学関係では「メディカルオンライン」「医学中央雑誌」、外国雑誌については「Science Direct」などが利用きる。そのほか、国内の出版情報のデータベース「BookPlus」や、法律・判例情報のデータベース、音楽を聞くことのできる音楽情報データベースも導入し、すべてのデータベースが、学内のネットワークに接続している端末からアクセスできる。今後も電子媒体の資料については、電子 BOOK をはじめ図書等の資料の充実とともに、整備を図っていく予定である。

図書館の設備は、本館・情報センターあわせて約 300 席の閲覧席があり、全館に無線 LAN も整備されているために、どの閲覧席においてもパソコンの利用ができる。閲覧席は、書架を中心として周りに配置されている。そのほか、最新の辞書・辞典・事典類のほか、年鑑・白書を過去 5 年間分配架している参考図書コーナー、オーディオビジュアルコーナー、グループスタディルームなどの施設がある。グループスタディルームは、利用者自身で資料を作成して、グループワークで活発な学習ができるよう、60 インチの大型モニタのほか、スキャナや、電子ピアノも設置している。アクティブスペースとしての環境は、情報センターとあわせて 3 箇所となる。そのほか、マイクロ資料閲覧のためのマイクロリーダーもあり、自由に利用できる。また情報センター（図書館分室）には、情報端末コーナーがあり、24 台のパソコンと図書館同様無線 LAN の環境が構築されているため室内利用のためのノートパソコン 10 台のほか、各自持参する iPad などのタブレットでも学内のネットワークに接続できる環境である。コンピュータの利用や自宅から学内ネットワークに接続できる VPN などの設定について質問できるヘルプカウンターもあり、その他、利用者にプロジェクターやスクリーン、ビデオカメラやデジタルカメラなどの貸出サービスも行っている。

図書館システムは、平成 25 年 9 月からリニューアルした新システムにより、現在の貸出資料のほか、文献複写依頼、現物貸借などの ILL サービス、リクエスト図書やオンラインレファレンスなど、各自で利用できるポータルサイトが充実した。My URL に各自ホームページのお気に入りを登録できるため、今後学科独自に利用してほしいリンク集などの提供も検討している。基本的な目録データベースは、国立情報学研究所の目録所在情報サービスシステムに接続して本学の情報データベースを構築し、OPAC をインターネット上で公開している。

現在学生への「学修」「教育」への支援が求められている中、多様な利用者層に意識したサービスを展開し、単なる学習スペースではなく、「個人」に加え「グループ」での学修も可能とする学習空間を提供し、「魅力ある学習支援サービス」の提供を図っていく予定である。

ク　入学者選抜の概要

（１）入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）

新たに設置する学科の入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）は以下のとおりである。

①人間福祉学科

・人間の尊厳を守り、基本的人権を尊重する女性

・社会福祉に興味を持ち、共感的態度をもって人とかかわる仕事を目指す女性

・現代社会の問題に関心を持ち、その解決に積極的に取り組もうとする女性

②健康栄養学科

栄養・運動・生活に強い関心を持ち、将来、専門的な知識と能力を活かし、人々の健康増進に貢献したいという意欲ある女性

③文芸文化学科

・ことばを有する人間が生み出した文化・芸術全般に知的な好奇心を抱き、それを追求するために必要な知性と感性を養いたい女性

・論理的な思考力、柔軟な発想力、的確な表現力を身につけたい女性

・生涯にわたって持続可能な教養を身につけたい女性

（２）入学者選抜方法

入学者選抜方法は、入学試験委員会で全学的な検討を行い、教授会の承認を得て決定する。現在実施している選抜方法は以下のとおりであり、新たに設置する学科についても同様とする。

①一般入試

高等学校までの基礎学力を重視し、特に学科の専門教育を受けるに足る学力を基準に選抜する。

②大学入試センター試験利用入試

大学入試センター試験の成績を利用して選抜するが、学科により選択科目を定めて実施する。地方受験生への受験機会の提供とともに、一般入試にない教科・科目からの選択が可能であり受験生の多様性に配慮している。

③AO 入試

本学の教育方針、教育内容を理解し目的意識の明確な学生を確保するために、学力検査ではなく人物を重視した入試として実施する。選抜方法は小論文または作文、表現活動、グループ討議、面談等を組み合わせて、受験生の潜在能力や適性、学習意欲、入学目的などを総合的に判定し、選抜している。

④推薦入試

本学を第一志望とし、本学の教育方針、教育内容を理解し学習目的の明確な者で、高校の成績が一定以上の者を高等学校長の推薦に基づいて、学科ごとに調査書、小論文または作文、面接を組み合わせて総合的に判定し選抜している。推薦入試は次の区分に分けて実施している。

・指定校推薦　入試実績に基づき対象となる高校を指定して実施する。

・公募推薦　　指定校と同レベルの学生を対象として実施する。

・併設校推薦　併設高校を対象とし実施する。

⑤特別入試

多様な学生を受け入れるため、一般入試と異なる方法で選抜する入試として以下のとおり実施する。

・社会人　社会経験を持ち入学時に満 22 歳以上の女性を対象とし、小論文または作文と面接により総合的に判定し選抜する。

・帰国生徒　日本国籍を有し、外国において最終学年を含めて 2 年以上継続して教育を受けた女性を対象とし、小論文または作文、面接により総合的に判定し選抜する。

・外国人入学生　一定水準以上の日本語能力を有し、本学への入学意欲のある外国籍の女性を対象とし、学科により日本語または英語、小論文または作文、面接を総合的に判定し選抜する。

・本学留学生別科生　本学留学生別科生で一定水準以上の日本語能力を有し、本学への入学意欲のある女性を対象とし書類と面接を総合的に判定し選抜する。

なお、新たに設置する学科の選抜方法による募集定員は下表のとおりである。

	入学定員	一般入試	大学入試センター試験利用入試	AO 入試	推薦入試	特別入試
人間福祉学科	100 名	30 名	20 名	20 名	30 名	若干名
健康栄養学科	80 名	26 名	9 名	10 名	35 名	若干名
文芸文化学科	70 名	30 名	10 名	10 名	20 名	若干名

（３）選抜体制

選抜体制としては、入学者選抜を円滑かつ公平に実施運営することを目的に、学長を本部長とし、副学長、募集・入試委員、事務局長、募集・入試部長等により構成された入試実施本部を設けている。合否判定については、学科審査会議で席次リストを作成の上、合否判定基準を検討、審議している。その後、学長を議長に副学長、各学科長及び各学科代表者 1 名で構成された合否判定会議が、大学全体の入学者数の確保や各学科の入学定員の超過を防止する観点から、各学科における入試の合否判定案について、その妥当性の判断及び全学的な調整を行っている。

（４）科目等履修生

科目等履修生については、学則 45 条に基づき、本学の教育に支障のない限りにおいて、選考の上、科目等履修生として履修を許可することとしている。

ケ　資格取得

取得可能な資格は以下のとおりである。

（１）人間福祉学科

社会福祉士	①国家資格
	②受験資格取得可能
	③卒業要件単位に含まれる科目のうち、社会福祉士関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない。
介護福祉士	①国家資格
	②受験資格取得可能
	③卒業要件単位に含まれる科目のうち、介護福祉士関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない。
保育士	①国家資格
	②資格取得可能
	③卒業要件単位に含まれる科目のうち、保育士関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない。

（２）健康栄養学科

栄養士	①国家資格
	②資格取得可能
	③卒業要件単位に含まれる科目の履修のみで取得可能だが、資格取得が卒業の必須条件ではない。
健康運動指導士	①民間資格
	②受験資格取得可能
	③卒業要件単位に含まれる科目のほか、健康運動実践指導者関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない。
中学校教諭一種免許状（保健体育） 高等学校教諭一種免許状（保健体育） 栄養教諭二種免許状	①国家資格
	②資格取得可能
	③卒業要件単位に含まれる科目のほか、教職関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない。

（３）文芸文化学科

中学校教諭一種免許状（国語） 高等学校教諭一種免許状（国語）	①国家資格
	②資格取得可能
	③卒業要件単位に含まれる科目のほか、教職関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない。
司書	①国家資格
	②資格取得可能
	③卒業要件単位に含まれる科目のほか、司書関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない。
学芸員	①国家資格
	②資格取得可能
	③卒業要件単位に含まれる科目のほか、学芸員関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない。

コ　企業実習や海外語学研修など学外実習を実施する場合は、その具体的計画

（a）実習先の確保の状況

現行の学部体制における幼児教育学科、食物栄養学科及び人間福祉学科が行っている学外実習の引受先に引き続き協力を求める。具体的な実習先としては、人間福祉学科は資料 8、健康栄養学科は資料 9 を参照されたい。

（b）実習先との連携体制

①人間福祉学科

事前指導の際、実習指導者や実習施設に勤務している卒業生をゲストスピーカーとして 1～2 名招き、福祉専門職の役割、日常の取り組み、実習生に期待すること等の講義を実施する。

実習前に、電話もしくは実習先オリエンテーションにて実習指導者と各担当教員が打合せを実施し、巡回指導（週 1 回の実習先訪問）の際には、実習指導者と各担当教員が実習の進捗状況、学生の様子、学習進度等を確認する。

事後指導としては、実習報告会に実習指導者の方を招き、学生の発表に対し質疑・意見をもらう。実習報告会の際には、実習指導者および教員にて実習指導説明会や懇談会を行い、意見交換を実施する。

②健康栄養学科

学内の実習担当教員が資格取得の学生に対して、事前指導を行う。実習課題を設定し、実習の目的や目標を明確にする。実習ノートを作成する。さらに事前オリエンテーションを実習施設にて施設責任者、指導責任者が学生に実習内容や実習に関する注意事項など細かな指導を行う。

実習開始前に実習施設と実習内容等の打合せを行う。

実習中においては、学生から必要に応じて実習状況の報告を受ける体制をつくる。大学と実習先は常に電話やメール等で連絡が取れる体制をとり、学生の実習状況の把握をする。学生には実習ノートに実習内容、実習課題について記録させ、実習先の指導責任者に点検してもらい、実習中の学生と指導責任者との意思疎通を図る。学科教員が一度は実習先を巡回し、実習学生の実習状況の把握並びに指導責任者からの話しなどを伺うことで、学生への指導に生かす。

事後指導として、実習ノートの記録をもとに、実習成果をまとめる。実習成果を発表の形にまとめ、実習先の指導責任者を交えて報告会を学内で実施する。

（c）成績評価体制及び単位認定方法

①人間福祉学科

実習施設による評価を参考に巡回担当教員が単位認定を行う

②健康栄養学科

大学が学生個人ごとの実習評価票を作成し、実習先の指導責任者が評価する。評価項目は実習内容の習熟度、理解度、目標達成度、意欲などでA－Dの4段階評価とする。実習開始時に評価票を実習施設に渡し、実習終了後、回収する。

実習先からの評価、実習ノートの評価、報告会での評価を総合的に判断して、学内担当教員が成績評価をつける。C以上の評価ならば合格として1単位の単位認定をする。

サ　編入学定員を設定する場合は、その具体的計画

新たに設置する学科の編入学定員は下表のとおりである。編入学後、個々の学生の状況にあわせた履修指導を行う。各学科で想定される編入学生の履修モデルはそれぞれの資料を参照されたい。

学科名	3年次編入学定員	履修モデル
人間福祉学科	5名	資料10
健康栄養学科	5名	資料11
文芸文化学科	5名	資料12

既修得単位の認定方法については、学則第25条第3項に「入学を許可された者の既に修得した授業科目及びその単位数の取り扱い並びに履修すべき授業科目及び在学すべき年数については、教授会の議を経て学長が決定する」とあり、上限を62単位として認定している。

シ　管理運営

教学面における管理運営の体制は、資料13のとおりである。

教授会は、学則第16条に基づき置かれ、教授会規程第3条に定められた①教育課

程の編成に関する事項、②学生の入学、退学、転学、留学、休学及び卒業に関する事項、③学生の賞罰に関する事項、④教員の人事に関する事項、⑤学長候補者の推薦に関する事項、⑥その他教育及び研究に関する重要事項が審議されている。平成 23 年度に社会情報学部と人間生活学部を統合し、1 学部体制となったことで、学長、副学長、学長補佐、専任の教授・准教授・講師・助教の教育職員が一堂に会しており、効率的で機動的な運営が図られている。なお、教授会は原則毎月 1 回開催されている。

運営会議は、学長、副学長、学長補佐、事務局長、その他学長が指名する者で構成されている。運営会議は、原則毎月 2 回開催され、十文字学園女子大学・同短期大学部運営会議規程（資料 14）第 3 条に定められた①大学、留学生別科、大学院及び短期大学部の運営の基本的な方針に関する事項、②大学、留学生別科、大学院及び短期大学部に係る重要事項の調査、検討に関する事項、③大学、留学生別科、大学院及び短期大学部に係る重要事項の連絡、調整に関する事項、④学長又は他の委員からの提案に関する事項、⑤その他学長が必要と認める事項を審議している。

企画委員会は、十文字学園女子大学・同短期大学部企画委員会通則規程（資料 15）に基づき、教務企画委員会、学生支援企画委員会、就職支援企画委員会の 3 つの企画委員会が設置され、定められた事項について、基本的な方針を定め、その実行を企画している。

全学委員会は、十文字学園女子大学・同短期大学部全学委員会通則規程（資料 16）に基づき、自己評価委員会、人事委員会、国際交流委員会、全学 FD 委員会、教員評価委員会、入学試験委員会、募集・入試委員会、個人情報保護管理委員会、安全衛生委員会、研究推進委員会、研究倫理委員会、動物実験委員会の 12 委員会が設置され、定められた事項について審議等を行っている。

企画委員会で企画・立案された事項や、全学委員会で審議された重要な事項は、運営会議でさらに審議され、重要事項は教授会に諮られ、意思決定されている。

これらの意思決定組織は学内規程で組織上の位置づけ等を明確に定めており、権限と責任の明確化と機能性は確保されている。また、庶務を担当する事務部門もそれぞれ明確に規定されており、各組織は有効に機能している。さらに、教学と経営が協議する場として協議会が設けられている

ス　自己点検・評価

本学は、学則第 60 条に「教育研究水準の向上を図り、大学の目的及び社会的使命を達成するため、本学における教育活動等の状況について自ら点検及び評価を行う」と定めている。

学則に基づき、自己点検・評価、外部評価、認証評価に関し、必要な事項を定めた十文字学園女子大学大学評価規程（資料 17）を制定している。

自己点検・評価の方法は、認証評価機関が定めた評価基準または、本学の目標を達成するために必要とする点検・評価項目を設定して実施することとしている。

そのため、平成 25 年度から平成 27 年度を期間とし、「教育」「入学者受け入れ」「学生支援」「就職支援」「研究」「社会貢献・地域連携」「国際化」「管理運営」の項目に分けた中期目標・中期計画を定めた。

上記の実施体制としては、全学委員会通則規程に基づき置かれている自己評価委員会が担っている。自己評価委員会は、学長、副学長、学長補佐、事務局長、学科長、センター長、事務局の部長、その他委員長が必要と認めた者で構成され、委員長は学長が務めている。自己評価委員会のもとに置かれる部会としては①自己点検・評価判定部会、②企画調整部会、③報告書執筆部会、④報告書校正部会、⑤エビデンス等編

纂部会がある。

外部評価に関しては、十文字学園女子大学外部評価委員会規程（資料 18）に基づき、外部評価委員会が実施している。外部評価委員会は、本学が実施した自己点検・評価の結果を検証し、優れた点及び改善を要する事項等を意見して、評価を付している。

認証評価に関しては、平成 20 年度に日本高等教育評価機構から「認定」の判定を受けており、さらに、平成 26 年度に日本高等教育評価機構から評価を受けるように準備を進めているところである。

セ　情報の公表

教育研究活動等の状況に関する情報の公表のために、本学ではホームページ及び各種印刷媒体を積極的に利用している。

本学ホームページのトップページに「情報の公表」のバナーを貼り、「情報の公表」のページ（http://www.jumonji-u.ac.jp/gakuen/jouhou/index.html）へすぐにたどり着けるように工夫されている。

なお、学校教育法施行規則第 172 条の 2 で公表すべきとされている情報について、本学が公表している内容及びホームページのアドレスは以下のとおりである。

①大学の教育研究上の目的に関すること

（http://www.jumonji-u.ac.jp/gakuen/jouhou/activity/kenkyumokuteki/index.html）

・建学の精神

・建学の精神・教育研究上の目的・学位授与方針・教育課程編成方針・入学者受入方針の相関図

・中期目標・中期計画

②教育研究上の基本組織に関すること

（http://www.jumonji-u.ac.jp/gakuen/jouhou/activity/soshiki/index.html）

・学校法人十文字学園組織図

・学部学科構成図

③教員組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること

（http://www.jumonji-u.ac.jp/gakuen/jouhou/activity/kyouin/index.html）

・専任・兼任教員数及び比率、職階別教員数、教員一人当たりの学生数、設置基準上必要な専任教員数

・専任教員の年齢別構成

・教員組織（役割分担）

・教員一覧（各教員が有する学位及び業績）

④入学者に関する受入方針及び入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関すること

（http://www.jumonji-u.ac.jp/gakuen/jouhou/activity/gakuseisuu/index.html）

・入学者に関すること

入学者受入方針（アドミッションポリシー）

入学者の情報

入学定員、入学者数、入学定員充足率、3 年次編入定員、3 年次編入者数

入学者の推移

過去の志願者数、受験者数、合格者数

入学試験に関する情報

学部、短期大学部の入学試験に関する状況

研究科の入試に関する状況
・在学者に関すること
在籍者数
留年者数
退学者数・除籍者数
外国人留学生数
・卒業者・修了者に関すること
卒業者・修了者数・学位授与数
就職者・進学者数
就職分野、就職先の状況
⑤授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること
（ http://www.jumonji-u.ac.jp/gakuen/jouhou/activity/jugyoukeikaku/index.html ）
・学びの特色とカリキュラム
・授業紹介・科目一覧
・履修モデル
・シラバス
⑥学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること
（http://www.jumonji-u.ac.jp/gakuen/jouhou/activity/gakusyuseika/index.html）
・取得可能学位
・授業科目の履修方法及び単位数
・卒業要件・修了要件
・成績評価
⑦校地、校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること
（http://www.jumonji-u.ac.jp/gakuen/jouhou/activity/shisetu/index.html）
・校地、校舎等の施設
キャンパス及び運動施設の概要
図書館
コンピュータ演習室
・課外活動の状況
学友会
クラブ・同好会
・交通アクセス
⑧授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関すること
（http://www.jumonji-u.ac.jp/gakuen/jouhou/activity/jugyouryou/index.html）
・入学登録料、授業料、施設費、実験実習費、諸経費
⑨大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること
（http://www.jumonji-u.ac.jp/gakuen/jouhou/activity/gakuseishien/index.html）
・修学に係る支援
リメディアル教育センター
特別支援教育センター
指定学生会館
奨学金制度
特待生制度、特別支援制度
・進路選択に係る支援
進路・就職

・心身の健康に係る支援
カウンセラー室
健康管理センター

⑩その他

・学則、規程等
（http://www.jumonji-u.ac.jp/gakuen/jouhou/activity/gakusoku/index.html）
・国際交流・社会貢献活動
（http://www.jumonji-u.ac.jp/gakuen/jouhou/activity/kokusaisykai/index.html）
・大学評価
（ http://www.jumonji-u.ac.jp/gakuen/jouhou/activity/daigakuhyouka/index.html ）
・その他
（http://www.jumonji-u.ac.jp/gakuen/jouhou/activity/sonota/index.html）
設置認可申請書・設置届出書
設置計画履行状況等報告書

また、財務情報については、事業報告書とともに大学ホームページ（http://www.jumonji-u.ac.jp/gakuen/jouhou/financial_52325538f2d9f/index.html）で公表している。私立学校法第 47 条で規定する財産目録等の備付及び閲覧に関しては、法人本部及び大学事務局において対応している。

今後も情報提供の内容や方法について検討し、充実を図っていく。

ソ　授業内容方法の改善を図るための組織的な取組

授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な対応として、十文字学園女子大学・同短期大学部全学委員会規程に基づき設置されている全学 FD 委員会が中心となり、以下の取組を行っている。

①授業評価

授業に対する受講学生の意欲や態度、教授方法・教育内容に対する受講学生の考え方などについて、質問紙調査で情報を収集し、教員が授業の質的向上を図るための一手段としている。

原則として開講している全ての授業で授業アンケートを実施しており、授業アンケートの結果は、全学 FD 委員会が結果を集計し、科目ごとの結果を担当教員個々に返却するとともに、全体の結果を掲示板にて学生に報告している。

教員は返却された科目ごとの結果をふまえ、コメントを作成している。教員のコメントは学生及び全教職員が閲覧できるように学内ネットワークにて公開しており、学生に対してその旨掲示板及びメールで周知している。

また、授業アンケートに関する学生との交流会も実施しており、学生の直接的な声を聞くと同時に、授業アンケートだけでは抽出しにくい日頃の授業に対する意見を引き出すことを目的としている。

②授業公開

教育の質向上を目指す諸活動の一環として、特定の一週間の期日を設け、授業公開を行っている。実施期間中に専任教員は一つ以上の授業を見学し、見学記録を作成する。原則全ての授業を対象とし、専任教員のみならず、非常勤講師や事務職員も見学可能となっている。

③大学問題研究会

FD と SD の合同事業として、全教職員を対象とした研修会を行っている。主に教育研究の改革に資することを目的としているが、管理運営面を含めた幅広いテー

マで本学の抱える諸課題等に関して、学内外の講師を迎えて参考となる事例について講演いただいている。

タ　社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

（１）教育課程内の取組について

本学の教育課程を通じた社会的・職業的自立に関する取組は、1 年次前期必修の共通科目である「入門ゼミナール」から始まる。「入門ゼミナール」では、大学での生活と学習が円滑に進み、卒業までの展望や卒業後の進路を学生が思い描けるようにする。また、共通科目の「十文字学」区分の中の「女性の自立・生き方を学ぶ」分野では、女性が働くことの意味や目的を考えるとともに、自分自身のキャリアプランを設計する「キャリアデザインとライフプラン」などを配置した。

さらに、各学科の専門科目として開講していた社会的・職業的自立に関する科目のうち、全学に展開すべき科目を整理し、平成 27 年度からは共通科目内に「キャリア教育」区分として体系化した。就労意識を形成させる「働く意欲を高める」分野には「社会人入門」「キャリアサポート」「インターンシップ短期」「インターンシップ」「自主社会活動」を、就業学力を養成する「就業力を身につける」分野には「キャリア基礎力入門」「キャリア基礎力応用」「現代社会理解」を配置する。

（２）教職課程外の取組について

教職課程外における社会的・職業的自立に関する取組は、学年に応じた取組が以下のとおり行われている。

新入生には、「新入生セミナー」として外部講師を招いた講演で、社会的・職業的自立を図るための学生生活の過ごし方についてのアドバイスを行っている。また、コンピテンシー（周囲の環境と良い関係を築く力）とリテラシー（実践的に問題を解決に導く力）の適正テストを実施し、新入生が自己理解を深め、学生生活を通してどのような能力を伸ばすべきかを考える機会とする。

低学年向けには、自主参加の「自己成長ワークショップ」を開催している。意欲的な学生生活を送ることが結果として満足度の高い就職につながることを理解させ、社会人基礎力の一つである「前に踏み出す力」を伸ばす意識を醸成している。

3 年生を対象とした「就職ガイダンス」は年 6 回開催し、さらにマナー講座、グループディスカッション講座、OG 講座、業界セミナーを開催している。また、就労意識の高い学生に向けて外部講師による「就職ゼミ」を開講している。

（３）適切な体制の整備について

本学では学長を補佐する体制として副学長を置いているが、その一人を就職担当としている。就職担当副学長は就職支援企画委員会の委員長として、就職支援企画委員会を開催し、学生のキャリア支援・就職支援に関する事項等について基本的な方針を定め、その実行を企画している（全学委員会通則規程第 15 条）。就職支援企画委員会の下に置かれているキャリア支援小委員会は、学生のキャリア支援及び就職指導に関する事項を検討し、実施している（就職支援企画委員会キャリア支援小委員会に関する細則（資料 19）第 2 条）。また、就職支援担当副学長はキャリア教育センター長として、キャリア教育センター運営委員会を所管し、本学のキャリア教育の企画・運営・推進にあたり、各学科等と連携して、キャリア教育の充実を図っている。これらの事務は、就職支援部就職支援課が担当しており、教学と事務組織が一体となり、全学で学生の社会的・職業的自立に取り組む体制が整備されている。

学生の確保の見通し等を記載した書類

1　学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況

（1）学生の確保の見通し

①定員充足の見込み

a）人間福祉学科

平成 27 年度に社会福祉・保育コースと社会福祉・介護福祉コースからなる人間福祉学科を新たに設置する。（現行の社会福祉士コースと介護福祉士コースからなる人間福祉学科は、平成 27 年 4 月学生募集停止とする。）

新たな人間福祉学科の入学定員 100 人の内訳は、社会福祉・保育コース 50 人、社会福祉・介護福祉コース 50 人とする。

社会福祉・保育コースは社会福祉士に加え保育士の養成を行うため、指定保育士養成施設としての指定を受ける。そのため、児童福祉法施行規則第 6 条の 2 第 6 号「1 学級の学生数は 50 人以下であること」の適用を受けることから、入学定員 50 人で設定した。

社会福祉・介護福祉コースは、現行の人間福祉学科の流れを汲むものであり、資料 1 の学生募集状況（受験者数≒合格者数）を鑑み、現行の人間福祉学科の入学定員 60 人から 10 人減じて 50 人で設定した。

ベネッセグループの株式会社進研アドに委託して行った新設ニーズ調査の結果は資料 2 のとおりであり、人間福祉学科の入学意向度は、「入学してみたい」4.8%（84 人/1,749 人）、「入学を検討してみたい」20.8%（364 人/1,749 人）であった。本学が位置し、本学入学者の出身地の半数を占める埼玉県の私立大学進学者数（女子）の将来推計と、私立 4 年制大学進学希望者に絞った入学意向度（「入学してみたい」4.4%）を鑑みると、入学定員 100 人は確保できる見込みである（資料 3）。

b）健康栄養学科

平成 27 年度に新たに健康栄養学科を設置し、入学定員 80 人とする。

健康栄養学科は栄養士の養成を行うため、栄養士養成施設の指定を受けることから、栄養士法施行規則第 9 条第 10 号「同時に授業を行う学生又は生徒の数は、おおむね 40 人であること」が適用される。そこで、1 クラスあたりの学生数は 40 人とした上で 2 クラス体制とし、入学定員 80 人で設定した。

ベネッセグループの株式会社進研アドに委託して行った新設ニーズ調査の結果は資料 2 のとおりであり、健康栄養学科の入学意向度は、「入学してみたい」6.4%（112 人/1,749 人）、「入学を検討してみたい」23.5%（411 人/1,749 人）であった。調査において「入学してみたい」との回答数が、入学定員 80 人を上回っており、入学定員 80 人を確保できる見込みである。

c）文芸文化学科

平成 27 年度に新たに文芸文化学科を設置し、入学定員 70 人とする。

十文字学園女子大学短期大学部表現文化学科の学問領域を移行する形で設置を行うが、表現文化学科および前身の文学科の募集状況は資料 1 のとおりであり、直近 4 年間の平均入学者数は 73.5 人であることから、入学定員 70 人で設定した。

ベネッセグループの株式会社進研アドに委託して行った新設ニーズ調査の結果は資料 2 のとおりであり、文芸文化学科の入学意向度は、「入学してみた

い」5.1%（90 人/1,749 人）、「入学を検討してみたい」23.5%（411 人/1,749 人）であった。調査において「入学してみたい」との回答数が入学定員 70 人を上回っており、入学定員 70 人を確保できる見込みである。

②定員充足の根拠となる調査結果の概要（資料 2）

ア）調査目的

設置（人間福祉学科、健康栄養学科、文芸文化学科）を行う学科に対する高校生の評価や入学意向を探る。

イ）調査方法

高校留め置き調査（高校の教員を通じて授業等で高校生に一斉配布・回収）

ウ）対象条件およびサンプル数

対　象　者：高校 2 年生女子
依　頼　数：21 校（埼玉県 16 校、東京都 4 校、宮城県 1 校）2,837 人
有効回収数：16 校（埼玉県 12 校、東京都 4 校）　1,749 人

エ）実査時期

平成 25 年 10 月 7 日（月）～平成 25 年 11 月 12 日（火）

オ）主な調査項目

・受験校選択の重視点
・十文字学園女子大学の認知度
・十文字学園女子大学の特色評価
・新設学科に対するキーワード評価
・新設学科の特色評価
・新設学科への興味・関心度
・新設学科への入学意向度

調査項目の全体像については、調査票（資料 4）を参照いただきたい。

③学生納付金の設定の考え方

a）人間福祉学科

初年度学生納付金は 130 万円とし、その内訳は入学登録料 10 万円、授業料 75 万円、実験実習費 15 万円、施設費 30 万円である。これは本学の食物栄養学科及び健康栄養学科を除く 6 学科と同額である。また、近隣大学の同分野の学部学科と比較しても同程度もしくは低い水準となっている（資料 5）。

b）健康栄養学科

初年度学生納付金は 135 万円とし、その内訳は入学登録料 10 万円、授業料 75 万円、実験実習費 20 万円、施設費 30 万円である。これは本学の食物栄養学科と同額であり、授業形態に実験が多いことから、他の 7 学科と比較すると 5 万円高い。また、近隣大学の同分野の学部学科と比較しても同程度もしくは低い水準となっている（資料 6）。

c）文芸文化学科

初年度学生納付金は 130 万円とし、その内訳は入学登録料 10 万円、授業料 75 万円、実験実習費 15 万円、施設費 30 万円である。これは本学の食物栄養学科及び健康栄養学科を除く 6 学科と同額である。また、近隣大学の同分野の学部学科と比較しても同程度もしくは低い水準となっている（資料 7）。

（２）学生確保に向けた具体的な取組状況

本学では、全学的な学生募集活動の充実を図り、その効果をより高めるため、学

長の下に学生募集戦略室が置かれ、また、募集担当副学長及び入試担当副学長の両名で所管する募集入試委員会が設置されている。学生募集戦略室で決定された学生募集に関する方針や戦略について、募集入試委員会で各学科に周知され、実行に移されている。

学生募集戦略室及び募集入試委員会を庶務する事務組織として、学生募集課、募集広報課及び入試課からなる募集・入試部がある。募集・入試部は、学生募集に関して企画・立案を行い、教員や在学生と一体となって学生確保に向けた諸活動を行っている。具体的には、オープンキャンパスや学外における会場ガイダンス、高校ガイダンス、高校教諭対象大学説明会、高校での模擬授業、高校訪問等を実施し、高校生や保護者、高校教諭に直接的に大学の情報を周知するように努めている。

大学の情報については、大学案内や大学ホームページ等でも、各学科の教育目標や学びの内容、取得可能な免許・資格、学納金や奨学金制度などに関する情報を周知している。また、入学者受入方針については学生募集要項や大学ホームページにて、入試情報については入試ガイドにて明らかにしている。

2　人材需要の動向等社会の要請

（1）人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的（概要）

a）人間福祉学科

人生のあらゆる場面における実践的な福祉・援助の方策を探る社会福祉学に基づき、「生活の質」の向上や「地域」における「共生」に対する理解を背景として、相談援助、介護、保育に関する知識・技術を適切に応用できる能力を習得することを教育研究上の目的とする。

b）健康栄養学科

栄養学を基礎として、食・運動・教育に関する専門的知識や技術、指導力、実践力を習得することにより、健康のスペシャリストとしてすべての人々の健康生活のための学びと実践を支え、推進できる人材を育成することを教育研究上の目的とする。

c）文芸文化学科

ことばを有する人間によって生み出された文化・芸術を深く理解し、それに基づいて、新たな文化を創造、発信する人材を養成する。また、人間生活の全般において、人として知的に成熟することを目指す人間を育成することを教育研究上の目的とする。

（2）社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠

a）人間福祉学科

現行の人間福祉学科で行っている社会福祉士及び介護福祉士の養成に加え、新たな人間福祉学科で保育士の養成をはじめる根拠は次のとおりである。

近年、子どもと子育て家庭をめぐる社会環境は大きく変化し、子どもや家庭をめぐる課題は複雑化、深刻化している。すべての子どもに良質な成育環境を保障し、子どもを大切にする社会の実現が求められているなか、保護者による適切な養育を受けられない子どもが増加している。こうした状況の中では、子どもを中心に据えつつ、子育て家庭を社会全体で支えていく「子ども家庭福祉」の観点が必要である。また、虐待相談対応件数は年々増加し、子どもの尊い命が失われる事例も多く発生している。子どもにとって安心できる養育環境を保障するためには、子どもは家庭だけではなく地域社会の中で育つという認識のもと、社会的に

子どもを養育し保護する児童養護施設、里親制度等の「社会的養護」の意義と重要性が高まっている。

このような社会的背景を受け、人としての尊厳を重んじ、互いに支え合い、共に豊かに生きられる共生社会の実現に貢献できる女性を養成してきた人間福祉学科の教育研究活動にこそ「児童福祉」の領域を加え、保育士の養成を行うべきであると判断した。これは、人間福祉学科の教育研究上の目的に沿うものであり、人間福祉学科において保育士を養成する意味は、社会福祉の知識が必要な児童養護施設や介護についての技能が求められる障害児入所施設（入所・通所）などでの施設保育、および問題や悩みを抱える保護者からの相談に対応できる相談援助技術といった付加価値の高い保育士の養成にあると言える。

また、保育士をめぐる現状であるが、平成 25 年 4 月、潜在的ニーズも含めた待機児童の解消を強力に進めるため、総理より「待機児童解消加速化プラン」が発表された。それを受け、5 月には厚生労働省が支援パッケージをまとめ、5 本の柱で保育の量的拡大と質の確保を図るとされている。その柱の一つに「保育の量拡大を支える保育士確保」が掲げられ、その施策として新規卒業者の確保が挙げられているところである。また、10 月には厚生労働省が「保育を支える保育士の確保に向けた総合的取組」（資料 8）をとりまとめ、その中には、「待機児童解消加速化プラン」により、保育の量拡大を図るなか、平成 29 年度末には保育士が約 7.4 万人不足することが見込まれており、保育を支える保育士の確保が重要とある。さらには、現状の保育士の求人状況をみても、ハローワークにおける有効求人倍率は 1.0 倍を超過する状況にあり、保育士の確保は喫緊の課題との記述がある。

本学が位置する埼玉県の上記に対応する数値は、平成 29 年度末不足保育士数約 9,300 人（資料 9)、保育士の有効求人倍率は平成 23 年度が 10 月以降、平成 24 年度が 8 月以降年度末まで 1.0 倍を超過している状況にある(資料 10)。なお、厚生労働省発表の「保育所関連状況とりまとめ」（資料 11）によると、埼玉県では待機児童解消のため、平成 24 年度、29 市区町村で保育所定員を増やし、県内で計 3,280 人の定員増となった。にもかかわらず、平成 25 年 4 月 1 日現在、902 人の待機児童がいる。首都圏においては、入所申込が増加傾向にあるうえ、平成 27 年度から本格施行予定の子ども・子育て支援新制度においては、パートタイマーや求職中の場合も、保育の必要性が認定されるようになり、公的保育の対象が拡大されることから、現在以上の保育需要の増加が確実である。それに伴う、深刻な保育士不足は容易に予想される。

このような政府の動向や埼玉県等の現状を背景として、本学においては入学定員増を行うことで保育士資格保有者を増やし、新規卒業者として保育所等へ就職させることにより、全国及び埼玉県の保育士不足の解消に寄与する。

b）健康栄養学科

「国民の健康の増進の総合的な推進を図るための基本的な方針の全部を改正する件」（平成 24 年 7 月 10 日厚生労働省告示第 430 号）が告示され、いわゆる「健康日本 21（第二次)」が平成 25 年 4 月より適用されている。

その基本的な方向として、

①健康寿命の延伸と健康格差の縮小

②生活習慣病の発症予防と重症化予防の徹底

③社会生活を営むために必要な機能の維持及び向上

④健康を支え、守るための社会環境の整備
⑤栄養・食生活、身体活動・運動、休養、飲酒、喫煙及び歯・口腔の健康に関する生活習慣及び社会環境の改善

が示されているが、健康栄養学科の教育研究上の目的はこれに沿うものである。

つまり、健康栄養学科で養成した人材は、国民の健康増進を形成する基本的要素となる「栄養・食生活」「身体活動・運動」を学修したことにより、食生活の改善や運動習慣の定着等による生活習慣病の第一次予防、乳幼児期から高齢期までそれぞれのライフステージにおける心身機能の維持及び向上などに資することができ、健康寿命の延伸の一端を担うことができる。

また、「健康日本 21（第二次）別表第 4」（資料 12）では、健康を支え、守るための社会環境の整備に関する目標値として、

○健康づくりに関する活動に取り組み、自発的に情報発信を行う企業数を平成 24 年度 420 社から平成 34 年度 3,000 社に増加
○健康づくりに関して身近で専門的な支援・相談が受けられる民間団体の活動拠点数を平成 24 年度 7,134 拠点から平成 34 年度 15,000 拠点に増加

を掲げており、活躍の場が広がることが見込まれる。

c）文芸文化学科

文芸文化学科の教育研究上の目的に掲げた「人間生活の全般において、人として知的に成熟することを目指す人間を育成する」とは、企業・団体に対して行ったニーズ調査の、企業が新規学卒者として採用したい人材の能力・資質の「常識がある」（3 位、69.7%）「幅広い教養を身につけている」（16.7%）などに応えるものである（資料 13）。

また、文芸文化学科はことばを中核とすることで、適切かつ高度な日本語の運用能力と論理的思考力を身につけさせ、自らの考えや想いを的確に相手に伝える力を修得させる。正確で美しい言葉を身につけることで、社会で「伝える力」を活かすことができる人材を育成することは、企業が新規学卒者として採用したい人材の能力・資質の「コミュニケーション能力が高い」（1 位 87.0%）に応えるものである。

これらのことから、文芸文化学科は企業・団体からの興味関心度、社会的必要度、採用意向度、特色ともに一定の評価を得ている（資料 14）。

d）ニーズ調査（企業編）の結果概要

ア）調査目的

設置（人間福祉学科、健康栄養学科、文芸文化学科を行う学科に対する企業の評価や採用意向を探る。

イ）調査方法

郵送配布・郵送回収

ウ）対象条件およびサンプル数

対　象　者：卒業生の想定される就職先の採用担当者
依　頼　数：2,000 社・団体
有効回収数：300 社・団体

エ）実査時期

平成 25 年 10 月 19 日（土）～平成 25 年 11 月 12 日（火）

オ）主な調査項目

・新規学卒者として採用したい人材の能力・資質

・十文字学園女子大学の認知度
・十文字学園女子大学の特色評価
・新設学科への興味・関心度
・新設学科の社会的必要度
・新設学科を卒業した学生の採用意向

調査項目の全体像については、調査票（資料 15）を参照いただきたい。

カ）調査結果の概要

各学科に対する企業・団体の採用意向度は、資料 16 のとおりである。

専門職を養成する人間福祉学科は「医療・福祉」、健康栄養学科は「飲食・宿泊・旅行・娯楽」といった関係の深い企業・団体からの興味・関心度、社会的必要度、採用意向度はより高い傾向にある。一方、主に一般就職を目指す文芸文化学科は業種による違いはみられないものの、従業員規模別において「100 名以上 500 名未満」「500 名以上」の企業からの採用意向度が高かった。

別記様式第３号（その１）

教　　員　　名　　簿

学　長　の　氏　名　等						
調書番号	役職名	フリガナ 氏名 ＜就任（予定）年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給（千円）	現　職 （就任年月）
－	十文字学園女子大学学長	ヨコスカ　カオル 横須賀　薫 〈平成23年4月〉		修士※ (教育学)		十文字学園女子大学　学長 十文字学園女子大学短期大学部　学長 （平成23年4月）

教　員　の　氏　名　等

（人間生活学部人間福祉学科）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給（千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現　職（就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
1	専	教授	ｶﾀｲｷ　ﾋﾃﾞﾄ 片居木　英人 ＜平成27年4月＞		政治学修士※		入門ゼミナール 読書入門 現代社会とグローバリゼーション くらしのなかの日本国憲法 社会福祉概論Ⅰ 社会保障論Ⅰ 福祉行財政と福祉計画 社会保障論Ⅱ 更生保護制度 相談援助実習指導Ⅰ 相談援助実習指導Ⅱ 相談援助実習指導Ⅲ 社会福祉実習 公的扶助特論 人間福祉基礎演習 人間福祉演習 卒業研究	1前 1前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1前 3前 3後 3後 3後 2・3前 2・3後 3・4通 3・4通 3後 2前 3通 4通	2 2 2 2 2 2 2 2 2 1 1 2 4 2 1 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 人間福祉学科 教授 （平成23年4月）	5日
2	専	教授	ｸﾘﾊﾗ　ﾅｵｷ 栗原　直樹 ＜平成27年4月＞		文学士		入門ゼミナール 読書入門 児童・家庭福祉論 ソーシャルワーク論Ⅰ 社会的養護論 ソーシャルワーク論Ⅱ 相談援助演習Ⅲ 相談援助実習指導Ⅱ 人間福祉基礎演習	1前 1前・後 1前 1後 2前 2前 2・3後 2・3後 2前	2 2 2 2 2 2 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 人間福祉学科 教授 （平成23年4月）	5日
	兼任	講師	ｸﾘﾊﾗ　ﾅｵｷ 栗原　直樹 ＜平成29年4月＞				児童・家庭福祉論 ソーシャルワーク論Ⅰ 社会的養護論 ソーシャルワーク論Ⅱ スクールソーシャルワーク論	1前 1後 2前 2前 3後	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1		
3	専	教授	ｻﾄｳ　ｱｷﾗ 佐藤　陽 ＜平成27年4月＞		社会福祉学修士		入門ゼミナール 読書入門 地域福祉論Ⅰ ソーシャルワーク論Ⅴ 地域福祉論Ⅱ 相談援助演習Ⅲ 相談援助演習Ⅳ 相談援助演習Ⅴ 相談援助実習指導Ⅱ 相談援助実習指導Ⅲ 社会福祉実習 ボランティア・コーディネーション 人間福祉基礎演習 人間福祉演習 卒業研究	1前 1前・後 2前 3後 2後 2・3後 3・4前 3・4後 2・3後 3・4通 3・4通 1・2・3・4後 2前 3通 4通	2 2 2 2 2 1 1 1 1 2 4 2 1 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 人間福祉学科 教授 （平成26年4月）	5日
4	専	教授	ﾂﾉﾀﾞ　ｼﾝｼﾞ 角田　真二 ＜平成27年4月＞		工学修士		入門ゼミナール 読書入門 現代社会と福祉 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ 生活環境支援技術 障害児と地域支援 保育実践演習 保育実習ⅠA（保育所実習） 保育実習ⅠB（施設実習） 保育実習指導Ⅰ 保育実習Ⅱ（保育所実習） 保育実習指導Ⅱ 保育実習Ⅲ（施設実習） 保育実習指導Ⅲ 社会調査の応用 ユニバーサルデザイン論 人間福祉基礎演習 人間福祉演習 卒業研究	1前 1前・後 1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後 2後 3後 3後 3前・後 3前・後 2通 3後・4前 3前 3後・4前 3前 2後 1・2・3・4前 2前 3通 4通	2 2 2 2 1 1 2 2 2 2 2 2 1 2 1 2 2 1 2 4	1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 （平成23年4月）	5日
5	専	教授	ﾌｷｻﾞｷ　ｷｮｳｺ 柊崎　京子 ＜平成27年4月＞		修士※ （社会福祉学）		入門ゼミナール 読書入門 生活支援技術応用Ⅱ 介護過程基礎Ⅰ 介護過程基礎Ⅱ 医療を必要とする人への介護Ⅰ 医療を必要とする人への介護Ⅱ 医療を必要とする人への介護Ⅲ 医療を必要とする人への介護Ⅳ 介護総合演習Ⅰ 介護総合演習Ⅱ 介護総合演習Ⅲ 介護総合演習Ⅳ 介護実習Ⅰ 介護実習Ⅱ－1 介護実習Ⅱ－2 人間福祉基礎演習 人間福祉演習 卒業研究	1前 1前・後 2後 1後 2前 3前 3前 3後 3後 1後 2後 3前 3後 1後 2後 3前 2前 3通 4通	2 2 1 2 2 2 2 2 1 1 1 1 1 2 4 4 1 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 人間福祉学科 教授 （平成26年4月）	5日
6	専	教授	ﾌｸﾀﾞ　ﾄﾓｵ 福田　智雄 ＜平成27年4月＞		文学修士		入門ゼミナール 読書入門 相談援助 保育者論 児童・家庭支援論 社会的養護演習 保育相談支援 保育実践演習 保育実習ⅠA（保育所実習） 保育実習ⅠB（施設実習） 保育実習指導Ⅰ 保育実習Ⅱ（保育所実習） 保育実習指導Ⅱ 保育実習Ⅲ（施設実習） 保育実習指導Ⅲ 人間福祉基礎演習 人間福祉演習 卒業研究	1前 1前・後 3前 3前 2後 2後 3後 3後 3前・後 3前・後 2通 3後・4前 3前 3後・4前 3前 2前 3通 4通	2 2 1 2 2 1 1 2 2 2 2 2 1 2 1 1 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 人間福祉学科 教授 （平成26年4月）	5日
7	専	教授	ﾐﾔｳﾁ　ﾄｼﾋｺ 宮内　寿彦 ＜平成27年4月＞		社会福祉学修士		入門ゼミナール 読書入門 社会福祉概論Ⅱ 基礎介護論Ⅰ 基礎介護論Ⅱ 介護と倫理 コミュニケーション技術Ⅰ コミュニケーション技術Ⅱ 介護過程展開Ⅰ 介護総合演習Ⅰ 介護総合演習Ⅱ 介護総合演習Ⅲ 介護総合演習Ⅳ 介護実習Ⅰ 介護実習Ⅱ－1 介護実習Ⅱ－2 人間福祉基礎演習 人間福祉演習 卒業研究	1前 1前・後 1後 1前 1後 2前 1後 2前 2後 1後 2後 3前 3後 1後 2後 3前 2前 3通 4通	2 2 2 2 2 2 1 1 1 1 1 1 1 2 4 4 1 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 人間福祉学科 准教授 （平成24年4月）	5日

8	専	教授	ﾐﾔｷ　ﾐﾁｺ 宮城　道子 （野崎） ＜平成27年4月＞		社会学修士		入門ゼミナール 読書入門 現代社会と福祉 社会調査の基礎 社会理論と社会システム 相談援助演習Ⅲ 相談援助演習Ⅳ 相談援助演習Ⅴ 相談援助実習指導Ⅰ 相談援助実習指導Ⅱ 相談援助実習指導Ⅲ 社会福祉実習 調査と統計 人間福祉基礎演習 人間福祉演習 卒業研究	1前 1前・後 1・2・3・4前・後 2前 2後 2・3後 3・4前 3・4後 2・3前 2・3後 3・4通 3・4通 1後 2前 3通 4通	2 2 2 2 2 1 1 1 1 1 2 4 2 1 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 人間福祉学科 准教授 （平成23年4月）	5日
9	専	准教授	ｵｵﾀ　ﾏﾁｺ 太田　眞智子 ＜平成27年4月＞		社会福祉学 修士		入門ゼミナール 読書入門 障害者福祉論 就労支援サービス論 相談援助演習Ⅲ 相談援助演習Ⅳ 相談援助演習Ⅴ 障がいの理解Ⅱ 障害児保育 相談援助実習指導Ⅰ 相談援助実習指導Ⅱ 相談援助実習指導Ⅲ 社会福祉実習 社会福祉の歴史 人間福祉基礎演習 人間福祉演習 卒業研究	1前 1前・後 1後 2後 2・3後 3・4前 3・4後 2後 2前 2・3前 2・3後 3・4通 3・4通 1・2・3・4前 2前 3通 4通	2 2 2 2 1 1 1 2 2 1 1 2 4 2 1 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 人間福祉学科 講師 （平成24年4月）	5日
10	専	准教授	ｵｵﾔﾏ　ﾋﾛﾕｷ 大山　博幸 ＜平成27年4月＞		教育学修士		入門ゼミナール 読書入門 ソーシャルワーク論Ⅲ ソーシャルワーク論Ⅳ 相談援助演習Ⅱ 相談援助演習Ⅲ 相談援助演習Ⅳ 相談援助演習Ⅴ 教育原理 相談援助実習指導Ⅰ 相談援助実習指導Ⅱ 相談援助実習指導Ⅲ 社会福祉実習 ケア論 人間福祉基礎演習 人間福祉演習 卒業研究	1前 1前・後 2後 3前 2前 2・3後 3・4前 3・4後 2後 2・3前 2・3後 3・4通 3・4通 1・2・3・4前 2前 3通 4通	2 2 2 2 3 1 1 1 2 1 1 2 4 2 1 2 4	1 1 1 1 3 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 人間福祉学科 准教授 （平成23年4月）	5日
11	専	准教授	ﾉｼﾞﾏ　ﾔｽｺ 野島　靖子 ＜平成27年4月＞		社会福祉学 修士		入門ゼミナール 読書入門 現代社会と福祉 生活支援技術概論 日常生活支援技術Ⅰ 日常生活支援技術Ⅱ 日常生活支援技術Ⅲ 生活支援技術応用Ⅰ 介護過程展開Ⅱ 介護総合演習Ⅰ 介護総合演習Ⅱ 介護総合演習Ⅲ 介護総合演習Ⅳ 介護実習Ⅰ 介護実習Ⅱ－1 介護実習Ⅱ－2 介護基礎 人間福祉基礎演習 人間福祉演習	1前 1前・後 1・2・3・4前・後 1前 1前 1後 1後 2前 3前 1後 2後 3前 3後 1後 2後 3前 1前 2前 3通	2 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 2 4 4 2 1 2	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 人間福祉学科 准教授 （平成25年4月）	5日
	兼任	講師	ﾉｼﾞﾏ　ﾔｽｺ 野島　靖子 ＜平成30年4月＞				生活支援技術概論 日常生活支援技術Ⅰ 日常生活支援技術Ⅱ 生活支援技術応用Ⅰ 介護過程展開Ⅱ 介護基礎	1前 1前 1後 2前 3前 1前	1 1 1 1 1 2	1 1 1 1 1 1		
12	専	准教授	ﾔﾏｸﾞﾁ　ﾕﾐ 山口　由美 ＜平成27年4月＞		博士 （人間学）		入門ゼミナール 読書入門 日常生活支援技術Ⅲ 認知症の理解Ⅰ こころとからだのしくみⅠ こころとからだのしくみⅡ 医療を必要とする人への介護Ⅲ 医療を必要とする人への介護Ⅳ 介護総合演習Ⅰ 介護総合演習Ⅱ 介護総合演習Ⅲ 介護総合演習Ⅳ 介護実習Ⅰ 介護実習Ⅱ－1 介護実習Ⅱ－2 人間福祉基礎演習 人間福祉演習 卒業研究	1前 1前・後 1後 2前 2前 2後 3後 3後 1後 2後 3前 3後 1後 2後 3前 2前 3通 4通	2 2 1 2 2 2 2 1 1 1 1 1 2 4 4 1 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 人間福祉学科 准教授 （平成26年4月）	5日
13	専	講師	ｶﾀﾔﾏ　ﾄﾓｺ 片山　友子 ＜平成27年4月＞		修士 （社会福祉学）		入門ゼミナール 読書入門 高齢者に対する支援と介護保険制度Ⅰ 高齢者に対する支援と介護保険制度Ⅱ ソーシャルワーク論Ⅵ 相談援助演習Ⅰ 相談援助演習Ⅲ 相談援助演習Ⅳ 相談援助演習Ⅴ 相談援助実習指導Ⅰ 相談援助実習指導Ⅱ 相談援助実習指導Ⅲ 社会福祉実習 人間福祉基礎演習 間福祉演習 卒業研究	1前 1前・後 1後 2前 4前 1後 2・3後 3・4前 3・4後 2・3前 2・3後 3・4通 3・4通 2前 3通 4通	2 2 2 2 2 3 1 1 1 1 1 2 4 1 2 4	1 1 1 1 1 3 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 人間福祉学科 助手 （平成24年4月）	5日
14	専	講師	ｶﾒｻﾞｷ　ﾐｻｺ 亀﨑　美沙子 ＜平成27年4月＞		家政学修士		入門ゼミナール 読書入門 保育原理 保育課程論 保育内容総論 保育内容演習Ⅲ 保育内容演習Ⅳ 保育実践演習 保育実習ⅠA（保育所実習） 保育実習ⅠB（施設実習） 保育実習指導Ⅰ 保育実習Ⅱ（保育所実習） 保育実習指導Ⅱ 保育実習Ⅲ（施設実習） 保育実習指導Ⅲ 人間福祉基礎演習 間福祉演習 卒業研究	1前 1前・後 1前 3前 1後 2後 3前 3後 3前・後 3前・後 2通 3後・4前 3前 3後・4前 3前 2前 3通 4通	2 2 2 2 1 2 2 2 2 2 2 2 1 2 1 1 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	松山東雲短期大学 保育科 専任講師 （平成23年4月）	5日

15	専	講師	ｸﾎﾞﾀ　ﾖｳｺ 久保田　葉子 ＜平成27年4月＞		konzertdiplom （ドイツ）		入門ゼミナール 読書入門 保育の表現技術Ⅰ（音楽表現） 保育の表現技術Ⅴ（ピアノ） 保育実践演習 保育実習ⅠＡ（保育所実習） 保育実習ⅠＢ（施設実習） 保育実習指導Ⅰ 保育実習Ⅱ（保育所実習） 保育実習指導Ⅱ 保育実習Ⅲ（施設実習） 保育実習指導Ⅲ 人間福祉基礎演習 間福祉演習 卒業研究	1前 1前・後 1前 1・2・3・4前・後 3後 3前・後 3前・後 2通 3後・4前 3前 3後・4前 3前 2前 3通 4通	2 2 2 5 2 2 2 2 2 1 2 1 1 2 4	1 1 1 5 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 非常勤講師 （平成23年4月）	5日
16	兼担	講師	ｱｽﾞﾏ　ｼｮｳｺ 東　聖子 ＜平成27年4月＞		人文科学 修士※		女性と文化	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 教授 （平成24年4月）	
17	兼担	講師	ｱﾀﾞﾁ　ｶｽﾞﾋｻ 安達　一寿 ＜平成27年4月＞		博士 （教育学）		地域で学ぶ 総合科目 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1前・後 1前・後 1前 1・2・3・4後	2 12 2 1	1 6 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 （平成23年4月）	
18	兼担	講師	ｱﾍﾞ　ﾌﾐ 阿部　史 （神崎） ＜平成27年4月＞		ＬＬ．Ｍ※ （アメリカ）		家庭と法 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	4 2 1	2 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 准教授 （平成25年4月）	
19	兼担	講師	ｱﾔｲ　ｻｸﾗｺ 綾井　桜子 ＜平成27年4月＞		博士 （教育学）		現代社会と教育	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部児童教育学科 准教授 （平成25年4月）	
20	兼担	講師	ｲｲﾀﾞ　ﾛｶ 飯田　路佳 ＜平成27年4月＞		体育学修士		健康と運動 身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	2 4 2	1 4 2	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 准教授 （平成23年4月）	
21	兼担	講師	ｲｹﾏ　ﾘﾖｺ 池間　里代子 ＜平成27年4月＞		文学修士		中国語Ⅰ 中国語Ⅱ 海外語学研修（事前事後指導を含む） 中国語試験対策科目	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4前 1・2・3・4前・後	2 2 2 4	1 1 1 2	十文字学園女子大学 特任准教授 （平成25年4月）	
22	兼担	講師	ｲｼｶﾜ　ﾀｶｼ 石川　敬史 ＜平成27年4月＞		図書館情報学 修士		情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1前 1・2・3・4後	2 1	2 1	十文字学園女子大学 専任講師 （平成24年4月）	
23	兼担	講師	ｲｼﾉ　ｴｲｲﾁ 石野　榮一 ＜平成27年4月＞		法学士		地域で学ぶ 現代社会理解	1前・後 3前	2 2	1 1	十文字学園女子大学 特任教授 （平成25年6月）	
24	兼担	講師	ｲｼﾔﾏ　ﾀｶﾕｷ 石山　隆之 ＜平成27年4月＞		ｽﾎﾟｰﾂ科学 修士		身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1前 1・2・3・4後	4 2	4 2	十文字学園女子大学 特任准教授 （平成24年4月）	
25	兼担	講師	ｵｵﾄﾓ　ﾕｷｺ 大友　由紀子 ＜平成27年4月＞		文学修士※		キャリアデザインとライフプラン	1・2・3・4前・後	4	2	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 教授 （平成26年4月）	
26	兼担	講師	ｵｶﾞｻﾜﾗ　ﾉﾘｺ 小笠原　典子 ＜平成27年4月＞		法学士 文学士		日本語Ⅰ 日本語Ⅱ 日本語能力試験対策講座(文法・文字語彙) 日本語能力試験対策講座(読解) 日本語表現技術	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4通	2 2 4 4 2	1 1 2 2 1	十文字学園女子大学 教授 （平成23年4月）	
27	兼担	講師	ｵｶﾉｳｴ　ﾅｵｺ 岡上　直子 ＜平成27年4月＞		教育学士		現代社会と教育	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部児童教育学科 教授 （平成23年4月）	
28	兼担	講師	ｵﾁｱｲ　ﾏﾕ 落合　真裕 ＜平成27年4月＞		文学修士※		現代社会とグローバリゼーション	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 講師 （平成24年4月）	
29	兼担	講師	ｶﾄｳ　ｱｷｺ 加藤　暁子 ＜平成27年4月＞		ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学 修士※		女性と文化 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	2 2 1	1 2 1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 准教授 （平成24年4月）	
30	兼担	講師	ｶｼﾞﾉ　ﾘｮｳｺ 梶野　涼子 ＜平成27年4月＞		学士 （栄養学）		食の科学	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部食物栄養学科 助教 （平成23年4月）	
31	兼担	講師	ｶﾘﾉ　ｺｳｼﾞ 狩野　浩二 ＜平成27年4月＞		修士 （教育学）		埼玉の地理・歴史・文化	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部児童教育学科 教授 （平成23年4月）	
32	兼担	講師	ｶﾜｸﾞﾁ　ﾋﾃﾞﾄｼ 川口　英俊 ＜平成27年4月＞		修士 （法学）※		くらしのなかの日本国憲法 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	2 2 1	1 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 准教授 （平成23年4月）	
33	兼担	講師	ｷﾀﾊﾗ　ｼｭﾝｲﾁ 北原　俊一 ＜平成27年4月＞		博士 （理学）		情報とネットワーク社会 宇宙とものなりたち 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ キャリア基礎力入門 キャリア基礎力応用	1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後 2前 2後	2 4 2 1 2 2	1 2 2 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 准教授 （平成23年4月）	
34	兼担	講師	ｸﾘﾊﾗ　ﾀｶｼ 栗原　隆史 ＜平成28年4月＞		博士 （経営情報学）		インターンシップ短期 インターンシップ	2・3前・後 2・3前・後	2 4	2 2	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 教授 （平成23年4月）	
35	兼担	講師	ｺｳｺﾞ　ﾄﾓﾐ 向後　朋美 （田中） ＜平成27年4月＞		文学修士※		英語Ⅰ 英語Ⅱ アドバンスト・リーディング アドバンスト・ライティング	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4後 1・2・3・4後	10 2 2 2	5 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 准教授 （平成23年4月）	
36	兼担	講師	ｺﾊﾞﾔｼ　ﾐﾁｺ 小林　三智子 ＜平成28年4月＞		博士 （歯学）		子どもの食と栄養	2前	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部食物栄養学科 教授 （平成25年4月）	
37	兼担	講師	ｺﾊﾞﾔｼ　ﾐﾉﾙ 小林　実 ＜平成27年4月＞		文学修士※		女性と文化	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 准教授 （平成24年4月）	
38	兼担	講師	ｺﾐｴ　ﾏｻﾋｺ 込江　雅彦 ＜平成27年4月＞		修士※ （経済学）		情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1前 1・2・3・4後	2 1	2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 准教授 （平成23年4月）	
39	兼担	講師	ｻｲﾄｳ　ﾚｲｺ 齋藤　麗子 ＜平成27年4月＞		医学博士		女性と健康	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部幼児教育学科 教授 （平成23年4月）	
40	兼担	講師	ｻｻｷ　ﾅｵ 佐々木　菜穂 （佐藤） ＜平成27年4月＞		農学博士		食の科学	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部食物栄養学科 講師 （平成26年4月）	
41	兼担	講師	ｼｰﾗ・ｸﾘﾌ Sheila Cliffe ＜平成27年4月＞		ＰｈＤ （イギリス）		現代社会とグローバリゼーション アドバンスト・ライティング 日常英会話入門 日常英会話 ビジネス英語 ビジネス英会話	1・2・3・4前・後 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 教授 （平成24年4月）	
42	兼担	講師	ｼﾀﾗ　ﾕｳｺ 設楽　優子 （松尾） ＜平成27年4月＞		ＭＡ （イギリス）		英語Ⅰ 英語Ⅱ ＴＯＥＩＣ対策講座 アドバンスト・リーディング 映画・ドラマ英語	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4後	10 2 2 2 2	5 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 准教授 （平成23年4月）	
43	兼担	講師	ｼﾝｷﾞｮｳﾁ　ｺｳｼﾞ 新行内　康慈 ＜平成27年4月＞		博士(先端科 学技術)		情報とネットワーク社会 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	2 2 1	1 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 准教授 （平成23年4月）	

44	兼担	講師	ｽｽﾞｷ　ﾔｽﾋﾛ 鈴木　康弘 ＜平成27年4月＞		教育学修士		身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1前 1・2・3・4前・後	4 2	4 2	十文字学園女子大学 人間生活学部幼児教育学科 准教授 （平成24年4月）	
45	兼担	講師	ﾀﾌﾞｻ　ｹｲｺ 田総　恵子 ＜平成27年4月＞		Doctor of Philosophy （アメリカ）		地球環境の保全と生活	1・2・3・4前・後	4	2	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 （平成23年4月）	
46	兼担	講師	ﾄｸﾉ　ﾕｳｺ 徳野　裕子 ＜平成27年4月＞		学術博士		食の科学 女性と健康	1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後	2 2	1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部食物栄養学科 講師 （平成23年4月）	
47	兼担	講師	ﾋｸﾞﾁ　ｶｽﾞﾀｶ 樋口　一貴 ＜平成27年4月＞		美学修士※		女性と文化	1・2・3・4前・後	2	1	三井記念美術館 常勤学芸員 （平成17年8月）	
48	兼担	講師	ﾋﾗﾀ　ﾁｱｷ 平田　智秋 ＜平成27年4月＞		博士 （体育学）		健康と運動 身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4前・後	2 4 2	1 4 2	十文字学園女子大学 人間生活学部人間発達心理学科 准教授 （平成23年4月）	
49	兼担	講師	ﾌｸｵｶ　ﾀｶﾏｻ 福岡　賢昌 ＜平成27年4月＞		経営学修士		現代社会とグローバリゼーション	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 准教授 （平成26年4月）	
50	兼担	講師	ﾌｸﾀﾞ　ﾋﾄｼ 福田　仁 ＜平成27年4月＞		M.A. in English （アメリカ）		英語Ⅰ 英語Ⅱ 海外語学研修（事前事後指導を含む） アドバンスト・リスニング インターネット英語 メディア英語	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4前 1・2・3・4前 1・2・3・4前 1・2・3・4後	10 2 2 2 2 2	5 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 教授 （平成24年4月）	
51	兼担	講師	ﾌｾ　ﾊﾙﾐ 布施　晴美 ＜平成27年4月＞		修士 （リハビリテーション）		女性と健康 保育内容演習Ⅰ リハビリテーション論	1・2・3・4前・後 1後 2・3前	2 2 2	1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間発達心理学科 教授 （平成23年4月）	
52	兼担	講師	ﾎｼﾉ　ｱﾂｺ 星野　敦子 ＜平成27年4月＞		博士 （学術）		地域で学ぶ 埼玉の地理・歴史・文化 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1前・後 1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	2 2 2 1	1 1 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 教授 （平成23年4月）	
53	兼担	講師	ﾏﾂﾅｶﾞ　ｼｭｳｲﾁ 松永　修一 ＜平成27年4月＞		文学修士※		埼玉の地理・歴史・文化 キャリアサポート 自主社会活動	1・2・3・4前・後 2前 1・2・3・4前・後	2 2 4	1 1 2	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 （平成26年4月）	
54	兼担	講師	ﾓﾘﾀ　ｶﾂﾕｷ 森田　勝之 ＜平成27年4月＞		文学士		英語Ⅰ 英語Ⅱ ＴＯＥＩＣ対策講座 アドバンスト・リスニング ビジネス英語 ビジネス英会話 映画・ドラマ英語 インターネット英語 メディア英語	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4前 1・2・3・4前 1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	10 2 2 2 2 2 2 2 2	5 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 （平成24年4月）	
55	兼担	講師	ﾔﾏｻﾞｷ　ﾕｳｺ 山崎　優子 ＜平成27年4月＞		博士 （栄養学）		食の科学	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部食物栄養学科 助教 （平成23年4月）	
56	兼担	講師	ﾔﾏﾀﾞ　ﾖｳｺ 山田　陽子 ＜平成27年4月＞		教育学修士		子育てと環境	1・2・3・4前・後	2	2	十文字学園女子大学 人間生活学部幼児教育学科 教授 （平成23年4月）	
57	兼担	講師	ﾔﾏﾓﾄ　ｻﾄﾙ 山本　悟 ＜平成27年4月＞		体育学修士		身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1前 1・2・3・4前・後	4 2	4 2	十文字学園女子大学 人間生活学部児童教育学科 教授 （平成23年4月）	
58	兼担	講師	ﾖｼｶﾜ　ﾄﾓｵ 吉川　知夫 ＜平成27年4月＞		修士※ （教育学）		現代社会と教育	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 准教授 （平成25年4月）	
59	兼担	講師	ﾖｼﾓﾄ　ﾒｸﾞﾐ 好本　恵 ＜平成27年4月＞		文学士		女性と文化	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 特任教授 （平成25年4月）	
60	兼担	講師	ﾜﾀｲ　ﾏｻﾔｽ 綿井　雅康 ＜平成27年4月＞		教育学修士※		情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1前 1・2・3・4後	2 1	2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間発達心理学科 教授 （平成23年4月）	
61	兼担	講師	ﾜﾀﾅﾍﾞ　ﾀｶｴ 渡邊　孝枝 ＜平成27年4月＞		修士 （人文科学）		身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1前 1・2・3・4前・後	4 2	4 2	十文字学園女子大学 人間生活学部幼児教育学科 助教 （平成26年4月）	
62	兼任	講師	ｱｷﾔﾏﾞ　ｴﾂｺ 秋庭　悦子 ＜平成27年4月＞		商学士		原子のエネルギーとわたしたち	1・2・3・4前・後	4	2	内閣府原子力委員会 委員 （平成22年1月）	
63	兼任	講師	ｱﾗｲ　ﾕｷｴ 新井　幸恵 ＜平成27年4月＞		社会学修士		認知症の理解Ⅱ 医療を必要とする人への介護Ⅲ 医療を必要とする人への介護Ⅳ 精神保健福祉論	2後 3後 3後 1・2・3・4後	1 2 1 2	1 1 1 1	十文字学園女子大学 非常勤講師 （平成26年4月）	
64	兼任	講師	ｲﾁｶﾜ　ｶｽﾞｵ 市川　和男 ＜平成27年4月＞		福祉マネジメント修士		発達と老化Ⅰ 障がいの理解Ⅰ 発達障害の理解	1前 2前 2後	2 2 2	1 1 1	東京家政学院大学 現代生活学部人間福祉学科 助教 （平成23年4月）	
65	兼任	講師	ｳｼﾞｲｴ　ﾋﾛｺ 氏家　博子 ＜平成28年4月＞		修士 （児童学）		児童・家庭支援演習(介入事例検討) 保育内容演習Ⅱ 保育内容演習Ⅴ 保育の表現技術Ⅳ(言語表現)	3前 2前 3後 2後	1 2 2 1	1 1 1 1	東京福祉大学 非常勤講師 （平成23年4月）	
66	兼任	講師	ｴﾋﾞﾅ　ﾅｵﾐ 蝦名　直美 ＜平成27年4月＞		修士(心理学)		発達と老化Ⅱ	1後	2	1	社会福祉法人宏仁会 生活相談員 （平成25年4月）	
67	兼任	講師	ｵｵﾊﾗ　ﾄﾓｺ 大原　知子 ＜平成27年4月＞		LITTERATURE FRANCAISE ET COMPAREE （フランス）		フランス語Ⅰ フランス語Ⅱ	1通 1・2・3・4通	2 2	1 1	十文字学園女子大学 非常勤講師 （平成12年4月）	
68	兼任	講師	ｵｶﾞﾜ　ﾏｻﾋﾛ 小川　政博 ＜平成29年4月＞		学士 （文学）		介護と地域	3後	2	1	あかね社会福祉士事務所 所長 （平成16年3月）	
69	兼任	講師	ｵｷﾞ　ﾌﾄｼ 荻　太 ＜平成29年4月＞		学士 （文学）		現代社会理解	3前	2	1	株式会社　アストラ 代表取締役 （平成22年3月）	
70	兼任	講師	ｵｷﾞﾉ　ｷﾖｺ 萩野　起与子 ＜平成28年4月＞		修士 （コミュニティ福祉学）		相談援助演習Ⅱ	2前	2	2	十文字学園女子大学 非常勤講師 （平成25年10月）	
71	兼任	講師	ｵﾀﾞ　ﾂﾔｺ 織田　つや子 ＜平成29年4月＞		修士 （社会福祉学）		介護と環境	3前	2	1	十文字学園女子大学 非常勤講師 （平成25年4月）	
72	兼任	講師	ｶﾒﾀﾞ　ﾋﾃﾞｺ 亀田　秀子 ＜平成27年4月＞		修士 （社会福祉学）		乳幼児期の心理学 保育の心理学Ⅱ	1前 1後	2 1	1 1	聖徳大学 通信教育部非常勤講師 （平成18年2月）	
73	兼任	講師	ｶﾝﾉ　ｷﾖｺ 菅野　清子 ＜平成27年4月＞		専修学校		保育の表現技術Ⅱ(身体表現) レクリエーション援助論	1後 1・2・3・4前	2 2	1 1	十文字学園女子大学 非常勤講師 （平成17年4月）	
74	兼任	講師	ｸﾎﾞﾀ　ﾅｵｺ 久保田　直子 ＜平成28年4月＞		学士 （社会学）		介護と自立	2後	2	1	社会福祉法人　いずみ 理学療法士 （平成20年6月）	
75	兼任	講師	ｻﾀｹ　ﾖｳﾍｲ 佐竹　要平 ＜平成27年4月＞		修士 （社会福祉学）		相談援助演習Ⅰ	1後	2	2	十文字学園女子大学 非常勤講師 （平成25年9月）	
76	兼任	講師	ｼﾌﾞﾔ　ﾊﾙﾖｼ 渋谷　治美 ＜平成27年4月＞		文学修士		生物の多様性と倫理	1・2・3・4前・後	4	2	埼玉大学 教授 （平成9年4月）	
77	兼任	講師	ｼﾐｽﾞ　ﾏｺﾄ 清水　誠 ＜平成27年4月＞		修士 （学術）		地球のしくみと災害	1・2・3・4前・後	4	2	埼玉大学 教授 （平成15年4月）	

78	兼任	講師	ｼﾗｺ　ｼﾞｭﾝｺ 白子　純子 ＜平成28年4月＞		修士 （社会デザイン学）		子どもの保健Ⅰ 子どもの保健Ⅱ 子どもの保健演習 乳児保育	2前 2後 2前 2後	2 2 1 2	1 1 1 1	社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 日本子ども家庭総合研究所 東日本大震災中央子ども支援センター 主任コーディネーター （平成24年2月）	
79	兼任	講師	ｽｷﾞｳﾗ　ﾉﾘｱｷ 杉浦　史晃 ＜平成28年4月＞		学士 （体育学）		生活支援技術展開Ⅰ	2前	1	1	十文字学園女子大学 非常勤講師 （平成20年4月）	
80	兼任	講師	ﾀｶｾ　ﾋﾃﾞﾋﾄ 髙世　秀仁 ＜平成27年4月＞		博士（医学）		医学一般	1前	2	1	信愛病院 （平成21年4月）	
81	兼任	講師	ﾀﾅｶ　ﾐﾂｴ 田中　満枝 ＜平成29年4月＞		修士 （社会学）		権利擁護と成年後見制度	3前	2	1	十文字学園女子大学 非常勤講師 （平成19年4月）	
82	兼任	講師	ﾀﾆ　ﾁﾊﾙ 谷　千春 ＜平成27年4月＞		専修学校		手話	1・2・3・4後	2	1	ＮＰＯ手話技能検定協会 理事長 （平成19年6月）	
83	兼任	講師	ﾁﾉ　ｹﾝｲﾁ 茅野　憲一 ＜平成28年4月＞		教育学修士		保育の表現技術Ⅲ（造形表現）	2前	2	1	国際学院埼玉短期大学 非常勤講師 （平成20年4月）	
84	兼任	講師	ﾁｮｳ　ﾋﾛ 曺　喜 ＜平成27年4月＞		修士 （日本文学）		ハングルⅠ ハングルⅡ	1通 1・2・3・4通	2 2	1 1	十文字学園女子大学短期大学部 非常勤講師 （平成24年4月）	
85	兼任	講師	ﾅｶｼﾞﾏ　ｿﾉｴ 中島　園江 （脇山） ＜平成28年4月＞		修士 （社会福祉学）		保健医療サービス論 介護サービス計画	3前 3後	2 2	1 1	十文字学園女子大学 非常勤講師 （平成23年10月）	
86	兼任	講師	ﾅｶﾞﾄﾓ　ﾕｳｿﾞｳ 長友　祐三 ＜平成28年4月＞		修士 （社会学）		公的扶助論	3前	2	1	十文字学園女子大学 非常勤講師 （平成22年4月）	
87	兼任	講師	ﾅｶﾑﾗ　ｻﾁｺ 中村　幸子 ＜平成29年4月＞		修士 （保健医療学）		生活支援技術展開Ⅱ 医療を必要とする人への介護Ⅲ 医療を必要とする人への介護Ⅳ	3後 3後 3後	1 2 1	1 1 1	十文字学園女子大学 非常勤講師 （平成25年4月）	
88	兼任	講師	ﾅｶﾑﾗ　ﾕｳ 中村　有 ＜平成27年4月＞		修士 （心理学）		心理学理論と心理的支援	3前	2	1	十文字学園女子大学 非常勤講師 （平成20年4月）	
89	兼任	講師	ﾌｶｻﾜ　ｽｽﾑ 深澤　進 ＜平成27年4月＞		修士（学術）		情報とネットワーク社会	1・2・3・4前・後	2	1	淑徳大学 非常勤講師 （平成25年4月）	
90	兼任	講師	ﾔﾏｸﾞﾁ　ﾉﾘｺ 山口　典子 ＜平成28年4月＞		修士 （家政学）		家事生活支援技術	2前	1	1	十文字学園女子大学 非常勤講師 （昭和59年4月）	
91	兼任	講師	ﾖｼｻﾞﾜ　ﾕﾀｶ 吉澤　豊 ＜平成29年4月＞		社会学士		医療ソーシャルワーク論	3・4前	2	1	近畿大学豊岡短期大学 非常勤講師 （平成22年4月）	

（注）

1　教員の数に応じ，適宜枠を増やして記入すること。

2　私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合又は大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合は，この書類を作成する必要はない。

3　「申請に係る学部等に従事する週当たりの平均日数」の欄は，専任教員のみ記載すること。

教　員　の　氏　名　等

（人間生活学部健康栄養学科）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給(千円)	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現　職 (就任年月)	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
1	専	教授	ｲｲﾀﾞ　ﾛｶ 飯田　路佳 ＜平成27年4月＞		体育学修士		入門ゼミナール 読書入門 健康と運動 身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ 食と健康※ 健康づくりの運動B(ダンス)※ 健康づくりの運動C(エアロビックダンス・体操) 健康運動指導演習※ 健康栄養学演習 卒業研究	1前 1前・後 1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後 1前 2前 2後 3前 3通 4通	2 2 2 4 2 0.3 0.5 1 0.7 2 4	1 1 1 4 2 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 准教授 (平成23年4月)	5日
2	専	教授	ｲｹｶﾞﾜ　ｼｹﾞｷ 池川　繁樹 ＜平成27年4月＞		医学博士		入門ゼミナール 読書入門 食と健康※ 解剖生理学実験※ 運動生理学（生理学を含む） 運動生理学実験※ バイオメカニクス 健康産業施設等現場実習 健康運動指導演習※ 健康栄養学演習 卒業研究	1前 1前・後 1前 1後 2前 2後 3前 3前 3前 3通 4通	2 2 0.1 1.3 4 0.5 2 1 0.3 2 4	1 1 1 2 2 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 食物栄養学科 教授 (平成23年4月)	5日
3	専	教授	ｷﾑﾗ　ﾔｽｺ 木村　靖子 ＜平成27年4月＞		家政学修士		入門ゼミナール 読書入門 食と健康※ 調理学 基礎調理学実習Ⅰ 基礎調理学実習Ⅱ 応用調理学実習 給食計画・実務論 給食運営実習 給食運営校外実習 給食運営演習※ 食事計画論 食事計画論演習 健康栄養学演習 卒業研究	1前 1前・後 1前 1前 1前 1後 2後 3前 3後 4通 4通 2前 2前 3通 4通	2 2 0.3 4 2 2 1 4 2 1 0.5 2 1 2 4	1 1 1 2 2 2 1 2 2 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 食物栄養学科 准教授 (平成23年4月)	5日
4	専	教授	ﾀｶﾊｼ　ｷｮｳｺ 高橋　京子 ＜平成27年4月＞		教育学修士		入門ゼミナール 読書入門 食と健康※ 健康づくりの運動D(水泳・水中運動)※ 健康づくりの運動G(野外活動) 体育原理 健康栄養学演習 卒業研究	1前 1前・後 1前 1前 2前 2前 3通 4通	2 2 0.1 0.5 1 2 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 教授 (平成23年4月)	5日
5	専	教授	ﾀｶﾊｼ　ﾏｻﾄ 高橋　正人 ＜平成27年4月＞		博士 (医学)		入門ゼミナール 読書入門 食と健康※ 健康管理概論 公衆衛生学(衛生学を含む) 解剖生理学(解剖学を含む) 解剖生理学実験※ 病態生理学 臨床栄養学Ⅰ 運動の障害と予防 運動プログラム演習 健康栄養学演習 卒業研究	1前 1前・後 1前 2前 3後 1前 1後 2後 3前 2前 2前 3通 4通	2 2 0.1 2 4 4 1.3 4 4 2 1 2 4	1 1 1 1 2 2 2 2 2 1 1 1 1	国際武道大学大学院 武道・スポーツ研究科 教授 (平成20年4月)	5日
6	専	教授	ﾅｶﾞｵ ｱｷﾋｺ 長尾　昭彦 ＜平成27年4月＞		博士 (農学)		入門ゼミナール 読書入門 食と健康※ 生化学 生化学実験 分子栄養学 食品機能論 食品衛生学 食品衛生学実験 健康栄養学演習 卒業研究	1前 1前・後 1前 2前 2後 4前 4後 1後 2前 3通 4通	2 2 0.1 4 2 2 2 4 2 2 4	1 1 1 2 2 1 1 2 2 1 1	独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 上席研究員 (平成23年4月)	5日
7	専	准教授	ｲｼﾔﾏ　ﾀｶﾕｷ 石山　隆之 ＜平成27年4月＞		ｽﾎﾟｰﾂ科学 修士		入門ゼミナール 読書入門 身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ 食と健康※ 健康スポーツビジネス論 健康づくりの運動A(ストレッチング・ウォーキング・陸上競技)※ 健康づくりの運動E(球技)※ 健康栄養学演習 卒業研究	1前 1前・後 1前 1・2・3・4後 1前 4前 1前 1後 3通 4通	2 2 4 2 0.1 2 1 0.5 2 4	1 1 4 2 1 1 2 1 1 1	十文字学園女子大学 特任准教授 (平成24年4月)	5日
8	専	准教授	ﾄｸﾉ　ﾕｳｺ 徳野　裕子 ＜平成27年4月＞		学術博士		入門ゼミナール 読書入門 食の科学 女性と健康 食と健康※ 公衆栄養学概論 公衆栄養学実習 給食運営校外実習 給食運営演習※ 健康食育論 健康栄養学演習 卒業研究	1前 1前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1前 3後 4前 4通 4通 3後 3通 4通	2 2 2 2 0.3 4 2 1 0.5 2 2 4	1 1 1 1 1 2 2 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 食物栄養学科 講師 (平成23年4月)	5日
9	専	准教授	ﾜﾀﾅﾍﾞ　ﾖｳｺ 渡邊　容子 ＜平成27年4月＞		栄養学修士		入門ゼミナール 読書入門 食と健康※ 食品学Ⅰ 食品学Ⅱ 食品学実験 食品加工学 食品加工学実習 基礎栄養学実験 給食運営校外実習 給食運営演習※ 食事計画論 食事計画論演習 食文化概論 健康栄養学演習 卒業研究	1前 1前・後 1前 1前 1後 2前 4後 4後 1後 4通 4通 2前 2前 3前 3通 4通	2 2 0.3 4 4 2 2 1 1 1 1 0.5 2 1 2 4	1 1 1 2 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	首都東京大学 人間健康科学研究所 助教 (平成18年4月)	5日
10	専	講師	ｻｻｷ　ﾅｵ 佐々木　菜穂 (佐藤) ＜平成27年4月＞		農学博士		入門ゼミナール 読書入門 食の科学 食と健康※ 解剖生理学実験※ 基礎栄養学Ⅰ 基礎栄養学Ⅱ 基礎栄養学実験 応用栄養学 応用栄養学実習 栄養指導論Ⅱ 給食運営校外実習 給食運営演習※ 健康栄養学演習 卒業研究	1前 1前・後 1・2・3・4前・後 1前 1後 1前 1後 1後 2前 2後 2後 4通 4通 3通 4通	2 2 2 0.3 1.3 4 4 1 4 2 4 1 0.5 2 4	1 1 1 1 2 2 2 1 2 2 2 1 1 1 1	人間生活学部 食物栄養学科 講師 (平成26年4月)	5日
11	兼担	講師	ｱｽﾞﾏ　ｼｮｳｺ 東　聖子 ＜平成27年4月＞		人文科学 修士※		女性と文化	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 教授 (平成24年4月)	
12	兼担	講師	ｱﾀﾞﾁ　ｶｽﾞﾋｻ 安達　一寿 ＜平成27年4月＞		博士 (教育学)		地域で学ぶ 総合科目 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1前・後 1前・後 1前 1・2・3・4後	2 12 2 1	1 6 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 (平成23年4月)	

13	兼担	講師	ｱﾍﾞ　ﾌﾐ 阿部　史 （神崎） ＜平成27年4月＞		Ｌ．Ｍ※ （アメリカ）		家庭と法 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	4 2 1	2 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 准教授 （平成25年4月）	
14	兼担	講師	ｱﾔｲ　ｻｸﾗｺ 綾井　桜子 ＜平成27年4月＞		博士 （教育学）		現代社会と教育	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部児童教育学科 准教授 （平成25年4月）	
15	兼担	講師	ｲｹﾏ　ﾘｮｺ 池間　里代子 ＜平成27年4月＞		文学修士		中国語Ⅰ 中国語Ⅱ 海外語学研修（事前事後指導を含む） 中国語試験対策科目	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4前 1・2・3・4前・後	2 2 2 4	1 1 1 2	十文字学園女子大学 特任准教授 （平成25年4月）	
16	兼担	講師	ｲｼｶﾜ　ﾀｶｼ 石川　敬史 ＜平成27年4月＞		図書館情報学 修士		情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1前 1・2・3・4後	2 1	2 1	十文字学園女子大学 専任講師 （平成24年4月）	
17	兼担	講師	ｲｼﾉ　ｴｲｲﾁ 石野　榮一 ＜平成27年4月＞		法学士		地域で学ぶ 現代社会理解	1前・後 3前	2 2	1 1	十文字学園女子大学 特任教授 （平成25年6月）	
18	兼担	講師	ｵｵﾀ　ﾏﾁｺ 太田　眞智子 ＜平成30年4月＞		社会福祉学 修士		障碍者福祉論	4後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間福祉学科 講師 （平成24年4月）	
19	兼担	講師	ｵｵﾄﾓ　ﾕｷｺ 大友　由紀子 ＜平成27年4月＞		文学修士※		キャリアデザインとライフプラン	1・2・3・4前・後	4	2	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 教授 （平成26年4月）	
20	兼担	講師	ｵｶﾞｻﾜﾗ　ﾉﾘｺ 小笠原　典子 ＜平成27年4月＞		法学士 文学士		日本語Ⅰ 日本語Ⅱ 日本語能力試験対策講座(文法・文字語彙) 日本語能力試験対策講座(読解) 日本語表現技術	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4通	2 2 4 4 2	1 1 2 2 1	十文字学園女子大学 教授 （平成23年4月）	
21	兼担	講師	ｵｶﾉｳｴ　ﾅｵｺ 岡上　直子 ＜平成27年4月＞		教育学士		現代社会と教育	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部児童教育学科 教授 （平成23年4月）	
22	兼担	講師	ｵﾁｱｲ　ﾏｻ 落合　真裕 ＜平成27年4月＞		文学修士※		現代社会とグローバリゼーション	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 講師 （平成24年4月）	
23	兼担	講師	ｶｼﾞﾉ　ﾘｮｳｺ 梶野　涼子 ＜平成27年4月＞		学士 （栄養学）		食の科学	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部食物栄養学科 助教 （平成23年4月）	
24	兼担	講師	ｶｼﾜﾊﾞ　ｼｭｳｼﾞ 柏葉　修治 ＜平成29年4月＞		博士 （社会福祉学）		学校保健概論※	3前	0.4	1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間発達心理学科 教授 （平成23年4月）	
25	兼担	講師	ｶﾀｲﾗ　ﾋﾃﾞﾄ 片居木　英人 ＜平成27年4月＞		政治学修士※		現代社会とグローバリゼーション くらしのなかの日本国憲法	1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後	2 2	1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間福祉学科 教授 （平成23年4月）	
26	兼担	講師	ｶﾄｳ　ｱｷｺ 加藤　暁子 ＜平成27年4月＞		ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学 修士※		女性と文化 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	2 2 1	1 2 1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 准教授 （平成24年4月）	
27	兼担	講師	ｶﾘﾉ　ｺｳｼﾞ 狩野　浩二 ＜平成27年4月＞		修士 （教育学）		埼玉の地理・歴史・文化	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部児童教育学科 教授 （平成23年4月）	
28	兼担	講師	ｶﾜｸﾞﾁ　ﾋﾃﾞﾄｼ 川口　英俊 ＜平成27年4月＞		修士 （法学）※		くらしのなかの日本国憲法 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	2 2 1	1 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 准教授 （平成23年4月）	
29	兼担	講師	ｷﾀﾊﾗ　ｼｭﾝｲﾁ 北原　俊一 ＜平成27年4月＞		博士 （理学）		情報とネットワーク社会 宇宙とものの成りたち 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ キャリア基礎力入門 キャリア基礎力応用	1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後 2前 2後	2 4 2 1 2 2	1 2 2 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 准教授 （平成23年4月）	
30	兼担	講師	ｸﾘﾊﾗ　ﾀｶｼ 栗原　隆史 ＜平成28年4月＞		博士 （経営情報学）		インターンシップ短期 インターンシップ	2・3前・後 2・3前・後	2 4	2 2	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 教授 （平成23年4月）	
31	兼担	講師	ｺｳｺﾞ　ﾄﾓﾐ 向後　朋美 （田中） ＜平成27年4月＞		文学修士※		英語Ⅰ 英語Ⅱ アドバンスト・リーディング アドバンスト・ライティング	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4後 1・2・3・4後	10 2 2 2	5 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 准教授 （平成23年4月）	
32	兼担	講師	ｺﾊﾞﾔｼ　ﾐﾉﾙ 小林　実 ＜平成27年4月＞		文学修士※		女性と文化	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 准教授 （平成24年4月）	
33	兼担	講師	ｺﾐｴ　ﾏｻﾋｺ 込江　雅彦 ＜平成27年4月＞		修士※ （経済学）		情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1前 1・2・3・4後	2 1	2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 准教授 （平成23年4月）	
34	兼担	講師	ｻｲﾄｳ　ﾁｶｹﾞ 齋藤　千景 （伊藤） ＜平成29年4月＞		修士 （教育学）		学校保健概論※	3前	0.9	1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間発達心理学科 准教授 （平成26年4月）	
35	兼担	講師	ｻｲﾄｳ　ﾚｲｺ 齋藤　麗子 ＜平成27年4月＞		医学博士		女性と健康	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部幼児教育学科 教授 （平成23年4月）	
36	兼担	講師	ｼｰﾗ・ｸﾘﾌ Sheila Cliffe ＜平成27年4月＞		ＰｈＤ （イギリス）		現代社会とグローバリゼーション アドバンスト・ライティング 日常英会話入門 日常英会話 ビジネス英語 ビジネス英会話	1・2・3・4前・後 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 教授 （平成24年4月）	
37	兼担	講師	ｼﾀﾗ　ﾕｳｺ 設楽　優子 （松尾） ＜平成27年4月＞		ＭＡ （イギリス）		英語Ⅰ 英語Ⅱ ＴＯＥＩＣ対策講座 アドバンスト・リーディング 映画・ドラマ英語	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4後	10 2 2 2 2	5 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 准教授 （平成23年4月）	
38	兼担	講師	ｼﾝｷﾞｮｳﾁ　ｺｳｼﾞ 新行内　康慈 ＜平成27年4月＞		博士(先端科 学技術)		情報とネットワーク社会 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	2 2 1	1 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 准教授 （平成23年4月）	
39	兼担	講師	ｽｽﾞｷ　ﾔｽﾋﾛ 鈴木　康弘 ＜平成27年4月＞		教育学修士		身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1前 1・2・3・4前・後	4 2	4 2	十文字学園女子大学 人間生活学部幼児教育学科 准教授 （平成24年4月）	
40	兼担	講師	ﾀﾌﾞﾁ　ｹｲｺ 田総　恵子 ＜平成27年4月＞		Doctor of Philosophy （アメリカ）		地球環境の保全と生活	1・2・3・4前・後	4	2	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 （平成23年4月）	
41	兼担	講師	ﾂﾉﾀﾞ　ｼﾝｼﾞ 角田　真二 ＜平成27年4月＞		工学 修士		現代社会と福祉 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	2 2 1	1 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 （平成23年4月）	
42	兼担	講師	ﾉｼﾞﾏ　ｾｲｺ 野島　靖子 ＜平成27年4月＞		社会福祉学 修士		現代社会と福祉	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間福祉学科 准教授 （平成25年4月）	
43	兼担	講師	ﾋｸﾞﾁ　ｶｽﾞﾀｶ 樋口　一貴 ＜平成27年4月＞		美学修士※		女性と文化	1・2・3・4前・後	2	1	三井記念美術館 常勤学芸員 （平成17年8月）	
44	兼担	講師	ﾋﾗﾀ　ﾁｱｷ 平田　智秋 ＜平成27年4月＞		博士 （体育学）		健康と運動 身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4前・後	2 4 2	1 4 2	十文字学園女子大学 人間生活学部人間発達心理学科 准教授 （平成23年4月）	
45	兼担	講師	ﾌｸｵｶ　ﾀｶﾏｻ 福岡　賢昌 ＜平成27年4月＞		経営学修士		現代社会とグローバリゼーション	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 准教授 （平成26年4月）	
46	兼担	講師	ﾌｸﾀﾞ　ﾄﾓｵ 福田　智雄 ＜平成29年4月＞		文学修士		社会福祉概論	3前	4	2	十文字学園女子大学 人間生活学部人間福祉学科 教授 （平成26年4月）	

47	兼担	講師	ﾌｸﾀﾞ ﾋﾄｼ 福田　仁 ＜平成27年4月＞		M.A. in English (アメリカ)		英語Ⅰ 英語Ⅱ 海外語学研修（事前事後指導を含む） アドバンスト・リスニング インターネット英語 メディア英語	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4前 1・2・3・4前 1・2・3・4前 1・2・3・4後	10 2 2 2 2 2	5 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 教授 (平成24年4月)	
48	兼担	講師	ﾌｾ ﾊﾙﾐ 布施　晴美 ＜平成27年4月＞		修士 (リハビリテーション)		女性と健康 学校保健概論※	1・2・3・4前・後 3前	2 0.7	1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間発達心理学科 教授 (平成23年4月)	
49	兼担	講師	ﾎｼﾉ ｱﾂｺ 星野　敦子 ＜平成27年4月＞		博士 (学術)		地域で学ぶ 埼玉の地理・歴史・文化 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1前・後 1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	2 2 2 1	1 1 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 教授 (平成23年4月)	
50	兼担	講師	ﾏﾂﾅｶﾞ ｼｭｳｲﾁ 松永　修一 ＜平成27年4月＞		文学修士※		埼玉の地理・歴史・文化 キャリアサポート 自主社会活動	1・2・3・4前・後 2前 1・2・3・4前・後	2 2 2	1 1 2	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 (平成26年4月)	
51	兼担	講師	ﾏﾂﾓﾄ ｱｷﾋﾛ 松本　晃裕 ＜平成28年4月＞		博士 (医学)		運動生理学実験※	2後	0.5	1	十文字学園女子大学 人間生活学部食物栄養学科 教授 (平成26年4月)	
52	兼担	講師	ﾐﾔｷ ﾐﾁｺ 宮城　道子 (野崎) ＜平成27年4月＞		社会学修士		現代社会と福祉	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間福祉学科 准教授 (平成23年4月)	
53	兼担	講師	ﾓﾘﾀ ｶﾂﾕｷ 森田　勝之 ＜平成27年4月＞		文学士		英語Ⅰ 英語Ⅱ ＴＯＥＩＣ対策講座 アドバンスト・リスニング ビジネス英語 ビジネス英会話 映画・ドラマ英語 インターネット英語 メディア英語	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4前 1・2・3・4前 1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	10 2 2 2 2 2 2 2 2	5 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 (平成24年4月)	
54	兼担	講師	ﾔﾏｻﾞｷ ﾕｳｺ 山崎　優子 ＜平成27年4月＞		博士 (栄養学)		食の科学	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部食物栄養学科 助教 (平成23年4月)	
55	兼担	講師	ﾔﾏﾀﾞ ﾖｳｺ 山田　陽子 ＜平成27年4月＞		教育学修士		子育てと環境	1・2・3・4前・後	4	2	十文字学園女子大学 人間生活学部幼児教育学科 教授 (平成23年4月)	
56	兼担	講師	ﾔﾏﾓﾄ ｻﾄﾙ 山本　悟 ＜平成27年4月＞		体育学修士		身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1前 1・2・3・4前・後	4 2	4 2	十文字学園女子大学 人間生活学部児童教育学科 教授 (平成23年4月)	
57	兼担	講師	ﾖｼｶﾜ ﾄﾓｵ 吉川　知夫 ＜平成27年4月＞		修士 (教育学)※		現代社会と教育	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 准教授 (平成25年4月)	
58	兼担	講師	ﾖｼﾓﾄ ﾒｸﾞﾐ 好本　惠 ＜平成27年4月＞		文学士		女性と文化	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 特任教授 (平成25年4月)	
59	兼担	講師	ﾜﾀｲ ﾏｻﾔｽ 綿井　雅康 ＜平成27年4月＞		教育学修士※		情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1前 1・2・3・4後	2 1	2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間発達心理学科 教授 (平成23年4月)	
60	兼担	講師	ﾜﾀﾅﾍﾞ ﾀｶｴ 渡邊　孝枝 ＜平成27年4月＞		修士 (人文科学)		身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1前 1・2・3・4前・後	4 2	4 2	十文字学園女子大学 人間生活学部幼児教育学科 助教 (平成26年4月)	
61	兼任	講師	ｱｵｷ ﾐﾅ 青木 己奈 ＜平成27年4月＞		修士 (教育学)		健康づくりの運動Ａ(ストレッチング・ウォーキング・陸上競技)※	1前	1	2	十文字学園女子大学 人間生活学部児童教育学科 助手 (平成24年4月)	
62	兼任	講師	ｱｶｶﾞﾗ ﾋﾛﾐ 赤堀　博美 ＜平成29年4月＞		修士 (家政学)		食コーディネート論 食コーディネート論実習	3前 3後	2 1	1 1	赤堀料理学園 校長 (平成20年4月)	
63	兼任	講師	ｱｷﾊﾞ ｴﾂｺ 秋庭　悦子 ＜平成27年4月＞		商学士		原子のエネルギーとわたしたち	1・2・3・4前・後	4	2	内閣府原子力委員会 委員 (平成22年1月)	
64	兼任	講師	ｳｴﾑｶｲ ﾉﾘｺ 上向　のり子 ＜平成27年4月＞		修士 (体育学)		健康づくりの運動Ｆ(武道・器械体操)※	1後	0.5	1	専修大学 非常勤講師 (平成23年4月)	
65	兼任	講師	ｳﾁﾐ ｼｮｳｺ 内海　緒香 ＜平成27年4月＞		修士 (人文科学)		基礎統計学 統計学演習	1前 1後	2 2	1 2	東洋大学　教育学部 非常勤講師 (平成25年9月)	
66	兼任	講師	ｵｵﾊﾗ ﾄﾓｺ 大原　知子 ＜平成27年4月＞		LITTERATURE FRANCAISE ET COMPAREE (フランス)		フランス語Ⅰ フランス語Ⅱ	1通 1・2・3・4通	2 2	1 1	十文字学園女子大学 非常勤講師 (平成12年4月)	
67	兼任	講師	ｵｷﾞ ﾌﾄｼ 荻　太 ＜平成29年4月＞		学士 (文学)		現代社会理解	3前	2	1	株式会社　アストラ 代表取締役 (平成2年3月)	
68	兼任	講師	ｶﾄｳ ﾘﾂｺ 加藤　理津子 ＜平成28年4月＞		博士 (医学)		栄養指導論Ⅰ 栄養指導論実習Ⅰ 栄養指導論実習Ⅱ	2前 2後 3前	4 2 2	2 2 2	帝京平成大学健康　ﾒﾃﾞｨｶﾙ学部 専任講師 (平成22年4月)	
69	兼任	講師	ｶﾓｼﾀﾞ ｶﾅ 鴨志田　加奈 ＜平成28年4月＞		運動科学学士		健康づくりの運動Ｂ(ダンス)※	2前	0.5	1	山村学園短期大学　保育学科 講師 (平成26年4月)	
70	兼任	講師	ｻﾄｳ ｱｲｺ 佐藤　愛子 ＜平成27年4月＞		修士 (体育学)		健康づくりの運動Ｆ(武道・器械体操)※	1後	0.5	1	了徳寺大学 職員・柔道部コーチ (平成26年4月)	
71	兼任	講師	ｼﾌﾞﾔ ﾊﾙﾖｼ 渋谷　治美 ＜平成27年4月＞		文学修士		生物の多様性と倫理	1・2・3・4前・後	4	2	埼玉大学 教授 (平成9年4月)	
72	兼任	講師	ｼﾐｽﾞ ﾏｺﾄ 清水　誠 ＜平成27年4月＞		修士 (学術)		地球のしくみと災害	1・2・3・4前・後	4	2	埼玉大学 教授 (平成15年4月)	
73	兼任	講師	ｼﾐｽﾞ ﾌﾐｺ 清水　文子 ＜平成27年4月＞		学士 (体育学)		健康づくりの運動Ｅ(球技)※	1後	0.5	1	十文字学園女子大学 非常勤講師 (平成17年4月)	
74	兼任	講師	ﾀｶﾞﾁ ﾁｴ 田口　千恵 ＜平成29年4月＞		修士 (学術)		臨床栄養学Ⅱ 臨床栄養学実習	3後 3後	4 2	2 2	お茶の水女子大学　寄付研究部門 助教 (平成25年4月)	
75	兼任	講師	ﾀﾅｶ ﾋﾃﾞﾊﾙ 田中　秀治 ＜平成28年4月＞		博士 (医学)		救急・応急処置演習	2後	1	1	国士舘大学　体育学部 教授 (平成13年4月)	
76	兼任	講師	ﾁｮｳ ﾋﾞ 曺　喜 ＜平成27年4月＞		修士 (日本文学)		ハングルⅠ ハングルⅡ	1通 1・2・3・4通	2 2	1 1	十文字学園女子大学短期大学部 非常勤講師 (平成24年4月)	
77	兼任	講師	ﾄﾓｺﾞｳ ﾋﾃﾞﾖｼ 蓬郷　尚代 ＜平成27年4月＞		ｽﾎﾟｰﾂ科学 修士		健康づくりの運動Ｄ(水泳・水中運動)※ 運動学(運動方法学)	1前 2後	0.5 2	1 1	明治大学 非常勤講師 (平成12年4月)	
78	兼任	講師	ﾉｻﾞﾜ ﾀｶｼ 野澤　隆司 ＜平成29年4月＞		修士 (体育学)		トレーニング論演習 体力測定・評価演習	3後 3後	1 1	1 1	ノザワヘルスクラブ 代表 (平成12年4月)	
79	兼任	講師	ﾋﾗﾀ ｻﾅｴ 平田　早苗 ＜平成29年4月＞		学士 (家政学)		フードマネージメント論	3後	2	1	株式会社ﾎﾞｯﾄﾌｯｸｲﾝﾀｰﾅｼｮﾅﾙ 代表取締役 (平成19年4月)	
80	兼任	講師	ﾌｶｻﾜ ｽｽﾑ 深澤　進 ＜平成27年4月＞		修士(学術)		情報とネットワーク社会	1・2・3・4前・後	2	1	淑徳大学 非常勤講師 (平成25年4月)	
81	兼任	講師	ﾐﾔﾜｷ ﾘﾅ 宮脇　梨奈 ＜平成28年4月＞		修士 (体育学)		健康・スポーツ心理学	2後	2	1	さいたま看護専門学校 非常勤講師 (平成25年4月)	
82	兼任	講師	ﾑﾗｶﾐ ﾊﾙｶ 村上　春香 ＜平成29年4月＞		修士 (体育学)		運動栄養学演習	3前	1	1	国立健康・栄養研究所 研究員 (平成24年4月)	
83	兼任	講師	ﾔﾏﾓﾄ ｱﾂﾋｻ 山本　敦久 ＜平成29年4月＞		修士 (体育学)		スポーツ社会学（スポーツ経営管理学を含む）	3後	2	1	成城大学社会　ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ学部 准教授 (平成24年4月)	

（注）

1　教員の数に応じ，適宜枠を増やして記入すること。

2　私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合又は大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合は，この書類を作成する必要はない。

3　「申請に係る学部等に従事する週当たりの平均日数」の欄は，専任教員のみ記載すること。

別記様式第３号（その２の１）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　員　の　氏　名　等

（人間生活学部文芸文化学科）

調書番号	専任等区分	職位	フリガナ 氏名 ＜就任(予定)年月＞	年齢	保有学位等	月額基本給（千円）	担当授業科目の名称	配当年次	担当単位数	年間開講数	現　職（就任年月）	申請に係る大学等の職務に従事する週当たり平均日数
1	専	教授	ｱｶﾏ　ｴﾂｺ 赤間　恵都子 ＜平成27年4月＞		文学修士※		入門ゼミナール 読書入門 日本文学概論 文芸文化特講※ 日本語表現Ⅱ 日本語表現Ⅲ 文芸文化ゼミⅡ 文芸文化テーマ研究ゼミ 日本文学史Ａ 日本文学の名作 日本文学論Ａ 日本文学研究Ａ 卒業研究	1前 1前・後 2前 3前 2後 3後 2後 3通 1・2後 1・2前 2・3・4前 2・3・4後 4通	2 2 2 0.1 2 2 1 2 2 2 2 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 短期大学部 表現文化学科 教授 （平成24年4月）	5日
2	専	教授	ｱｽﾞﾏ　ｼｮｳｺ 東　聖子 ＜平成27年4月＞		人文科学 修士※		入門ゼミナール 読書入門 女性と文化 基礎演習 日本文学史Ｂ	1前 1前・後 1・2・3・4前・後 1後 1・2前	2 2 2 1 2	1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 短期大学部 表現文化学科 教授 （平成24年4月）	5日
	兼任	講師	ｱｽﾞﾏ　ｼｮｳｺ 東　聖子 ＜平成28年4月＞				芸術文化概論 日本文学史Ｂ 芸術と歴史 芸術と生活 児童文学	2後 1・2前 2・3・4前 2・3・4後 2・3・4前	2 2 2 2 2	1 1 1 1 1		
3	専	教授	ﾀｹﾀﾞ　ﾋﾛｵ 武田　比呂男 ＜平成27年4月＞		文学修士※		入門ゼミナール 読書入門 文芸文化特講※ 日本語表現Ⅱ 基礎演習 文芸文化ゼミⅡ 文芸文化テーマ研究ゼミ 文化を考える 日本の文化 日本文学論Ｃ 日本文学研究Ｃ 日本文化研究 神話・伝承学 卒業研究	1前 1前・後 3前 2後 1後 2後 3通 1・2前 2・3・4前 2・3・4前 2・3・4後 2・3・4後 2・3・4前 4通	2 2 0.1 2 1 1 2 2 2 2 2 2 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 短期大学部 表現文化学科 教授 （平成24年4月）	5日
4	専	教授	ﾏﾂﾅｶﾞ　ｼｭｳｲﾁ 松永　修一 ＜平成27年4月＞		文学修士※		入門ゼミナール 読書入門 埼玉の地理・歴史・文化 社会人入門 キャリアサポート 自主社会活動 文芸文化特講※ 日本語表現Ⅲ 基礎演習 文芸文化ゼミⅠ 文芸文化テーマ研究ゼミ 言語学入門 フィールドスタディ 日本語学Ｂ 日本語学研究Ｂ 日本語音声学 データコレクション入門 卒業研究	1前 1前・後 1・2・3・4前・後 1後 2前 1・2・3・4前・後 3前 3後 1後 2前 3通 1・2後 1・2前・後 2・3・4前 2・3・4後 2・3・4後 2･3･4前 4通	2 2 2 2 2 4 0.1 2 1 1 2 2 2 2 2 2 2 4	1 1 1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 2 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部 ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 （平成26年4月）	5日
5	専	教授	ﾖｼﾓﾄ　ﾒｸﾞﾐ 好本　惠 ＜平成27年4月＞		文学士		入門ゼミナール 読書入門 女性と文化 文芸文化ゼミⅡ 文芸文化テーマ研究ゼミ 芸術とことば 音声表現 くらしと日本語 卒業研究	1前 1前・後 1・2・3・4前・後 2後 3通 1・2後 1・2前・後 2・3・4前 4通	2 2 2 1 2 2 4 2 4	1 1 1 1 1 1 2 1 1	十文字学園女子大学 特任教授 （平成25年4月）	5日
6	専	准教授	ｲｼｶﾜ　ﾀｶｼ 石川　敬史 ＜平成27年4月＞		図書館情報学 修士		入門ゼミナール 読書入門 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ 基礎演習 文芸文化ゼミⅡ 文芸文化テーマ研究ゼミ 図書の文化 文化財研究 卒業研究	1前 1前・後 1前 1・2・3・4後 1後 2後 3通 2・3・4前 2・3・4後 4通	2 2 2 1 1 1 2 2 2 4	1 1 2 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 専任講師 （平成24年4月）	5日
7	専	准教授	ｶﾄｳ　ｱｷｺ 加藤　暁子 ＜平成27年4月＞		ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学 修士※		入門ゼミナール 読書入門 女性と文化 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ 文芸文化ゼミⅡ 文芸文化テーマ研究ゼミ 文化と生活 色彩とデザイン 舞台芸術Ｂ 卒業研究	1前 1前・後 1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後 2後 3通 2・3・4前 2・3・4前 2・3・4後 4通	2 2 2 2 1 1 2 2 2 2 4	1 1 1 2 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 短期大学部 表現文化学科 准教授 （平成24年4月）	5日
8	専	准教授	ｺﾊﾞﾔｼ　ﾐﾉﾙ 小林　実 ＜平成27年4月＞		文学修士※		入門ゼミナール 読書入門 女性と文化 文芸文化入門 文芸文化特講※ 日本語表現Ⅰ 基礎演習 文芸文化ゼミⅠ 文芸文化テーマ研究ゼミ 日本と異文化 日本文学史Ｃ 日本文学論Ｂ 日本文学研究Ｂ 比較文化研究 卒業研究	1前 1前・後 1・2・3・4前・後 1前 3前 1後 1後 2前 3通 1・2前 1・2後 2・3・4前 2・3・4後 2・3・4後 4通	2 2 2 2 0.3 2 1 1 2 2 2 2 2 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 短期大学部 表現文化学科 准教授 （平成24年4月）	5日
9	専	准教授	ﾋｸﾞﾁ　ｶｽﾞﾀｶ 樋口　一貴 ＜平成27年4月＞		美学修士※		入門ゼミナール 読書入門 女性と文化 文芸文化ゼミⅠ 文芸文化テーマ研究ゼミ 芸術と人間 テーマで触れる芸術 卒業研究	1前 1前・後 1・2・3・4前・後 2前 3通 2・3・4前 2・3・4後 4通	2 2 2 1 2 2 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1	三井記念美術館 常勤学芸員 （平成17年8月）	5日
10	専	准教授	ﾎｼﾉ　ﾕｳｺ 星野　祐子 ＜平成27年4月＞		人文科学 修士※		入門ゼミナール 読書入門 文芸文化特講※ 日本語基礎 日本語表現Ⅰ 日本語表現Ⅲ 文芸文化ゼミⅡ 文芸文化テーマ研究ゼミ 日本語学入門 日本語学Ａ 日本語学研究Ａ 卒業研究	1前 1前・後 3前 1前 1後 3後 2後 3通 1・2前 2・3・4前 2・3・4後 4通	2 2 0.1 2 2 2 1 2 2 2 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 短期大学部 表現文化学科 講師 （平成24年4月）	5日

11	専	講師	ｵﾁｱｲ　ﾏｻ 落合　真裕 ＜平成27年4月＞		文学修士※		入門ゼミナール 読書入門 現代社会とグローバリゼーション 文芸文化概論 文芸文化特講※ 基礎演習 文芸文化ゼミⅠ 文芸文化テーマ研究ゼミ 世界の演劇 海外文学の名作 比較文化論 外国文化論Ａ テーマで読む文学 笑いの文化 卒業研究	1前 1前・後 1・2・3・4前・後 1後 3前 1後 2前 3通 1・2前 1・2後 2・3・4前 2・3・4前 2・3・4後 2・3・4後 4通	2 2 2 2 0.3 1 1 2 2 2 2 2 2 2 4	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 短期大学部 表現文化学科 講師 （平成24年4月）	5日
12	兼担	講師	ｱﾀﾞﾁ　ｶｽﾞﾋﾁ 安達　一寿 ＜平成27年4月＞		博士 （教育学）		地域で学ぶ 総合科目 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1前・後 1前・後 1前 1・2・3・4後	2 12 2 1	1 6 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 （平成23年4月）	
13	兼担	講師	ｱﾍﾞ　ﾌﾐ 阿部　史 （神﨑） ＜平成27年4月＞		ＬＬ．Ｍ※ （アメリカ）		家庭と法 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	4 2 1	2 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 准教授 （平成25年4月）	
14	兼担	講師	ｱﾔｲ　ｻｸﾗｺ 綾井　桜子 ＜平成27年4月＞		博士 （教育学）		現代社会と教育	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部児童教育学科 准教授 （平成25年4月）	
15	兼担	講師	ｲｲﾀﾞ　ﾖｶ 飯田　路佳 ＜平成27年4月＞		体育学修士		健康と運動 身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	2 4 2	1 4 2	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 准教授 （平成23年4月）	
16	兼担	講師	ｲｹﾏ　ﾘｮｺ 池間　里代子 ＜平成27年4月＞		文学修士		中国語Ⅰ 中国語Ⅱ 海外語学研修（事前事後指導を含む） 中国語試験対策科目	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4前 1・2・3・4前・後	2 2 2 4	1 1 1 2	十文字学園女子大学 特任准教授 （平成25年4月）	
17	兼担	講師	ｲｼﾉ　ｴｲｲﾁ 石野　榮一 ＜平成27年4月＞		法学士		地域で学ぶ 現代社会理解	1前・後 3前	2 2	1 1	十文字学園女子大学 特任教授 （平成25年6月）	
18	兼担	講師	ｲｼﾔﾏ　ﾀｶﾕｷ 石山　隆之 ＜平成27年4月＞		ｽﾎﾟｰﾂ科学 修士		身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1前 1・2・3・4後	4 2	4 2	十文字学園女子大学 特任准教授 （平成25年4月）	
19	兼担	講師	ｵｵﾄﾓ　ﾕｷｺ 大友　由紀子 ＜平成27年4月＞		文学修士※		キャリアデザインとライフプラン	1・2・3・4前・後	4	2	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 教授 （平成26年4月）	
20	兼担	講師	ｵｶﾞｻﾜﾗ　ﾉﾘｺ 小笠原　典子 ＜平成27年4月＞		法学士 文学士		日本語Ⅰ 日本語Ⅱ 日本語能力試験対策講座（文法・文字語彙） 日本語能力試験対策講座（読解） 日本語表現技術	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1・2・3・4通	2 2 4 4 2	1 1 2 2 1	十文字学園女子大学 教授 （平成23年4月）	
21	兼担	講師	ｵｶﾉｳｴ　ﾅｵｺ 岡上　直子 ＜平成27年4月＞		教育学士		現代社会と教育	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部児童教育学科 教授 （平成23年4月）	
22	兼担	講師	ｶｼﾞﾉ　ﾘｮｳｺ 梶野　涼子 ＜平成27年4月＞		学士 （栄養学）		食の科学	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部食物栄養学科 助教 （平成23年4月）	
23	兼担	講師	ｶﾀｲｷ　ﾋﾃﾞﾄ 片居木　英人 ＜平成27年4月＞		政治学修士※		現代社会とグローバリゼーション くらしのなかの日本国憲法	1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後	2 2	1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間福祉学科 教授 （平成23年4月）	
24	兼担	講師	ｶﾘﾉ　ｺｳｼﾞ 狩野　浩二 ＜平成27年4月＞		修士 （教育学）		埼玉の地理・歴史・文化	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部児童教育学科 教授 （平成23年4月）	
25	兼担	講師	ｶﾜｸﾞﾁ　ﾋﾃﾞﾄｼ 川口　英俊 ＜平成27年4月＞		修士 （法学）※		くらしのなかの日本国憲法 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	2 2 1	1 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 准教授 （平成23年4月）	
26	兼担	講師	ｷﾀﾊﾗ　ｼｭﾝｲﾁ 北原　俊一 ＜平成27年4月＞		博士 （理学）		情報とネットワーク社会 宇宙ともののなりたち 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ キャリア基礎力入門 キャリア基礎力応用	1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後 2前 2後	2 4 2 1 2 2	1 2 2 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 准教授 （平成23年4月）	
27	兼担	講師	ｸﾘﾊﾗ　ﾀｶｼ 栗原　隆史 ＜平成28年4月＞		博士 （経営情報学）		インターンシップ短期 インターンシップ	2・3前・後 2・3前・後	2 4	2 2	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 教授 （平成23年4月）	
28	兼担	講師	ｺｳｺﾞ　ﾄﾓﾐ 向後　朋美 （田中） ＜平成27年4月＞		文学修士※		英語Ⅰ 英語Ⅱ アドバンスト・リーディング アドバンスト・ライティング	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4後 1・2・3・4後	10 2 2 2	5 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 准教授 （平成23年4月）	
29	兼担	講師	ｺﾐｴ　ﾏｻﾋｺ 込江　雅彦 ＜平成27年4月＞		修士 （経済学）		情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1前 1・2・3・4後	2 1	2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 准教授 （平成23年4月）	
30	兼担	講師	ｻｲﾄｳ　ﾚｲｺ 齋藤　麗子 ＜平成27年4月＞		医学博士		女性と健康	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部幼児教育学科 教授 （平成23年4月）	
31	兼担	講師	ｻｻｷ　ﾅｵ 佐々木　菜穂 （佐藤） ＜平成27年4月＞		農学博士		食の科学	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部食物栄養学科 講師 （平成26年4月）	
32	兼担	講師	ｼｰﾗ・ｸﾘﾌｦ Sheila Cliffe ＜平成27年4月＞		ＰｈＤ （イギリス）		現代社会とグローバリゼーション アドバンスト・ライティング 日常英会話入門 日常英会話 ビジネス英語 ビジネス英会話 文化と歴史 創作ワークショップＤ	1・2・3・4前・後 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後 2・3・4後 2・3・4通	2 2 2 2 2 2 2 2	1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 教授 （平成24年4月）	
33	兼担	講師	ｼﾀﾗ　ﾕｳｺ 設楽　優子 （松尾） ＜平成27年4月＞		ＭＡ （イギリス）		英語Ⅰ 英語Ⅱ ＴＯＥＩＣ対策講座 アドバンスト・リーディング 映画・ドラマ英語	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4後	10 2 2 2 2	5 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 准教授 （平成23年4月）	
34	兼担	講師	ｼﾐｽﾞ　ﾚｲｺ 清水　玲子 ＜平成28年4月＞		学士 （音楽）		舞台芸術Ａ	2・3・4前	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部幼児教育学科 教授 （平成23年4月）	
35	兼担	講師	ｼﾝｷﾞｮｳﾁ　ｺｳｼﾞ 新行内　康慈 ＜平成27年4月＞		博士（先端科学技術）		情報とネットワーク社会 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	2 2 1	1 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 准教授 （平成23年4月）	
36	兼担	講師	ｽｽﾞｷ　ﾔｽﾋﾛ 鈴木　康弘 ＜平成27年4月＞		教育学修士		身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1前 1・2・3・4前・後	4 2	4 2	十文字学園女子大学 人間生活学部幼児教育学科 准教授 （平成24年4月）	
37	兼担	講師	ﾀﾅｶ　ﾄｳｺ 田中　東子 （山本） ＜平成28年4月＞		政治学博士		マンガ・アニメ文化論	2・3・4前	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 （平成23年4月）	
38	兼担	講師	ﾀｸﾞｻ　ｹｲｺ 田総　恵子 ＜平成27年4月＞		Doctor of Philosophy （アメリカ）		地球環境の保全と生活	1・2・3・4前・後	4	2	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 （平成23年4月）	
39	兼担	講師	ﾂﾉﾀﾞ　ｼﾝｼﾞ 角田　真二 ＜平成27年4月＞		工学修士		現代社会と福祉 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	2 2 1	1 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 （平成23年4月）	
40	兼担	講師	ﾄｸﾉ　ﾕｳｺ 徳野　裕子 ＜平成27年4月＞		学術博士		食の科学 女性と健康	1・2・3・4前・後 1・2・3・4前・後	2 2	1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部食物栄養学科 講師 （平成23年4月）	
41	兼担	講師	ﾉｼﾞﾏ　ﾔｽｺ 野島　靖子 ＜平成27年4月＞		社会福祉学 修士		現代社会と福祉	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間福祉学科 准教授 （平成25年4月）	

42	兼担	講師	ﾊｼﾓﾄ ｶﾂﾐ 橋本　克己 ＜平成27年4月＞		修士 (教育学)		生涯学習概論	1・2前	2	1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 教授 (平成24年4月)	
43	兼担	講師	ﾋﾗﾀ　ﾁｱｷ 平田　智秋 ＜平成27年4月＞		博士 (体育学)		健康と運動 身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4前・後	2 4 2	1 4 2	十文字学園女子大学 人間生活学部人間発達心理学科 准教授 (平成23年4月)	
44	兼担	講師	ﾋﾗﾀ　ﾄﾓﾋｻ 平田　智久 ＜平成28年4月＞		美学士		創作ワークショップＥ	2・3・4通	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間発達心理学科 准教授 (平成23年4月)	
45	兼担	講師	ﾌｸｵｶ　ﾀｶﾏｻ 福岡　賢昌 ＜平成27年4月＞		経営学修士		現代社会とグローバリゼーション 外国文化論Ｂ	1・2・3・4前・後 2・3・4後	2 2	1 1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 准教授 (平成26年4月)	
46	兼担	講師	ﾌｸﾀﾞ　ﾋﾄｼ 福田　仁 ＜平成27年4月＞		M.A. in English (アメリカ)		英語Ⅰ 英語Ⅱ 海外語学研修（事前事後指導を含む） アドバンスト・リスニング インターネット英語 メディア英語 多元文化論	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4前 1・2・3・4前 1・2・3・4前 1・2・3・4後 2・3・4前	10 2 2 2 2 2 2	5 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 教授 (平成24年4月)	
47	兼担	講師	ﾌｾ　ﾊﾙﾐ 布施　晴美 ＜平成27年4月＞		修士 (リハビリテーション)		女性と健康	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間発達心理学科 教授 (平成23年4月)	
48	兼担	講師	ﾎｼﾉ　ｱﾂｺ 星野　敦子 ＜平成27年4月＞		博士 (学術)		地域で学ぶ 埼玉の地理・歴史・文化 情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1前・後 1・2・3・4前・後 1前 1・2・3・4後	2 2 2 1	1 1 2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部生活情報学科 教授 (平成23年4月)	
49	兼担	講師	ﾐﾔｷ　ﾐﾁｺ 宮城　道子 （野崎） ＜平成27年4月＞		社会学修士		現代社会と福祉	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間福祉学科 准教授 (平成23年4月)	
50	兼担	講師	ﾓﾘﾀ　ｶﾂﾕｷ 森田　勝之 ＜平成27年4月＞		文学士		英語Ⅰ 英語Ⅱ ＴＯＥＩＣ対策講座 アドバンスト・リスニング ビジネス英語 ビジネス英会話 映画・ドラマ英語 インターネット英語 メディア英語	1通 1・2・3・4通 1・2・3・4前 1・2・3・4前 1・2・3・4前 1・2・3・4後 1・2・3・4後 1・2・3・4前 1・2・3・4後	10 2 2 2 2 2 2 2 2	5 1 1 1 1 1 1 1 1	十文字学園女子大学 人間生活学部ﾒﾃﾞｨｱｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学科 教授 (平成24年4月)	
51	兼担	講師	ﾔﾏｻﾞｷ　ﾕｳｺ 山崎　優子 ＜平成27年4月＞		博士 (栄養学)		食の科学	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 人間生活学部食物栄養学科 助教 (平成23年4月)	
52	兼担	講師	ﾔﾏﾀﾞ　ﾖｳｺ 山田　陽子 ＜平成27年4月＞		教育学修士		子育てと環境	1・2・3・4前・後	4	2	十文字学園女子大学 人間生活学部幼児教育学科 教授 (平成23年4月)	
53	兼担	講師	ﾔﾏﾓﾄ　ｻﾄﾙ 山本　悟 ＜平成27年4月＞		体育学修士		身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1前 1・2・3・4前・後	4 2	4 2	十文字学園女子大学 人間生活学部児童教育学科 教授 (平成23年4月)	
54	兼担	講師	ﾖｼｶﾜ　ﾄﾓｵ 吉川　知夫 ＜平成27年4月＞		修士 (教育学)※		現代社会と教育	1・2・3・4前・後	2	1	十文字学園女子大学 准教授 (平成25年4月)	
55	兼担	講師	ﾜﾀｲ　ﾏｻﾔｽ 綿井　雅康 ＜平成27年4月＞		教育学修士※		情報処理演習Ⅰ 情報処理演習Ⅱ	1前 1・2・3・4後	2 1	2 1	十文字学園女子大学 人間生活学部人間発達心理学科 教授 (平成23年4月)	
56	兼担	講師	ﾜﾀﾅﾍﾞ　ﾀｶｴ 渡邊　孝枝 ＜平成27年4月＞		修士 (人文科学)		身体運動Ⅰ 身体運動Ⅱ	1前 1・2・3・4前・後	4 2	4 2	十文字学園女子大学 人間生活学部幼児教育学科 助教 (平成26年4月)	
57	兼任	講師	ｱｷﾆﾍﾞ　ｴﾂｺ 秋庭　悦子 ＜平成27年4月＞		商学士		原子のエネルギーとわたしたち	1・2・3・4前・後	4	2	内閣府原子力委員会 委員 (平成22年1月)	
58	兼任	講師	ｲｼｸﾞﾛ ﾉﾘｺ 石黒　教子 ＜平成28年4月＞		学士 (芸術)		創作ワークショップＡ 創作ワークショップＣ	2・3・4通 2・3・4通	2 2	1 1	十文字学園女子大学 非常勤講師 (平成13年4月)	
59	兼任	講師	ｲﾅﾊﾞ ﾐｷ 稲葉　美樹 ＜平成27年4月＞		修士 (文学)		日本語基礎 日本語表現Ⅱ	1前 2後	2 2	1 1	十文字学園女子大学 非常勤講師 (平成9年4月)	
60	兼任	講師	ｳｴﾉ ｻｴ 上野　左絵 ＜平成27年4月＞		修士 (文学)		日本語表現Ⅰ 日本語表現Ⅱ	1後 2後	2 2	1 1	十文字学園女子大学 非常勤講師 (平成23年4月)	
61	兼任	講師	ｴﾄｳ ｼｹﾞﾋﾛ 江藤　茂博 ＜平成28年4月＞		修士 (文学・芸術学)		映像文化論	2・3・4後	2	1	二松学舎大学　文学部 教授 (平成16年4月)	
62	兼任	講師	ｵｵﾊﾗ　ﾄﾓｺ 大原　知子 ＜平成27年4月＞		LITTERATURE FRANCAISE ET COMPAREE (フランス)		フランス語Ⅰ フランス語Ⅱ	1通 1・2・3・4通	2 2	1 1	十文字学園女子大学 非常勤講師 (平成12年4月)	
63	兼任	講師	ｵｷﾞ ﾌﾄｼ 荻　太 ＜平成29年4月＞		学士 (文学)		現代社会理解	3前	2	1	株式会社　アストラ 代表取締役 (平成2年3月)	
64	兼任	講師	ｻｲﾄｳ ﾋﾃﾞｱｷ 齋藤　秀昭 ＜平成28年4月＞		修士 (文学)		物語分析 創作ワークショップＢ	2・3・4前 2・3・4通	2 2	1 1	十文字学園女子大学短期大学部 非常勤講師 (平成25年4月)	
65	兼任	講師	ｼﾌﾞﾔ　ﾊﾙﾖｼ 渋谷　治美 ＜平成27年4月＞		文学修士		生物の多様性と倫理	1・2・3・4前・後	4	2	埼玉大学 教授 (平成9年4月)	
66	兼任	講師	ｼﾐｽﾞ　ﾋﾛｱｷ 清水　裕明 ＜平成28年4月＞		学士 (商学)		身体と表現	2・3・4前	2	1	劇団「SEIREN」 代表 (平成14年4月)	
67	兼任	講師	ｼﾐｽﾞ　ﾏｺﾄ 清水　誠 ＜平成27年4月＞		修士 (学術)		地球のしくみと災害	1・2・3・4前・後	4	2	埼玉大学 教授 (平成15年4月)	
68	兼任	講師	ｽｽﾞｷ　ﾖｼｺ 鈴木　慈子 ＜平成28年4月＞		学士 (理学)		毛筆書道	2・3・4通	2	1	十文字学園女子大学短期大学部 非常勤講師 (平成12年4月)	
69	兼任	講師	ﾀﾅｶ　ﾏｻｷ 田中　正樹 ＜平成28年4月＞		修士 (文学)		漢詩・漢文に親しむ	2・3・4後	2	1	二松学舎大学　文学部 教授 (平成19年4月)	
70	兼任	講師	ﾀﾆ　ﾋﾛｺ 谷　洋子 ＜平成28年4月＞		M.S.Ed (アメリカ)		ディズニー研究	2・3・4後	2	1	十文字学園女子大学短期大学部 非常勤講師 (平成18年4月)	
71	兼任	講師	ﾁｮ　ﾋ 曺　嘉 ＜平成27年4月＞		修士 (日本文学)		ハングルⅠ ハングルⅡ	1通 1・2・3・4通	2 2	1 1	十文字学園女子大学短期大学部 非常勤講師 (平成24年4月)	
72	兼任	講師	ﾅｶｶﾞﾜ ｼｭｳﾀﾛｳ 中川　秀太 ＜平成27年4月＞		修士 (文学)		日本語基礎 日本語表現Ⅰ	1前 1後	2 2	1 1	十文字学園女子大学 非常勤講師 (平成21年4月)	
73	兼任	講師	ﾅｶﾞﾊﾏ ﾄﾓｺ 長濱　トモ子 ＜平成28年4月＞		学士 (文学)		硬筆書道	2・3・4通	2	1	十文字学園女子大学短期大学部 非常勤講師 (平成21年4月)	
74	兼任	講師	ﾌｶｻﾜ　ｽﾑﾑ 深澤　進 ＜平成27年4月＞		修士(学術)		情報とネットワーク社会	1・2・3・4前・後	2	1	淑徳大学 非常勤講師 (平成25年4月)	
75	兼任	講師	ﾌｼﾞｻﾜ ﾌﾐｷ 藤澤　茜 ＜平成28年4月＞		博士 (文学)		芸能の世界	2・3・4後	2	1	十文字学園女子大学 非常勤講師 (平成22年4月)	
76	兼任	講師	ﾏﾂﾓﾄ　ｹﾝｼﾞﾛｳ 松本　剣志郎 ＜平成27年4月＞		博士 (文学)		考える日本史	1・2後	2	1	武蔵野市教育委員会 学芸員 (平成25年4月)	
77	兼任	講師	ﾖｼﾀﾞ　ﾓﾘﾀｶ 吉田　守孝 ＜平成28年4月＞		学士 (芸術)		生活とデザイン	2・3・4前	2	1	多摩美術大学 非常勤講師 (平成19年4月)	

（注）

1　教員の数に応じ，適宜枠を増やして記入すること。

2　私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合又は大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合は，この書類を作成する必要はない。

3　「申請に係る学部等に従事する週当たりの平均日数」の欄は，専任教員のみ記載すること。

別記様式第３号（その３）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

専任教員の年齢構成・学位保有状況

（人間福祉学科）

職　　位	学　　位	29歳以下	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上	合　　計	備　　考
教　　授	博　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修　　士	人	人	人	4 人	2 人	1 人	人	7 人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
准教授	博　　士	人	人	人	1 人	人	人	人	1 人	
	修　　士	人	人	1 人	人	人	1 人	人	2 人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
講　　師	博　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修　　士	人	2 人	1 人	人	人	人	人	3 人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
助　　教	博　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
合　　計	博　　士	人	人	人	1 人	人	人	人	1 人	
	修　　士	人	2 人	2 人	4 人	2 人	2 人	人	12 人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	

（注）
1　この書類は，申請又は届出に係る学部等ごとに作成すること。
2　この書類は，専任教員についてのみ，作成すること。
3　この書類は，申請又は届出に係る学部等の開設後，当該学部等の修業年限に相当する期間が満了する年度（以下「完成年度」という。）における状況を記載すること。
4　専門職大学院の課程を修了した者に対し授与された学位については，「その他」の欄にその数を記載し，「備考」の欄に，具体的な学位名称を付記すること。

別記様式第３号（その３）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

専任教員の年齢構成・学位保有状況

（健康栄養学科）

職　　位	学　　位	29歳以下	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上	合　　計	備　　考
教　　授	博　　士	人	人	人	1　人	2　人	人	人	3　人	
	修　　士	人	人	人	2　人	人	1　人	人	3　人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
准教授	博　　士	人	人	1　人	人	人	人	人	1　人	
	修　　士	人	人	人	2　人	人	人	人	2　人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
講　　師	博　　士	人	人	1　人	人	人	人	人	1　人	
	修　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
助　　教	博　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
合　　計	博　　士	人	人	2　人	1　人	2　人	人	人	5　人	
	修　　士	人	人	人	4　人	人	1　人	人	5　人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	

（注）

1　この書類は，申請又は届出に係る学部等ごとに作成すること。

2　この書類は，専任教員についてのみ，作成すること。

3　この書類は，申請又は届出に係る学部等の開設後，当該学部等の修業年限に相当する期間が満了する年度（以下「完成年度」という。）における状況を記載すること。

4　専門職大学院の課程を修了した者に対し授与された学位については，「その他」の欄にその数を記載し，「備考」の欄に，具体的な学位名称を付記すること。

別記様式第３号（その３）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

専任教員の年齢構成・学位保有状況

（文芸文化学科）

職　　位	学　　位	29歳以下	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上	合　　計	備　　考
教　　授	博　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修　　士	人	人	人	1 人	2 人	人	人	3 人	
	学　　士	人	人	人	人		1 人	人	1 人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
准教授	博　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修　　士	人	人	4 人	1 人	人	人	人	5 人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
講　　師	博　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修　　士	人	1 人	人	人	人	人	人	1 人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
助　　教	博　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	
合　　計	博　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	修　　士	人	1 人	4 人	2 人	2 人	1 人	人	10 人	
	学　　士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	短期大学士	人	人	人	人	人	人	人	人	
	その他	人	人	人	人	人	人	人	人	

（注）
1　この書類は，申請又は届出に係る学部等ごとに作成すること。
2　この書類は，専任教員についてのみ，作成すること。
3　この書類は，申請又は届出に係る学部等の開設後，当該学部等の修業年限に相当する期間が満了する年度（以下「完成年度」という。）における状況を記載すること。
4　専門職大学院の課程を修了した者に対し授与された学位については，「その他」の欄にその数を記載し，「備考」の欄に，具体的な学位名称を付記すること。